

奇譚クラス

現代人の風俗雑誌

6月号

★戦争と性慾特輯号★

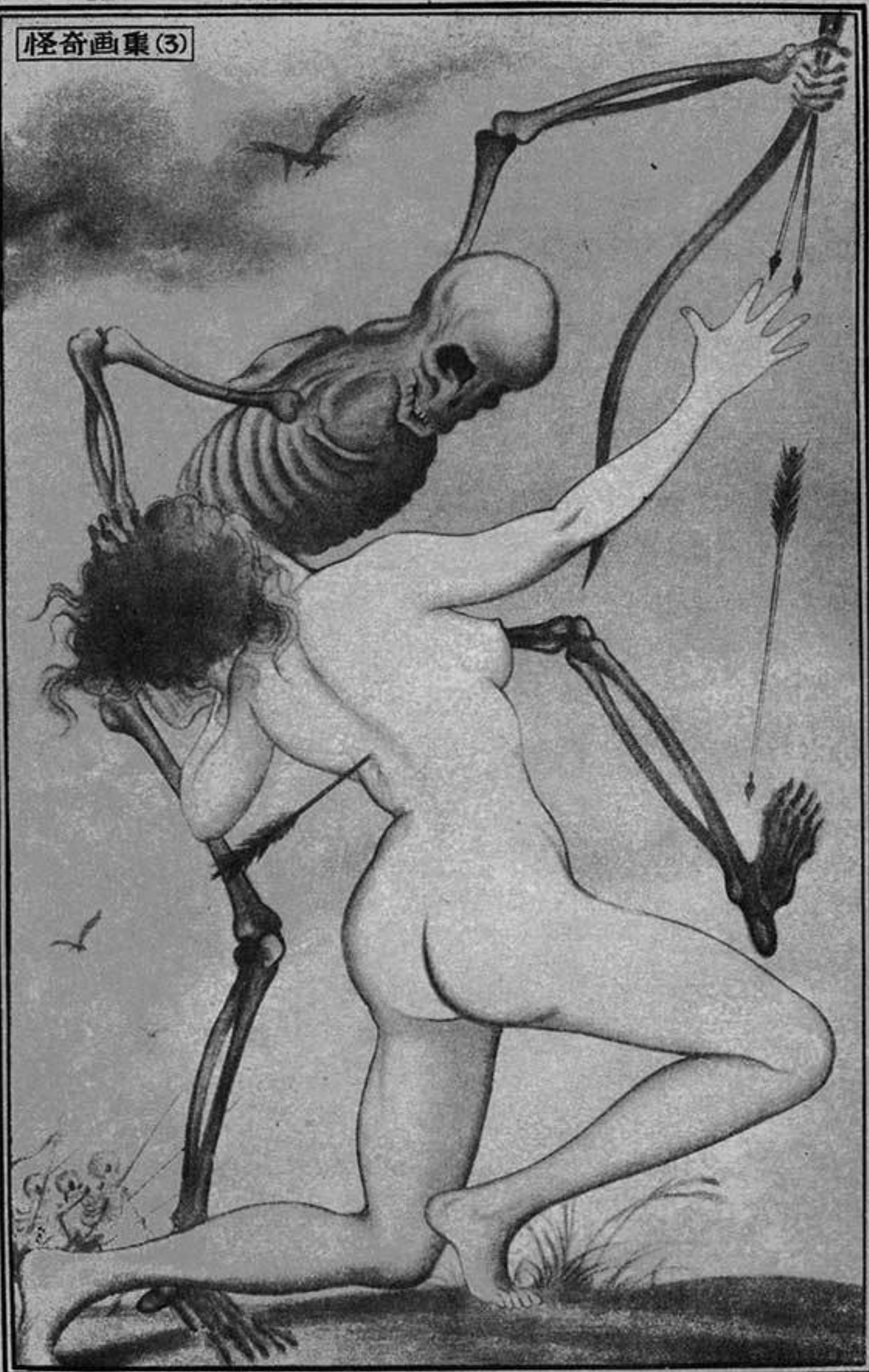


1952



定價九拾円

地方賣價(九拾參円)



暴虐の嵐





ハレムの美妃

嶋 螢 光

ハレム Harem とは土耳其の婦人部屋のことである。ハレムの女たちは碧い眼を美しい滑らかな皮膚に包ましたやさしいポーズの所有者たちである。女たちがハレムに入るのは十二才前後である。もしこれ等の女たちが、ハレムから出ないなら、彼女たちは一生女同志のだれ切った生活を続けてゆかねばならない。

全然異性を離れた密封的な生活である。男女間の社交もなければ意志の疎通もない。然し彼女たちも、一様に性への目覚めを感じる時がくる。ハレムの女たちの心願は、妻たらんことではない。彼女たちは一様に愛妾たらんと望むのである。彼女たちはハレムという小さな世界に密封されて育まれるから、無教育であり無定見である。文化とは全くの没交渉であり、只頭髮の手入をしたり、爪を磨きたて、外見上の美しさを増すばかりが日常の仕事である。

ハレムには異性がいる。では性的の交渉がありそうに思われるかも知れないが、これらの異性は総て睾丸を失った所謂宦官ばかりだから、どうすることも出来ない。だから毎日毎日ベットのの上に寝そべって、水煙管からぼつり／＼と煙をくゆらしているばかりである。一日の勉めを煩いていうならば、それは沐浴とマッサージとそして化粧だけである。

♡好色秘本

バルカン戦争

~~~~~(三)~~~~~

口絵・戦争と性慾画集・ハレムの美妃・ハレムのロマンス・責められる女の美

## 戦争とエロ

- |           |          |
|-----------|----------|
| 貞操特攻隊の悲劇  | 杉山清詩…(天) |
| モスコウの妖花   | 藤田盛治…(元) |
| ナポレオンの兵隊  | 松谷茂…(天)  |
| 成吉思汗の性慾戦術 | 中澤公平…(四) |
| テルマ病院の点描  | 花本史郎…(三) |

## 人間便所の妄想狂

一一宮忠一…(一〇)

## 戦争と性慾の珍談奇聞集

- |                     |           |
|---------------------|-----------|
| 今は昔戦線エロ落穂集          | 下出章一…(一五) |
| 太平洋戦争戦塵漁色余話         | 高原順三…(九)  |
| 中国兵の妻となつた女の手記       | 田島由美子…(四) |
| 南方特殊慰安施設こぼれ話        | 三嶋彰太…(三)  |
| ジャワ戦争をめぐる悲戀ソング      | 井村幸男…(一〇) |
| 終戦時に満洲で奪われた日本婦人の貞操池 | 内白楊…(一〇)  |

## 小説陣傑作

魔性私刑 (ましろう リンチ)  
淫蕩歌舞伎圖繪

街啓介…(一四)  
夏目千代…(一六)  
緑猛比古…(一七)

- |                   |           |
|-------------------|-----------|
| 戦争と娼婦 (戦争は娼婦を生む)  | 田森浩志…(三)  |
| 陸軍特設第七天国          | 眞鍋吟吾…(二)  |
| 二人の兵士             | 渡辺榮一…(一六) |
| 男子同性愛雑考           | 浅倉文朗…(三)  |
| 技師長のマダム (シベリヤ性風景) | 穴吹武…(五)   |
| 港々の女たち            | 下山雄…(六)   |
| 女闘絵巻 美濃輪稻荷縁起      | 増田志郎…(九)  |

- |                      |           |
|----------------------|-----------|
| 男子同性愛者からの書信          | 南里文彦…(九)  |
| 屍姦の悲劇 (サロメとサジスムス)    | 高野彌助…(四)  |
| 女体哨戒線突破              | 浪速三郎…(一〇) |
| 戦争とマゾ                | 女軍従軍譜     |
| 女性陰毛の生理 (多毛者は果して多淫か) | 田中芳生…(一五) |





## ハレムのロマンス

嶋 螢 光

ハレムの床一面には厚い美しい毛氈が一杯に敷き詰められて、華やかな感觸も限りない。その床の上をハレムの女たちが右往左往する光景は絵であり、詩である。室々の壁には強烈な色彩で鳥や花が描かれている。この美しさの中に香ぐわしい浴場がとめどなく官能を目覚めさせる。

そして美しいハレムを取り囲むものは、また美しい花の香である。匂いの高いローズの花に、ジャスミンの白や黄も眩しく、ゼラニウムのけばくしきはハレムにふさわしい姿とも見えよう。そして水々しいオレンジの果が大きなサボテンや珍しい印度の植物などの濃い青さから覗いている。

幼い乙女がこのハレムに買われて、一定の成熟期に達する頃までには、様々の身軀が授けられる。彼女たちは一生懸命にマツサージをやるのでその肌は桃のような色彩を見せる。そして全身にも官能をそそり立てるような強烈な香油を塗り立てる。

美しいハレム、美しいハレムの女たち。そしてハレムの香りから生れる美しいロマンスと、あくどい性慾生活を思うとき、バレットの奇蹟を感じないだろうか。



# 戦争と性慾 画集

人間には誰しも惨虐性がある。人類に歴史が始つて以来、人間の凡ては惨虐性を持つていた。人間の惨虐性は、人間が自己の生存を意識し出せる時より脳裏の奥深くに生ずる或る呪わしい閃きである。

世界の歴史を繙いてみれば悉く惨虐の連続である。吾が国の例で見ても古代より中古、平安、鎌倉、室町、戦国、徳川、明治、大正昭和と、その時代の跡を顧つてみると、そこには人間の血と血で洗われた争闘と惨虐と凌辱の歴史ではなからうか。

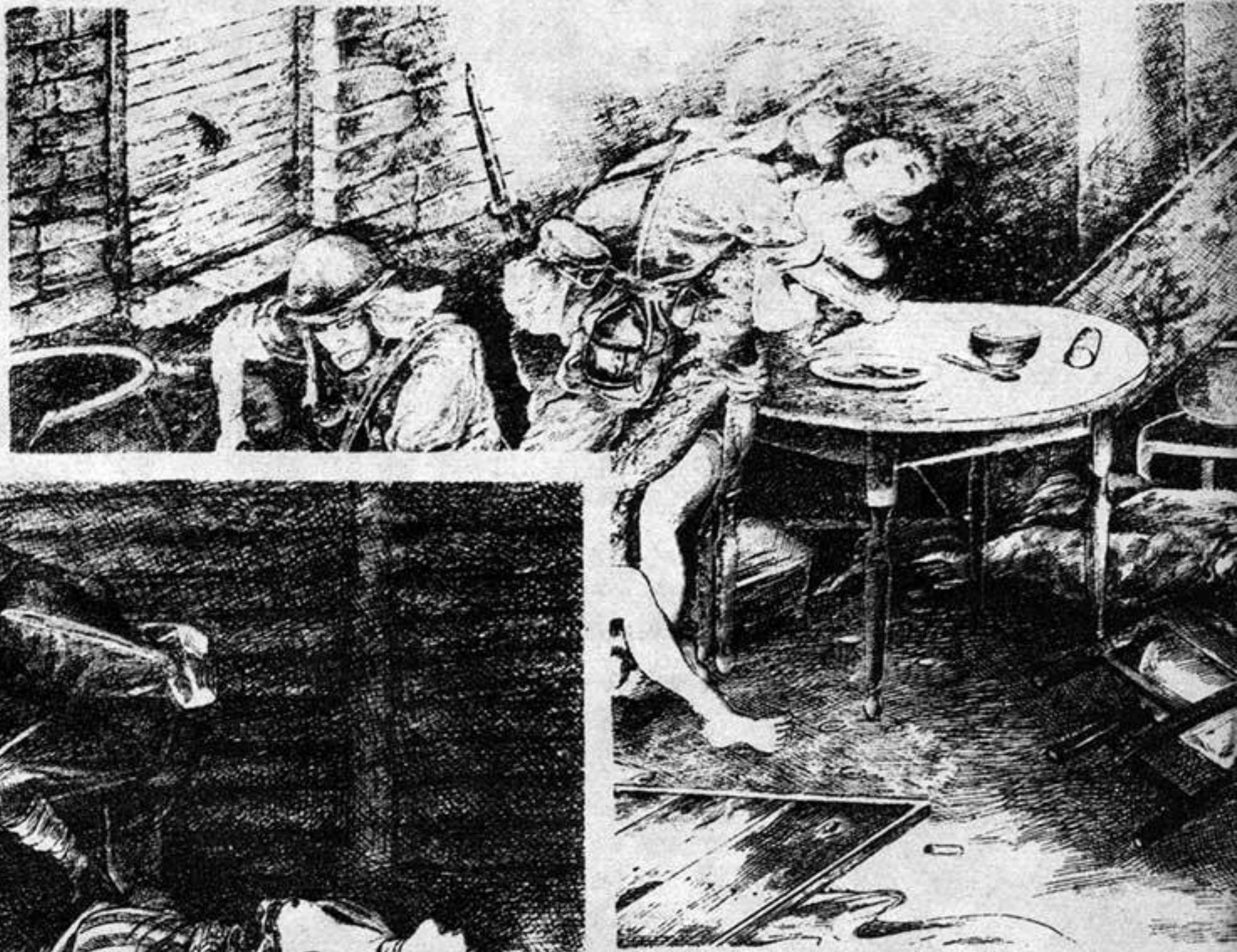
戦争は人間を物質的飢餓の中へ陥れると共に、また性的飢餓の中へも突き落す。その性的飢餓が興奮しきつて獸性と化した人間に対して如何なる作用を及ぼしたか？それは想像するだに戦慄を覚えすにはおかぬ。





# 戦争と性犯罪

戦争の犠牲者は女性だ！



第一線に於ける惨虐行為

戦後  
銃後に於ける性的犯罪（防空壕に於ける痴漢）



ハバンセン  
八幡船長驅南京を寇す。 明書に曰く、

毎日婦女を虜にして  
夜は必ず酒色酣睡す。劫掠將に終らんとする  
や、これに従うに焚煙をもつてす。人その酷  
烈を畏る」と



## 最後の慾情、

南海の孤島に主君寸前の一兵士の最後の姿を描く。



**蒙古襲来、** 日本制圧を企図して朝鮮海峡を押し渡った十数万の元軍は、先ず壱岐、対馬を冒して猛威を逞しゅうした。



## 爆発する性慾、 洋の東西、

時代の古今を問わず、戦争に暴虐は付きものである。指導者の掲げる戦争目的が如何に崇高なものであつても、お互いに殺戮しあふ兵士達の間にあつては、死に直面した生死の境にあつて人間性をなぐり捨てた本能の奔流が爆発するのは又やむを得ないことであつた我々は歴史の書を繰く度に、そこに血を血で洗う惨虐な暴力の跡をまざ／＼と見せつけられると共にその暴力の下に鬼哭啾々としてむせび泣く数多の犠牲者の涙の声を聞くことが出来るのである。



# ★ クリーゲル バルカン 戦争 ★

世紀の秘録、バルカン侵略の秘史  
 クリーゲルに現れた戦争による人間の性慾が、かもし出す地獄相は見る者をして肌を粟を生ぜしめずにはおかない。集団的淫獣と化した侵略軍の兵士達は逃げおくれた婦女子を襲い、強姦、掠奪、惨殺をほしきまゝにした。隊長は叫んだ、「食事は後にして、先ずお前達の捕えてきたものを



見せろ。その美人を裸にしろ」兵士達は直ちにその命令通りした。間もなく彼女たちは皆シャツと靴下だけにされてしまった。隊長の命令で兵士達は乳房を取り出して見せた。そして裾をまくり上げて。「突撃用意！」兵士達は各自の目標に向って毒牙を逞くすべく邪魔になる衣服をかたぐり捨て、立ち上った。



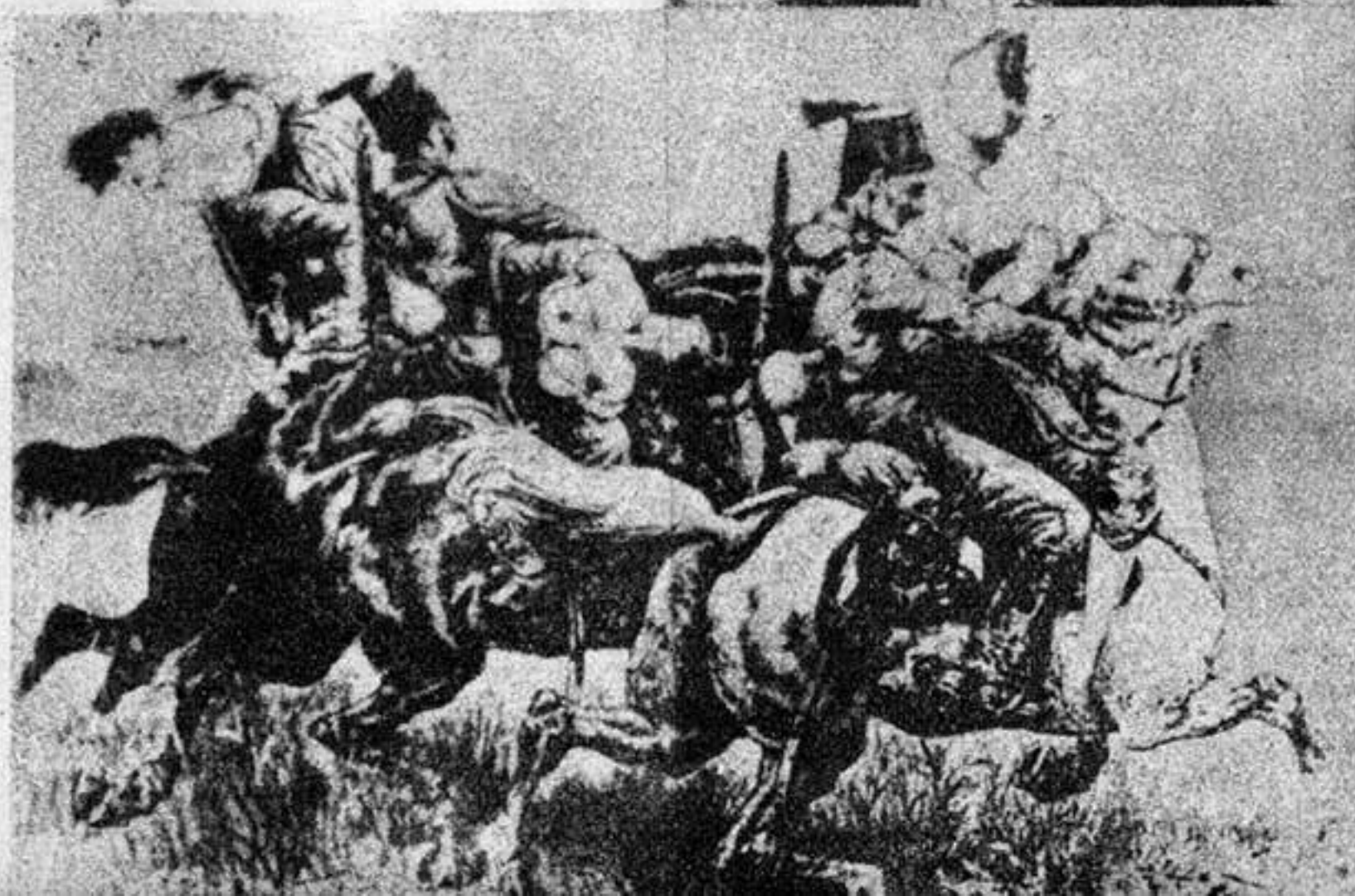
## 寢室を犯す嵐！（高価な戦利品）

司令官夫人の寢室に乱入した敵軍兵士の一隊は、そこに最も高価な獲物を発見した。そこに散らばっている指輪や首飾りには目もくれず兵士達は一様に目を淫らに輝かせて御馳走に迫ろうとした時、此の一隊の指揮者らしき一人が叫んだ。「待て！此の戦利品は我々の司令官閣下に差し上げることにしよう」



## 女体の争奪戦

或るアルパニヤの村に向つてヒルピア軍の一隊がひそかに音も立てず進撃していた。彼等の企てた奇襲は見事に奏効した。村外れの山陰で女たちを弄んでいた敵の一群を発見すると隊長は号令を下した。「それ、俺たちの女を奪い返せ」忽ち起る銃声に驚いて敵の兵士たちは数個の死体を残し乍ら散を乱して逃げ去った。

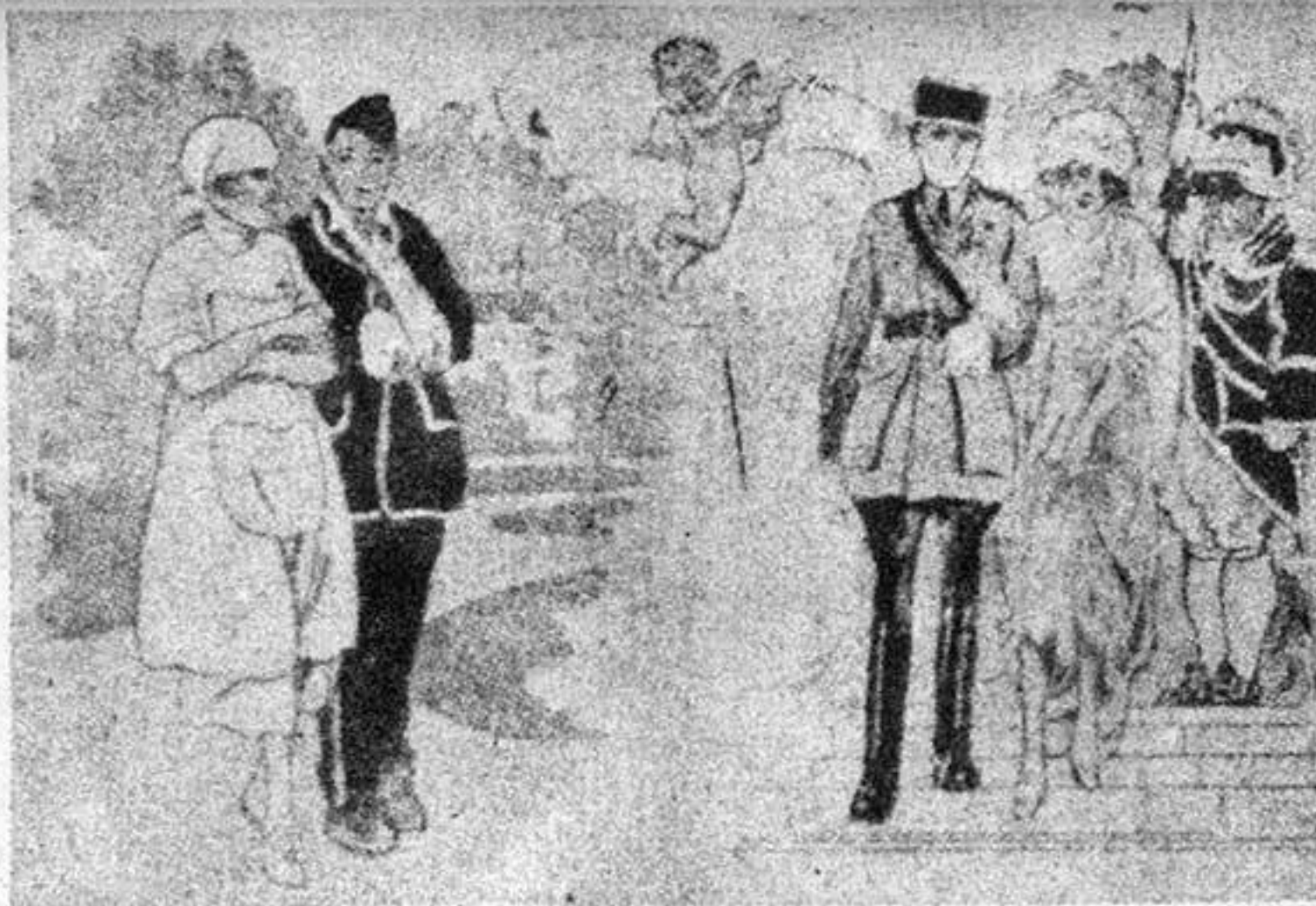




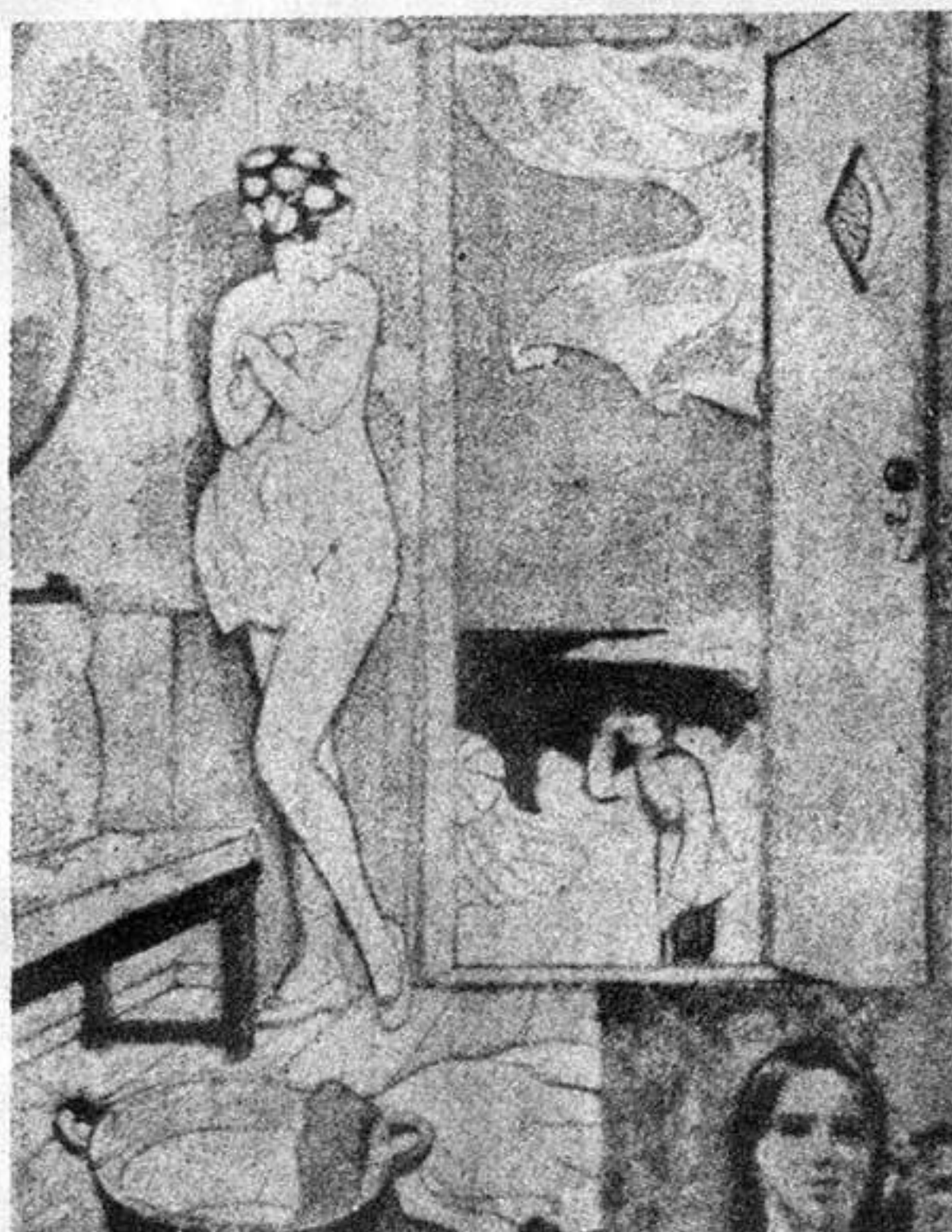
7、塙軍兵士専門の娼家



6、病院から結婚へ、傷兵と看護婦のロマンス



8、これは失敬、風のいたざらです。



9、白耳義の娼婦たち



10、ちよつと寄つてゆかないか(戦時絵葉書)





2、中々うまいぞ！（戦時絵葉書の一枚）



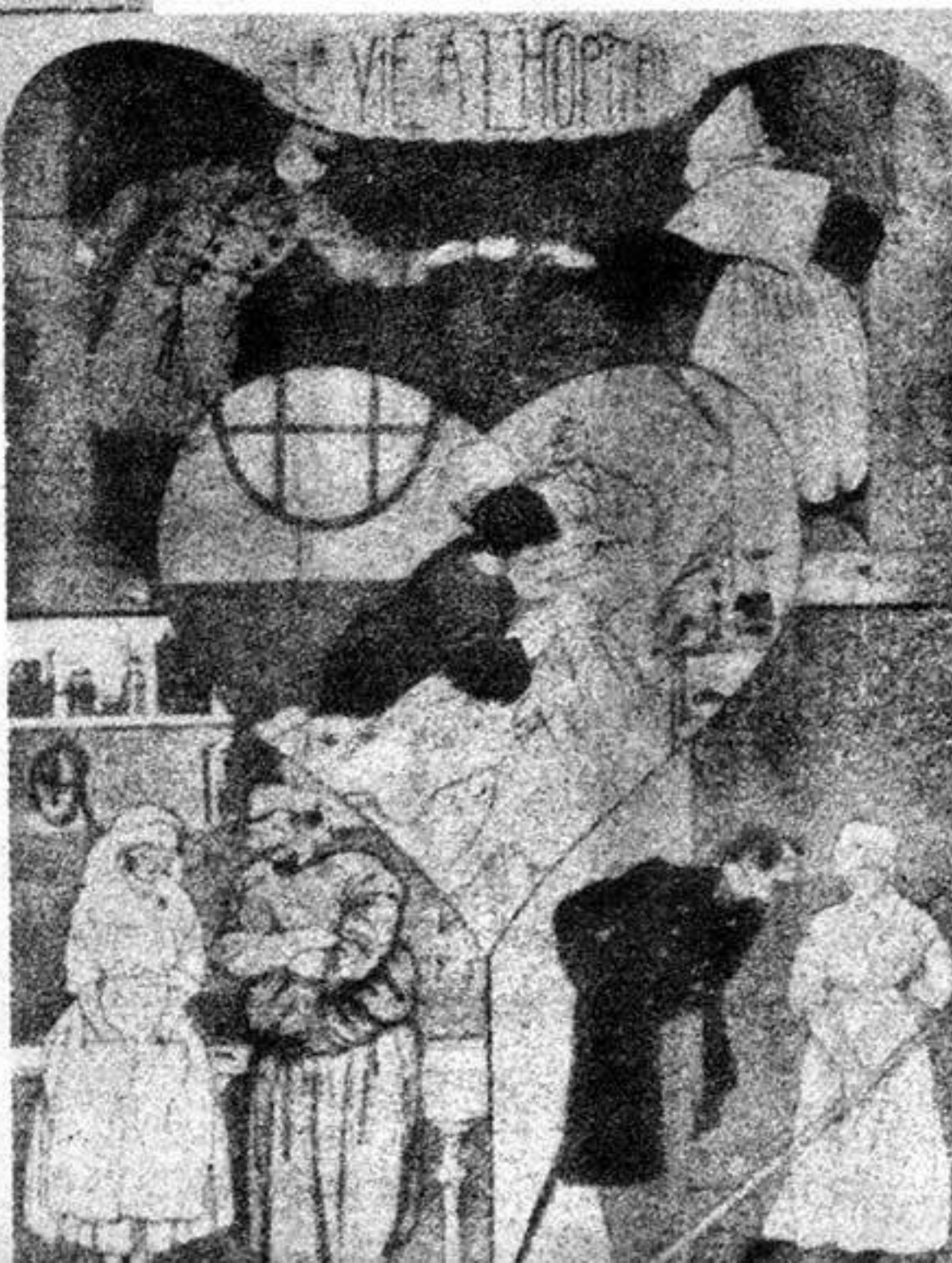
1、兵士の妻の不満（留守宅に於ける）



3、将校用の移動娯家（第七天国の慰安）



4、野戦病院に於ける口説五態



5、傷兵と颯爽とドラブする看護婦





# 兵士と女と酒

戦線へ駆り出される兵士たちが今宵酒場に現れて、飲めや歌えの大騒ぎとなつた。明日の命の頼めぬ彼等たちにとつては酒と女がその刹那的な歓楽の糧であつた。娼婦は兵士たちの金を目当てにその肉体を惜しげもなく捧げた。これは前線へ向う兵士と酒場の娼婦の痴態として笑つて過しておけることであらうか。



女体への憧れの戦い

## 狂つた一頁

両将軍の握手（欧州大戦諷刺画）



女間諜の誅殺





ポーズの交錯



責められる女の美



處女と蛇





聖壇の裸女







戀  
の  
幻  
想





戦争に於ける飽くなき淫行と惨虐を描く世紀の秘録！

## 好色 秘本 バルカン戦争

戦争によつて巻き起される戦線と銃後に於けるあらゆる淫虐行為を刻明に描いた軟派読物である。

原作はトルコのウイールヘルム・マイテル博士の作だと言われている。昭和二年四月、文芸市場社同人訳として我国に紹介された。

(第一部) 戦争の勃発による性的乱脈——戦争によつて国中の男子は

すべて出征した為、銃後に残つた好色婦人達は空閑に堪えかねて、自慰や同性愛に耽ける。そして守備隊との間に言語に絶する淫蕩極まりない享楽絵巻が繰り展げられる。

(第二部) 戦争による惨虐と淫虐——勝ち誇つた戦線の兵士が敗残の

部落に侵入し、凌辱と暴行をほしいままにする。戦勝の将兵を迎えた人妻、石使達が進んでその軍隊を歓迎し、肉体を提供して甘んじ買いつく自らも慾情して行く。

### バルカン戦争の経過

一九一一年伊太利がアフリカのトリポリを占領したことから端を発し

て土耳其との間に伊土戦役が開始されたこの時、土耳其領のアルバニヤ、マケドニアの二異民族が叛乱を起したので、ブルガリヤ、ギリシヤ、セルビアの三国はモンテネグロ王国を誘つて一九一二年、土耳其に対して宣戦した。土耳其は腹背に敵を受けて進退に窮し、急に伊太利と和約を結んでトリポリを割譲して血路を開き以てバルカン諸国を邀撃したが、この計画も成功せず敗退して割地を誓つた



しかるにその後、獲得地の分配についてブルガリヤが多きを要求したので、セルビア、モンテネグロ、ギリシヤの三国は共に起つてその不当を攻めた。するとブルガリヤも俄かに起つてこれに加わりブルガリヤに対して戦を宣することになった。これを見た土耳其は再び兵を出した。そして失地の一部を回復したが、結局ブルガリヤは大敗して、ブカレストの和約によつて漸く戦乱は収つた。トルコはこの戦争によつて歐洲に於けるその領土の大部分を失つた。





# 第一部

## 戦争勃発による性的乱脈

### パーレン伯爵夫人

出征のため故国を離れてゆく軍隊の快き行進曲は尙遠くから響いていた。ギラ／＼と隣のように輝く長蛇の行軍の列が国境へ通ずる道に沿うてうねつてゆくのがハッキリと見える。

彼等は戦争へ行くのだ。——誰も彼もみんな。彼等の妻を、許嫁を、否彼等の娘を母を後へ残して。

パーレン伯爵夫人は彼女の石造のバルコニーの上に立ちつづけている。目には涙が光っている。彼女の瞳は遠く、今し方黒い長蛇の列が見えなくなつたばかりの国境の彼方へ。

彼女の唇は今別れてゆく伯爵の後から送ろうとするキッスの為にもあるかのように軽く丸味を帯びている。彼女はなつかしげに両の腕をひろげるのであつた。急に彼女は身をめぐらしてサロンへ戻る。そこを通り抜けて今自分が好んでプ

ードワールと名づけている部屋に立っている。この立派な衣裳部屋は壁は全部戸棚になつていて、戸棚の戸は皆大きな一枚硝子の鏡になつてゐる。そして更にその手近のドアは夫人専用の浴室へ通じてゐる。

彼女は碧色の呼鈴を押すと、音もなく入口の戸のカーテンが押しつけられて、一人の非常に美しい肉付のよい黒髪の少女が入ってくる。侍女のエトカである。エトカの両眼もすっかり涙で赤くなつてゐる。伯爵夫人パーレンはそれを見て「あゝ、そなたもか？妾達はお互いに慰め合ねばならないのだよ。ねエ、エトカ、そして妾達は本当に慰め合へると思ふのよ。さあ妾に着物をきせておくれ」そこで此のハンガリー女は又微笑えむ夫人は日本から直輸入させた少しも混ぜ物のない柔かい絹で出来たマチネーをま

とらうていた。前にボタンが一つもなく又一つも針目のついていない。彼女は低い長椅子に身体を滑り込ませる。沢山の座布団を持つて立派な愛の巢になつてゐる手を頭の上に組み合せて仰向に寝ながら両足を少しひき寄せる。

エトカは其処に侍してゐる。そして主人の言葉を思い出すともう一度微笑が口に現われてくるのを禁じ得ない。

「奥様、何か御用は？」

「あゝ、何も、あちらへ退つておいで、

——妾はこうして寝ていたいのだ」

エトカが外へ出ると其処にはイロンカが泣いて立っている。自ら慰めることが出来ない二人である、二人はドアの所へ忍び寄つて身をかがめて中を覗く。彼女たち二人がそうして立つてゐる所は中々可愛い見える。何故なればハンガリーの短い着物は太股の膝の所迄あらわしているから。

彼女等は両手を膝の上に支えている。そしてエトカは鍵穴から覗いてゐる。イ





ロニカはすき間から——。

伯爵夫人は一人になつたのを知ると身を起した。氣持よきさうに両腕を伸ばしてもう一度のびをする。すると着物の前が開く。着物は身体の前で二つに分れる。夫人は一つの棚の所へ行き抽出を開ける。一冊の本を取り出すと再び長椅子に返える。そして肉のしまつた太腿を少しひらけ加減にして、それからシャツをすつかりおし下げる。

彼女の両眼はじつと此の蠱惑的な画を見つめている。バラ色の乳房が嵐の様に波打つて眼は閉じられる。そして時々再び浮んでゐる火の様に開かれる。只一つの溜息のみ——。

ドアの外では二人の婢がもう長い間、お互に相手の上衣の下へ手を差し入れて覗き見している。あえぎながら彼女達は尙も其処に立つてゐると、其の時彼女等の耳のそばで一つの声が

「どうしたと言うの？御前達は——」

伯爵夫人が立つてゐた。びつくりして二人はとび離れたが間もなくエルカは氣を取り直す。

「私共はお互に慰め合つていたのでござ

います。奥様！」

夫人はほゝえむ。

「それは中々凄いわね！妾は御前達はまだほんの処女だとばかり思つてゐたのに、——御前達の身体は中々素晴らしい！さあ此方へ入つて見せておくれ」  
彼女は決して怒つていない。むしろ自分の発見を喜んでゐる。これで第一の補いが出来るのだと。——黙つてこの二人は部屋へ入る。しかしまだ二人の婢はいくらか恥しがつてゐる。

「着物を脱いでごらん。妾は御前達の裸体が見たい——」

二人は命令に従うのを躊躇しながら然し期待にもえて、その魅力の一つ宛あらわしてゆく。遂に裸体で其処に立つに至る迄。只然しハンガリーの靴下だけは足につけて。

膨起する乳房は非常にかたい。そしてでつぷりと其の乳房は身体から離れて浮き出している両足はがつしりと發育している。心地よさそうに伯爵夫人はこの二つの裸体をじろじろと眺めている。沢山の鏡のせいでこの室全体そがの裸体像で



充たされてゐる様に思われる。「それで——」と彼女は言う。  
「誰がお前の一番好きな人かえ、エテルカ？」  
「ラヨスでございます。奥様」  
「そして、あなたは？イロニカ」

「ヤノスでございますわ」  
「お前達はあの最後の晩に彼等と一緒になつたのかい？」

乙女達はうなずく。もう恥しがらない。「おゝ、それをお前達は妾に話してごらん！さあこゝへ掛けよう」

夫人はシャツを脱ぎすてゝすつかり裸体になるそしてソファの上に横になる。

「イロニカ、お前は——うん、はらばいでなくありむけに——そう——もう少し先へ——そうそうそれでよろしい。それから。エテルカお前はこつちへおいで——うんそうじゃない——あゝそう——もう少し前へ——さあ身体を延しなさい——あゝそうそう——」

で私は——。





## 淫乱女

## 司令官夫人の行状

司令官夫人の家には夫人の希望によつてイストヴァンが後に残つていた。彼はマジヤール人だがつしりと肥つた好色な男だ。まだあの出征の行進曲が聞えて来る時、もう既に彼の女主人の前に呼ばれていた。

龍騎兵の司令官夫人というのは非常に肥えた女で、もう成熟し過ぎていて、恐らくその為に尙更淫乱だつたのかも知れない。彼女も又出征の前夜は嵐の様な夜を過したのだ。夫の精力の最後の一滴までしほり取つたのだ。然しそれでもまだ満足はしていない。

「男喰い」と士官達は彼女を呼んでいる。そして彼女にその貢物を捧げなくてはなんだ士官は一人もいない。

イストヴァンは主人の前に立つて彼女の顔をじろく眺めている。

「お前は中々顔の皮が厚いね、余り早く喜ばぬがよい。何故なれば未だ私はお前を戦線へ送ることが出来るからねえ——」  
「そうしたら奥様はそれから誰と——」  
「私だつて禁慾する事位出来ますよ。」

イストヴァンは笑っている。こゝで彼女はもうそれ以上体裁をつくることはない。

「お前の言うことは尤だ。私は本当に二人きりになれて嬉しいよ。もう私達を邪魔する者はいない。さあ——」

彼女は朝の衣を着ている。其れはだぶついているので一層彼女は肥つて見える。彼はその衣を開けて脱がせる。彼はこうした仕事にはもう慣れきつてゐる。

司令官夫人の気が落ちついて話をすることが出来る様になる迄には彼は大分待たなければならなかつた。彼女はあえぎ乍ら言つた。

「イストヴァン、お前はロバだね！」

## 二人の娘

その間に司令官夫人の二人の娘の部屋で或る会話を交していた。無論それには応ずる行為も伴つていた。

姉娘のミチイは当年十九才だつたが、身体は成熟した女と同様に発育していた。彼女の乳房はもうすっかり張り切つていた。そして臀も又同様に。彼女の大きな真黒の眼の中には慾望に燃えていた。

妹娘のリツシイは数え年十七才であつた。そして身体つきは姉さんと同じようになりそうだつたが、然し姉程まだ肥つてはいなかつた。彼女はブリュネットへ帯黒色の髪を有する女子であつた。そして非常にやわらかい皮膚を持つていた。この二人の娘の服装はシャツ、靴下、上ばき、ズボン、スカートとコルセットそれだけであつた。

「もうみんな行つてしまつたわねえ」とミツチイが言つた。

「これから退屈になるでしょう」

「そんな事はないわよ！まだ二、三人は残つていてよ」

「ミツチイ、こゝに男の人がいてくれたらね、えゝどんな人だつて男ならいゝわねえ」

彼女は鏡の前に立つてシャツを胸から押しのけたので素晴らしい乳房はすっかり見えた。彼女の皮膚は血管が青くすき透つて見える程やわらかであつた。そしてバラ色をした乳頭はピンと突起していた。そして乳頭の固りはいくらか黒味を帯びていた。

そこで彼女達は只靴下だけを残してすっかりおゝいを脱ぎすてた、若々しい新鮮な姿。——それでいてもうすっかり発育した姿だつた。彼女達は鏡の前に立つて身体を眺めていた。そして波打つてゐる乳房を両手で押えていた。それから椅子に腰かけて足を出来るだけひろげた。





## 孤獨に負けた第三の女

## 騎兵隊長夫人コル

町に於ける二軒の家の有様はこの様であつたが、他の家では？尙此処に騎兵隊長夫人のコルがいた。真のウイン生れの女でハンガリー人と結婚していた。彼女は派手好きな火の様な情熱のある女であつた。

夫が家にいた頃は彼女の満足のゆく迄彼女に仕えてくれたので、それだけ彼女は夫との別れを悲しんだ。然し彼女は自瀆したり、侍女や下男と通じたりする程無恥にはなつていなかつた。彼女は時をつぶすのに他の方法を求めた。彼女は一匹の強い大きな愛犬を持つていた。彼女がその動物をその目的でつれてきた時には——それは夜も更けて家人がすつかり寝静まつた時だつた。——美しいこの女は一人つぎりの彼女の室に坐つていた。彼女はまだ着物を身につけていた。その着物は身体にきちつと合つていた。それは前が切り下げられていた。彼女は彼女の足もとには犬がねていた。彼女は足先で犬をなでゝいた。

「さあ、ネロや！」  
この大きな動物は立ち上つた。犬の冷たい鼻が彼女の足に触れた。……

そこで彼女はよい助手を見出したと思つていた。然し彼女が着物をまとつた時には、彼女は殆んどこの犬にも恥しくて顔が向けられなかつた、それで彼女は犬を外へ出してやつた。

彼女は今丁度髪の手入れをして朝のコーヒーを飲んだ所だつた。その時に歩兵隊のボラーク中尉が訪れた。彼女は彼と知り合いであつた。彼はがつしりとした青年であつた。急いで彼女は鏡を見た。彼女は少しも恥じる必要はなかつた。中尉は室へ入つてきた。そして彼女に気付かれない様にドアにカギをかけてしまつた。彼女は微笑を浮かべて彼を迎えた。「何か御用はございせんか」

その時彼女は彼の目を見た。そしてその目に驚いた。彼女は逃げ出そうとした。然し彼はもう彼女の側へ来て後から彼女を抱きか



ゝえた。夫人は声を立てようとしたが、もうその時には彼は彼女の耳にさゝやいた。  
「静かになさい。私は昨夜のことをすっかり拝見してしまいました。あれは奥様〇茲でしたねえ、監獄は直ぐそこにあります。僕が一言しやべればいいのです。然し僕はそんな事はしやべりません。僕は貴女に惚れているのですよ」  
「あなたは私を訴えるようなことはなさいません？」  
「ええ、只一つの条件の下に——、いやですか？」  
「おゝ！あなたは——」  
「僕を何とでもお呼び下さい。——あなたは僕で満足するでしょう」

彼は尙かすかに反抗している此の女を抱き上げてベッドへつれて行つた。然し尙他の女にも同じ様な事が起つた。或る女は直ぐ降参した。或る女は仲々しなかつた。然し結局は大ていの女は愛人を得た。





サ  
タ  
ン  
の  
暴  
室

—銃後の街は恐るべき亂交時代を現出していた。—

[illegible]

物になつてしまつた。

又或る男爵の娘でカチーという子供がいた。この娘は男を見ると肉慾の刺激を受けるという早熟な乙女の一人であつた。細つそりと背が高かつた。しかしそれでいて乳房は充溢していたし、彼女の短かい着物の下からは太い脛が見えていた。彼女はもとつくに処女ではなかつた。従兄が彼女が庭の葉かげで独りきりで坐つていた時に誘惑してしまつたのだ。カチーの様な淫乱な女は珍しかつた。彼女は実に沢山の色男をこしらえた。

最も彼等の好んだのは人里離れた森の池で水浴することであつた。これは淫猥な光景を演ずることによつて終りを告げるのが普通であつた。

夫がありながら不自然な同性愛を好む少佐夫人。この町全体が伝染病にかゝつてしまつていた。あの司令官夫人がその

中でも最も中心になつた。彼女はイストヴァンを使つて凡ての貴婦人達を自分の家へ招いた。彼女は自分の二人の娘と一緒に大きな食堂にいた。

「私達はいろいろと變つた殿方をこゝへ招待して、その方達と楽しもうではありませんか。私達がみんな心を合せていさえすれば私達の夫は何も知らずにいるでしよう。私達は二度とは楽しめないいろ／＼の楽しみを味うことが出来ると思います。」

この司令官夫人の意見に結局皆が賛成して大宴会を開催することに一決された。そこで司令官の家へ守備隊と貴婦人の殆んど全部が集つた。どの侍女たちも一種のトルコ風の着物を着ていた。それは腕のないジャケツで前がすつかり開いていた。

各兵隊には二人の貴婦人と二人の娘が割り当てられた。室の中ではあちこちで淫猥なダンスが始められた。この時好色な司令官夫人は躁宴を始める合図をした。そして魅力のある氣違ひじみた性の乱舞が続けられた。そしてこの饗宴が繰返えされるに従つて、如何なる男——行商人





であろうと——参加させ、下女達は勿論新しい沢山の好色女が駆け集められた。村の娘たちも新しいいけにえとして加えられた。

「私共は貞操の堅い女を捕えてきて皆の見ている目前で辱しめて見ようではありませんか。その女が烈しく抵抗する様子を見るのは確かに新しい喜びだと思えますわ」

此の司令官夫人の提案によつて、早速腹心の者達を派遣して、最も純真で貞淑な一人の田舎娘を百姓小屋から奪つて来させた。

室の中央には大理石の浴槽が設けられて、その中には極く上等の白ブドウ酒を一杯いれてあつた。その桶の側にはいろいろな着物が置いてあつたその着物は



けにえとなる娘が着なければならぬのであつた。四人の男が素裸になつてこの不幸な女を辱しめるために立つていた。

そこへ、この犠牲となる百姓娘ヴァンヤが連れてこられた「放して下さい」とヴァンヤは悲鳴を挙げて蒼白になつたり赤くなつたりして逃げ出そうとしたが忽ち掴まつてしまつた。彼女のはかない抵抗も結局何にもならなかつた。遂にシャツは開かれてしまつた。

「本当に処女？」司令官夫人は尋ねた。

「ええ、本当の処女ですとも！」

「では彼女を裸にして供物を供えなさいそれから彼女自身をいけにえとして供えるのです」

そこで争いはもう一度始つた。彼女はすっかり裸にされてしまつた。実に素晴らしい肉体美の持主であつた。女達はみんなでヴァンヤの処へ押しかけて波うつている隆起を触つたり撫でたりした。司令

官夫人は先ず順序を定めた。先ず入浴させよと命じた。そこで彼女は浴槽の中へ運び込まれた。この立派な身体を洗う仕事はリツジとミツジ及びレジー夫人が當つた。洗いながら彼女達は此の身体のおちこちを掴んで楽しんだのであつた。非常に心を使つてこの可憐な女の濡れた身体が拭われた。それから一段と高い椅子の上にのせられて四人の男がおさえていた。すると今度は此処に集つてゐる女達は、その前で氣狂いじみた舞踏会を始めた。踊りながら身につけていた蔽いを残らず脱ぎすてしまつた。それが済むと彼女達は一列になつてこの椅子の前に並んで嬉しそうに笑つていたが、遂にうん／＼呻り出した。彼女達はもう一度手をつないで此のいけにえの周りを踊り乍ら廻り出した。

さあ今度は此の犠牲の番だ。

四人の男によつてヴァンヤはソファの上に横たえられた。トーフエルが此の処女を破る幸福な男に選ばれた。そして又彼は此の役には、嵌り役であつたのだ。彼女は彼を噛もうとした。しかし沢山の女の助手は彼女の頭を押えた。





## 悪魔の饗宴

―性に飢えた女と野獣と化した兵士とが奏でる狂人譜―

それから食事が始まった。裸の女達も手軽なキモノを纏い、みんな新しい精力を得るために御馳走を食べたり強い酒を飲んだ。

此の時、突然にこの広間の両方のドアが叩き破られてガチ／＼と音を立て、白刃をひらめかした敵の一隊が雪崩込んできた。すべての者は驚いて身を硬くして坐つたまゝでいた。男達は飛び上つて獲物を得ようと争つたが、高が食卓用のナイフ位しか手に入れることは出来なかつた。勿論そんな物は何の用にも立たなかつた。

「降参しろ、お前達は皆捕虜になつたのだ」

敵の隊長が叫んだ。そして窓の戸を指さした。その窓からは銃身が威嚇的に皆の方に向けられていた。それにも拘わらず二三の将校は椅子をふりかざして敵に

向つたが、忽ちのうちに打ち倒されてしまつた。残りの者は縛られて広間の片隅におし込められてしまつた。

「予は予の兵卒達の労を犒う為に保養を与えてやろう」

隊長は叫んだ。女は皆心を躍らせて強そうな敵の将校の方へ秋波を送つていた。敵の将校達は各々二人宛の貴婦人を手に入れ、兵卒たちは広間に侵入して二人に一人の割で下女を連れてきた。勿論下女は抵抗等しなかつた。然し尙その後から多数の兵士が進入してきたので多数の女を手に入れることが出来なかつた。

早速司令官夫人のはからいで、前にこの乱痴氣騒ぎに参加したことのある町の人妻や娘が兵卒の手によつて連れて来られた。

「食事を後にして、先ずお前達の捕えてきたものを見せろ、お前達の美人を裸に

せい」

そこで兵士達はその命令の通りにした間もなく彼女たちは皆シャツと靴下だけにされてしまつた。それから隊長の命令で彼等は波打つ乳房を取り出してみせた。それからシャツをまくり上げて残りの部分も露わにした。

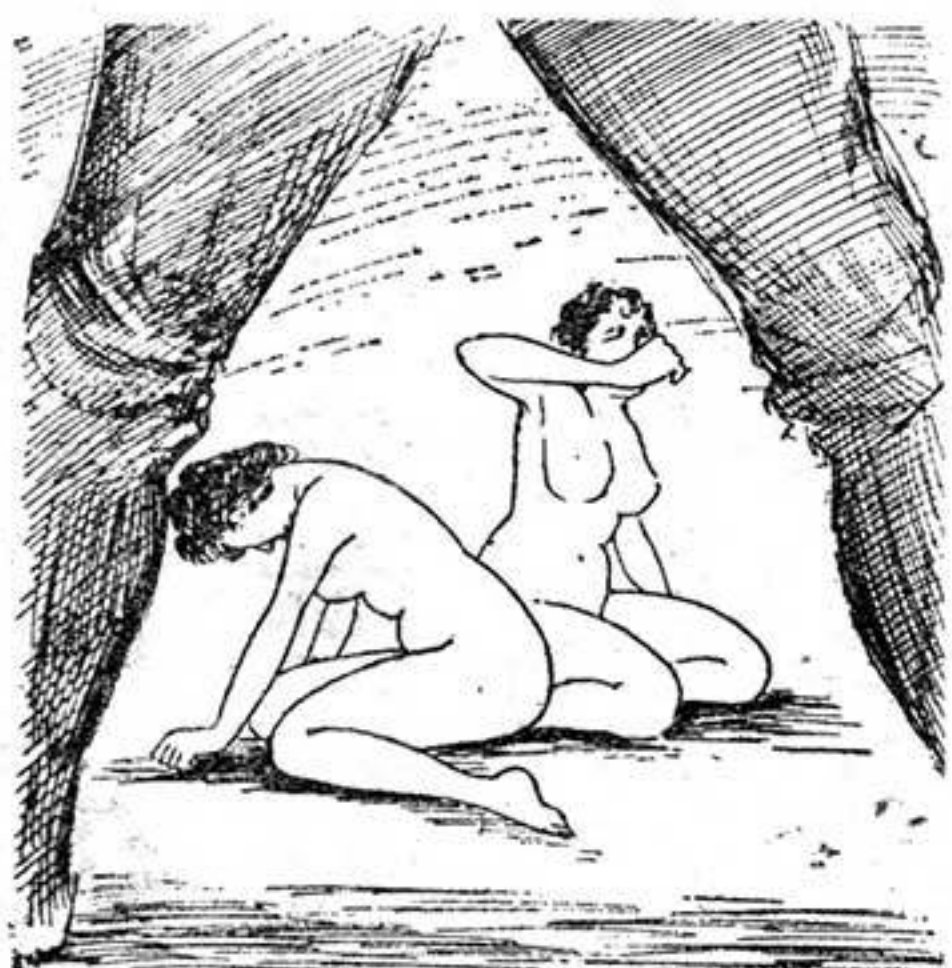
隊長は自ら範を示して司令官夫人を手に入れた。将校達はこんなに易々と自分達に快樂を提供してくれる女に驚異の眼をみはつた。兵士共はその間に各々娘達を分配した。こうして外部に待機していた兵士達も交替で十二分に満足してから隊長は命令した。

「さあ、今度はあの捕虜の男達を処分することにしよう」

将校は一行に並んで立つた。そこで彼等の前には裸のまゝの或は絹の靴下だけの女や娘達の逞ましい足がテーブルからぶら下り、裸の乳房が波打つていた。さてそこで捕われた将校たちが先ず引き出された。

「貴様達は戦場に出ている同僚の妻や娘を誘惑して、これを姦淫して恥と思わな





る。然し貴様達は先ず自分で恥しめた女達によつて恥しめを受けねばならない。——おい、兵士達、こいつらを一人一人椅子に縛りつけてズボンを取がせい」と隊長がどなつた。

忽ち命令通りに捕虜の裸の臀は空高く上つた。そこで隊長は今度は婦人達に向つて、「兵士達から剣の革帯を借りなさい二人宛この男達の左右に立つて、交る交る二十五回この男を打ちなさい。直ぐ血の出る程しつかり力をこめて！力を入れない者はその男の恋人と見なすのであるから——」

パチ／＼と音を立てて革帯は捕虜の臀に落ちた。その革帯の端には止め金がついていたので、直ぐ血が流れ出した。皮膚は益々破れて真赤に染つた。血は床の上にポト／＼と滴つた。女達はそれが気に入つたので愈々強く打つた。打たれた者はもう動かなかつた。少くとも氣絶に近い状態にいた。

「では、この懲罰を終ることにしよう。で女達は今度は真裸になつてくれませんが、そうして呉れると私達を喜ばせ、感激を新にさせて強い行為力を出すことが出来ますから——」

大急ぎで繰べてのこれらの貴族の娼婦達は娘達も——この命に従つた。そこで将校達は奇抜な美しい光景を眺めることが出来た。白い丸味を帯びた手足、突起した臀、膨れて豊かな乳房！何んたる素晴しさであつたことだろう。……

さて次に捕虜の男たちには恐ろしい最後の刑罰が加えられた。捕虜たちは椅子に坐らされて縛りつけられていたので出血している臀は坐席にしつかりはりついてしまつた。そして女たちの手によつて言語に絶する凄惨なやり方で拷問された彼等の両眼は飛び出し、叫び声を発した

いかの如く口を開けていたが、只苦しげに喘ぐのみであつた。そして皆が死人のような蒼ざめた顔をしていた。

「さあ今度は銘々小刀を持つて一人は×を、もう一人は××を切り取れ、進め！恐ろしい罰だ、さあやれ！」

すると女は一人として躊躇する者はいなかつた。間もなく声高き苦痛の叫びが響いた。この広間は河の如く血が流れた「のけ！」

隊長の命令によつて、兵士達は半死半生の捕虜の首に縄をかけて壁際に引きずつていつてぶら下げた。数分にして皆死んでしまつた。

此の日以来、敵兵はこの占領した町に駐屯した。勝ち誇つた彼等は守備隊を壊滅させ、出征した将校、兵卒、それに市民達の家の中で自分達の最も氣にいつた女のいる処へ宿泊した。

老人やほんの幼児以外には男と名のつく者はおらず、只女ばかりが残つていただけであつた。女は——老いも若きも——おしなべて強姦され、純潔な処女はその貞操をみじんに踏みにじられ、少年迄鶏姦の憂目にあつた。この乱暴極まる兵卒たちのする事に、ほんの少しでも不服な態度を示す者は、一層惨忍なやり方で辱められるだけであつた。





## 第二部

# 戦争による惨虐と淫虐

## 處女林への闖入者

女学校の寄宿舎へ闖入した兵士たちは、本当の処女の巣とでも言うべきものを発見した。人々は武器をとつて激しく反抗したので、下男や召使いたちがすつかり殺されてしまつてから、彼等は勝利者の権利として、その家を占領してしまつたのであつた。



この寄宿舎にはこの国の上流社会の娘たちが入つてゐた。そして二人の貴族の女が（自分の自由意志で結婚しないでいた所の）この舎監をしてゐた。この二人の女は有名な美人であつた。

メルとヴェル。は当然軍法会議に引出されたが、其れは只口実に過ぎなかつた。法官である将校たちはもう最初から二人の女の受ける罰をきめてゐた。彼女たちの顔色は蒼白であつた。敵は非難な満足を以つてこの二人の女をじろくと眺めてゐた。

先じ型のように二人の身分姓名が確められた。この国でも最も古い貴族の出であつた。起訴状が読みかされた。女たちは責任を否定しないのみか、自分達に任せられてゐる所の少女を保護するためには、自分の生命を投げ出すことも義務と思つてゐると答えたのであつた。

「何故被告は吾々軍人が斯かる少女たちに害を加えるという事を恐れるのであるか、吾々は決して婦女に対して戦争してゐるのではないのだ」

メルは此れを聞くと輕侮の笑を洩した。彼女は今迄にもこの戦争について、色々な噂を耳にしてゐたのであつた。この二人の女は罪を拒ばなかつた。闖入者に対して敵対行動を取る様に下男たちに命じたという事も承認したので証人などを訊問するの要は少しもなかつた。暫く謀議した後、判長は判決を下した。——先ず市内三ヶ所に於て公衆の面前で鞭打つて後に絞罪に処すといのである。

メルとヴェルは色は失つて氣も顛倒せんばかりであつた。死など決して恐れないと言つた、しかし絞罪——馬泥棒に科せられる罪である。——それに鞭打——しかも公衆の面前で。

「先ず第一の懲罪を裸の背に受く可し。第二のを胸に、第三は臀に！プロフオツスは各々二十五宛打て！」





プロフオツスと呼ばれた男は、軍隊式の挙手の礼をして前に進み出てから彼はこの罰を最もよく実行出来るものはないかと見廻した。しかし彼は天井からぶら下っているランプ有吊架の外には何も見出すことは出来なかつた。

彼は巧みに此れに縄をしぼりつけたその縄は丁度腕を伸ばすと握める所まで下つてきた。メルとヴェルは此の異様な準備を何のためにすることやらのみ込めないで見ていたのであつた。プロフオツスはメルの方が年長だと考えたので、彼女の方へ近づいて命ぜられた通り上半身を裸にしようとして彼女の方へ手を伸ばしたのであつた。しかし彼女は彼から一步飛びのいて威嚇的に彼を睨みつけて叫んだ。

「けがらわしい。私に手などお触れでない」

彼は心地よさそうに笑つた。

「手向いしない方がいゝよ。どうせ駄目なのだからさ。」

しかし彼が彼女を掴もうとした時に、二人の女は同時にその男に飛びかゝつて彼を押ししかえたので、彼はよろめいて

もう少しの処で尻もちをつく処であつた怒りに身をふるわせた彼は、連れてきておいた兵卒に目くばせした。すると直ちにこの兵卒たちは二人の娘にとびかゝつた。

二人の女は絶望的に抵抗したが、男の力には到底かなわなかつた。二人の男が両手を押さえ、第三の男が彼女たちの暴れている足を縛りつけてしまつたので、彼女たちは歯をくいしばつて成すがまゝにされるより仕方なかつた。そこでプロフオツスはメルの上半身を裸にするこ



もがいてあらゆる限りの力を出して抵抗した。しかし、こんな努力は何の効も奏しなかつた。

間もなく胸衣は落ちてしまつた。そして何の妨害を受けることもなく今や丸い驚くほどの素晴らしい乳房の隆起がはみ出して来たのであつた。そこで彼女は有吊架の下へ連れてゆかれた。兵卒は彼等が掴んでいた女の手を高く上へ上げた。するとプロフオツスは手早くその手をしぼり合せて、下つて来ている一条の縄にそれを縛りつけてしまつた。

こうして吊り下げられている姿勢の乳房は又一種特別な魅力ある見世物であつた。やがてヴェルの番が来た。彼女も又力の限りの抵抗を試みたが姉と同様に殆んど何の効果もなかつた。彼女の胸衣も又脱がされてしまつたので彼女の両の腕は裸になつた。暫くして彼女も同様に有吊架に縛りつけられてしまつた。こうして二人の姉妹は互に並んで立つていたプロフオツスは一本の太い棒の鞭を持つた。その鞭は沢山の細い枝がついていたので、でこぼこしていた。

ビューー！





鞭はうなりを立てて宙にうなつてメル  
ルのやわらかい背に当たった。打たれたメ  
ルは飛び上つて前へよろめいた。下着  
がすべり落ちてしまつた。裸の上半身と  
堅い乳房は男たちの前に波動していた。  
男たちは身を乗り出してこの眺めを一層  
享樂しようとした。

痛みと恥しさの為に彼女は身をかゞめ  
て一層頭を下へさげたのであつた。しか  
し両手を上に縛られているのでそれが出  
来なかつた。彼女は恥しさで真赤になつ  
た。第二打が彼女に当たった。彼女は激し  
く身を震わせた。白い皮膚の上に幾すじ  
もの赤い跡が身体中に沢山ついていた。  
彼女の乳房は烈しく波打つた。

プロフォッスが十五打ち続けて今度は  
ヴェルの方へ行つた。彼は新しい鞭を  
受け取つて、直ぐに此の美しい背にも恐  
ろしい打撃を加えた。「残りの十打は臀  
を打つてやれ」この裁判長の命令に、毒  
蛇にでも噛まれたように二人の女は身を  
すくめた。

「但し犯人が吾々に対して敵対行為に参  
加した女生徒の名前を白状すれば其の刑  
は許してつかわすが、どうじゃ？」

メルもヴェルも共に答えをしなかつ  
た。

「是非なし、さあプロフォッスやれ！」  
「裸にしていましようか？」  
「いや、それには及ばん、只着物をまく  
り上げて、ズロースを取りのけてしまえ  
ば十分だ」

そこでメルはいましめを解かれ、一  
脚の椅子へ連れてゆかれた。彼女はその  
上に寝せられて、小娘のようにせつかん  
されるのだと言うことを知つた。彼女は  
震えた。恥辱の意識の前には彼女の誇り  
も消えてしまつた。

「私はそれを白状致します」  
メルはどもりく言つた。

「恥辱だよ、メル」  
とヴェルは怒つて叫んだのであつた  
「お前は黙つていろ！この無礼に対して  
は何の慈悲も容赦も与えてはやれない、  
プロフォッス、直ぐこの女を椅子の上に  
のせてやれ」

直ちに男はこの娘を掴んで紐を解いた  
そして烈しく抵抗する女を椅子の所へ引  
つぱつて行つた。ヴェルは長い透明な  
絹の靴下の外に、膝の一寸上まで届く青

絹の口のしまつたズロースをはいていた  
そのズロースは太腿をきちんと包んでい  
た。プロフォッスは隊長の目くばせによ  
つて足のいましめを解いた。それから一  
本の丸鞭を手に持つた。その鞭は余り丈  
夫ではなかつたが、しかし非常によくし  
なつて弾力があつた。

「容赦するな」と隊長が叫んだ。

すぐに鞭は宙にうなつた。非常な勢で  
脹れた臀に当たった。ヴェルは出来るだ  
け逃れようとして椅子ごといくらか身を  
起した。しかし直ぐ兵卒に押えられてし  
まつた。第二の打撃が加えられた。する  
とズロースはビリ／＼音を立て、破れた  
今は動かすことの出来る唯一の足をバタ  
／＼させてもがいた。第三の打撃でその  
うすい布は前より一層破れた。そして第  
四の打撃ではばら／＼に破れ下つていた  
そこで皮膚の上には、恐ろしく太く赤い  
ミミズ脹れが見えた。

「臀を裸にせい」ズロースが邪魔にな  
る」

と隊長が叫んだ。ヴェルは其の男が  
彼女の臀を裸にして、ズロースを膝の辺  
迄引つ張り下げるのを感じて身を震わせ





たのであつた。それで只太腿ばかりでなく裸の臀部をも見ることが出来た。彼女は無論両足を出来るだけ締め合せていたが、しかし次の打撃が加えられた時には彼女はすべてを忘れて非常にはげしく足をばた／＼させた。

メルはひそかに独り泣いていた。彼女は下着を胸に押し当て、身体中を震わせていた。しかし妹を助ける等思いも寄らぬことだつた。そして新しい打撃が加えられる度に、彼女は自分が打たれたようにびく／＼とけいれんさせていたのであつた。遂に最後の打撃が加えられ、ヴェールの臀は恐ろしく燃え痛んで真赤に腫れ上つていた。

「よし、其の女はそのまゝおかせておけ、次の女の見せしめになるから！」

ヴェールは身を震わした。女生徒たちの眼前にこうして横わつていなければならぬのだらうか？ しかし一方、メルは二人の兵卒に伴われて寄宿生たちの厳重に禁されている広間へ行かねばならなかつた。そして敵対行為に参加した娘たちを教えねばならなかつた。それはたつた三人きりだつた。十八になる或



る將軍の娘と、十六と十五になる二人の貴族の娘とであつた。

この三人は広間へ連れて来られた。彼女たちはメルが下着だけにされて背中にはみみずばれの打痕が一杯についているのを見ただけで恐れをなしていた。更に可哀相なヴェールを見た時には、すっかり肝をつぶしてしまつた。白状しなければこの女のように打たせるぞと隊長がおどすと一も二もなく石を投げた事を白状してしまつた。

三人の娘はそれぞれ裸の臀を打たれて忽ち真赤に染つてしまつた。

「三人の娘は一人宛別々の室へ入れろ、ヴェールはこゝに残しておけ」  
隊長の命令が遂行されて、将校を除く一切の者は暫くの間遠ざけられた。そこで将校たちと美しいヴェールだけになつた。彼女はやつぱり椅子の上にねたまゝになつていた。将校たちは笑つてそれを見ていた。

更にあらゆる辱しめを受けたメルは順々に年長の方の寄宿生徒を連れてくる様に命ぜられた。そして此等の娘は皆敵の劣情のいけにえとなつてしまつた。

こうして遂には二十八人以上もの美しい裸の少女が完全に処女を奪われて、枕を並べて寝ていた。メルは寄宿舎の舎監から完全に娼家の女将になり下つてしまつた。自分の寄宿にいた娘は皆将校の所へ連れてきた。十才の少女に至る迄。

最も淫乱に陥つたのはメルであつた。彼女は飽くことを知らない情慾が強かつた。全市には敵兵と姦通しないような人妻は一人もなく、又敵兵のために処女を破られないような娘は一人として見出すことは出来ない有様であつた。





## 侵攻軍の淫虐行為

### (一)

数日後に一般民衆の敵意が燃え上つた。そして敵味方共に何の容赦もなく極端に惨虐な戦争を始めた。若しも奥国の兵士が敵の手中に捕えられた様な場合には、敵の女たちは直ちに此等の兵士の陰莖や陰囊を切り取つてこれを殺害するのである。すると男たちはこうして惨殺された死体を見るも恐ろしいような姿で街路に放棄しておくのである。

奥国人はこれに対して恐ろしい復讐をした。——女という女は、若いのも老いたのも共に彼等の手中に入るや否や全部輪姦されたからである。——

奥国兵の一大隊は敵の一隊を突に見事に奇襲して、彼等が抵抗する間も、又彼等よく試みる自殺がする間も与えずに完全此れを捕えてしまつたのである。捕虜の中で男は遺體会釈もなく附近の木に縛りつけてしまつた。

十八人いた女は殊数つなぎにして皆外

側へ向けて円形に並べられた。すると将校はこれを検閲して各々自分に気に入つた女を除かせた。ステファン中尉と友人のミロヴィチの二人は共に十二才位の少女を選んだ。この少女の姿態は蠱惑的に發育して丸味を帯びていた。が、勿論まだ男などは知らなかつたのである。

大隊長は一人の成熟しきつた美しい女を選んだ。この女は腰れ上つた美しい乳房と丈夫そうな太股の所有者であつた。其の他の将校も各自の好みに応じて選択したのであつた。しかし残念な事には、隊長を除いては二人又は三人に一人の女で我慢しなければならなかつた。そこで兵卒たちは、将校たちが其の慾望を満足する迄待つていなければならなかつたのであつた。

ステファンとミロヴィチは捕虜の女を傍の草むらの中へ連れていつて、そこでどういふ風にしてこの小娘をなぐさんだものかと相談した。

「僕はこんながつしりした娘が、はり切つた脛を出し乳房はもう丸くなつていて全然男を知らないなんて信用されんネ、故郷ではこんな美しい娘に手を出すことは絶対に許されない所だよ、しかし此処では——」

そう言いながらステファンが、淫慾に眼を光らして、この乙女の下衣の下に丸く膨れ上つて波打っている。乳房をまじく眺めた。

「本当だよ！」とミロヴィチが答えた。

「だが、この女は言う事は聞くまいよ」

「聞くも聞かんもあるものか力づくさ」

彼等は娘と交渉を始めた。若し娘が彼等の意に従うなら褒美をやらうと言つた。然しこの小娘は只二人の男を輕侮の眼で眺めているばかりであつた。そこで彼はこの娘を掴んで自分の膝の上に乗せて着物を脱がせ、美しい丸い臀を裸にし、両手をこれを真赤になる程打つた。この哀れな娘は一声も立てなかつたが、怒りに燃えて齒を喰いしぼり息をはずませていた。

「どうだ、言う事を聞く気はないか？」  
彼女はこれには何も答えなかつた。





「じゃ仕方がない暴力でやろう」  
遂に彼等は女を裸のまま地上に倒した。彼等が慾望を満たして立ち上つた時には、このモンテネグロの小娘は、死人のようにそこに寝ていた。只美しい丸い胸ばかりが嵐のように波打っているばかりであつた。  
「僕たちはこの娘と一緒に連れて行けるというのだけれどねえ！」  
とミロヴィナが言つた。しかしステファンは笑い乍ら  
「どうしてさ？俺たちは又次へ行けば、直ぐ外の女を手に入れることが出来るじゃないか」  
その間に隊長は自分の女を真裸にさせてベットのの上に縛りつけさせた。彼はこ

の女を散々弄んだ上兵卒に与えてしまつた。この外残りの総べての女や娘もこれと同様な目に遭わされたのだつた。丁度一時間後に、この十八人の女や娘は再び地面の上に寝せられていた。

真裸のまま彼女たちはもう呼吸も出来ない位凌辱の限りをつくされていた。兵士たちは、この裸女を寝せたままで前進していった。そして男たちが自分の妻や娘を探しに来た時に、彼等は半死半生に陥っている女たちを見出したのであつた。そして彼等は此処で一体どんなことが行われたかについて直感的に覺つた。少しの躊躇もなく彼等はこの不幸な女たちを深い谷の一つへ、無造作に投げ込んでしまつた。女たちは谷の底にある岩の上に落ち、身体を粉微塵に打ちくだかれてしまつて、禿鷹や野獸の餌食となつてしまつた。

## (二)

アルバニヤの村へ向つて一隊のセルビヤ人が、ひそかに音も立てずに進軍した奇襲である。この奇襲は見事に奏効した男たちが家や小屋から飛び出して抵抗を開始する前に彼等はすべて捕えられて無

惨にも殺されてしまつた。それから兵卒たちは、アチコチの家の中庭に雪崩れ込んで行つた。襲れた女や娘たちも、自分達の身を防ごうとしてその中庭で応戦の準備を整えていた。そしてその勇氣の犠牲となつて倒れた女も決して少くなかつた。然し、その犠牲となつた女たちは、むしろ幸福者であつたといつてよからう何故なら生き残つた女たちは、一人残らず凌辱の憂き目を見たからである。

——勿論素つ裸にされ、しかも街路にゴロゴロころがっている多数の男女の屍体の中で——そして兵火にかゝつて炎上する家々の炎の光りは、其処此処で演じられ展開される残忍きあまりない光景をアカ——と照し出していたのであつた。

勝利者が翌朝退却した時には、この村にはただ一人の生存者もなかつた。——生き残つて暴虐な凌辱の限りを加えられた多くの女や娘たちは、皆炎々と燃え上つている火災の中へ投げ込まれて無惨にも焚殺されてしまつたのであつた——けれども此の様な惨害が必ずしも到る所で行われたというわけではなかつた。それは何故かという、ヨーロッパ民族に属する兵卒たちの多数は、少くとも仮面を脱ぎすてるだけの勇氣がなく、白昼公然と捕虜の女たちや娘たちを凌辱する程の残忍行為を振舞わなかつたからである。





## 侵略軍を歓迎する女達

### 二人の中尉

この町に向つて最後の突撃が行われた  
そしてありとあらゆる抵抗が根底から打  
ちくだかれてしまった。残存していた人  
々は悉く捕えられて兵舎の中へ監禁され  
てしまった。堂々とした建物の建ち並ん  
だ大通りは、勝ち誇つた兵士によつて充  
たされていた。だが彼等は決して掠奪な  
どはしなかつた。彼等はおとなしく集合  
して、やがて宿舎の割当られるのを待つ  
ていた。それが済むと彼等は分散して割  
当てられた家々へと侵入していった。そ  
れ等の家々に男のいる所は殆んどなかつ  
た。

フオーゲル中尉とベルゲル中尉とは、  
或る豪商の許へやつてきた。その営業所  
の方は勿論閉鎖されていたが、住宅の方  
はまだ開けてあつた。戸口の処で一人の  
美しい侍女がこの二人の将校を出迎えた  
彼女は北の国特有の服装をしていた。上  
衣の上にマントに似たものを羽織りそれ

を絹の帯で締めていた。着物の下には立  
派な二つの張りきつた半球が浮き出てい  
たが。

ベルゲル中尉がこの顔を赤く染めてい  
る侍女を軽く抱えた。するとその時彼の  
手はこの素晴らしい隆起が気急しく波打つ  
ているのを感じた。侍女はこの二人の客  
をサロンへ案内した。サロンへ足を入れ  
ると同時に一人の気品のある堂々とした  
美人が盛装をこらして現れた。そしてに  
こやかに言つた。

「妾たち両国民は唯今互いに敵味方とな  
つて戦つております。けれど妾はその為  
に賓客を迎える友誼をおろそかにする事  
出は来ませんわ」

この二人の紳士はいとも叮嚀にお辞儀  
をした。それから何物かを探ぐる様な眼  
なざしをして、この夫人の全身を眺めわ  
たした。彼女の全身こそは実に魅力の権  
化であつた。身の丈はすらりとしていた  
が、そりかといつて決して瘦せてはいな  
かつた。むしろ肉付きのよい豊かな身体

つきの婦人であつた。彼女は白い乳房の  
上部を四角に裁ち下げた着物のくりから  
現していた。

こうして二人の中尉は夫人と侍女の二  
人を相手として飽くなき快樂に耽ること  
が出来た。

### 或る騎兵隊長

騎兵隊長は非常に高貴な宿舎に泊るこ  
とが出来た。その宿舎では優雅な主婦が  
彼を鄭重に迎えてくれたばかりでなく二  
人の娘がいた——勿論まだ若い娘であつ  
た。姉娘のエデースはやつと十四になつ







たばかりで妹娘のヘレーネはそれより一つ下の十三であつた。この三人の親子の外に、仏人の家庭教師と仏国生れの侍女が二人と外に四人の召使いの女がいた。そして此処にいた女は皆、背のすらりとした肉付きのよい非常に優雅な服装をした女ばかりであつた。

戸主の外には男という者は一人もいなかった。すべて武器を取る事の出来る人間は皆出征してしまつていた。夫婦は大変に性慾の強い女であつた。その上長い間禁慾生活をしていたので騎兵隊長は容易に彼女に近づくことが出来た。

最初の晩、すでに——彼女が騎兵隊長と二人きりで冬の園の中に腰かけていた時、彼女は唇を脹らせて彼にキスを許したのであつた。そればかりでなく、彼女は自分の上品な張つてはいなかつたが形のよい乳房にさわることも許したのであつた。

食後彼女の居間で四方山の話に耽つていた。夫人は一つのソファの上に横わつていたのでスリッパをはいた小さな可愛いい両足が自由になつていた。そうして彼女は騎兵隊長に自分の側へ来る様にと声をかけた。直ぐ彼は彼女の脇に席をと

つた時には、丁度偶然にでもある様に彼女の着物がひらいたので、白い乳房を眺めることが出来た。こうして彼女は益々無遠慮に身を伸ばしていった。

と彼女は叫びながら「私、もう一度あなたに身を任せたいのですわ！だがその前にこの邪魔な着物をすつかり脱がして下さいな」

彼はこの言葉を二度とは繰り返ささなかつた程すばやくふるえる手ですばらしい部分を裸にしたのであつた。……

彼はしかし、それでも彼女を放さないで……彼女に尋ねた。今見た女を皆自分のものにしてもよいかどうかを。

「若しあなたが私だけで足りなければ！しかし私は自分を中心とすることを要求します」

「それからあなたのお嬢さんも？」

「ええ、あなたはあの子たちにも触れてよいのですが、只処女を奪う事だけはいけません。あの子達はその点だけは純潔にしておかねばならないからです。しかし成長して後に、一人前の若い女になつた時には何をしようと私はかまいませんけど」

その夜は甘い快楽に耽つた後で二人は一つの寢床に眠つたのであつた。夫人はベルを鳴らして侍女を呼んだ、そして侍女が入つて来た時でも彼を離さず一緒に

寝ていた程であつた。侍女は夫人が裸で男の人と一緒に寝ているのを見た時には顔を真赤に染めたけれども、寢床へ近づいて用を尋ねた。

「マデロン、お前は私の代りに此処へ寝る気はないかい？」

「まあ！奥様……」

「お前、そんなに気どらなくてもいいよ。私はお前が長い間どんなに男に渴していたかをよく知つてゐるのよ。さあ、おいで——」

暫く躊躇していたが、やがて夫人の命に従つたのであつた。……

其の次の朝、彼は夫人の智慧だけで公園へ行つた。そして或る木かげにかくれていた。間もなく彼はエデースがこちらへ歩いてくるのを認めた。彼女は自分の入ろうとした木かげに人の居るのを見た時、驚いて戻ろうとしたが、彼はとび上つて自分の膝の上へ乗せてしまつたので——彼女は真赤になつて泣き出しそうにした——

その日、彼は娘の処女を奪わなかつた褒美としてもう一人の侍女を与えられた。彼女も又非常に肉付きのよい豊満な女であつた。彼はこの女も……一方マダムはそれを見ながら自分で満足していた。

翌朝、彼は庭でヘレーネを手に入れた。彼女はエデースからつかわれたのであつた。彼女又、彼のやさしさに身を任したのであつた。





## 戦争終結

トルコ侵略軍の好色的行状と凱旋者と銃後の女たちのトラブル

トルコの領土へも又勝ち誇った軍隊は侵入したのであつた。其処でも又士官たちは同様に多数の女や下女を捕えたのであつた。

第四連隊はトルコの或る町を占領してその地のパシヤの家へ侵入したのであつた。勝利者たちは一つの大きな部屋に女が三四百人も集まっているのを見た。そのうち少くとも百人位の黒人の女がいた——これ等は皆、裸であつた。

中には無論、男の心を蕩かすような美人もいた。特に並はずれた大きな乳房を持つてゐる点で他の者を凌駕していた。そうして多数の者は決して黒人に特有な黒色をしてゐるというわけではなかつたが、でもやつぱり黒いには黒かつた。士官の望んだのは白人の女だつた。

勿論白い女も十分にいた。彼女たちは乳房も露わなジャケツを着て、両足はダブダブしたズボンで包まれていたが、そのズボンは士官たちの命令で直ぐ脱がされてしまつた。するとトルコの女は太い

手足に一種独特な魅力があるのだという噂の本当であることが裏書きされた。

うそ程に太い腿や臀が現れた。皮膚は皆非常にやわらかくよく手入がしてあつた。その上これ等の女や娘たちは貞淑ぶろう等ということは少しも考えなかつた否、彼女達はこんなに沢山の異性を見た為、嬉しそりに眼を輝かした位であつた。そして直ぐ其の場に身を投げかけて兵士達から十分の享樂を与えて貰つたのであつた。

彼女たちは三人の正妻の外は皆、パシヤの愛妾と侍女であつた。だから妾である女は、何十日目に一度位の割でしか自分の番は廻つて来なかつたのだから——こうして士官達は女護島にいる様な気がして最初は非常に満足した。然し彼等はそれが済むと何か目を樂します様なものが見たいと言ひ出した。此処にいる女たちは精々レスボスの愛(同性愛)の芝居位しか見せることは出来なかつた——しかし此れは実に彼女たちには手に入つ

たものであつた。

こうしてゐるうちに、列強の干渉によつて平和が準備された。遂に平和条約も締結されたので勝利軍も又凱旋したのであつた。そうなると勿論、色々な不愉快な驚きが其処此処に起つて、そして多くの不貞の妻はその裏切つた家から放逐されたのであつた。しかし乍ら、中には此等の事実を仕方ないものとして、とがめなかつた男もいた。例えば例の司令官などもその一人であつた。彼の妻は人も知る乱痴氣騒ぎの一方の大將になつた女であつた。その二人の娘は最もひどい売女になり下つてしまつていた。

彼が凱旋し、何も予感することなく普通の挨拶を受けて後、間もなく彼の長女が彼の処へやつてきた。しかも寝巻のままで——こんな事は出征前には無いことであつた——彼女は驚いてゐる父親の前で寝巻の前をひろげてシャツ迄出して見せたのであつた。それから直ぐに美しい肉体迄もさらけ出してしまつた。

彼はすっかり魂消てしまつて、口をきくことも出来ない程であつた。彼女が、もう自分たちは皆数えきれない程強姦されてしまつた。——と説明した時には。





ロシア革命夜話

# モスコウの妖花

藤田盛治

（世に戦争ほど人の運命を狂わすものはない。このことは内乱とか革命に於ても全く同様だ。ここに私が書き綴ろうとするのは、一九一七年のロシア革命にまつわる、一人の女性の哀しくも数奇な物語である）

## （一）

W公爵の夫人アクシニアは、当時のロシア貴族屈指の才媛であり、社交界の花形であつた。長々と波を打つた金髪、ことに均勢よく伸びて、而もあふれるばかりに豊かな肢態。その濃麗な瞳は何時も妖しい情熱をたゞえて輝き彼女が嫣然と微笑むときは、豊頬のエクボと相俟つて、完全に見る者の眼を奪つたと云う。

十月革命の朝、彼女はモスコウの豪奢な邸宅の化粧室で金髪をくしけずつていた。数日前からウクライナ地方へ出掛けた良人のW公爵のことなどを想いながら、まだ薄い寝間着一枚の身を六きな三面鏡に映して、時々ニッコリへつて見るのであつた。

召使の一人が扉を押し破るようにし

て飛び込んで来たのは、ちやうどその時である。

「奥様、自動車へ、早く自動車へ！」

「早く、早く自動車へ！」

「——」

「すぐお逃げにならないと捕つてしまします。暴動です。革命党が反乱を起したのです」

アクシニアの手から銀の櫛がバタリとすべり落ちた。ロシア全土に垂れこめていた不穏な空気は今に始つたことではないが、折もあろうに良人の居ない留守に革命の勃発を見ようとは——しばらくは何の分別もつかず、呆然と鏡に映る己が顔を見つめていた。

「奥様、これを着てお逃げなさい。これは私の服です。これなら、顔を知らない人達には公爵夫人だとは分りません」

とつきの機転だつた。しかし着換えるのに意外に時間がかゝつて、二人が漸く転げるようにして階下へ駆け下りた時には、もう遅かつた。手にく銃や斧をさげた革命軍が広間に入りこんでいて、彼女等は難なく捕つてしまつた。

老執事がブルークロアながら邸内へ案内をさせられようとしている。綺麗に磨き上げて



あつた筈の広間が泥靴で無残にふみにじられ、汚い労働服の男達が、邸内の至る処から銀の燭台や茶沸器を持ち出すのが見えた。

「公爵は居らんらしい。しかし、公爵夫人は居る筈だ。夫人は何処だ。夫人を探せ！」

指導者らしい軍人がこう叫びながら、邸内を行きつ戻りつする。アクシニアは生きた心地もなかった。血の気の引いた頬が、死人のように蒼々蒼々として行くのを自分でも意識した。

銃剣を突きつけられながら、召使や従僕達と一しよに、追われるようにしてトラックに積み込まれようとした。もし公爵夫人だと分れば殺される。そう思うと、まるで刃の下をくぐる気持だった。

その時、ボンと彼女の肩を叩く者が居る。粗末な兵服を着た其の男が誰であるか、しばらくは呑み込めなかつたが、その男が小さな声で、

「公爵夫人、うまく化けましたな。それじゃ顔をよく知らない革命軍の奴等には分りつこない。私ですよ。庭師のグレゴリですよ」

「あつ、グレゴリ！」  
と云おうとしたが、声がかすれて言葉にはならなかつた。

「見つかりや命はないんだ。私について来なさい。何とかして上げよう。今じや私も光榮ある革命軍の一員だが、まあ、ここは一つ日頃の御恩返しに——」

暗夜に灯とはこのことか、思わず涙ぐもうとする彼女の手をグレゴリはぐつと掴んで、「なあ同志。こいつは此の邸で俺と兼ねてから馴染の召使だ。ちよつと借してもらうせ。お前達もそう殺氣立たずに、少しは楽しめしめ。女はそこら辺に一杯居らあ」

## (二)

「ねえ公爵夫人、さつきから云つて通り、命を助けてやろうと云うんだ。一度ぐらいは抱かしてくれてもいい筈だ。ねえ、そう邪慳にせずに——」

溺れる者は薬をも掴むと云う。その薬が此の場合いけなかつた。無我夢中で連れ込まれた穀物庫の中で、グレゴリにこう居直られようとは思ひもかけないことであつた。

「何をするの、変な真似はよしておくれ」

執拗にからんでくる男の手を払いなが、アクシニアは乱れた衣裳の前を押さえた。それでも、雪のように白い脛がチラチラとのぞいて貪婪な男の眼が、なめくじのようにその上

を這いまわる。

「庭師だと思つて馬鹿にしてるんだろが、ねえ、公爵夫人。革命が成功すりや、今度は俺達がお前さんの主人になるんだ。だからよ、一度でいいから、その玉の肌を——」

グレゴリの頑丈な手がぐつと彼女の肩にかゝつた。身を退いたはずみにビリりと衣裳が裂けて、桃色の乳房がむき出しになる。

再び抱え込まれて、男と共に薬の上を転げまわつた抵抗ももはや無駄であつた。抵抗すればするほど、それが却つて男の荒々しい情慾を唆つた。

ぐつたりと全身の力を抜いた彼女は、目を閉じたまゝ、次第に高まつて行く男の動作をじつと受けていた。

悪夢のような革命の一日であつた。

想いを遂げた庭師のグレゴリは、前言をひるがえして、容赦なく彼女を革命軍の中へ突き出した。素性だけは隠して置いてくれたが、せめてもの情けであつたのだらうか。

アクシニアはトラックで、市庁に設けられた強制収容所へ運ばれた。途中、血にまみれた幾つかの死体が雪の上に捨てられてあるのを見た。その上を、自動車を除けようとせずドン／＼轢いて行く。弾条の悪い車輪が



其の度にガタン／＼と不気味に揺れた。

その夜は、冷い板敷きの上で寝なければならなかった。そして、それから数日、彼女達はまるで奴隸の如くに追い使われた。凍りつくように寒い夜中、レールの雪払いをさせられる苦しさ。しなやかだった白魚の手も凍傷で紫色に腫れ上つてしまった。

薄暗い穀物庫で庭師のグレゴリから受けた凌辱の数が、気の狂いそうな憤りと悔恨を伴つて、彼女の胸をしめつける。良人は今何処でどうしているのだろうか。もしや捕えられて——不吉な予感が絶え間なく胸中を去来する。

今一度、良人に会いたい。でなければ、死んでも死に切れない。凡てを神に祈りながら彼女は次第に或る決意を固めて行くのであった。

遂にその機会が訪れた。

その夜、収容所の庭の樹にもたれて、寒々としたモスコウの空を眺めていたアクシニアは、ふと、近くの便所に入つて行く衛兵の姿を眼にした。而も彼はうかつにも拳銃の入った帯革を外に置きつ放しにして——。

彼女はそつと近づいて拳銃を抜き取つた。そして、収容所の建物と煉瓦塀の間の狭い路

を少し走つて、今度は足掛りを見つけて、一

気に高い塀を飛び越えた飛び越えたはずみに身体が雪の上にどつかと落ちて、上草履がそのまゝ雪の中にはまり込んだ。彼女は靴下一枚で走り続けた。

ほんのり雪明りのした街角の夜の露を通して、黒い人影が見えた。薙剣の先端が冷たく光つた。星の徽章が夜目にも赤い。

「止まれ！誰だ？」

鋭い声がかゝつて、銃剣が近づいてくる。その時、もう、アクシニアの拳銃は鳴つていた。

大きな身体が枯木のようにどつと倒れ伏した。彼女は夢中で駆け出した。暗い街を右へ曲り、左へくねつて——

どのくらい走つたであらうか。息が切れて凍えた足がもう動こうともしない。ぶくぶくとした雪の深みに足が埋まつたかと思うと、そのまゝ其処へ倒れ込んでしまつた。さらさらと落ちてくる粉雪が、ほてつた頬の上で冷たく消えた。

彼女は顔を雪に埋めた。そして、次第／＼に気が遠くなつて行くのを感じた。

ハツと気がついた時には、もう、ほんのりとした朝の暗示が薄桃色の明りを雪の表に授

げていた。

一人の少女がアクシニアをのぞき込んでいた。少女はアクシニアの首筋に手を廻して起しながら、

「私の肩にお摺まりなさい。私の家はすぐ其処ですから」

雪が再び激しく降りはじめた。

### (三)

ストーブには赤々と火が燃えていた。その火で貝殻のような耳をほてらしながら、少女が愁わしげに云うのであった。

「この革命が始つてから、もう数え切れぬくらいの人々が殺されています。皇帝や皇妃もシペリヤに送られるとか。貴族や高官の方々も次々に銃殺されました」

年の頃は十七、八であらうか。小柄な、如にも内気そうな少女であつた。口を利く元気もないアクシニアに向つて、少女は独り言のように話し続ける。

「私は貴女がどんな方か一向に存じません。また知ろうとも思いません。それに、こんな革命の時は、身分を明かすことは身の破滅です。ですから、貴女も——」

年に似合わず意味の深い少女の言葉であつ



た。少女は何もかも察しているのではあるうか。万事を呑み込んだ上、而も、絶対に素性を明かすなと説いているのであるうか。

「唯、私の兄は革命軍です。党の中央部で働いて居ります。ここ当分、家に帰つてくることもないと思いますが、でも、もし兄が帰つてくれば——」

と、思ひなしか語尾を憂いに濁らせて、

「どこか、お行きになる宛でも？」

「——」

「じゃ、此処にしばらくおいでになつてもいいわ。革命だつて直ぐに済みますわ。兄が帰つて来ても、私が居りますもの——」

「——」

「私はね、兄と二人つきり。貧乏だけど、幸福だわ。年は十七、名前はテレザ。覚えて置いて下さいね」

そう云つて少女はニコリと微笑んだ。

革命の日以来、はじめて知つた人の情であつた。アクシニアの閉ざされた心も漸く暖かくほぐれて行つた。云い知れぬ感に震える口で、やつと、

「御親切は身にしみて——」

こうして、その翌日も、その翌日も、アクシニアは少女テレザの家に傷心の身を横たえていた。

モスコウ市内はもとより、重要都市は殆んど革命派の掌握する処となつた。王統軍は支離滅裂になつて、至る処で潰走した。革命成功は今や疑うことのできぬ事実であつた。

数日の後、少女が何気なく洩らした言葉から、アクシニアは良人のW公爵がモスコウに帰るなり直ちに銃殺されたことを知つた。予期しないことではなかつた。しかし、最愛の良人を奪われた妻の悲しみは大きかつた。彼女は革命を呪い、怒り、そして泣いた。眼が血走り、とめどもなく流れ落ちる涙が音もなく絨氈の上に吸い取られて行つた。

アクシニアは夢遊病者のように表へ出た。もう何も考えてはいなかつた。涙も乾きつくして、彼女はたゞ二、三間先を見つめながら、憑かれたように夜の街を止いて行つた。

(呪われたる革命。復讐、復讐)  
唯、それだけが彼女の頭にあつた。街の外れは橋になつて、向うにはクレムリンの王宮と寺院の円い屋根が闇の空に黒く浮んで、雲を割つた星影が淡い光を投げて瞬き続ける。

冷たい夜風がさつと頬に消えた。

× × ×

少女の兄のルドフが帰つて来た。

革命の戦火をくぐつて来た彼の容貌は、見るからに精悍であつたが、同時に極めて無口な男であつた。

詳しい事情を聞こうともせず、気まずい夕食が終ると、彼はアクシニアに冷たい一べつを投げたきり、無愛想に二階の自室へ閉じこもつてしまつた。

「お気を悪くなさないでね。根はとつても好いのですが、生一本で、とつつきが悪いんですの御免なさいね」

一生懸命に取りつくろつてテレザの心が、むしろ、いじらしかつた。

「いいえ、別に」

と笑い返して、アクシニアは唯一人、窓辺の籐椅子に倚つて、暮れて行く街の家並を何時までも見つめていた。

眠れ吾子、いとほしの吾子——テレザの声であらうか、モーツアルトの子守唄が夜の空気を縫つて流れる。

一時間、二時間。アクシニアは其処を動かしなかつた。血の革命に疲れ切つたモスコウの街々も、ようやく深い眠りに落ち込もうとしていい。墓場の如き静けさであつた。



アクシニアが不意に立上つて、二階へ上つて行く。そして突当りのルドルフの部屋の扉をユツ／＼と叩いた。

「誰！」

鋭い声の中から応えた。

「わたくし、アクシニア。お邪魔しても宜しいかしら」

「何の用です！」

「折入つてお願いが——」

「僕は疲れています。明日にして下さい」

しかし、その言葉のまだ終らぬ中に、アクシニアは扉を押して中へ入つていた。ルドルフがあわてて寝台の上に起き直り、

「僕に何の頼みがあるんです！」

それには答えず、つとアクシニアが寝台の傍へ進み寄つて、真正面からルドルフと向い合つた。

「御迷惑！」

「迷惑じゃありません。しかし」

「しかし、何ですの。やはり御迷惑！でなければ、何故そんなに冷たくなさるの！」

不可解な女の言葉であつた。その意味を取り兼ねたルドルフが、

「早く用事を云つて下さい。僕は疲れてるんですから」

「じや云いましよう。私を革命軍に紹介して下さい。貴方の御世話で私に出来る仕事をさせて下さい。私は何とかして革命軍のお役に立ちたいんですの」

ルドルフの眼がキラリと鋭く光つた。

「僕は貴女がどう云う素性の人か知りません。また知る必要もない。しかし、貴女は決して我々の味方ではない筈だ」

「いいえ、私は貴方達の味方です。私はある貴族の召使でした。朝から晩まで彼等に追いつかれて居りました。革命党はその私達を貴族の手から解放してくれました。革命党は私達の恩人です。だから、だからこそ、私は貴方々のお役に立ちたいんです」

「——」

「ルドルフ、私の願いを叶えて！ 私の願いさえ聞いて下さるなら、私は貴方に何でも差し上げます」

ぐつと縫り寄つた女が、何か云わうとする。ルドルフの口へ強引に己が唇を押し当て、両腕を蛇のように男の首筋へ巻きつけた。

女の衣裳が肩からすべり落ちた。艶やかな肌と豊かな乳房の隆起が、じつと男の行動を待っている。

白い肉体が男の本能を烈しく揺すぶつた……

……寝台がギ／＼と妖しく鳴り続ける。

「おえ、ルドルフ。私のお願い、聞いて下さるでしよろね」

#### (四)

血に飽満した革命の勇士達は、やがて酒と女を求めて市中を横行し始めた。革命騒ぎで職を失つた女が、夜の街角に立つて彼等の袖を引く。焦土の上で、一片の黒パンと肉体が交換された。のみならず、至るところの収容所で、数知れぬ貴族の夫人や令嬢が兵隊達に凌辱された。

革命の指導者達は軍紀の紊乱を恐れてこれを嚴重取締つたが、指導者達にもまた彼等なりの秘密の歓楽があつた。此処、モスコウの某地下室がそれであつた。

街の陰惨な暗さと比べて、何と云う明るさと華やかさであらう。広いホールには煌々と電燈が点り、紫色の壁には豊満な裸婦の油絵が懸つている。卓子を取囲んで、既に多くの革命軍の幹部が女を擁して酒を呑んでいた。ブラボー、ブラボー、乾杯のコップが触れ合う音。陽気に笑いはしやぐ女の声。まこと歓楽の不夜城と云うにふさわしかった。



突然、あたりの電燈が一時に消えて、広間の真中に、小さなステージが紅い照明を浴びて浮び上った。

「我等が親愛なる同志諸君。諸君の不屈の斗争をおぎらつて此処に御覧に入れまするは、

当夜の呼び物、ラシアン・バレエ  
題して阿片吸飲者の夢」

司会者の挨拶が終ると、広間の隅のカーテンが開いて、支那服をまとつた二人の男が、ゆつくりと現れ出た。

両手を袖の中で組合わせたまま、ペコリと頭を下げ、変な足取りで舞台の紅い光の輪の中へ入つて行く。紅服はいよゝゝ紅く、青服は紫色に変わる……一しきり舞いが続いたかと思ふと、向い合つてドツカと胡坐をかいた。

徐ろに前の壺から長い煙管を取り出して食ふように吸い始める。やがて、ユラ／＼とただよう煙と共に、彼等はうつ伏せになつたまゝ深い眠りへ落ち込んで行く。

照明がパツと青に變つた。

と、隅のカーテンをひるがえして

薄い衣に身を包んだ一人の女が、玉のような素足を小股に刻んで走り出た。

どつと喚声がわく。卑猥な彌次が飛ぶ。女はその度にニツとこぼれるような愛嬌笑いを振りまく。

彼女の美しい身体が独楽のように廻り始めた。両の腕が蛇の如くにくねる。

照明が再び消えて、スポット・ライトだけが女の体をくつきりと闇の中に浮き出させた。薄いベールが一枚脱ぎすてられた。二枚





三枚………そうして最後の一枚。その一枚がサラリと身体を滑り落ちると、其処には月光を浴びたヴィナスのように妖しくも美しい全裸の女が微笑んでいた。

女の身体が再び異様に動き始めた。なめらかな人魚の肌の上に、青白いライトが照り映える。

乱舞する女の裸身と、蛇の如くにくねるその腕。ふくよかなその乳房、腰、肌、脚。光はまた紅になり、紫に、緑に………煙草の煙、酒、女、陶酔、溜息。

満場寂として声もなく、かたずを呑んで見守る間に、既にこの女をめぐつて取引が始っていた。

「あの女ですか？ そりやまあ、將軍のお望みとあれば御世話せぬことありませんが」  
タキシードを着込んだ男が、或る卓子の傍で卑屈に笑う。將軍と呼ばれた男は、見るからに脂ぎつた顔を光らせながら、

「なあ、我々は名譽ある革命の勝利者だ。世話をしてくれりや、礼はずむぞ」

「有難いことで。じゃ、例の部屋でお待ち下さい。直ぐに女を行かせますから。ヘッヘッへ、お楽しみなことですなあ。あの雪の肌と云い、乳房のふくらみと云い、將軍、覺悟を

決めて行かぬと、身体がとろけますぜ」

## (五)

「ねえ、將軍、大丈夫なの、本当に？」  
「なにが？」

「だつて、お家では奥様がお待ち兼ね」

「馬鹿を云え、あんな奴はどうでも好い。あ

いつは、わしよりも子供の方が大切なんだ」

「じゃ、將軍の一番大切なものは？」

「仕事だ、革命だ——いや、今晚からは違

お前だ。今日からはお前がわしの命だ。わし

はお前ほど美しい女を見たことがない。わし

はもう、ホレ、この通り、ぞつこん惚れたな

あ、だから」

「アラ、嬉しいこと云つて下さるわねえ。い

いわ、その代り、今晚は寝ささないわよ。う

んといじめて上げるから。ね、ね——」

ギニツと女の手が男の足をつねる。痛い、

と男が悲鳴を上げながらも、毛むじやらな手

で女の白い体をまさぐる。女の手練手管が何

時しか革命の斗士を陶酔の底に引きずり込ん

で、後は唯もう他愛もなく………。

人の世の様な姿態。その凡てを包んで、モ

スコウの夜が深々と更けて行く。

ぐつたりと寝込もうとする男の胸をゆすぶ

つて、女が甘い声で囁いた。

「ねえ、明晩も来て下さるでしょう？」

「いや、明日は駄目だ。明日は忙しくてな」

「アラ、どうして？」

「ちよつと重要な仕事があつてな」

「重要な仕事つて、なあに？」

「別に大したことじゃないが、とにかくお前

達の知つたことじゃない」

「アラ、変なことおつしやるわねえ。いいわ

將軍がその積りなら、私、もう帰るわ。こん

な割ない仲になつたと云うのに、案外薄情な

のね。いいわ、帰るから」

云いざま、女がスルリと男の腕を脱け出し

て寝台からすべり下りる。あわてた男が裸の

身も忘れて起き上り、

「待て。ちよつと待てよ。そうお前みた

いにボン／＼云つちや」

「じゃ、明晩来て下さる？ お約束してよ」

「いや、それが駄目なんだ。何しろ、明日の

仕事は絶対に手が離せぬのでな」

「私のために都合をつけて下さるだけの氣持

がないの？」

「決してそう云う訳じゃないが、実はな、明

日、一ヶ連隊ほどの軍隊を鉄道でペテルブル

グへ送るんだ。朝の十時にモスコウ駅を発つ



だから明日は——

× × ×

ペテルブルグへ向つた革命軍の軍用列車がモスコウを出発して間もなく、何時仕掛けたとも知れぬ地雷によつて、こつぱみじんになつたと云う報告が党本部に入つた。

数日を置いて、革命軍の参謀将校が作戦地図を某所で何者かに盗まれた。三日の後、秘密の火薬庫が爆破された。その翌日、再び輸送列車が王統派の手によつて襲撃された。

こうした不測の事件が、何時果てるともなく続いた。

ようやく事態の重要性を認識した革命軍がその全警察組織を挙げて捜査を開始した。スパイが居る！ 革命軍の機密をさぐつて王統派に通ずる謎のスパイが居る！

## (六)

今宵も、地下室の歓楽境は酒と女の香でむせ返らんばかりであつた。

折しも、舞台の上では、例の美女が白蛇のように踊り狂っている。ライトの点滅、テンポの高低。肌が輝き、乳房がふるえる。

最後のベールがさらりと肩から落ちた。青い光を吸つて妖しく浮び上つた純白の裸形、

# 屍姦の悲劇

(「サロメ」とサジスムス)

高野 彌助

虐待性淫乱症、即ちサジスムスを材料にした創作の中で我が国にもよく知られているサロメの一篇は一八九三年にオスカーワイルドの手になつた戯曲で、全体を通じて戦慄すべき「感情の悲劇」が横溢している。

一代の名女優サラ・ベルナールが始めて此れを公演しようとした時、淫猥なるの故を以てその筋から興行を禁止された。然るにその後三年を経て、独乙のドレスデンに於てストラウスが始めて此れを上演して以来大いに世評を博し遂に欧州各国に演ぜられるようになった。

戯曲の大意は——。サロメとは猶太王ヘロドの妃の前夫たる王との間に生れた妙齡の美女で、ヘロド王とナラボス大尉の二人より恋せられている。処がヘロド王が羅馬国皇帝よりの使者を饗応する席上に於て、サロメは端なくも予言者ヨカナンのか野の百合の花の如き肌々と黒い葡萄のように黒い頭髮々々猩々緋のように真赤な唇に見惚れて熱烈な

愛情を起し、進んで接吻せんとする。

予言者は彼女を罵り辱しめて此れを拒絶する。ナラボス大尉は自身の恋の到底成る見込のないのを知つて自殺する。処がヘロド王は予てより彼女に人知れず恋焦れているのでその歎心を求めるために、起つて舞わんことを勧める。そこでサロメはその舞う報酬として何なりと自分の望むものを与えるという誓約を王に為さしめたる後、一曲の舞を奏し予言者ヨカナンの首を斬つて、これを銀盤に載せ下賜せられんことを請う。

王は大いに驚き、いろ／＼説きすかしてその請求を撤去せしめるよう苦心するが、彼女はどうしても聞き入れないので、王はやむを得ず誓約の言を重んじ副手をしてヨカナンの首を斬らしめ、鮮血ににじんだ生首を銀盤に載せて彼女に与える。サロメはいかにも嬉しげに微笑を湛えて、ヨカナンの生首に接し、その真紅の唇に接吻する。その刹那、王は嫉妬のあまり思慮分別を忘れて、兵士に命じ楯



神秘の女体——

観る者の視線が凡て一つに集つたその時、突如、楽屋口からドカ／＼と入り込んで来た革命軍憲兵。それを縫うようにして、あわただしい少女の声。

「公爵夫人、逃げて、早く逃げて！」

声の主は確かに少女テレザ。とすれば公爵夫人と呼ばれた裸女は何人！

「テレザ、何もかも許して頂戴。革命を呪う私の精一杯の復讐。私は私の肉体で革命軍の機密を探つたんだわ。成功だつた、面白いほど成功だつたわ。でも、もうお終い。覚悟は出来てる。凡て運命ですもの——じゃ、私の優しいテレザ、左様なら」

× × ×

明けて一九一八年一月七日の早朝。モスコウ牢獄の外庭に一人の囚人が連れ出された。そのしなやかな身体と、こまかい足の運びは一見して女と知れる。

雪が紛々としてふり乱れる。午前四時、モスコウの朝は明けようとして未だ明けきらなかつた。突き刺すような冷気に耳の底がジンと痛い。

女の背が一本の樹にしばらくつけられ、兵隊の手で目かくしがされた。少し離れた処で一

を以て彼女を圧殺せしめるというのが戯曲サロメの大意であつて、いずれも恋のために非業の死を遂げるという血腥い悲劇である。

女主人公サロメが王に請うて予言者ヨカナの生首を迫るのは、その熱烈なる愛情を拒絶したヨカナンに対する復讐心にも出たことであるが、然しそれよりも彼に接吻してその燃るが如き情熱を満足せしめるとする強烈な性慾が王として此れを為さしめたのである。彼女はヨカナンの肉体の美に憧憬して、殆んど抑制することの出来ない熱情から、ヨカナ

列に並んだ兵隊達が息を殺して上官の号令を待つ。

反革命的スパイの罪により、元公爵夫人アクシニアを銃殺刑に処す——嘗てのロシヤ華胄界の花アクシニアの生命が、あえなく此の世を去つて行く一瞬であつた。

パン／＼、パン／＼！ 冷い朝の空気を破つて、時ならぬ銃声が響き渡つた。

女の細い首がガックと前に崩れ、真白いうなじにハラ／＼と粉雪がふりかゝつた。

(完)

ンを殺して此れを死骸にして迄も犯さねばやまぬ程の女性である。そこにサジスムスから派生した殺人淫樂の気分が明白に現れているのである。

自分の恋い慕える異性の身体を傷つけ、毒々しい鮮血の淋漓として流れいずる有様を見て層一層の熱情が激発し、快美感を覚ゆるのがサジスムスであり、更に一步すすめてその相手の生命を絶ち、泉のように迸り出る血潮を吸い、或は血腥き内臓を喰つたりして、十分に熱情を漏らすのが殺人淫樂症である。

北 濱

湯川胃腸病院

院長 湯川 永 洋  
副院長 三 浦 洋

大阪市東区今橋三丁目  
電話北濱 0922・6057



## 告白小説

## 中国兵の妻となつた女の手記

田島由美子



私は今、或る港町の裏通りにある特殊飲食店の一室で此の手記を書いております。私は自分の肉体を見も知らぬ男に弄ばす事によつ

あの満洲の大混乱の中に、十六の乙女が無智なるが故に中国兵のために純潔を奪われ、苛酷な運命の中に奔弄されてゆくのです。

て生活している卑しい女です。私は自分の拙い文章もかえりみず自身の歩んできた道を告白しました。それは今の十代の方々に前車の轍として頂きたいと思うからです。掠奪、暴行、惨殺、放火、終戦時の

文中の千恵というのは何をかくしましよ私の前身なのです。この哀れな女の告白をどうぞ聞いてやつて下さい。

世間の荒浪から隔離された学舎生活も、あの恐ろしい終戦によつて一挙に中断され、当時十六歳であつた私は、温室育ちの中からいきなり寒風の中へ投げ出されたまゝ一足飛びに大人にさせられてしまいました。学生という限界から其れ以上見る事も聞くことも禁じられていた当時の私にとつては、見る物、知る物皆驚異警嘆の別世界でありました。そうした未知の世界の頁を一枚一枚めくつてゆく事に、この上ない興味と好奇心をそゝるのでした。

父兄から貞操の如何に大切であるかを常々耳にたこが出来る程聞かされてはいましたが、さて強姦、暴行とはどのようなにされてなされるかといった具体的な事といえは何一つ知らない私でした。人眼をひく大柄な顔立ちと、人なつつかい性格は誰にでも可愛がられ、私は物おじせずソ連兵達と手真似で談話をしたり近所の公安隊達といち早く心易くなり、前か



らの知己のように仲よく歌を唄つたり、食事を共にしたりしていたのです。

「ソ連兵や公安隊だつて、千恵は一寸も怖くなくつてよ。此の間家へ掠奪に来た時はそれでも少し気味悪るかつたけど、私の勉強部屋へ来た兵隊はみんな笑ひ乍ら握手をしてくれて手を出したわ。大きながっちりした手だったので私思わず笑つてやつたの。戦争に負けた日本人が戦勝国の兵隊から掠奪の憂目を見るのは仕方のない事じゃないかしら。千恵はみんなの様に彼等を憎めないわ」

私は生意気にもこんな事をお隣りの保兄様に言つて苦笑させました。無知程恐ろしいものはないと言われますが、後になつて此れが悲しい事実となつて証明されたのです。

年が明けて私は十七歳の春を迎えました。何時故国へ帰れるかわからないまま、現在の様な居食生活を続ける不安から、この長春に在住して長い私達は、何か商売をしようと考えました。其の結果、私は保兄様と一緒に煙草売りをする事になりました。保兄様は強度の近眼のため兵隊にもとられず、満洲工大の研究所に通つていました。我儘でお天気屋の千恵を本当の妹のように可愛がつて下さいました。

毎日街角に立つて煙草を売り乍ら、誰彼の見さかいなく直ぐ親しくなり、楽しそうにきやつきやつと戯れる私を、保兄様は御自分の商売もそつちのけで、はら／＼と見守つていられました。そんな時いつも額に皺を寄せて苦々しそうな顔をしているのです。私は内心保兄様は千恵に嫉妬してゐるんだわ、とひとりよがりな想像して、余計目に余る馴々しさを中国人達に示しました。

煙草売りの日本人仲間で千恵が一番よく売りお客の間で人気がありました。私はそんな自分がたまらなく得意で、保兄様の心配もよそに、夜晩く迄中国人の家で食事をよばれて帰ることもありました。飲んだ事もないウオッカやウイスキーを口にして、自分がとても大人になつた様な錯覚を起して胸を高鳴らしていたのです。

「千恵ちゃんは何も知らないんだろけれど、女の子はもつと自重しなくては取り返えしのつかない事になるんだぜ、千恵ちゃんの行動は全く危くて見て居れない、幸い今迄何事もなかつたのを良い事にして千恵ちゃんは平気でいるが、世の中つてそんな甘いものではない事を知らないのか、何んて君は馬鹿なんだろう、おまけにお酒まで飲んで……」

杏花園から、のこ／＼と出て来た私をいきなりつかまえて保兄様は私の左頬をなぐりつけながら、目鏡の奥からあの細い眼でけわしく睨らむのです。

「いや／＼、保兄様の意地悪、千恵は何も中国人なんか好きになりやしないわ。危い時は命がけで逃げるわよ。千恵はこう見えても心の中で警戒してるのに変な老婆心なんか出して、もう二度と誰が保兄様となんか口をきくのですか」

私は熱く火照つてひりひりする頬を押え乍らワツと烈しく泣き出しました。

## 二

折悪しく午後になつて降り出した雨は中々止みそりにもなく、日本人の露店商達はそれぞれ帰り仕度をしています。私は河連長との約束を思い出して、これ幸いと商売道具をしまいました。東洋人にしては珍しく彫の深い陰翳のある顔を持つた河連長を私は嫌いではありませんでした。彼は湖南なまりのひどいせいか何時も無口でしたが、目に常は優しく微笑んでいました。

毎日きまつたように「楽群」を二個買い、帰りには無操作にロシヤ飴を置いてゆくので



す。

「保兄様、今日が最後、もうこれから誰ともこんなお約束致しませんわ」

さつき帰ろうと誘われた時、曖昧な返事をしたまま逃げてきた私は心の中で自分自身にそう言い聞かすように呟やいて、人目に立たない様にネツカチーフを真深かに被り、急ぎ足で歩き出しました。今日の私は何んだか保兄様にかくれて悪いことをしに行くような、慓つたい、変な気持だつたのです。丁度その時、馬車の中から河連長が優しく笑い乍ら手招きするのでした。

「何処か静かな処で食事をしましょう」

彼は私の耳元で小声でそう囁やいて、馭者に行先を命じました。「トオ」鋭い苔の音に馬はバカバカと雨の大同大街を真直ぐ城内へ入つて行きました。大きな樹立に包まれた中国人の家の中へ私は河連長に寄り添つて入りました。彼の心安い家と見えて、案内もなく勝手を知つたように、私を促してドン／＼奥へ入つてゆきました。流石の私も余りにも家が大きいのので何だか心細く、おず／＼と彼について入りました。

雨は愈々烈しく本降りになつてきた様です。脂っこい支那料理に飽食した私は室内の調度

品を見廻しました。壁には三人の中国の娘の肖像画がそれ／＼異つたポーズで懸けられています。何かしら部屋全体が頹廢的な色彩で埋れているのも私の心を落着かせなかつた一つでしょう。私は幾度も腰を上げて彼に帰ることを要求しました。彼はその都度、首をふり乍ら、もう少し小降りになるのを待とうと私をなだめるのでした。

彼との談話にも倦きた私は、椅子から離れて窓外の雨の景色をぼんやりと眺めていました。「千恵ッ」突然河連長から呼ばれて、何気なく顧つた、私は瞬間こわばつた様な彼の表情に思わず、ぎよつと身を固くしたのです。一枚の洋紙に中国文で何か書いてあるのを、彼は私の目の前に展げるのです。そして私の顔から眼を離さずじつと睨んでいました。

私は恐る／＼その文面を読んで行く中、顔色の變つてゆく自分を意識していました。今迄私の夢想だになかつた恐ろしい要求。——自分の言いなりにならない以上は、此の部屋から絶対に貴女を帰さない——ということです。

「なんて自分勝手な」私は怒りと恐怖にがた／＼と身体の震えるのをどうすることも出来ませんでした。

「男つて皆野心を持つて女に近づくのだから千恵ちゃんもつと注意しなくてはいけないよ。君は吞氣過ぎるよ、いや吞氣よりも無智なんだ。千恵ちゃんを見る中国人達の眼は皆獸の眼だ、紳士ぶつていても爪をかくした狼共なんだよ。其の場になつて慌てたり悔んだりした所で其の時はもう晚いんだ」

何時かこう言つた保兄様の言葉が私の耳に悲く甦つてきました。——もう晚いんだ——獸の眼——私は紙を引き裂くと椅子をつき飛ばして素早く入口のドアへ身体毎ぶつつけましたが、何時の間にか鍵をかけられたドアはびくともしないのです。河は冷ややかに窓の方を向き乍ら煙草をくわえて不敵な微笑を浮べています。その眼はらん／＼と輝やいて煙草を灰皿に落とすと彼は無言で私の身体を抱きしめにきました。「何を、何をするの」私がけばもがく程、力の加わる彼の腕に、私は思いきり上半身をそらして彼から離れようと抵抗の限りを続けました。何分位経つたでしょうか、無言の闘争の末、ぐつたりとなつた私は手にも足にも力が入らず、息も絶え／＼に肩で喘いでいたのです。彼の熱い息を頬に受け乍ら長椅子に運ばれてゆくのを知りつゝどうすることも出来ませんでした。



遠く雨の音を聞いて私は目覚めました。もう何時でしようか室内にはシャンデリヤが明々とついています。私はあのまゝの恥しい姿で長椅子に寝かされているのです。あゝ何もかも終つてしまつた。眼に一杯涙を堪えながら私は力なくふら／＼と起ち上りました。

真暗な雨の道に石につまずき、ぬかるみにはまり乍ら私はとぼ／＼と歩いていました。今迄私の考えていた世間、男というものは何んと甘いものだつたんでしよう。知らなかつた。知らなかつた。あんなひどい目に逢う為にのこ／＼とついて行つた大馬鹿の千恵。泥は靴の裏にくつついて焦点を失つた私の身体を引き倒そうとする。

——あゝ、夢であつたら、夢であつたら然し夢ではなかつた。下着に残つた冷たい触感と焼火箸を当てられた様な疼痛は現実の私を攻めさいなんだ。処女とはこんなにも脆く失い去るものであらうとは。

「お、お母様」私は電柱にすがつたまゝ下半身を泥まみれにして道端に倒れてしまいました。

## 三

其の夜を境として私は沈んだ陰鬱な娘とな

つてしまいました。あれ程気易く冗談を言い合い大好きだつた保兄様にも逢わないように心掛けたのです。私は保兄様の視線が一番恐ろしかつたのです。煙草売りに出るのもばつたり止してしまいました。

「千恵ちゃん、この頃どうしたの？ 僕の顔を見ると途端に不機嫌になるが、何か變つた事でもあつたの、それとも何処か悪いのかい。千恵ちゃんはずつかり人が變つてしまつたなあ」

保兄様は昨日もこう言つていらつしやいました。千恵は黙つて顔を振つて泣き笑いのよりに頬をゆがめて笑いましたが、心の中では泣いていたのです。

その間に中央軍の邦人に対する引揚開始の命令が出ました。十数日前の千恵であつたら嬉々として両親や保兄様と一緒に引揚仕度に忙殺されたでしょうが、今の千恵にはも早や視国へ帰る意志等毛頭ありませんでした。今の私には、あの殺しても倦き足りない筈の河青榮ホウセイエイに今一度逢いたいという念いで一杯でした。逢つてどうしようというのか、それは分らない乍らも、あれ程憎い河が日が経つにつれて慕しくなつてゆくとはどうした事でしょう。心の一隅では目に見えない糸で引か

れるように河の面影にたぐり寄せられるのです。

私は小さい胸一つに畳んだ此の秘密をどう処理するか日夜悶え苦しみました、誰のせいでもなく自ら招いた過失なのです。当然自分で刈り取らなくてはと思いつゝも、此の打ちひしがれた傷手をかゝえて故国へ帰ることは堪え切れないことでした。

「お母様、千恵は身体がだるくて盗汗が出るの、一度病院へ行つて見て頂きますわ」

昨夜いろ／＼考えた末の口実ではありましたが、何も知らずに本当に身体が悪いのかとおろ／＼と心配する母の顔を正視するに堪えず涙の顔をうつむけてむせび泣きをするのでした。「お母様、本当にいけない千恵です、ごめんなさい」と心で詫び乍ら逃げるように玄關の玉砂利を踏み、名残り惜しく今一度自分の家を顧つてみるのでした。

丁度折悪く門の所でバツタリと出逢つた保兄様に、私はどきんと胸をつかれ、そゝくさと目礼をしたまゝで行き過ぎようと思いました。が、いち早くこの腕を掴まれて引き戻されました。

「千恵ちゃん、何処へゆく」

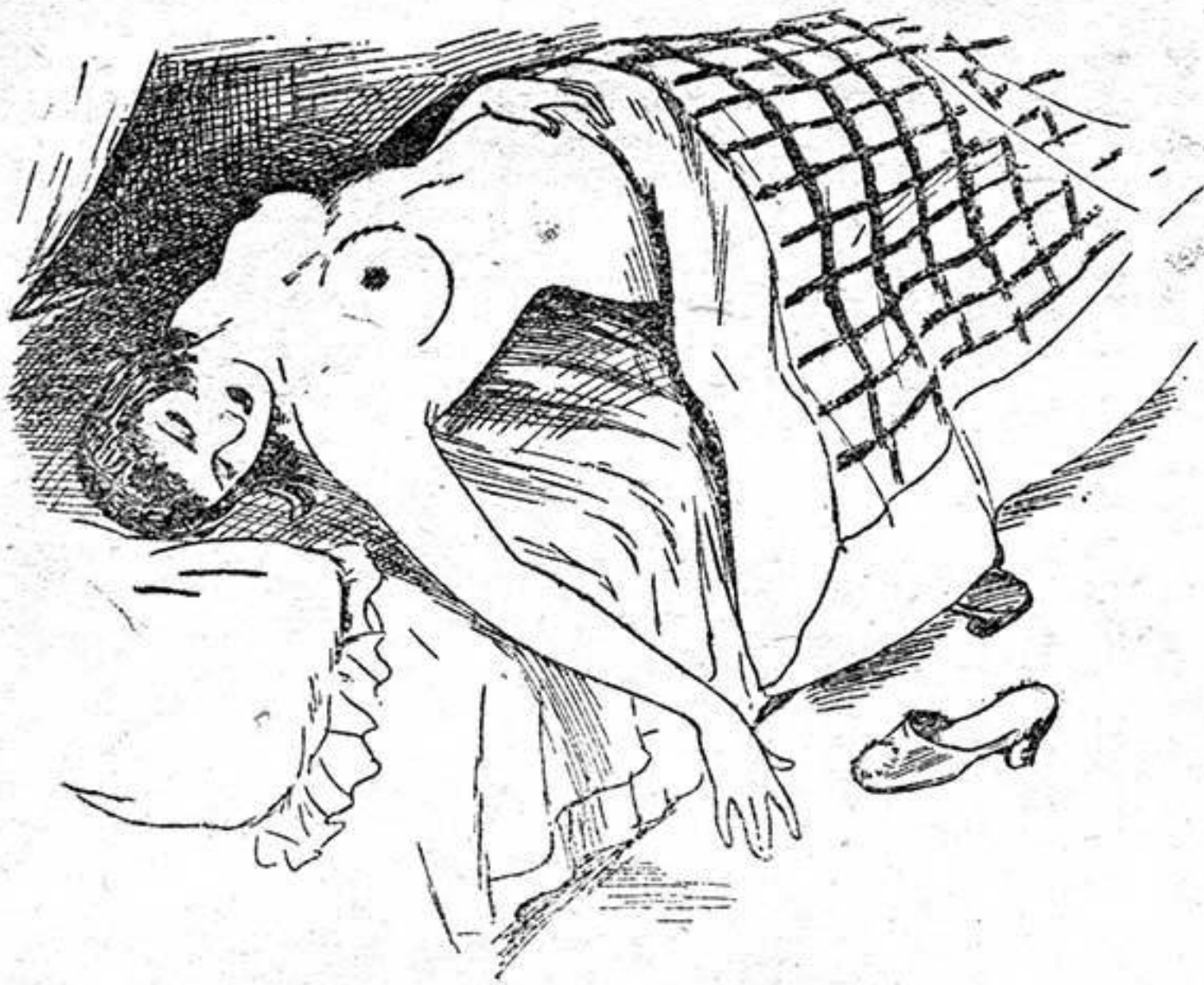
何もかも見すかした様な保兄様の静かなそ



して酷しいお声、私はこらえ切れなくなつて肩をふるわせて泣きじやくるのでした。

## 四

私は真白い枕カバーにたぽくと涙をこぼ



して、美しい牡丹の花を一面に刺繡した絹夜具に深々と身を沈めながら、心では学校時代の楽しい思い出を追っているのです。

不思議に初めの日の様な疼痛はありませんでしたが、決して乙女の心に快いものではありませんでした。

りません。こんな事をされている私を友達は想像もしないだろうと思ふと、自分一人だけが背負つた運命の苛酷さがひし／＼と身にしみてくるのです。

私が空ろな瞳を開いて呆然としてゐるのを河は、どう感違ひしたのか満足気ににやりとして「頂好罷テンホウバ」と幾度と熱い息を吐き乍ら囁やくのでした。こうした生活にも私は日増しに慣れてくる様になりました。日に一回は当然のやうな此の営みも決して嫌ではなくなつたのです。そんな私自身の変化を自分ではたまたなく軽蔑しました。情なくも思いましたが、も早や私の肉体には河青栄は絶対のものとなつたのです。

両親、兄弟、保兄様達の事は出来るだけ考えない事にしました。が矢張り一人になると背信の自分の姿が胸をしめつけられる様に苦しく思えてくるの

です。「親も兄弟も、友達も国も何も無くていゝ、要らないのよ。私には現在と河だけがあればいゝの……」そんな時私は狂しいばかりに心の中で叫び続けるのです。

家出から三カ月の月日が流れました。

河青栄は此の年若い日本娘を自分のものにした喜びを包みかくし切れないように私を一瞬も側から離しませんでした。何処へ行くにも特別な会合でもない限り、河連長のいる処には、着飾つたマネキン人形の様な私の姿がありました。

其の頃、在満邦人の待ちに待つた内地引揚は避難民地区をトップに順調に進められていました。落葉期の木の葉の散つてゆくやうに私の身边は佗しさを加えてゆきます。中国人の妻になつた私である筈なのに日に日にいつてゆくこの淋しさは何んとした事でしよう。私は河にかくれて荷物を満載したターチュの群を樹のかげから涙にうるんだ目でじつと見つめていました。

その頃、私は河の紹介で中国名月英グエイと呼ばれる村田智子さんを知る様になりました。智子さんはソングーからの避難者で、義兄さんの借金のかたに心ならずも中国人の妻になつた人でした。青白く澄んだ何かフリージヤの



花を思わせる線の細い月英さんは同じ中国人の妻として私の唯一のお友達となりました。

「千恵ちゃん、日本の空はこつちね」

こう言い乍ら彼女は自分の生れ故郷である松江の街の美しさを聞かせてくれました。宍道湖畔から仰ぐ夕暮の千鳥、ロマンに包まれた塚ヶ島のいわれ、島根半島に開れた絵の様な中の海、伯耆大山の雄大な眺め、私は月英さんの話を聞かされる度に、まだ見たこともない父母の国日本の山河をひそかに胸に描いてみるのでした。

郷愁！とは他国の空でいる私の胸に湧き上る物悲しい懐しさを言うのでしうか。

私の日常の起居動作、言葉のアクセントは自分でも驚く程中国人らしくなつて参りました。中国女性の社交上のエチケットとして喫煙も飲酒もすっかり板につきました。咽喉をやく強烈な白酒は私にあつてはむしろ忘我の境を誘ふ薬石でした。真赤にほてつた頬を河の腕の中に埋めて、酔に麻痺した神経を酷して現実の悲しさから逃避しようとするのです。彼の眼前できらびやかな豪華な衣裳を引き裂き、グラスを叩きつけ、窓ガラスを破り、挙句の果は一糸まとわぬ裸体をさらけだして痴態の限りをつくす狂乱の私。そうして嵐の

様な一刻の通過した後は、空蟬の様にぼんやりと窓外の叢から洩れる虫の声に送られて、こん／＼と深い眠りに陥るのでした。

## 五

何も知らない無垢な余り、欺されて河に汚され、そのまゝ親も兄弟もすてゝ河の許へ走つた私でしたが、千恵の身体はいつしか深く河を愛する様になつていたのです。

でも、それをはつきり自覚した頃には此の生活も終局が訪れました。八路との戦いは愈々本格的となつて、中央軍は一日一日と追いつめられていました。長春も戦場化するの時間の問題とさえ言われました。第六十四団迫砲連長河青榮は中央の命令で单身、南京へ行くことになつたのです。それは再教育のため南京陸軍大学へ入学するためなのです。「千恵、中国が平和になつたら必ず迎えに来る。三年後か、五年後か其の日迄日本で待つてくれ。今更日本へ帰えれとは言えた義理ではないが……」

涙を滂沱と流しながら河は私をしつかりと抱きしめて言うのです。私はもう彼のエゴイズムを呪ふ事も怒る事も出来ませんでした。何れ早かれ遅かれ此の様な日の来る事を覚悟

していた私です。何も言わず淋しくうなずいたのです。

一年余りの良心にせめられた血みどろの愛慾の生活だつたかも知れませんが。愛憎も傷心の星霜も何も彼も洗い流して、すが／＼しい安らかさで私は平和な日本へ帰つて参りました。勿論月英の智子さんと一緒に。



編集部

方々へ

田島由美子

私の拙い一文を発表して頂けるといふお便り有難うございました。私は本文でも申し上げました通り長春で生れあちらで育つたものですから日本には故郷というものがありません。あれから親兄弟は勿論、保兄様にも逢つておりません。私が引揚げて始めて足を止めた此の港町で売春婦に迄落ちていくという事等きつと御存じないと思ひます。此んな恥しい商売をしているのですから私の住所だけは必ず発表しないで下さい。然し保兄様にだけは一目逢つてお詫びしたいという氣持が切ないばかりです。若しお元気で暮しておられるのなら……。



## ★シベリヤ性風景★



## 技師長のマダム 穴 吹 武

局敗北者だ。大きなものにはまかれよだ。は  
ムムム。」

「武士は食わねど高揚子は昔の事だ——。」

「大森一つ俺達も時の流れにそつてパンのな  
る木をさがすか。」

「そらだな——。ノーマルツアー（二号）で  
やつてる連中もいゝ所があるらしいよ。お  
めでたい二人が俺達は揃つたもんだな——。  
はムムム。」

「はムムムどこかいゝ所あるかな。」

「発電所の技師長の家はどうかだろう。此の附  
近ではあそこ位だぜ。」

「そりかな——。あのマダムなか／＼美人だ  
がどこか冷たい所があるぜ。」

「そりかなあ——。だがソ連人は割に個人的  
にはいゝ民族だぜ。」

「じゃ——大森一つ行つて見ろよ。」

「俺一人でか。」

「そらだよ。ロシヤ語の下手な俺なんか最  
初から行つても駄目だよ。先づ第一印象が大  
切だ。」

「うまい事言つて俺を行かすんだな。だが何  
んと言つて行くんだ。」

「まさか薪割り、水汲み如何がとも言つて行  
けんし。」

「そらだ——煙草の火をもらいに行つて、水  
を汲みましようか、位で行くか。」

「そらだ、それがいゝよ。」

「俺は心臓が弱いから、もう胸がどき／＼だ  
ぜ」

「何に——言つてゐるんだ。鋼鉄製のくせに。  
たのむぜ。」

「しかたないな——。」

と言いつゝ大森は鋸を置いて立ち上つた。  
十分ばかりすると大森は四百瓦位の黒パンを  
持つて、にや／＼笑いつゝ歸つて来た。

「おい、亦組長大尉の家へ行つたよ。」  
「亦か、いゝ仕事だな——。俺達に仕事をさ  
せておいて、大尉の所の薪を割つたり、水を  
汲んだりして、マダムの気障を取つていろ  
／＼食物や煙草をもらうんだから。」  
「いやな奴だよ。あれでも陸士出身だからな  
——。」

「はムムム。だが谷、奴の様なのが結局は賢  
いんかも知れないぜ。うまくその時代の流れ  
に従つて行くのが。」

「そらだな——。時の流れにさからえば、結



「たいしたもんじやないか。」

「うまく行つたよ。まあ——食べろよ。」

と大森は谷にパンを半分やつて話し出した。

「丁度マダムが居てね、煙草の火をもらいながら、ベーチカの側を見るとバケツが丁度からなんだ。早速水を汲んで来ましようと言ふと喜んでね——。すみませんが明日から毎朝汲んでくれと言ふんだ。マダム手に霜焼けをしてるんだ。」

「そうか、犬も歩けば棒にあたるか。そろ／＼俺達にも運が向いてきたかな。」

「馬鹿正直者にも一度位はね。はゝゝゝ、君も交替で水汲みにいつてくれよ。」

「よしやるよ。」

翌朝から大森と谷は作業班長や警戒兵の目を盗んで技師長の家の水汲みをしたり、仕事で出来た木端を持って行つたりして、パン、馬鈴薯、煙草等もらつて楽しんで居た。

二人は毎朝交替で行つていたが、いつかロシア語の喋れる大森が専属になり、谷はもらつてきた馬鈴薯等の料理をする様になつた。

昨日迄一片のパン、一個の馬鈴薯でもいいと言つてた二人も、次第と欲を出し、ぜいたくになつて、せめてパンを三百瓦だけ、いや罐詰でも食べたいとなり、水汲み等でもら

食糧ではたらなくなつてきた。俘虜がソ連より支給される食糧以外に、一粒でも手に入れる方法は交換である。満洲、朝鮮から持つてきた衣類、日用品をソ連人の食糧と交換するのだ、終戦後二年位迄ソ連人の生活は実に惨めなもので如何に独ソ戦が苦しかつたかどうかわれた。

大森もいつか技師長のマダムの所へ、リュックの品物を一つ／＼持つて行く様になつた靴下、手袋、石鹼、マツチ、風呂敷等なんでもかんでも持つて行つたが、布類が一番喜ばれ、風呂敷はマダムのいゝネツカチーフになつた。

今日も大森はとつて置き、腹巻にしてた晒一反を持つてマダムを尋ねた。

此の技師長のマダムは、二十五六であろるか、金髪、大きな目、紅い唇、豊かな曲線を画く胸と腰、如何にもロシア人らしい体の持主で、村一番の美人の名が高かつた。

「おゝ大森素敵ね、貴方なか／＼いゝ物持つてるのね。」

とマダムは大森の持つてきた晒を手に取りつゝ言つた。

「此れでマダム三疋パン一本とソーセイジの罐詰一個くれないますか。」

と大森はマダムの親爺がマガジン（配給所）をやつてゐる事を知つてゐるので、大きくふきかけた。

「あら——困つたわ——。三疋パン一本一寸無理ね。」と小首をかしげつゝ、一寸大森を睨む様に笑つた。

「今日半分にして。明日亦半分あげるから。いゝでしよう。」

「そうだな——。あの大きなのを一つ枕にして寝て見たいんだがな——。」

「あらパンと寝るの——。はゝゝゝ大森の彼女はパンなのね。」

「そうですよ。だけど抱いて寝てやるという女の人さえあればパンよりいゝですけど。はゝゝゝ。」

「はゝゝゝ私では如何が。」

と冗談を言つたマダムがふと窓から入口の方を見て

「コンボイ（警戒兵）よ。」

と鋭く言うや、晒を急いで机の下に隠したさあ大森こそ大変である。地方人の家に入つてゐるのがみつければ、交換に入つた位で早速倉庫である。どこに隠れようと室内を見渡した時、マダムが丁度彼女の足下にある野菜貯蔵庫の蓋をあけ



「こゝに隠れなさい。」

未だ蓋をするかしないかにコンボイ（警戒兵）がノックをして入つて来た。

「今日は、マダム御氣様如何ですか。」

「あら貴方こそ。」

「マダムはいつ見ても綺麗ですね……。」

とコンボイはマダムをほめてから

「最近日本人は交換にやつてこないですか」

と本筋に話が入つてきた。大森は狭い穴倉

の中でびく／＼しつゝ、二人の話を聞いてい

たがふと上からさし込む光線に上を見ると、

丁度蓋を取る為に指の入るだけの小さな穴が

あいて居る。そこからそつと上を見て大森は

思わず頭に血が、か——つと昇るのを感じた

丁度マダムはその真上に立つて居たのである。

る。

北国の雪は白くきめがこまかい。その雪に

生れ、育つた女の

肌は透き通る様な

白さと、こまかさ

を持つて居る。す

んなり伸びた脛脛

がふつ／＼と豊か

に実る太股は、ま

るで雪である。触



れゝば冷たいかも知れない、しかしその奥には雪をとく春陽よりも暖い熱い血潮が流れて居る。

大森はマダムの雪肌、食欲の為にすっかり忘れて居た若い血潮がめら／＼燃えるのを感じた。

此の日以来大森は俘虜として起してはならない若い焰をマダムに対してめら／＼と燃した。美貌で開放的な陽気なマダムは大森の焰にます／＼油をそゝいだ。

「大森——」

と歌う様にマダムは名を呼びつゝ

「わ——毛糸のジャケツ持つてない。」

と一寸悪戯つぽく媚を含んだ目に会や、

ころりとまいつてしまふ大森である。

「一ついゝのを持つてますよ、明日持つてきましよう。」

「そう——。じゃきつとね。約束——。」

と彼女は大森の手を握つた。

大森はとう／＼、いわくつきのグリーンの

ジャケツを手放す事にした。此のジャケツは

実は彼の物ではなかつた、と云うのは、十九

年の暮現地入隊の為友と二人で北支の大同か

ら北京へ向つた。友は北京で大森は青島だつ

たので北京で別れを惜しみ、ふと友のすわつ

て居た汽車の座席を見てはつとした、

大同の駅を出る時、友が会社の姑娘からも

らつた紙包を忘れて居る。その忘れられたの

が此のグリーンのジャケツで、遂に彼の物に

なつてしまつたのである。

「大森有難う。すばらしいわ——。」

とジャケツに頬ずりして喜ぶマダムの姿に

大森自身嬉しくてたまらなくなるのだつた。

「今日は御馳走が作つてあるのよ。技師長は

ウラジオに行つてゐるし、ゆつくりなさいね。

さあもつと飲みなさいよ。男のくせに。」

「マダム僕は弱いんですよ。アルコールは、

それにウオツカは強過ぎて——。」

「意くじのない大森、折角御馳走作つてあげ

たのに。じゃ私が半分飲んでから、」

と向い側からマダムは大森の横に移つて来

て、腰を並んでおろし、半分飲むや、

「ねえ——飲むのよ。」

と大森の唇へ持つてきた。

大森はかんねんしてぐつと飲み乾すやかあ

——と胸が焼けてくる、

「あらいけるじゃないの——。」

「いや駄目ですよ。」

「大森——。」

マダムが歌う様に呼びつゝ



「私貴方が大好きよ。とてもいゝ人ね。」

「いや——。」

と言う大森の眼がたよりない。何しろ二年越し、酒が入つてない。

「ねえ大森、私きらい。」

とマダムは大きな瞳を妖しく輝かせ、豊満な身体を大森にびつたりと押しつけて来た。

甘い香料の匂いと共に、金髪が大森の頬にかゝる。

「とても好きですよ。マダムの言う事なら何でも。……」

「嬉しい……大森。」

と薄い部屋着の体がいづか彼に崩れかゝつた。彼は此の間見た雪の太股がふと浮んだ瞬間。

「マダム——。」

と若い情慾が堰を切つて流れた。ねつとりとからみあう舌、マダムの熱れ切つた双の乳房が、荒い呼吸と共に、大森の体を上から押した。禁慾の二年間。嵐の様に理性を押し流し、いまは自尊心も自制心も何処かへ消し飛んだ若い本能がむき出しにされた。

薄い部屋着の裾をまくると、真白な雪の中へ、紅い花模様の流れる色が目に燃える。

大森は雪の白いなだらかな丘を昇つて行つ

た。今にもつるりと滑り落ち、その深い谷間に消えてしまふさうだ。大森は息使いも荒々しくその雪溪を昇つていつた。

いになつた事を聞いた。恐るべき病魔に脳を侵されたのである。谷は大森が最初話した、マダムの霜焼けの様な紫色の指先を思い出した。

## 男女和合の性神

### ◎ 生駒の聖天 ◎

聖天即ち歓喜天は密教の天部の一つであつて、象頭人身の男女の相抱合した性神をその本像とする。除病、壊災、治病、致富等諸方面に亘る施福神として諸人に尊崇せられてゐるが、その中でも男女の和合に著しい靈験があると称えられて、花柳界の女子に大いに信仰されている。

畿内で最も繁昌しているのは、「生駒の聖天さん」と呼ばれている生駒山の宝山寺に安置されてある大聖歓喜天であつて、毎月一日と十六日の縁日には、京阪神の花柳界の姐さん連が押し寄せ、毎月の参詣者は二千人を下らぬという有様で、生駒駅は紅紫とりどりの時ならぬ艶めかしさに彩ら

れる。参詣者たちは、清酒、団子、大根等を捧げて施福を祈るるのである。

象首人身の男女二体より成る性神聖天の像は厨子の内に深く安置されてあるから、参詣人には見えない。それに対して大事な祈願をかけるには、浴油供といつて、深夜僧侶一人、胡麻油を盛つた銅器の内に聖天の像を入れ、依頼者の願事を唱えながら、匙で油を象頭に注ぐのである。聖天に対する供養法には、此の浴油の外に、酒供、花水供というのもある。

昔は生駒山の麓にある河内の住道から山頂まで、五十八町の坂を一步進んでは三拝しながら、五十日程も費して参詣する修行者もあつたが、今ではケーブルカーで一足飛びである。迷信深い花街の女たちを目当てに妖しげな祈禱を施す白衣の男が出没するの此の辺りである。





戦争怪奇戦慄秘話

貞操特攻隊の悲劇

登志江の手記

山陰線豊岡駅から、宮津線に乘替えて、汽車が久美浜の町を過ぎると、なだらかな砂丘

と、広大な桃林にかゝる。その次は、京都府下唯一の温泉地、丹後木津なのですが、その中間の砂丘の蔭に、灰色の工場のようなもの

がありました。夏草や、つわものどもの夢の跡、今はドス黒く焼けたぐれ、不思議な老婆が唯一人、そ

杉山清詩

すまじやう



こを棲家にしてゐる、荒れ果てた廢墟と化しています。夏頃、そこへ行くと、鬼哭啾々として、全身ヌルヌル焼き崩された若い乙女達の亡霊が、夜な夜な姿を見せて、訪ねる人達を取巻くと伝えられています。

昭和二十七年夏、私は、宮津峰山の演奏旅行の帰途、その木津温泉に立寄りしました。

私、北村登志江といつて、在洛女流ピアノの一人です。滞りなく全予定を終えて、余暇の一日を、此処で旅塵を洗う事にしたのです。というのは、こゝのお湯が、外傷性傷害などに、特效があると聞いていたからです。実は私は背に一面の、醜い火傷の痕があるのです。

温泉にも近いし、一番設備のいい、この町の一流旅館をびす屋に旅装を解いて、すぐ向いにある共同温泉で一汗流すと、浴後の散策に、その附近を歩いてみる事にしました。

蛭子屋旅館の若主人は、こゝは松露狩りや貝拾いが出来、峠を越して浜詰村の海岸まで行けば、静御前の出生地だという静神社があるなどと、いろいろ教えてくれましたが、私はあの砂丘の蔭の、恐ろしい回想の地へ足を向けました。

汀に近い濕潤な地に、やゝ小高い丘陵があ

る。そこは土地の豪族だった、大沢家十三代の立派な墓石があり、真紅や濃紫黄白の、見るからに嫌らしい毒茸類が簇生する所で、人も近寄らない無気味な場所。その打ち果てた納骨堂の裏に、

### ——殉難学徒の碑——

という大きな墓標があり、いつも香華が供えられています。秋の彼岸の頃ともなれば悲惨な乙女達の鮮血を撒いたように、毒々しい曼珠沙華が群り咲くのです。

まるで安達ヶ原の一ツ家に棲む、人喰い婆のような妖婆が一人、今日もボツネンと、納骨堂の脇に坐っていました。緑色の空、潮騒の音、そして燃えるような落日の壮厳、やがて水平線があの日巨火のように、真赤な血と焰の色になると、空は紫色に暮れて、怖ろしい妖鬼の囁きが聞えるのです。

碑の前に額く私を見ると、老婆はその傍へ寄つて来て、どなたぢやな、と陰々とした声を掛けて来ました。

「お骨婆さん、私をお覚えですか、たつた一人死に損つた、北村登志江——」

私はそう言つて、ブラウスを脱ぎ、ひきつた背の大きな癰痕を見せると、老婆の眼はギラギラ光つて、

「おゝ、おゝ——又幽鬼が迷い出て来た。友達の呼ぶ悲しい声が、あんたの耳にだけは、より聞えるじやろう。冥福を祈つて、泣いてやつて下され。」

丘の斜面に、今は雑草に蔽われているけれども、あの頃を偲ぶ魔の入口が、赤茶に焦げたまゝ残っています。高熱に破れた石の階段を下りると、広い煤けたコンクリートの部屋その隣りは、大地震の跡のようになつた。凄惨を極めた地下工場の惨骸、私はその部屋へ入るなり、思わず胸迫る悲しさに、頬伝う涙は堰を切っていました。

「娘さん、こゝが人鬼共の居た片輪工場の跡じや、その黒くこびりついているのは、眼の玉をくり抜かれ、足をヘシ折られた娘さんたちの、血潮と肉片。隣は昭和の紀文、石油王大沢十三代の貯油槽庫、そこにはもう白骨になつた、幾つかの鬨闘もある。夜な夜な幻になつては、こゝに集つて哭きよります。こうしてワシが、毎日香華を供えてやつても、腸を切千るような声で、泣くのを聞くと、あの日の悪夢が思い出されてなア……」

老婆は、まだ死臭の罩めるような、その幽鬼の墓場で、そう語るのです。



二

今から七年前。当時私はまだ十六の、女学生でした。

戦争末期、昭和二十年六月 日本本土は巨大な兵火に包まれ、敗戦の土壇場に喘いでいました。米国の超大型爆撃機は、不滅を豪語した神州日本の空を、真黒になつて隅々まで蔽い、巨弾は舞鶴軍港にも雨と降つて、灼熱の業火は冲天を染めました。

学徒動員——時の日本は一億皆兵を叫んで、私達女学生達もペンを棄て、皇土防衛の呪咀に追われて、軍需地区の第一線に立つていました。

私達A高女の生徒六〇〇名も、舞鶴の船殻工場などに配置されて、男の学生達と同じように、天台の寄宿舎から、雪の日も雨の日も灰色の軍都へ通いました。

それが、爆撃が次第に熾烈になつて来たので、航空機用ガソリンを、疎開させる事になりました。その一つの候補地に、この竹野郡の砂丘が選ばれたのです。

土地の豪士、大沢十三代目の齋儀兵衛という人は、秋田新潟の油田に権利を持ち、早くから油槽船で山陰に廻漕し、巨万の富を得て

いた人ですが、その秘密貯油倉庫を、砂丘の下の地下室に持つていました。そこへ何万ガロンという精油が移されて、その監視に、私達を選ばれたという訳なのです。

最初に十人の女学生が選抜され、当時の軍機秘というおふれこみで、トラックに乗せられると、眼隠しされて、此所へ連れて来られたのです。更に七月半ばに、第二次監視員の名目で、又十人の女学生が送られました。

八月六日、広島に原子爆弾が炸裂し、更に第二弾は長崎を潰滅、ソ連の参戦と、事態は急速に悪化、原爆第三号は、東京を狙つて送られていました。

そうした、軍国日本の断末魔が、刻々と迫る八月十三日、私達は突然工場長室に呼ばれました。A高女のものが五名、F高女の上級生が五名、L高女とQ高女の人々が五名、それに女子挺身隊員が約二十名、一人宛順番に呼ばまれるのです。海軍工廠の高官と言え、当時では九重の雲上の人、天皇陛下にでも拝謁するうちに、私達は鯁ホコ張つてそこへ入つて行きましたが、汗と油にまみれた作業服が、とても気になったものでした。

所が、名前は？ 年は？ 何処の学校？ などと簡単な質問をされただけで、私は別の

室へ入れられました。そこへ入つて来たのは合計十人だけで、私の学校からは私一人だったので、何か心細い気がしました。それに、私が一番若いようでした。

その日もB29が二機、軍港上空を施回して空襲警報が鳴りましたが、その後で、私達十人はトラックに乗せられ、荷物をまとめて西の方へ出発しました。

第三次貯油倉庫監視員

私はすぐその直感しました。何処が何処とも分りませんでした。なだらかな砂丘と、果てしない桃林の続く地帯まで来ると、果して、私らは目隠しされてトラックを降り、今度目を開いたら、陰湿な蒸し暑いセメントの工場に居ました。

そこは太陽光線を知らず、風も夜も分りませんでした。煤けた古い柱時計で、午後六時である事が分りました。

ところが間もなく、ヘンな事に気付きました。それは、軍国調一点張りの、怨敵悉退散必勝の壁文字の工場なのに、案外軍規がルーズで、軍人は少く、殆どが軍属の人で、そこは管理されているということと、既に先発隊が二十人から来てる筈なのに、先任らしい女の方は、僅か二三人より居ない、という



事でした。つまり、軍律の将外にある、別天地らしいという事です。

やがて、引率して来た、海軍少佐の階級章をつけた指揮官が、私達を集めて、一場の訓示と、注意とを与えました。それによると、私達の使命は、貯油タンクの守備監視であり、それがある特攻兵器の原動力になる、ガソリンであること、だから、例によつて例の如く滅私奉公、職場死守の信条に徹してほしい、という事を強調され、注意として、第一に火気厳禁、第二に場所の秘密保持の為に、監視哨以外の外出禁止、という事でした。

私達は隘い地下宿舎に入れられ、私はその夜、十二時から翌朝六時迄の、監視哨に当つてしまいました。何しろ火気絶対厳禁の場所ですから、特にタバコを喫まない若い女が選ばれるのだそうです。

消燈は九時ですが、喇叭は使わずに、全く口頭連絡でした。ところがそれから、四、五人の軍属の人は飲酒を始め、猥雑な唄などを歌っていました。先任の人を混えて、五人の友達を呼びに来ると、何処かへ連れて行つてしまいました。夜半までの監視哨なのでしようか。

暑いのと、交替時間が気になつて、眠れな

いままに、狭いベッドで寝返りを打つと、隣に寝ていた先任の女子監視員の人が、  
「あんたもA高女ね、私五年生の森宮数子、あんたは？」と小さい声で、耳もとへ囁いて来ました。

「水泳部の北村登志江です」

「そお、大変な所へ連れて来られたわねえ」

「え？ 大変なつて？」

「私も今夜監視哨に立つから、後で話したげる。こゝではダメ」

それだけ言われた言葉が耳に残つて、もう眠れませんでした。

十二時十分前、かなりお酒に酔つた軍属さんが、私と森宮さんを呼びに来ました。二人が暗いコンクリートの廊下を行くと、何処からか女の泣声や、離して！と騒いでいる声があるのです。私がハツとして立止ろうとすると森宮さんが強く手を引いて、早く来いという風に促します。防空壕の入口のような所から外へ出ると、美しい銀砂の星が満天に輝き、私は長い間忘れていた、乙女心の淡いロマンを、ふと胸に喚び起されました。甘い感傷はどんなに戦争に傷められても、やはり胸の一隅に棲んでいたのでしょう。その瞬間、

「そつちのチビさん、いくつだい？ 十六とい

うと、もう大人になつてゐるかな？ 年の割には背も高いし、お乳も少しは膨れてるようだが――」

酒くさい言葉が飛んで来たので、私はハツとしました。所が更に私を驚かせたのは、監視所というのは、実は墓地の中の、納骨堂だった事です。まるで胆試しのように、砂丘の中の夜半の納骨堂は、さすがに良い気持はしません。寒い戦慄に身体も竦む思いです。

「此所は固くならんでも、気軽に楽しく働ける所だからな。じゃア森宮監視哨、よろしく頼むよ、その代り、明日又……なア」

彼はそう言つて、又何処かへ行つてしまいました。

「あれが監視主任やけど、もう大丈夫、朝まで来やへんわ」

寒くはなかつたけれど、さすがに無気味でした。夜の墓地は、死人たちが囁いて、賑かだと言いますが、あんまりアテになりませんそれに、そこへ近寄つて来たのは、ざんばら髪 of 眼脂の老婆です。私はキャツといつて、危く卒倒するところでした。

「大丈夫、この人はお骨婆さんというて、私達の仲間よ」

森宮さんにそう言われても、私の血も凍る



ような戦慄は、そう簡単には解けません。人喰婆のような白髪鬼が、丑満刻の墓場にさまよつて、ギタギタ笑いながら、近付いて来るんですもの。

「又新しい娘さんが来たんやな、まだ子供やないか、可哀そうに——退屈やろう、飴でもどうやな」

婆さんも傍に坐り込んで、飴袋を差出しました。

「可愛い顔してるやないか、こんな若い身空で、大沢淫鬼の贅に捧げられるなんて、あんたも親御さんがあるやろうに、運の悪い人やわしの娘も、孫娘もな、大沢先代先々代に女中奉公に上つて、子供まで孕まされて、こゝ

で首を吊つて死にましたじや。今はその小さい墓の中に眠つてますが、こうやつて、毎日墓に参つてやるのが、わしの何よりの慰めでなア……」  
私は思わずぞつとしました。



「——この頃の若い女の子は、兵隊

さんや予科練やのといふと、まるで神さんより偉いもんみたいに思つて、後先も考えんと、身体まで差出しおるが、今に泣かんならん時が来るで。そらなアお国の為に命まで捧げて闘うて

下さる人を慰めてあげるのもええ。しかし、難しい理屈は分らんけど、こんな時代がそういつ迄も続くもんやない。わしのつれ合いも白露の役で怪我してなア、今の傷痍軍人は偉いもんやけど、同じ戦争で片輪になつてもその時分の廢兵は乞食も一緒や、屹度今に戦争が済んだら、今の傷病兵さんもその二の舞、靖国の妻も九段の母も、みじめな姿になる時が屹度来る。ほゝ、大きな声でこんな事言うたら、一ペンに国賊じやとお仕置きになるけど、若い娘さんにまで、長い将来を苦勞させとるはないもんじや……」

訥々として語るその言葉のうちには、何か胸打つ真情がありました。勿論そんな言葉に共鳴したら、当時は、それこそ忽ち憲兵隊行きでしたが、今にして思えば、このお骨婆さんこそ、単なる予言者ではなく、大きな救世の先覚者とも言ふべきでしょう。

「森宮さん、一体こゝは——」

「そりなんです。此所は軍人よりも、大沢軍属の天下です。登志江さんが此所へ廻されたのも、実は貴女が美人だったからですわ」

「え？」

「こゝには塚本少佐と立花技術中尉の他に、大沢の三人兄弟が管理実権を握つています。





そして美しい女子挺身隊員が、その慰安婦に送られて来る、貞操の地獄なんです。そうしてでも気嫌を取らねばならない弱点を、軍は大沢に握られてるんです。そしてその犠牲が愛国忠誠に眼隠しされた、私達なのです、国家総動員、一億玉砕、それらは、何と都合のいい口実でしょう」

私は話を聞いているうちに、目もくらむ思いに、卒倒しそうでした。

「今日来た人のうち、既に三人は、もう今頃羞しい事を強いられているでしょう、顔を隠し、身体をくねらせて、誰も知らないこの地

下牢獄で、親にも言えない悲しみを、灼きつけられているのです。貴女も、いづれ明日か明後日の夜には、その苦しい当番が廻つて来ます。しかも極秘公用の仮面の下で——」

「い……嫌！私、そんな事されるなら、死んでしま……いす……」

「シッ！声が高いわ、誰かに聞えたら、それこそ大変、貴女はまだ知らないけれど、こゝを追放される時は、唯ではすまないのよ」

陰々たる夜半の密語、私はガチガチと歯の鳴るような、恐怖に襲われていました。

「唯ではすまないって？」

「今迄に二十人の娘が、此所へ送られて来ました。それがもう四人より残っていません。

後の十六人は、どうなつたとお思い？殆どがその墓石の中へ入つてしまつたんです。此所を逃げ出すものは、規則によつて銃殺されます。又用事が無くなつて、他へ移される時には、秘密を護るために、声帯を灼かれて啞にされます。再びこゝを見付け、大沢の顔を識

別出来ないように、眼球を潰され、鼓膜を破つて聾にされてしまいます。或は激しい梅毒から、瘋癲患者になり、廢人になつて自らを処刑してしまふのです——」

### 三

所が、そのもつと恐ろしい日が、案外早くやつて来ました。

翌十四日L高女の人から、昨夜の事を聞かされて、日の暮れるのが、何よりも怖ろしかったのです。一夜中、無垢な処女たちを、舌なめずりして、変態的な獸慾の祭壇に捧げられ泣くにも泣けない、劇烈な醜行を演じさせられた悪夢の連続。どんなあばずれた売笑婦でも、顔赤らめてこの足を踏む大非倫。全然想像もしなかつた淫虐のどん底。それは田舎女学生 of 純情な神経には、万死以上の悪虐非道だつたのです。

あゝ悲しい哉、涙も涸れた肉体挺身隊。生地獄に喘ぐ貞操特攻隊の大悲劇！

やがて日が暮れると、もう渺々競々でした。所がその夜、舞鶴鎮守府から高官が見えて夜更けまで、何事か密談が始まりました。会議が終つたら、屹度私達を呼びに来るだろう。そう思うと、誰も眠りに就く事も出来ません



しかし幸いなことに、その将官は、一夜を此所で宿泊されたので、その夜は何も起きませんでした。

将官が帰つていつたのは、翌朝十時、何でもその日の正午に重大放送があるのだそうです、抗戦か休戦か、輿論は相半ばして、何か落着かないまゝに、その時間は来ました。私達はその秘密壕の中で、ラジオを囲んで直立していました。

やがて、スピーカーから流れ出した国歌君ヶ代、あゝ何という美しく厳肅な調べでしょう。国歌はいつ終つたのか、やがて縹緲として、現世から浮び出た私の耳に伝つて来る神音は、あゝ、それはかくも賤しき布衣の身の上になで、降り注ぎ給う天皇陛下御親らの御声しかし、しかし、畏くもその玉音は朗々とは拝せず、或いは高く或いは低く、言々句々は烈々断腸、天籟の彼方より、玄々として降り来る激しいお言葉、一億国民は唯地にひれ伏して泣きました。

朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ、茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告グ――

たつた今迄、熾烈な爆撃も物ともせず、唯勝利の爲にと闘つて来たのに、私達はその油

に汚れた顔を蔽つて、愕然と泣き出しました。一人が泣くと、皆胸を掻きむしるようにしてポロポロ涙を流しました。ギョツと唇を噛みしめる程、悲しさがこみ上げて来て、ある人は身を打ちふるわせ、ある人は壁に身を押しつけて、又ある娘は、じつと首うなだれて、シユク／＼肩を波立たせました。

朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ、其ノ共同宣言を受諾スル旨通告セシメタリ、抑、帝国臣民ノ康寧ヲ図リ、万邦共栄ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ、朕ノ拳々措カサル所……

ただ勝つ爲に、か弱い腕に、慣れない職場に、こんなにして頑張つて来たのに、私達の熱意を誠心が、純情な努力が、こんな姿で報いられようとは……。

「やはり私達の力が足りなかつたのです。そして陛下様に、こんな悲しい思いを煩わせ、日本をこんなにしてしまつたのだわ、私達は一体どうしたらいいのでしよう、今この詔書を読んでらつしやる、陛下様のお胸の中は、一体どんなであらせられるでしょう……あゝあゝ……天皇陛下様、お……お許し下さい！」  
私はラジオにしがみ付いて泣きました。後にはたゞ万斛滲沱の涙。

――宜シク挙国一家子孫相伝ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ、任軍クシテ道遠キヲ念ヒ、総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓ツテ国体ノ精華ヲ発揚シ、世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ。

世紀の放送が終ると、私達は涙に濡れながら、誰からともなく君ヶ代を唱和しました。それなのに、無条件降伏は、大和民族の滅亡、帝国の倒壊を思い、死を宣告された男の人は、あんなにも狂暴になるものでしょうか。特攻隊は健在だ！、俺達は軍国日本を再建する！

そうだ、神国肇つて三千年、大日本帝国に降伏など有り得ん！

口々にそう叫んだかと思うと、野獸は自暴自棄になつて、私達を抱こうとしました。

「こら女！、お前達は絶対に帰さんぞ、こゝは特攻隊の基地にするんだ。その秘密を守る爲に、お前達はもう生きては帰さん！」

五人の男達は私らに組付き、ある者はもう私達の前で、羞しい姿にされて、馬乗りになつていました。

キヤア！ 助けて！

誰かが入口へ走ると

「逃げるかッ、逃げる奴は叩つ殺すぞッ！」



男が狂気のように叫び、銃の引金を引いていました。兇弾はその人の胸板を貫き、ガブガブ血を吐いてばったり倒れました。それからもう修羅と惨鼻の大混乱、高村という女学生は銃床で膝を蹴られ、ガクンと嫌な音を立てて骨が砕けると、ギヤツとぶつ倒れ、その足は、布人形のようにベラベラになつていました。

又誰かが発砲しました。先任の一人は、銃剣で眼の玉を割られ、鮮血の虹を架けてブツ倒れます。私は大沢弟に抱きすくめられ、なめくじのように嫌らしい唇を、無理におしつけられると、引倒されて衣類を剥がれ、まだ大人になり切らない身体は、丸裸にされてしまつていました。そのすぐ隣りでは、吉村三重子さんが、犬のように、獸交を強制されていました。

何と恐ろしい地獄絵図！ 裸にされた森宮さんは、下腹部を銃剣で刺され、畜生ツと血を垂れながら、大沢弟を突倒して、私を逃がしてくれました。そして、眈を逆吊らせ、鬼どもを皆殺しにしてやる。と気狂いのように叫ぶと軍刀で又腕を傷けられながら、油槽庫に飛込んで石油ランプに点火したのです。「うわア危いッ！」

立花中尉の小銃が、ガンガン火をはきました。数子さんの胸に腹に、銃弾は貫通し、あの美しい身体に、血の華がバツと咲いたかと思ふと、あの人は石油ランプを持つたまま、どつと重油タンクの中に落ち込みました。

瞬間——ゴオオッ！

と、百万の噴火山が一時に怒り出したような紅蓮と狂煙の大爆発！

裸のまま、入口まで逃げ出していた私は背に鎧のような焰を浴び、迸る強烈な爆風に、一挙に墓地まで嘔き出されてしまいました。

五つの油槽は次々と誘爆を起し、それは炭坑の爆発よりもつと凄惨でした。五人の狂獸と、十三人の薄幸の裸女たちは、何千度の高熱に嘔きつけられ、一瞬にしてある人は骨まで熔け、又ある人は壁にへばり付いて、その肉体は、うにか塩辛のようになつてしまつたのです。

私が息を吹返した時、お骨婆さんに助けられていました。地獄の砂丘倉庫は、三日三晩燃え続け、原爆の跡より凄惨な、廢墟と化してしまつたのです。

殉難学徒の碑——

終戦と共に、焦熱地獄の中に悶絶した、あまりにも悲しい早乙女達の霊は、いまだこの地に怨恨の魂魄を留めて、啾々と哭き続け

ているのです。お骨婆さんは毎日欠かさず靈よ冥れと香華を捧げて、五臓を裂く回旧に涙してくるのです。

——了——

## ハナヲ、タカケスル

問、私は鼻が低くて悩んでいます。隆鼻術というのをよく聞きますが、効果があまるものでしょうか。

答、先づ特殊薬注入法があります。鼻すじだけ通じたいという人には理想的な方法です。次に象牙挿入法は今から三十年前から初め、アメリカでも使用され捨て難い方法です。合成樹脂も最近材料がよくなり使用され出しました。肉質法は少しづつ、高くし度い方には良い方法です。以上は費用何れも六千円です。

更に当院独特な永久不変な弾力性物質が発明され、その自然性においては如何なる方法も追従を許しません。従来象牙合成樹脂のもつ欠点は一掃されました。将来は当院で発表すれば、如何なるハも皆この方法で行うべき運命をもつていけるのです。費用は八千円以上です。(広告)

大阪市北区梅田新道交又点  
東一丁電車通

三山整形外科内

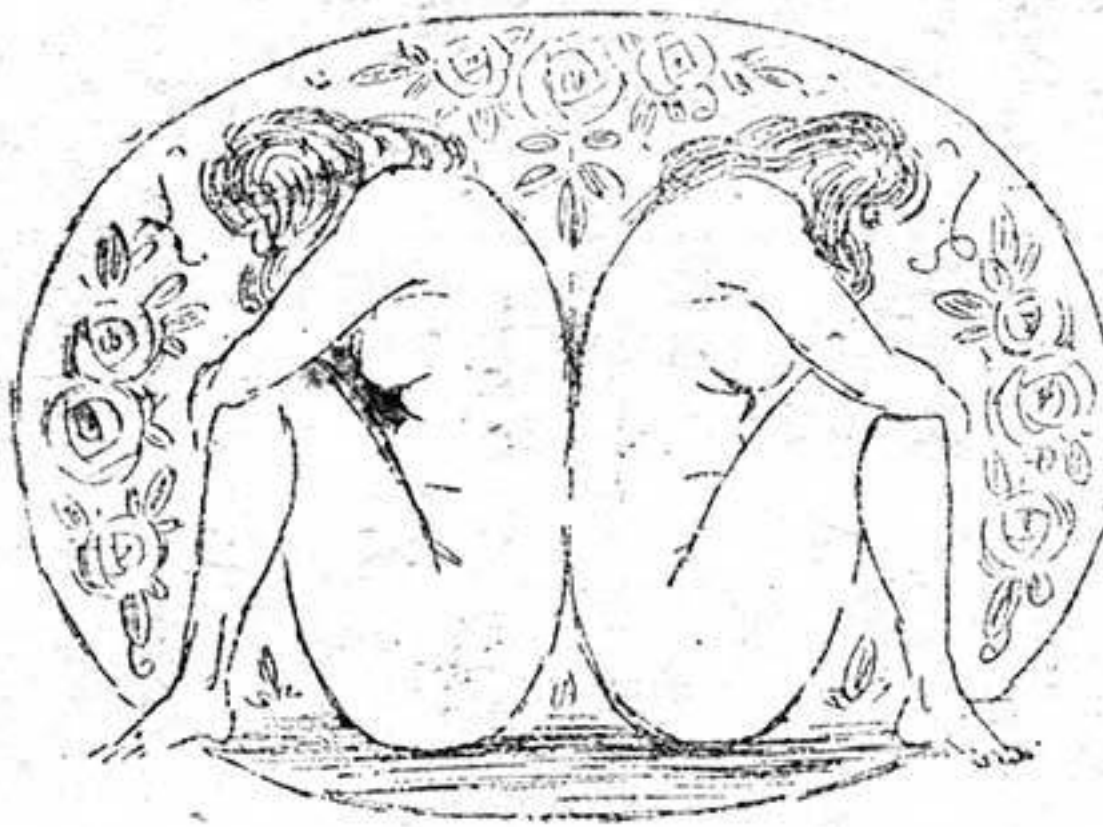
三山隆鼻法研究所長談



## 港々の女たち

下山雄

横浜とか神戸といった、大きな港の色街より、余り知られない小さな港の色街にこそ、その地方地方の情緒があつて面白いものである。ここではそうした余り大きくない港の色



街の女について紹介しよう。

## 新潟の巻

雪深い新潟の港は、唄と女とで有名でもあ

る。おなじ雪国でも、富山港や伏木港の女が言葉が荒く、何となくすさんでいるのにひきかえ、この女は、情愛が深くおつとりとしている。九州の女が、情熱的なかわり浮気っぽいのと対蹠的に、新潟女は、なかなか男に惚れないが、惚れたら一筋に打込んでくる。ぼつてりと色の白いこの女は、また新潟美人と云われるほど美しくもある。

四月の終りごろ、雪が解け終ると、新潟の街にも、胎蕩とした春色が漂ってくる。この街を縦横に通じている堀割の水は柔かくぬるみ、堀割の岸の柳は、しつとりと垂れた枝に青い嫩葉をつける。新潟の港に入港したボヘミアンよ。この堀割をいくつか通り、柳の嫩葉の香を嗅ぎながら、諸君の鋭い嗅覚を頼りに、(新潟の遊廓はなかなかわかりにくい)がそう誰にでも聞くわけにいくまいから——色街を訪ねてみたまえ。

「泊りでいくらだつて？」と、諸君は必ず聞き直すであらう。それもその筈、通しの花代で関西の五分のいくらいだからだ。仲居はお

なじことを繰返して答えるだけだ。「余り安過ぎる。きつとからかつているのだから」

諸君はとても信ぜられないから、そう思つて外に出てゆくかもしれない。だが、二三軒廻つてみると、それがやっぱり本当だつたことが納得できるだらう。何故ならここは所謂「廻し」で客をとつてゐるからである。ものはためしというから泊つてみたまえ。

女は部屋に案内してから、「おまをつけます？」と聞く。余りに急々だから、「あとでいいよ」と云つたとする。すると女は部屋から出てゆくだらう。さあ、それからが大変である。諸君は床のなかに入つてゐるけれども廊下を歩く女の足音が気になつて仕方がないだらう。一時間、二時間、廊下の足音が今度は自分の部屋に入つてくるか、今度は入つてくるかと、気になつて眠ることもできず夜は更けてゆく。女は十二時前までに廻つてくるだらう。そして用がすんだらまた出てゆくが夜中にまたやつてきて、そのまま一緒に朝ま



でわたとしたら、諸君はその女にもてたことになるのである。

女は、関西の五分の一ぐらいの花代で、五人から六七人ぐらいの客をとつてゐるのだ。〃廻し〃五人分の泊代にして、一人の客にした方が、体も楽だろうし、部屋数も少なくてすむと思うのだが、どんなものだろうか。

## 宮津の巻

ボヘミアンよ。旧軍港舞鶴に入港したら、東舞鶴や西舞鶴の色街で遊ぶのもよいが、一度は宮津にもいつてみることにだ。舞鶴の女たちはすれているが、おなじ港でも、連絡船や機帆船くらいしか入港しない、宮津の色街には、京女の割合おとなしいのが多い。

この色街は、宮津湾の磯波がひたひたと岸を洗っている海岸端に、軒を連ねている。細目格子の茶屋茶屋の二階からは、絃歌の音がしつとりと流れ、軒先の角行燈の灯は、なまめかしく揺れて、何かせつなくボヘミアンの旅情をそそるものがある。諸君はきつと木偶のようになつて、一軒の妓楼に上るだろう。ここではときに、まだ水揚げもすんでいない娘芸者に出会すこともある。だが宇頂天になつて酒をがぶ飲みしてはいけない。ここで

はちびちびと酒を飲み、料理などは欲しくないうという顔をしていることだ。何しろ、〃綿の財布がからになる〃と云う丹後の宮津だ。いい気になつて飲み食い散財をしていたら、あとからあとから代りをもつてきて、それであつてさえぼられるのに、酔いつぶれでもしたら、輪に輪をかけてぼられることになるかもしれないからだ。その点は御用心、御用心それに、余り飲み過ぎると、折角まだ水揚げもすんでいない娘芸者に出会し、千載一遇の好機をつかみながら、酒のために機能が麻痺して、空しく不覚をとることなきにしも非ずだから、いずれにしても酒は控え目にしておくことだ。

宮津の妓は殆んどが京女だが、京都の色街の女とは格別に、鄙なりの情と美しさをもつていて、諸君をしつぽりと濡らしてくれることだろう。

## 若松の巻

関門港のうちでも若松港ぐらい面白いところはあまるまい。この紅燈の女こそ本当の港の女と云つてよいだろう。

若松港は洞海湾内にあるバンカーポート（補炭港）で、スチームエンジンの船なら大概

この若松港あたりでバンカー（燃料炭）をとるから、船員にとつては馴染み深い港である。若松は、港に碇泊している汽船が吐き出す煤煙で、薄汚く煤けた街である。だがこの港町は、夜になるとネオンの灯や紅行燈の明りで美しく彩られ、艶冶な街を一変する。街には船員相手のカフェーや、飲食店、喫茶店等がなかなか多く、またあちらこちら至るところの路地に、特殊飲食店がひっそりと灯をともしている。連歌町の花街よりも、若松らしい頹廢的な情緒は、こうした特殊飲食店に深いようだ。

昭和通りには、二十数軒の特殊飲食店が、ごちゃごちゃと軒を連ねている。此の迫り合った狭い通りで、この通りは通称淫売通りとも呼ばれている。九州では〃顔見せ〃と云つて、女が店の間にすらりと並んで坐つてゐるのが常である。だが彼女等は店頭に進出して勇猛果敢に客を引くこともある。一度彼女にねつとりと手をとられたが最後、彼女等は容易なことでは離してくれない。あれよ、あれよ、と云つてゐるうちに、朋輩連中も応援に出てきて担ぎこまれてしまうことがある。また、彼女等は素見客の帽子とか鞆をとつて、上らねば返さぬと云つて手古摺らすこともあ



るから、素見<sup>ひやか</sup>するときには用心していなければならぬ。

若松の女は、馴染みになつて情意投合すると、船が入港する日時を、その船会社の支店に電話で聞いておいて、岸壁に迎えに出てくる。出港のときも岸壁でハンカチを振つて見送つてくれる。入港しても金がないので女のところに行かずにいると、「どうして来ないのか」と云つて船まで迎えにくる。「金がないから」と云うと、「身上りするから金はい」と云い、一緒に連れて帰る。彼女等は船員をだまさないが、船員にはよくだまされることがある。

若松は本当の港町であり、若松の女は本当の港の女である。

## 唐津の巻

佐賀県の唐津港もバンカーポートとして船員に馴染み深いところである。ここにバンカー積込みのため入港すると、農閑期など近在の農村の娘が人夫になつてやつてくる。佐賀県の女はなかなか働き手である。昔はこの娘たちと船員の間に、いろいろロマンスがあつたらしいが、いまはどうだか。

唐津港は西唐津にあるので、上陸して女遊

びに行こうと思えば、東の東唐津か西の呼子まで行かねばならない。どちらに行くにしてもバスで行かねばならぬが、いずれを選ぶかは各人の好みによるだろう。

東唐津はどことなく落着いた旧城下町で、この唐津湾に臨んだ花街もひとつそりとしてゐる。女が店の間に顔見せ<sup>〃</sup>していることは、若松などとおなじだが、ここには割合に若くてきれいな人が多い。素見しても余り引張らないが、一度上つてみるがいい、情愛の濃かなることは受合つてもよい。神功皇后が三韓征伐をされた砌、佐用姫は夫を慕うの余り、船のかげが見えなくなつたとき、涙石に化したと云うが、唐津の女はそれぐらい一途でもある。

呼子は漁港らしい活気に満ちた町で、この色街は呼子湾を隔てた対岸の殿ノ浦にある。対岸と云つても五十米くらいしか離れておらず、夜になると妓楼の灯が水面に映つて美しい。呼子側の料理屋の二階の窓からその灯を眺めながら、お手のものの魚料理で一杯飲み上機嫌になつて渡船で殿ノ浦に渡る風情はいい。

捨てつ鉢で投げやりな呼子の女には、またそれなりの面白さがある。例えば朋輩と喧嘩

してやけ酒を飲み、お客を放つたらかして前後不覚になつてね込んでしまふといったこともある。しかし客は金を払つてきているのだから、女が前後不覚になつていようと、朝までの間にはしたい放題のことをする。ところが朝眼を醒ました女は、「昨夜はすみませんでした」と云つて、長襦袢の裾を払げるくらい人の好いところがあるのだ。

## 玉野の巻

宇高連絡船の発着港玉野とその西にある玉が合併して玉野市になつてゐる。玉には三井造船所があり、玉の町はこの造船所でもてゐる。玉にはカフェーとか食堂とか喫茶店が多いが、どうしたものか色街といったものは見当たらない。だが、この港に入港した船員たちよ。ここでは特に色街がなくても、女にはこと欠かないから心配には及ばない。

敗戦後、玉の町の風紀は極度に紊乱した。試みに、どこかきれいな娘のいる喫茶店へ、酒を一杯ひつかけて看板前に行つてみたまえ。そして、お茶を運んできた娘の耳にそつと「今晚は頼むよ」と云つておいて、お茶を飲んだら酔つ払つてねたふりをしていたまえ。やがて看板になつて、その娘がもし諸君に気



があつたら優しく揺り起してくるだろう。そして、「わたしのあとを十歩ぐらい離れてついてきてね」と云つてくれるだろう。鼻の

下を長くしてついて行つてみたまえ。どこかのいかがわしい淫売窟に連れていつてくれるだろう。それが全くおぼつこそうな娘までそ

うなのだから、きつと諸君は啞然とさせられるに相違ない。

(未完)

## 戦争とマゾ

あか  
赤

さか  
坂

つよし  
剛

特攻隊に志願して永久の大義に生きるといふ自殺行は人間の奥底に潜むマゾ的傾向のあらわれと云えば叱られるであろうか。群衆が雑踏している街路へ百貨店から飛降り自殺を敢行する者達も、自分の悲惨な即死に体を衆人の眼前に晒すということに多分のマゾ的興味を働くだらうと想像するのは如何?

私の友人で玉碎寸前に終戦となつて助つて帰つてきた男があるが、その男の話によると敵に完全に包囲されて、もう余命幾許もないという際、少しも恐怖の念は湧かず、むしろ敵が突撃してきたり何人位斃してやろうかという興味の方が強く、その結果、敵の銃劔によつて串刺しにされる自分や又弄りものにされる自分の屍体を想像して、何んとなしに愉快な気持になつて、戦争等少しも恐怖でなか

つたと。

又戦時中に応召する兵士の出征間際に結婚を承諾する処女等の気分の中に、犠牲的精神と云われている、自分の身を殺して快感を覚えるマゾ的傾向は、知ると知らず実行されていた。未だに戦死した夫を守っている戦争未亡人の中にも、こんな気持がいのを知っている。

「後に続く者あるを信ず」と言い残してガタルカナル島へ引き返えしていつた一将校の態度は立派だと思ふが、引き止めれば尙更、いきり立つ戦場心理の外に、先の特攻精神と同じ悲愴感が男子の一命をも軽くするのではな

いかと思ふがどうであらうか。  
「海行かば水づく屍、山行かば草むす屍、大君の辺にこそ死なめ、かえりみはせじ」

戦時中流行した此の歌は、人間を死地へ欣然として赴かせるのに麻薬的な効果を持つていた。屍を山野に晒して如何に多くのつわもの共が消えて行つたことであらうか。硫黄島や沖繩、或はビルマ等で日本人の白骨が累々と積みかさつていふという事が報導されているが、それ以外の南方のジャングルの中にも、骸骨の白い道標が未だに放任されたまゝであるという。

戦争は潜在的な変態性慾者を誘発する動機となつて戦後夥しい変態性慾者の続出を見た捕われの身となり、縛られ鞭打たれ、足蹴りにされた敗戦時の思い出が未だに忘れられず、マゾヒストになつた男を知っている。彼も戦争なかりせば、あたら変態にはならなかつたものを――。



# 喇 嘛 の 淫 佛

葵ヶ丘規久夫



いから、私は私なりにこれを理解し、且つ想像して書くことにした。

## 大成殿の壽宴

頃<sup>ふん</sup>は延佑<sup>えんう</sup>六年春。燕京の人民たちも、うきうきとしているのどかな日である。

仁宗皇帝は今三十五の春を迎えていた。春は例年宴を開く。今年も又大宮、百郷、群臣千余を大成殿に召して盛宴が開かれる。

さていよいよ当日。皇帝は皇太后、寵愛の皇后とともに、今を盛りの花の如き宮女を百人従えて、花やかに、又厳めしく御出ましになる。

「やあみなもの者、今日は大いに呑み大いに笑え。朕は満足じや。」

酒宴が賑かに始まった。その時に舞楽の長である李仲範が進み出で、王座の前に額いて「世祖大帝（忽必烈<sup>クビライ</sup>の意）日本御征伐の時彼

国より捕虜として連れて参りました美女、

かれ等こそは日本国で申します白拍子、かねてその白拍子どもに、今日の壽宴を幸い、日本の大和舞とやらを舞う様に申しつけ、すでに化粧の御殿において、用意仕り居りますれば、早速これへ召出して、その大和舞を舞わせ、陛下の御歡興にそなえたいと存じます」

と述べた。聞いておりました一同は、

「いやそれは／＼一段の思いつきでござる」

「早く見たいもので。」

「いや、日本の美女といえは大したもの。早く見たいものじや。」

「さよう／＼。」

などと、一座の並び大名など大賛成である然るに、何たる事ぞよ。仁宗帝は、少しも喜ばれる気色がない。かえつて眉をひそめられて、

「いかにも世祖大帝は、日本に兵を進められ

□

黄喇嘛<sup>フアンラマ</sup>の大本山地である庫倫<sup>クーレン</sup>から、近年ある戯曲の写本が発見された。題を「大成殿」と云う。作者ははつきりと判明しないが、内容は非常に面白い。喇嘛の妖怪の中に、日本の日蓮宗の功力と、白拍子（昔の舞妓の意）を配した深刻且変化のある、興味深いものである。原本のままではしかしあまりに固苦し



だが、その後は、征伐を御中止に相成殊に父成宗皇帝は浙江の僧寧一山を使として、日本に遣わしめたまつた。これ日本と我國の、和親を復する為ではないか、朕の世となつても日本と和親を望みこそすれ、少しも敵意は持つておらぬ。然るに捕虜の女子にもせよ、日本の白拍子に舞わせ、それを見て楽しむとは第一彼国に対して、和親を求める道でない。ことさら故郷恋しとて日夜泣き居るであらう白拍子ども、それを無理に舞わせるは情を知らぬ人のこと、朕は見とうない。」

となか／＼人道主義な事を云つて反対される。皇后は

「まあ、うれしい。やつぱり妾の人はしつかり者。ああ、私がいとしい故に、たぶん見とらないと、云われるにそういあるまい。あなた、うれしいわ。」

と云われたか、思われたか、そこは知らない。がとにかく鶴の一声は、汗の如きはすが、当時の元朝ではそうは行かなかつた。皇帝の寛厚に乗じて、百万軍の頭目たる、赤ツ面の、まさしく三十八度の熱でもしてるんじやあないか、と思われそうな顔をした王右干がしやしやり出た。

「ありや、御説ではござるが、日本はその時

不尽にも、大元数万の軍兵を虐殺いたした。日本人こそは、義理も人情もわきまえぬ野蠻国、まして売女の白拍子ども、何の遠慮会釈がござらう。引ずり出して踊らしめされ。」

「賛成でござる。」

の方が多いので帝もやむなく黙許した。楽長の李が畏まつて引退ると、入れちがいに十人の美しい白拍子が出て、いわゆる大和舞を舞う。楚々たる風姿、切々たる情緒、そして容顔の美しさと手振の巧みさ裾捌きのあざやかさとは、さながら天女の舞うが如く、一座の者はみな恍惚として、魂を失つたものの如くだつた。ある者は口をあげ、ある者は目をつぶり、心中何事もないといった表情であつた。舞終ると嵐の如くに、讃嘆のどよめきが起るのだつた。

びんでん

## 二 便殿(帝の一時の休み場所)

仁宗帝の前で、丞相鉄木迭児チンムクタイが伏奏していた。

「河南北、未曾有の飢饉にて、百姓塗炭に苦しんでいます。これを申すも陛下が妙法僧日持なるものをみだりに、宮中へお入れになる為世祖以来国教として、尊崇あらせられた喇嘛仏の怒りに触れたものと信ぜられます。殊

に彼は日本の間諜軍事探偵でございますから一日も早く御詔戮にならないと、どの様なわざわいを顔すかも知れませぬ。」

根拠のないざん言である。帝はじつと目をつぶっている。何を考えているのか何の表れもなかつた。笑も怒も……。

その時下手から話題の主、日持上人が登場して来た。一瞬丞相と雄僧は目でにらみ合つた日持は静かに口を切つた。

「丞相殿。いかなる譏言をなされたかの。」

「馬鹿げた事だ。」

「いや馬鹿げた事ではあるまい。貴殿はたしかに、我が妙法によつて、飢饉があると申されたのう。」

「いいいかにも。」

いよく丞相と雄僧との御前対面が始つた「さような事はだんじてござらぬ。そも／＼喇嘛は同じシヤカ如来の教えの流れとはいえ小乗中の邪宗である。妙法は大乗の無上道、この妙法の為に、飢饉などは断じて起りませぬ。」

「ババ馬鹿を申せ。ふとどきにも一国の丞相にむかつて、不礼にもほどがあるぞ。」

とにかく法門の争いとなると、丞相のいう事はしどろもどろ。ただ權威を笠に猛り立つ



ていた。とその時

「陛下注進にござります。」

といつて、注進の御史が入つて来た。

「河南河東大豊稷。民百姓は大喜びでございます。」

と奏上して引下つて行つた。

丞相のざん言は、たちまち曝露したのだ。

彼は青くなつて唇をかんだ。そして今まで目をつむり、につこりともしなかつた帝は、はじめて莞爾として奥に入つて行かれた。日持は何も云わず、もく／＼として退場して行つた。

あとに丞相ただ一人。

「ウーム。しそんじたか。につくきやつめ。思い知らせてやろうぞ。」

と事の破れを憤慨していた。立つたり坐つたり、まつたく着座をじつとしていない、そわ／＼とした怒りかただった。風が出たらしい。簾がバタ／＼とゆれた。廊下に足音がした。丞相ははつと身を固くした。喇嘛の妖僧吉什迦<sup>キシカ</sup>だった。あたりをうかがいながら忍び入つた。吉什迦は西藏の生で、喇嘛の三方便即ち幻術忍術と誨淫のいづれにも長じて、殊に幻忍の両術にかけては、西藏でも一二といわれた妖僧だ。

「丞相さま、とんだ不首尾でございましたな。」

「叱ッ、静かにいたせ。」

といつてさつとあたりを見渡した。

「はッ」

吉什迦は龜の子の様に首に首を縮めた。丞相は忌々しそりに顔を歪め、ちよつと頭をしやくつた。

吉什迦は無言で首を突出した。二人は何やらヒソ／＼と話しを行つた。丞相が話手吉什迦が聞手らしい。この二人の密談を知っているのは当の二人と、そしてつめたくさびしく吹く風のみであつたろう

「な、よいか。」

「かしこまりました。」

「ぬかるな。」

「大丈夫でございます。手並は流々仕上を御覧じて下さいまし」

吉什迦はそりいいながら、自信満々といった調子で胸を叩いた。丞相ははじめてにつことしながら點頭いた。どこかでコンドルの鳴く声がする。



### 三 歡喜<sup>ホア</sup>佛<sup>シー</sup>殿<sup>フ</sup>

觀喜仏殿は淫仏のまつてある所だ壁書も彫刻も、あらゆるものが淫仏なのだ。局部も



あらわな男女の裸図。夜の状景そのままの等々、まさしく一目見ると悩殺百パーセント。春機発動もおのずと起きざるをえないであらうと思われる。仏と申しかねる如きものばかりなのだ。ここへ日本の白拍子が入つて来た。数多く並べられた淫仏を見て、びつくりしてそれでも陽気に笑つた。見なれているのかどうなのか、あまり飛上らなかつた。白拍子等は、相顧りみて、

「日本から尊い上人が、お越しになつてられるそうではありませんか。」

「日持上人とかおつしやる妙法の高僧とか聞きました。」

「その上人にお願い申して、早く日本へ帰れる様皇帝に奏聞していただきたいものでござんすな。」

「本当にそうしておもらい申しましよう。」

そう希望を語り合つてゐる所へ、飄然としてやつて来た者がある。吉什迦だつた。

「いやな奴が来た。」

と云わんばかりの顔を示して白拍子等はさつと奥の一間に馳せ去つて行つた。吉什迦は廊下の向うから、日持のやつて来る動靜を見ていたが近づくを見て、す早く歡喜仏の後に隠れた。

日持登場。そして歡喜仏の醜怪ぶりを見て「ああ同じ仏の道ながら何たる事だ。」

目に涙をにじませながら喇嘛の腐敗を慨歎した。ところへさ——と美しい香と共に弁財天女が琵琶を弾きながら現れた。美々しくも妖艶を極めた流水豈心無からんやといった容姿である。

日持は眉も動かさず、儼然とそこに立つて天女をにらんだ。天女は媚を含みながら日持の側に寄添うと、

「日本のお上人様おめづらしゆう対面いたします。」

「弁財天女には、法華経を護持なさる筈、何用あつてかような所へは参られた。」

「高德のお上人が、かような所へ参られたのと、同じ心持でござりましよう。」

「觀喜仏を御信仰か。」

「お上人が御信仰なら、われらも信仰いたしましよう。」

「いや、われ等は妙法の行者、かような邪法を信仰するいわれはない。」

「わらわとても同じこと、邪法折伏の念願を以つてこの国へは現れたなれど、女人の身は力足らず未だ功德を積むことが出来ませぬ。願わくは高德のお上人に力となつていただき

たく、わざとこれへ参りました。」

といつて前をちら／＼させて日持の氣を引いている。

「は／＼／＼、われ等として未断惑の凡夫何のお力になれましよう。」

「いえ／＼お上人の高德は天子も渴仰なさつています。その上尊いお曼茶羅を御所持なさればいかなる邪法も破れぬ道理はありませぬ。女人のわらわにもそのお曼茶羅さえあれば、たやすく事は行われ様と思います。近頃不躒なお願ひながら、それをわらわに譲つてたまりませぬか。」

天女はいろ／＼の媚態をつくして、日持に接近しようとする。さわれば落ちなんの風情でございます。日持は二三歩退いて「あいやこの曼茶羅こそは、日本において高祖上人より特にわれ等に賜われし、妙法御真筆の本尊故天女とお譲りは申し難い。もつとも強つて御所望とあらば、開帳してお見せ申そう。」

そう云つて天女をはつたとにらみつけ、日持懷中より一卷を取出し、さつと開いてつきつけた。ドロ／＼と日本の芝居なら差詰め大ドロの鳴物の入る所。天女はくる／＼と窓を亂し始め、たちまち吉什迦の本体を現わした



「曼荼羅の威光はどうじゃな。」

日持は静かに云つた。

幻術の破れた吉什迦は、やにわに一刀を抜いて、

「これでも食え。くそ坊主め」

と切突するどく斬りかかつて来た。日持はさつと曼荼羅にて受けとめた。チャリンと刀は三段に折れて散つた。光るもののない室の中で、それだけ印象的にキラリと光っていた吉什迦はまったく狼狽してコソ／＼と逃げて行つた。その逃げるはずみに落した一通の文書があつた。日持はそれを拾つた。

「アッ」

と声を出して驚いた。それは大元横領に関する陰謀の密書ではないか。

#### 四 再び 便殿

日持は仁宗皇帝に謁見していた。丞相鉄木妖僧と吉什迦の陰謀を密奏し、また白拍子等の赦免帰国を歎願する為である。

「帝、ちよつと重大事を御耳に御入れ申し上げます。」

と云つてかのくだりを申し上げた。

「ウム。さようであつたか。まったく朕の手ぬかりじゃつたのう。」

「は、つきましては、日本より捕われております白拍子等の御赦免帰国を許していただきとうございます。」

「うむ／＼。もつともな願い、許してつかわす。」

「ありがとうございます。」

そう云つて日持は頭を下げた。

それから帝は丞相を召出した。

「こりや鉄木、その方を今かぎり免官いたす理由はその方の胸にあるはず。早々引下れい。」

「ハッ。その、は……。」

「だまれ。本来ならば死罪の所、それを免官にとどめたのはそちの将来を案じての事、申し立てを申すなら即座に手打にいたすぞ。」

もと／＼胸におぼえのあるもの。へたを云つて手打にでもされては大変と、鉄木ほう／＼のていで引下つていった。

「いやこれで朕も安心申したわい。ところで上人、この燕京にも長い間とどまつてもらつてすまなかつたのう。が一つ所へ長い間腰をすえるのはよくあるまい。これより元朝発祥の旧都、大蒙古和林<sup>カルコム</sup>に赴いて布教教化されたらいかがなものじゃ。朕はそれをすすめるぞ」

「は、まことにありがたき儀日持喜んでお承いたしましたでございます。」

#### 五 居庸関

日持は和林を目的にいよ／＼燕京をたつた

思えばはや日本を離れて幾年か。日持はふつとそんな事を思つた。しかしこれから先大蒙古布教の途はいつまでつづくであらうか。万里の長城を歩きながら日持はフツと大きく深呼吸をした。居庸関<sup>キヨウカン</sup>にさしかかつた。

「止まれ、止まれ、怪しい坊主、いづくからいづれへ行く」

居庸関の軍卒が威丈高になつて行手をさえぎつた。

「決して怪しいものではない。都から蒙古へ布教に行くのだ。」

「だまれ／＼、この国に見馴れぬ面魂の坊主召しとつて詮議する。」

「ままだたれよ。」

「いや早く召とれ。」

そう云いながらひしめき合っている時、砂塵を挙げて騎馬の一隊が追い着いた。

「やあ軍卒、この上人は怪しい方ではない。帝の知遇をうけられこのたび和林へ布教に行かれる途中召とつて詮議とは無礼であらう」



「は、さようなお方とはぞんじませず。まことに失礼つかまつりました。」

「いやよい」。日本の上人。私は帝からこまでの御供をおおせつけられた禁衛軍の者です。あ、それからあれ、あの通り、白拍子共がやつてまいりました。お別れにと。」

「御心配かたじけない。」

その時白拍子等が馳つけた。

「お上人様。あなた様のおかげで帝から赦免されました。ありがとうございます。」

「ありがとうございます。でもすぐにお別れとは、つろうございます。」

などとよろこびとともに別れを惜んだ。

「元氣でお帰りよ。」

日持は遙かに東方日本の空を拝し、また燕京を顧みて、ただ一人、雲山万里の漠北を指して旅をつづけるのだった。

空はあくまで青くすみ渡っていた。(完)

## ◇大道棋の詰ませ方◇

大 橋 虚 士

### 銀問題の宿題

|   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 七 | 六 | 五 | 四 | 三 | 二 | 一 |
|   |   |   |   |   | 王 | 皇 |
|   |   |   |   |   | 飛 | 馬 |
|   |   |   |   |   | 馬 | 香 |
|   |   |   |   |   | 馬 | 香 |
|   |   |   |   |   | 馬 | 香 |
|   |   |   |   |   | 馬 | 香 |
|   |   |   |   |   | 馬 | 香 |

### 持駒 銀

前号の宿題は銀問題の極く易しいのを選びました。御判りになった方もあるでしょう。正解順を後廻しにして最初目につくのは二二銀打、一二玉、三三銀不成、この時五二角と飛を素抜きにされて了る。三三銀不成の処一一銀成とする一三玉三五馬この時二四歩とスナリ上られて三四角が一二に利いて詰まない。何んだ斯んな問題位とかんたんに考えると一百円奉納組となる

初手二二銀打の着手が不可とすれば五一飛成一二玉二一銀打一三玉以下どうにもならない。三三銀打も一二玉、四三銀、二二合とされて詰まない。一二銀打、同香、五一飛成二二玉、三一馬、三三玉以下駄目。

本題は先づ五四馬と四三に一間空けて銀合とさせるのが解決の鍵ともいえる。何故銀合をするか他の金桂香等の合駒であれば金合なら同馬同角二二金打でかんたんだし、歩桂合なら二二銀打一二玉三三銀不成で詰む。即ち銀合なら五二銀と飛に当てゝあるから三三銀不成の時飛を抜かれて了る。四三銀合にて以下二二銀打は駄目なら以何なる手段が良いのであろうか、四三合馬と切つてはどうか、あわてゝは失敗を招く、同馬同角一二銀打は三一玉、四二銀、三三玉で詰まないし、二二銀

打は一二玉、二一銀、同角となつて詰まらずぐ四三馬と切らずに先きに一二銀打(好手)同香(三一玉は四三馬迄)こゝで同馬、同角二二銀打で解決する。先きに一二銀打が面白いのであつて、この手順前後は誠に味合ふべきでありました。銀問題には大体右の手筋が主眼となつて含まれていますから次の宿題図を充分に検討して置いて下さい。

### 銀問題の宿題

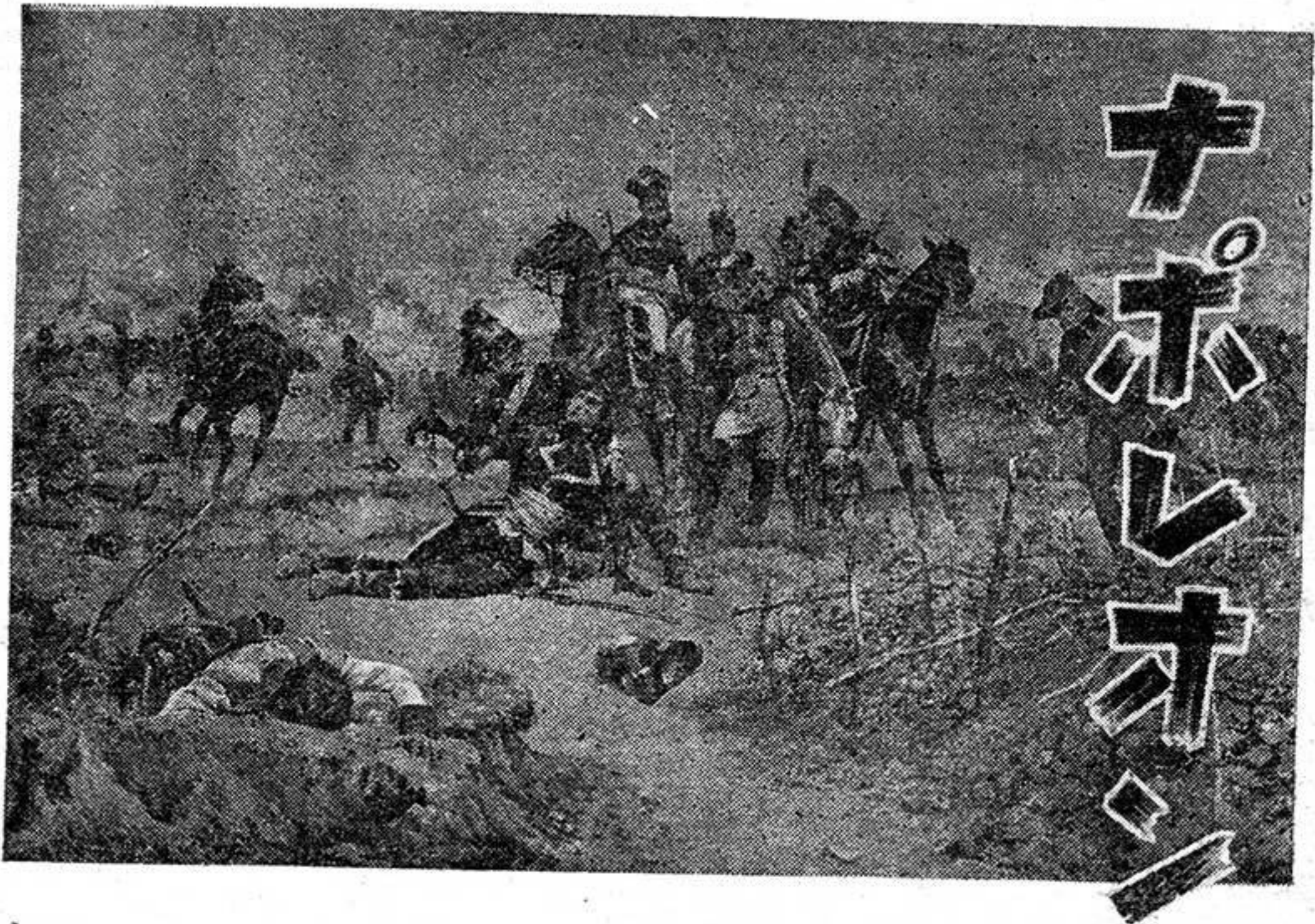
|   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| 五 | 四 | 三 | 二 | 一 |
| 王 |   |   |   |   |
| 飛 |   |   |   |   |
| 馬 |   |   |   |   |
| 馬 |   |   |   |   |
| 馬 |   |   |   |   |
| 馬 |   |   |   |   |
| 馬 |   |   |   |   |

### 持駒 銀

正解は十五手で詰む。

隅の一一香が無い。五三は角となつて五一金五二歩が一一香の無いかわりに玉方の駒がふえている、この五一金五二歩は何を意味するのでしょうか、





# ナポレオンの兵隊

松谷 茂

## 廢屋に

### うめく女

部落の入口で姿を見失つたまゝ、どこを探してもヤンソリー一等兵の行方は分らないのだつた。

もはや日は暮れようとしている。ぢつとしていられない寒さだつた。

モンバー一等兵は、とある土壁の上に立つて、途方に暮れたように後を振り返る。顔一面垢と髭で覆われているが、その鋭い眼光是、折からの黄昏近い反映を受けてぎら／＼と輝く。遠くパリコフの空を焦すように燃え上つているの

は、本隊夜営の灯りである。彼の属する中隊は、つい眼の前のヤンスの森まで進攻して来ていた。近日に迫つた大攻撃の命令を待って、壕を掘り小屋を作つて軍装を解いたまゝだ。

モンバーは薄闇の森の梢にゆら／＼と上る炊煙を見上げながら、ふと風食を抜いた身の極度の空腹を感じた。が、同時に

「いゝか、二人で一人の女を探すのだ。顔を選べ、顔を。吾々下士官や将校が相手にする女とは事情が違うのだぞ。畏れ多くも大元帥陛下が御自ら……いや、分つたか、分つたら行け。醜い女は斬り捨てろ！」

烈しい語気で命令を伝えた時の、ケリモン伍長の顔を思い起すと

「糞ッ！」

いま／＼しげに唾を吐きつけ、踵を返すと、家財の破片や、破り捨てられた衣類の散乱した道に足を踏み入れた。



眼の届く限り人家は続いていったが、一軒として灯の入った家はない。土壁には穴が明けられ、窓は滅茶苦茶に叩き潰されたまゝだ。一面に芥塵のような匂いが満ち溢れている。

「ヤンソリー、ヤンソリー。」

低く響きのこもつた声で、彼は呼び続けた。が、間の抜けたような反響が戻ってくるだけである。女一人はおろか、猫の子一匹いる気配もない。

「ナポレオン軍来る。」この情報は数日前に恐怖をもつてこの部落に伝わっていて、あわてふためく部落民達が、取るものも取り敢えず続々と逃げ去つた後だつた。

プロシアを征服し、チフリスからハリコフに進んだナポレオン軍の行動は残虐を極めていた。チフリスの占領後、避難に遅れた婦女三百名を、ナポレオン皇帝自ら凌辱を加え、悉く黒海に投げ込んだ事などは、その一例に過ぎない。

殊にこの界限の人心を恐怖に陥入れたのは、ナポレオン軍がカスピ湖畔のバクーから掠奪して来た二十名の婦女が、一昨夜、集団自殺を遂げたという噂からだつた。その真実の事情は判明しないが、言語に絶した凌辱の

あつた事は想像がつく、

それ許りではなく。

自ら陣頭に立つて以来、一夜として占領地の変つた女を抱かぬ事のなかつたナポレオンが、昨日、今日のひとり寝に耐え得る筈がなく、女を探すための大命令を発するに違いない事を部落民達は感付いたのだ。

その僅か半月の後に、あの歴史的な雪中敗走の憂き目や、エルバ島流身の運命を知らずに――。

「余の辞典に不可能の文字はない。」

ナポレオンが得意の絶頂にあつた時の事だ。

モンバー一等兵は土壁で囲まれた家の一軒くを、焦躁に蒼ざめながら覗いて廻つた。

今夜の内に女を連れて帰らなければ、どれ程の処罰を受けるか、充分に想像出来るのである。

もうとつぷりと日は暮れた。

と、その時、モンバーは入れ込んだ露地の奥で、ほのかに灯りの点いている家を発見してはつとした。部落民が斬込隊を編成して残っているかも知れないのだ。

彼は足音を立てないように気を配りながら、露路の片側に身を貼りつけた姿勢で、一

歩くと近づいていった。それは、土間から洩れる屋内の灯である事が分つた。が、更に彼が息をつめて見極めると、その土間の光を半身に受けて、一生懸命に中を覗き込んでいる人間の姿が浮び上つた。

(……?)

彼は背に掛けた銃を外した。そして銃先の剣に息を吹つかけた。次の刹那、彼は全身に漲る殺意を感じると、ばつと土壁を蹴つて踊りかゝろうとした。が、その瞬間的な視線で、相手の人間がヤンソリー一等兵である事が分ると、ほつとして躍り上つた胸の鼓動を鎮めながら、ドサくと近づいて行つた。

「ヤンソリー！」

「おお！」

ぎよつとしたように、相手の上半身を起して身構えた。

「モンバーか？」

低い声だ。

「探し廻つたんだぞ。ヤンソリー、どうした？この家は？」

「うむ。耳をすませ、静かにしろ！」

モンバーはヤンソリーの背後に廻つて、その土間を覗き込んだ。灯が枚戸の隙から洩れているだけで何の変化もない。



「何だ？一体。」

「黙つてろ！」

モンバーは肩をすぼめて耳をすました。ヤンソリーはもう長い事ぢつとしていたらし、寒さの為にガタ／＼慄え、齒を喰いしはつてゐるようである。

う／＼う／＼う／＼う／＼

土壁の中から、うなり声が伝わつて来る。

「おい。」

モンバーはヤンソリーの肩を叩いた。

「女ではないか。入ろ、入つて連れて帰ろ。」

「待て——男がいるのだ。」

「——恐いのか？」

「馬鹿！どうも、産をしているらしいのだ」

「え？」

「子供を産んでいるらしい！大分前から苦しんでいる。」

う／＼う／＼う／＼う／＼

二人はどきんとしたように口を閉ぢた。あわてたような、男の聲が続いた。そして、女のうめき声が更に大きくなつたかと思ふと、ぽつと、嬰兒の泣き声が響いた。洩れている光が大きくゆら／＼とゆれた。

「入ろ。」

「よし！」

二人の兵は銃を構えて一度四圍を見廻すと、ドタ／＼と音を立て、行つた。

## 兵の慾情

一步部屋に足を踏んだ瞬間、するどい異臭が鼻を衝いた。血と体臭の混つた匂いだ。そして二人の兵が見たものは、驚愕に慄える中年の男と、今、出産を終つた許りの寝乱れた女だつた。どうして暖をとつたものか、むつとする程の温い部屋である。泣き叫ぶ嬰兒を襁褓のような衣布の上へ転げ出したまゝ、男は泣くような眼瞬きをしながら、おろ／＼と手を差出して、ヤンソリーに握手を求めようとする。必死の早口で何かいつてゐるのだが、言葉が通じない。

「えゝい！」

ヤンソリーは男の手を銃床で払い退けると、ヅカ／＼と産婦の傍に進んで行つた。モンバーが彼に代つて、男の胸に銃先を当てる。

産婦は空虚な眼を死んだように開けたまゝ、肩で呼吸をしていた。今、自分がどんな事態に置かれてゐるのか、考え及ばない虚脱の状

態である。美しい銀髪の子だつた。産気づいて避難出来なかつた精神的な苦痛が、眼と眼の間に深く残つてゐるようだが、それも無事に出産の終つた安堵に變つてゐる。大柄な体である。呼吸をするたびに、大きな乳房が左右に動いた。ぎつしりと汗を流してゐるのか、ゆるいランプの光に、白い腹部がざら／＼と光つた。

「女！」

ヤンソリーが大声を上げた。女はきよろんと眼球を動かして彼の顔を眺めたが、表情には何の変化もない。無感動のよう眼球を元へ戻したかと思ふと、まるで音がするかと思はれる程に、ぱたりと眼を閉ぢた。ピクリと太腿が動いた。古い毛布は血で赤く染んでゐる。

男は何度も／＼モンバーに手を差出しては握手を求め、そのたびに払い退けられては妻の方を眺め、子の泣き声におろ／＼する。

「ヤンソリー連れて行くか？」

「うむ。」

女の体を眺め廻したヤンソリーの眼が異様に光つた。

「女は血まみれの産後だ連れて行つても役に立つまい！」



「しかし、他には人間一人もないぞ！うろくしてると今夜中帰れなくなる！」

「……」

「おい、どうするのだ！」

モンバーはいら／＼していた。彼の足許で、両手両足を宙に浮かした嬰兒が泣き叫んでいるのだ。

「よし連れて行く！おい、モンバー」

「男はどうする。」

「殺せ！いや、俺がやる！」

そういつたかと思うと、ヤンソリーは振向いて銃を持上げた。その顔は、モンバーがはつとする程蒼ざめていた。が、彼が更に驚いた事は、ヤンソリーの銃口が自分の方に向けられている事だ。

「ヤンソリー何をやるのだ！」

モンバーは絶叫した。と、ヤンソリーはふと気がついたように

「失敬！思い違いだった。俺は何を考えていたのか！」

狼狽したように銃先が男に向けられた瞬間  
ダーン！

男はどさりと横へ倒れた。次に、ヤンソリーは銃先で無造作に嬰兒の頭を突き刺した。銃先から血しぶきが上り、泣き声はピタリと

止む。小さな肉塊は見る／＼紫色に変つた。

モンバーは何の感興もなしに、これらの事を眺めていた。戦線に立つてから既に六ヶ月。毎日のように繰返して来た行動なのだ。凡そ慈悲心といったものは微塵も見受けられなかった。いや、慈悲心に縛られていては、彼等自身の首を絞めなければならなかったのだ。

まして、冬將軍の到来と共に決行される大攻撃を目前に控えているのだ。敗戦になるかも知れぬ、丁度農民が冬籠りの用意をするように、二人の兵は、ナポレオン皇帝の飽く事ない獲物の取得に必死的である。

ヤンソリーは血びたりの銃剣を土壁に突き刺し、附着した肉片を拭い去ると、ツカ／＼と産婦に近づいた。女は単調な呼吸を肩で小さくしながら、眠りに入っているようである。

「まるで、死体だ！」

二人が顔をしかめたのも無理はない。下腹部から太腿にかけて、どす黒い血がべつたりと乾きもしないで浮んでいる。中隊へ連れて帰つても、文句をきくだけの事を、二人は同時に悟つた。しかし、他に女の探しようのない事、今日一日の探索で知り尽している。それに、もう夜だ。

「モンバー。まるで糞糞許りだ。何処かで服でも探して来い！俺は此奴の体を洗う。」

ヤンソリーは血走つた眼で命令のようにいうと、辺りに散らばつた綿屑をかき集めて、ぐいと女の片足を持上るようにながら、丹念に血糊を拭い初めた。やけつくような異臭がぐつと迫つたが、最早ヤンソリーの鼻は受けなかつた。呼吸は乱れ、眼は燃えた。

「服なんて何一つ残つてやしない。しかし、探して来る。」

モンバーは銃を肩に担うと、あたふたと外へ出た。一寸先も見えない闇の世界だった。

キシ／＼と顔面が針で突くように痛んだ。彼は周囲の動静に注意しながら、土壁から土壁へ、土間から土間へと、まるで這うようにしながら手探りで二十軒近い家々を探し廻つた。何一つ服らしいものは見当らなかつた。

彼は引返した。そして、産婦の家まで戻り着いて、ドサ／＼と靴音を立てながら土間に入りかけると

「待てモンバー、入るのを待て！」

部屋の中からヤンソリーの声がした。モンバーはびくりとして立止つた。

「ヤンソリー、！、何だ！」

「待て、待つておれ！」





喘ぐような口吻だつた。モンバーは心の中であつと声を立てた。予想しない事ではなかつたのだ。今までの戦線でも、掠奪のあるたびに行つて来た事なのだ。第一線の兵の特権の如く振舞つたものである。しかし、今は違

う。相手は出産を終つた許りの、血まみれの女ではないか。まさか、と思ひながらも

「ヤンソリーっ」

「待て！」

その制止に反して、モンバーは部屋に跳び込んだ。ぱつと驚いて起き上るヤンソリーの下で、女が空虚な眼を開けたまゝ、ピクリと太腿を動かした。

## 處 罰

黙々として足を運ぶモンバーと、女を背負つたヤンソリーとが、ヤンスの森の中隊本部まで歸つて来たのは、もう夜も十時に近かつた。二人は飢えと寒さのために口をきくのも大儀な程に疲労し切つていたが、兵隊達の眠り込んでいる天幕と天幕の間を通り抜けて、下士官達のいる堀立小屋まで運びつくと

「ケリモンズ伍長！」

モンバーがきりつと引緊つた声で呼びかけた。中からカラ石

を転がす音がする。彼がもう一度呼ぶと

「おう！」

と返事がして、靴の音がした。

ケリモンズ伍長は扉から洩れる光の中に、二人の姿を認めると

「遅い！何をしていた十二時を過ぎると軍法会議に廻す処だつた！」

そして、ヤンソリーの背の女を覗き込んで

「寝てるのか？」

「は。部落民は一昨日悉く避難したらしく、この女だけが逃げ遅れたらしいのですが、ひどく疲労し切つております。」

「何！」

ケリモンズ伍長は女の顔と二人の顔を交るゝ見比べていたが、ふと踵を返すと

「待つとれ！」

投げ捨てようといつて、小屋の中に入つて行つた。

ヤンソリーの顔は恐怖に歪んだ。女が元気でいるならば、何の不安もないし、又疑いも掛らない筈であるが……

モンバーは女の首筋を軽くトク／＼と叩いた。しかし、女はヤンソリーの肩にがつくりと顔を伏せたまゝ身動き一つしかなかつた。やがて、部屋の中から



「入れ！」

と声が掛つた。

中では大きな素板のテーブルを囲んで、四人の下士官がもうくと煙を吐きながら、石の賽に熱中していた。その奥に、薄汚れたカーテンで仕切つた部屋がある。ケリモンス伍長はヤンソリーから軽々しく女を、右脇に抱え込んで、奥の部屋に消えた。

「は。はい、逃げ遅れたらしいのです。」

四角張つた返事をするケリモンス伍長の声がした。中には、連隊本部の将校がいるらしいのだ。

ヤンソリーはガタ／＼慄えながら、奥の様子を必死になつて窺つていた。大変な事になつたと思つた。しかし、中の気配は全然察し方がなかつた。モンバーがそろりと前進して、ヤンソリーの脇を小突いてさゝやいた。「おい！露見するかも知れないぞ！貴様のやつた事が！」

ヤンソリーの顔色は蒼白である。頬に小粒の汗が浮んでいる。

「ヤンソリー・モンバー、入れ！」

中から叱りつけるような声がとんで来た。真正面の小さなテーブルの上に両足を投げ出してふんぞり返っている将校の左腕に、白

黄色の腕章が巻かれている。軍医なのだ。両脇に若い将校が二名、ユラ／＼とパイプをくわえたまゝ棒のように立つていた。

「前へ！」

入口に立つていたケリモンス伍長が声をかけた。二人の兵は歩調を合せて三步進んだ。軍医の背後で、毛布にくるませられて、女は転がつていた。

「ケリモンス伍長！検査をしろ！」

軍医は顎をしやくつた。ツカ／＼と近寄つて来たケリモンス伍長は

「おい、ズボンを下せ！」

二人の兵が、いわれた通りにすると、若い将校がやつて来て、ヤンソリーの下腹部に手を触れると、明らかにそれと分る分泌物が滲み出た。ぐつと顔を上げてきつくにらみつけた将校は、いきなりぱつと拳で頬を殴りつけた。

「貴様つ！」

よろめいたヤンソリーが、足許の木柵につまづいて転がるのを見下しながら

「ケリモンス伍長、縛れ！」

そして、モンバーの前に立つて、同じ事を繰返した。しかし、彼にはそんな現象は起る筈がなかつた。

「御苦勞！事情は後程に聞く。外で待て！」深い安堵感にほつとしながら、モンバーが外へ出かけると、両手を後へ廻されて縄を受けたヤンソリーが、俯向いたまゝ部屋の隅に立たされていた。

外は風が音を立て、吹いていた。

やがて扉が開いて若い将校と、ケリモンス伍長が、ヤンソリーを引連れて出て来た。

「モンバー、お前達二名の連れて来た女は、大命により今夜半、皇帝の許へ参上させる事になつた。先程のお方は軍医総監である。深く勞をいたわれとの事であつた。しかし、ヤンソリーの行為はフランスの軍規を蹂躪し、威厳を損い、尙、皇帝にまで恥辱を加えるものと同断である。本官はこれに処罰を加えないでいられない。」

そして首を廻らすと、大声でいつた。

「分つたか、ヤンソリー。」

ヤンソリーの顎がカチカチと鳴つた。

次の瞬間、将校の脇下で短銃がぱつと火を吐いた。その音は森中に反響した。

そして、つと一步踏み出たヤンソリーは、その場でぱつたりと噎れてしまつた。

……終……





# 陸軍特設第七天国

眞鍋吟吉

## 鉄條網のエロス

「……我々は大都會の第七天国でやるように広間で女を選ぶなんてそんな悠長な事は許されない。何しろ慰安婦と遊ぶのは三十分以内ときめてあるのだ。部屋の外で我々は列を作つて並んでいた。時々

「次」という声がした。

四十五分程すると僕の番が廻つてきた。

「第六号室！」

×××が僕の方を向いてどなつた。僕はドアを排して薄暗い部屋へ飛び込んだ……」

オット——ヘネルの戦争小説「鉄條網のエロス」の一節にこんな描写がある。これは戦線が膠着した欧州大戦のとき

のこと——最初のうちは戦線の将兵の自然的要求をどうしようという風な問題はてんで起らなかったが、戦争第二年目の一九一五年から先ず文明の開けた西部戦線、次に東部戦線と連合軍側にも同盟軍側にも、戦線の後方へ、陸軍特設第七天国というやうなものが現れてきて、さしむき現在不用の建物とか崩れ残つた民家とかを利用して、この公設の慰安施設が繁昌することになった。

新しくそのためにバラックを作つたのも多かつたが、振るつたのなると荷馬車を改造して名実共に「移動本部」を拵えたのもあつた。戦線で一働きして後方へ帰休するとなると、この第七天国を目指しての威風堂々たる行軍が始まつた。そこには最初は商売人の女がいた。がしかし、終り頃になると、その戦線附近

一帯の素人の娘や女房が参加するようになつてきた。それ以外には喰う方法がなくなつたからだ。一切れのパンで彼女たちは肉体を売つた。戦場から遙か離れた後方でも極端な生活難だ。

荒れ果てた戦場に残つた連中のことは言うだけが野暮、彼女達はこつそりと兵士の袖を引くことを始めたが、直ぐ憲兵隊に発見せられて「第七天国へ入るか、それとも懲罰を受けるか？」というのつびきならぬ押問答の末ずる／＼とこの非人間的な泥沼へ陥んでしまつたのだ。

余りにも機械的な、余りにも忙しい「遊興」について、さすがに軍隊であるから、金さえあればという世間並なことは通用しない。将校用、下士官用、兵隊用とちやんと女の階級がきまつていふばかりでなく、建物にもそれぞれ階級がつけてあつた。奥軍の「軍立公娼規定」の第七条「婦女」という条項には  
 婦女ヲ分ケテ左ノ三種トス  
 イ、将校用公娼

ロ、第一階級兵士用公娼  
 ハ、第二階級兵士用公娼 云々  
 と書いてある。どこ迄も階級だ。これ





は敵味方全軍を通じて同じであつた。これは女の顔顔ばかりでなく、遊興時間迄が階級的になつてゐることである。兵士の三十分に対して将校は百二十分と規定されている。つまり階級が上になれば、女もよくなるし、時間も長く遊べるというわけである。兵卒用の第七天国にはちやんと「兵卒用」という木札が掲げてあるし将校用には「将校専用」になつており、これを間違えてはならなかつた。西部戦線のベチューヌでは夜になると将校用の家には青色のランプ、兵卒用には赤色のランプを出して区別した。

なにしろ戦線のことであるから一度激戦になるとエロどころではないその代りいざ帰休兵が来るという事になると、女たち食事の間もなく位休みなしに駆け立てられることになる。甚しい例になると、朝の八時から晩の九時迄、ひっきりなしに三十数名の兵士の相手をした女もある。

性病予防に関する軍律ぶりを挙げよう。先ず兵士は遊びに行く前に病院へ行つてその氏名と所属部隊を登録し、軍医が直接その兵士の身体検診をする。それが及

第すると各々プロタルゴールとワセリンを買つて出てゆく。帰つてくると、軍医の手に検診の上、プロタルゴールの注入を受け、その相手の女の名を報告する。一方女の方では毎週数回の検査を受けるのは勿論である。

双方共性病にかゝつてゐることを知り乍らこれをかくしていると、禁錮刑が課せられる。この軍律がこういう手続の後光つていたのである。

## 斬壕のエロス

戦争御用学者は、禁慾は決して身体に害にならないと太鼓判を押した。然し毎日く硝煙に包まれて地虫の様に斬壕生活が続けている兵士たちには、陳腐な学説でしかなかつた。直接敵と対峙している兵士達には、後方の第七天国も高嶺の花であつた。

妖しげな画が持ち廻られるのは勿論のこと、落書から流行歌の返え唄までエロ尽しである。平素如何なる謹厳居士でも一度このような生活に浸ると、刹那的な快楽を求めるようになるのは實際不思議な位である。そして次第に露出的とな

り、あらゆる悪習が流行してくる。平常そんなことを考えたことのない人々までが、長い禁慾生活によつて殆んどすべてこの悪習に引き込まれた。

禁慾生活の起した病氣の中には性的な性質のものが多かつた。大砲の音が轟くとその音を聞いただけで精液を漏らした兵士もあれば自分の撃つ小銃の音でそんな現象を起す者もあつた。その癖いざ帰休になつて女と逢ふ機会が出来ても、すつかりインポテンツになつて完全に変態性慾に陥つてしまつていた。

同性愛は勿論の事、獸姦迄行われたという事が記録されている。ルーマニヤへ派遣された或るバイエルン生れの軍曹があつた。この男がちよいと馬小屋の中へ消えるので仲間の者がそつと覗いてみると……

で彼はとうとう軍法会議にかけられることになつた。考えてみると気の毒でもあり滑稽でもあつた。軍務にも熱心な男で平常は少しも変態的な所もなかつたところであるが、やはり嚴罰を受けたということである。





# 成吉思汗の性慾戦術

中 澤 公 平

## ボハール城外の觀兵式 「軍律による集團強姦」

戦争は、すべてのものを崩壊させる。なかんづく、人間の心を崩壊させる。そして、そこに残るものは、本能の残骸である。

戦争は、人間を野獸にする。少くとも、敵に対して、野獸にする。戦争は、人間を

発狂させる。集團的な発狂者と化する。実に、戦争ほど奇怪なものはない。すべてものが、どう変わる。かからないからである。

しかし、歴史を案ずる時、この人間の本能化、獸化、狂化、墮落性を大幅に逆用して驚異的戦果をあげた天才的大戦術家も、十指に余るほどあるのである。これらの天才たちにとつては、一切の徳性の肉が崩れ落ちて本能の骸骨だけになった人間や、野獸の心をもつた人間や、発狂した人間の方が、常なみの人間よりも、どれほど便利だったか知れないのである。なぜなら、これらの天才たちは、人間を単なる手段、もしくは機械、もしくは消耗品としてしか見ず、本能や獸心や

狂心は、それらの手段を飛躍させる契機として、それらの機械を回転させる動力として、それらの消耗品を効果的にする装置として、驚くべく役立ったからである。

それらの天才たちの最たる者の一人は、言うまでもなく、チンギス・ハーン（成吉思汗）であり、他の一人は、ティムール即ちタメルランである。タメルランは、「ティムール・イ・レンク」（跛のティムール）が訛つたものである。

前置きはこの位にして、すぐ話の本筋に入ることにしよう。

本能の大宗たる食慾をのぞけば、人間獸化狂化の本源は、色慾である。ティムールについては暫らくおくとして、チンギス・ハーンは、実にこの人間色慾の最大限における活用者であつた。



一二一九年に、モンゴル（蒙古）の根拠地を発して、ホラズム帝国征服の途にのぼったチンギス・ハーンは、行く行く、大小もろもろの敵城を屠り、ついに大都ボハラの城下に迫った。ボハラは当時、世界屈指の大都会で、イスラーム教文化（マホメット教文化）は絢爛の極に達し、文字通り、全中央アジアの文化中心であつた。——ボハラの語義は「学問の中心」。

街には大厦高樓が立ちならび、その到る処に大寺院が競い立ち、この平和な「学都」の一日は、それら無数の寺院の尖塔から唱え出される宣礼偈のメロディーに明け暮れしていたと言へば、この大都の市民たちの生活はいかに大らかな典雅さに満ちていたように思えるかも知れないが、その実、彼等の文化生活は既に爛熟を通り越して、頹廢の域に入っていたのである。

奢侈安逸は市民生活の同義語となり、享樂主義は信仰生活と表裏一体を形づくっていた市民たちはみんな、彼等の教祖ムハンマッド（訛つてマホメット）にならつて、一夫多妻制度になずみ、貧富の差こそあれ、それぞれに（ハレム）婦人部屋をもち、一人でも多くの、少しでも美しい、少しでも若い、女を手

に入れることに人生の意義と目的を見出し、いたのである。——しかも、おおびらに。

奴隸市は、街の各所で、連日のように開かれ、身に一条もまとわぬうら若い女たちは、競売り人の手真似に應じて、幾百人の買い手の前で、立つて見せたり坐つて見せたり、両手をさしあげたり腰をくねらせたりしている。貧慾に燃える眼で、彼女たちの急所急所を焼けつくほど見つめていた買手たちの或る者は、ついに堪らなくなつて、目ざす女の乳房を思いきり掴んでみたり、お尻をなで廻したり、そして、しまいには、きまつたように太股を開かせて、××の検査をはじめるのである。その時、競売り人は、ここぞとばかり、きまり文句の叫びをあげる。——「甘い、甘い、アフリカの西瓜の味！いや、その西瓜も及ばない、パレスティナの無花果の味！いやいや、その無花果も及ばぬ、ホラーサーンの本場のメロンの味！一度味わつたら、一生忘れられないこの娘の味！さあさあ、安売りの大安売！買った、買った！」

イーラーン（訛つてイラン）風の美しいフアイアンス焼きのタイルで壁面を飾り立て、同じくイーラーン特産の見事なカーペットを床に敷きつめた、幾百の豪華な大邸宅の奥深

くで、毎夜のように、頹廢生活の極致を象徴するかのような、奇怪な戯画的所作が演ぜられている。

好んで遠来の旅行者や隊商の幹部などをわが家に泊らせては、海山の馳走をする、それらの大邸宅の主たちは、まさに寝につこうとする客の枕元へ、ハレムから選びぬいた一人の美女を、そつと侍らせる。そして、壁一重隔てて、自分も他の美女を抱きしめながら、かねて設けてある覗き穴から、その幸福な客人と一夜妻との間にくりかえされる熱烈な抱擁を、細大もらさず盗み見るのである。

長年にわたる過度の耽溺生活で萎びきつたそれらの富豪たちや貴族たちの××は、もはやかかる人工的嫉妬の刺激を借りるより外、勃起が不可能なほど、末期的症狀を呈していたのだつた。——脂っこい美食づくめで、肥満しきつた彼等ではあつたが。

この大都のあちこちに、あるいは裏の通りに、あるいは縁取りのように、散存している裏街には、地元トルコ人ばかりか、イーラーン人、アラビア人、ユダヤ人、さてはインド人までがごった返し、それらを相手に、無数の私娼窟に入りまじつて、男娼も門戸を張っていた。



かくて、大ボハラの市民は、彼等の生命と財産とを、優柔な支配者であるホラズム並びにイーラーの君主スルターン・ムハンマッドの手に委ね、實戦の経験に乏しい職業的軍隊に護られ、一見堅固に見える城壁の中で、奢侈安逸の明け暮れを迎えていたのである。

懸軍長驅、怒濤の勢で、モンゴルの精銳が、否、獸兵が、城壁に迫つたのは、まさに全城市を挙げて、このような文化的酩酊の最中だつたのである。

攻囲数日、三万に余る城兵は、一夜、突如として開城出撃し、モンゴル軍の虚を衝いて脱走をはかつた。が、百戦錬磨のチンギス・ハーンは、少しも驚かず、一旦、散開背進して、敵をやり過ぎた後、急速に陣形をととのえて、敵に追いつき、アム河の岸辺に於てこれを完全に包囲し、三万の城兵を一挙に殲滅した。

万事休したボハラの市民は、司式僧ロクン・ウツディーンや裁判官ベドル・ウツディーンをはじめ、名立たる貴族たちを選んで、使節団を組織し、チンギス・ハーンのもとへ送つて、降伏と忠誠とを誓わせた。が、冷酷氷の如きハーン（皇帝）は、彼等を一わたり

睨みつけただけで、一言の応答もしなかつた。

やがて、音に聞えたボハラの市街を見物するために、ハーンは、護堅を衛固にして城内へ赴いた。そして、アルラーハムハンマッド教の神の殿堂である大寺院へ馬を乗り入れ、神聖な祭壇の前で下馬したが、その足で説教壇へ駆けのぼると、親兵たちに向つて叫んだ。

「わが軍馬に秣をあたえよ！」

兵たちは、神聖無比の經典を藏めてある金色燦爛たる箱を、寺院の内庭にはこび出し、經典を土足で踏みじつた上、その箱を秣桶の代りにした。

ハーン麾下の將兵は、その大寺院内で、市内から駆り集めて来た娼婦たちに酌をさせながら、へべれけになるまでケミーズ（馬乳酒）をあおり、鬨声を張りあげて、原始的なモンゴルの俗謡を歌いまくつた。

あくる日、ハーンは、嚴命を下して、全市民を城外の平原に集合させたが、身につつむ衣服の外は、一物たりとも携行することを許さなかつた。

数十万の住民が退去するのと入り替りに、幾万のモンゴル兵は、隊伍整然と入城した。

そして、ここにいよいよ、名高いチンギス・ハーンのヤサ（軍令）によつて定められた「集團掠奪」が開始されたのである。それは実に一糸乱れず、嚴正無比の規律と順序によつて遂行された空前の掠奪であつた。

先ず、ハーンの親兵が、ハーンのために、最も金目の物を掠奪し、それが終ると、軍司令官や万人長（師団長に当るもの）たちが掠奪し、それに次いで、千人長、百人長の順序で掠奪し、残りは、十人長（下士）以下、一般の兵たちが、洗いざらい掠奪し尽すのである。いやしくも、この軍令によつて定められた順序を無視して、我れ先に掠奪する者は、その場で斬殺される。

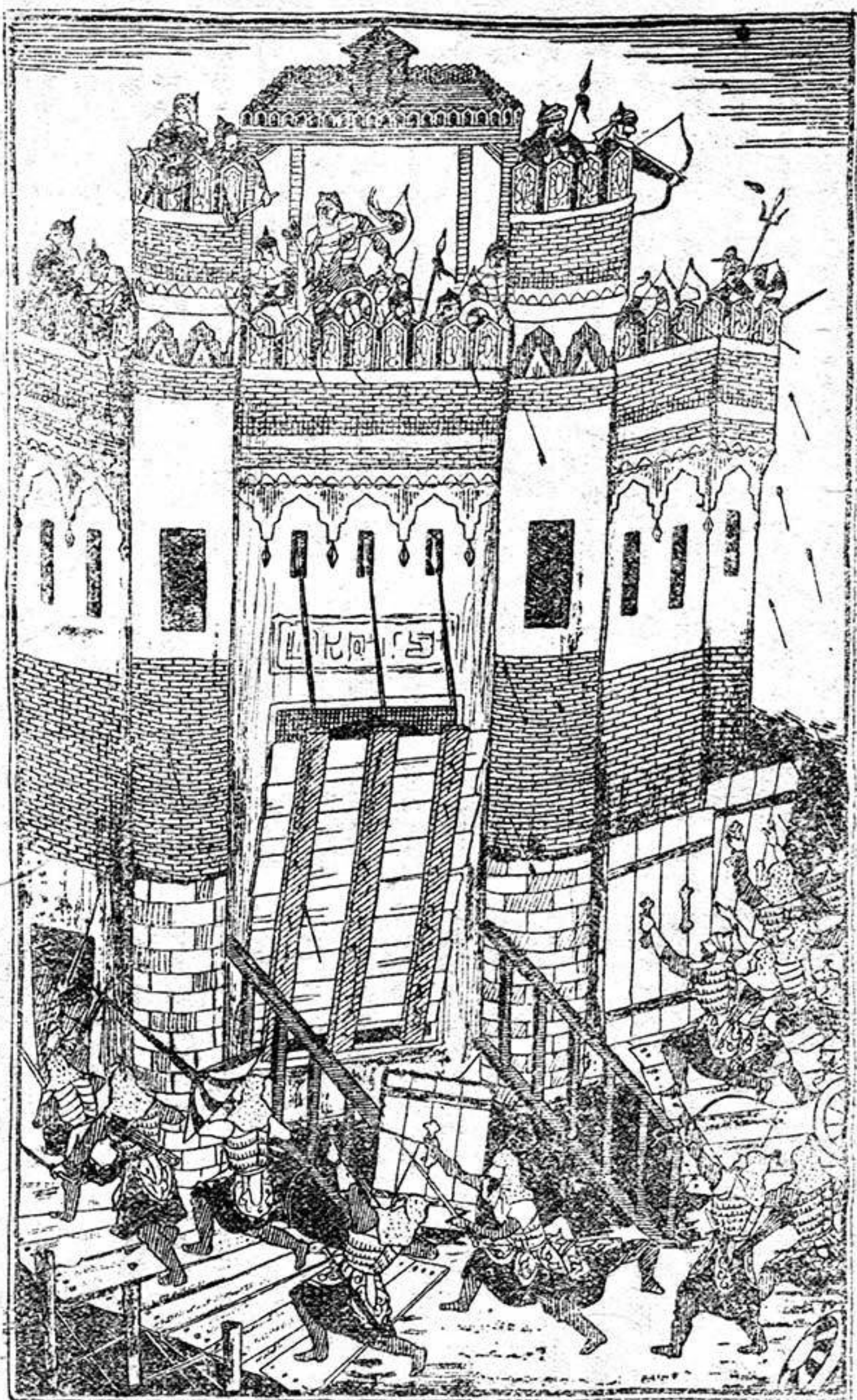
「物慾戰術」、「色慾戰術」の天才であつたこの世界征服者は、懸軍万里、千辛万苦の進撃途上に於て、極度の疲労と空腹とのために、まさにへこたれようとする將兵に向つて、常に次のような言葉をもつて、激励しつづけたのである。そして、その史上に名高い言葉は、それらの困憊し昏迷しきつた將兵たちの間に、立ちどころに起死回生の奇効をもたらしたのである。曰く、

「敵の都が、帯をといってお前たちを待つてゐるぞ！金銀財宝の山々が、お前たちに山分



けされるのを、今か今かと待つてゐるのだぞ！  
 ！顚の軟い股のよく肥えた幾万の若い女たちが、お前たちの鉄の腕に抱きしめられるのを、首をのばして待つてゐるのだぞ！」  
 モンゴル兵は、ビハーラの市の掠奪に九二日を費した。そして、三日目には、いよいよ城

外の平原に集合させてあつた幾十万市民の中にまじる「顚の軟い股のよく肥えた女たち」の分配に取りかかった。  
 先ず、ハーンの親兵たちが、ハーンに献納するために、貴族や富豪や一般良家の生娘や若妻たちの中から、飛び切りの美人を八十一



人まで選んだ。八十一という数は、九を九倍した数で古来、モンゴル人にとつては、最も縁起のよい数である。次に、軍司令官、万人長、千人長、百人長の順にそれぞれ三十六人、二十七人、十八人、九人といった数を選び取りし、残る幾万の若い女たちは、十人長以下、一般の兵たちの為たい放題にまかされた。かくて世界史上にもその比を見ない「軍律による集団強姦」の幕は切つて落されたのである。  
 言い落したが、この段取りになるまでには、この人肉の大饗宴の眼ざわりになる青年や中年の市民たちは、悉く惨殺され、死を免れた老人や子供は、この凄惨饗宴の雑用を勤めさせられたのだつた。それは、実に正視し得ない情景であつた。イーラーンの史家、イブン・ウル・エティールの記する所によれば、「これは、まことに恐るべき日であつ



た。幾十万の老若男女が別れを悲んで泣き叫ぶ声は、天をゆるがし、年若き女たちは、衆人の眼前に於て、衣服をぬがせられ、それらの獸兵どもに思いのままに輪姦されながらも敢えて指先の力ほどの抵抗も試みようとはしなかつた」と。

勿論、抵抗する女は、即座にその下腹部を切り裂かれ、子宮を引き出された。老人や子供の中には、眼前でわが娘やわが母が辱められるのを見るに忍びず、絶望の勇気を揮つて、その人面獸心の業畜どもに躍りかかつた者も少くなかつたが、それらの勇者たちは、監視に當つてゐるモンゴル憲兵のために、またたく間に八つ裂きにされた。(泰西の史家の記す所によれば、当時のホラズムやイーラインの市民たちの眼には、兇暴なモンゴル兵の顔は、あのマステイフ種の犬の面のよう映つたという。獸面獸心という語は、ここから生れる。)

鬱積しきつた情慾ならぬ獸慾を、十二分に、それこそ腰の抜けるまでに遂行した「犬面の大軍団」は、滞留旬日の後、ボハーラ市を焼き払い、黒煙の高くあがるのを後にして次の犠牲たるサマルカンド市へと向つたのである。馬上ゆたかに采配を振るチンギス・ハ

ーンのいかめしい口からは、またしても、次のような言葉が、神々しいまでの響をもつて逆り出ていた。

「ボハーラにもまさる敵の大都サマルカンドが帯をときかけてお前たちを待つてゐるぞ」

## 「歩く性器」と精力鑑別法

鎧袖一触、サマルカンド城市を陥れたチンギス・ハーンは、ここでも、心ゆくまで魔王としての、否、色魔王としての貫祿を示し、選りに選つた数百の美女をハーン専用として陣中の幕舎に起臥させ、連日、裸踊りだの、裸相撲だの、裸曲芸だのを演じさせて楽しむ一方降伏した城兵の中、五万余を虐殺し、全く無抵抗の市民の中、三十万以上をなぶり殺しにしたが技術家や職工の類は成るべく生かして置き、約三万を「道具」として活用した。

ハーンの大軍団は、その後、数枝隊に分れて、ホラズムの西につづくホラーサーン、イーライン、カウカサス(訛つてコーカサス)南部ロシア、さてはインドまで攻め入り、到處で掠奪、強姦、虐殺、放火をほしきままにしたが、純然たる非戦闘員の犠牲者だけでも、幾百万にのぼるか、史家は算定に苦しん

いる。

ハーンは、遠征よりの帰途、アルタイ山の一角に登つて、山麓を東へ向つて行進する蜿蜒長蛇の如き凱旋部隊の威容を望見し、得意げに次の如く洩らしたと、イーラインの史家、ランド・ウッディーンは伝えている。

「わしの軍隊は、まるで林のようだ。わしの軍隊の後に従つて来る女たちの数だけでも、優に一兵団ほどある。……山海の珍味を飽きるほど食ひ、綺羅錦繡を毎日とり替えて身につけ、金殿玉楼に住み、愛馬の群を青々とした沃地に放牧し、往来する道には茨一本生えぬようにする。これがわしの願いで、今や、万事その通りになつた！」

この一兵団ほどもある夥しい女の群は、勿論、ハーンが大事な分捕品として携行して来たものである。晩年に於ける彼の妃妾は五百人を越えていたと言うが、妃妾とまでは行かずに、物好きな老ハーンによつてただ馬群同様に飼われていた若い女の数は、恐らく幾千にも達したであらう。

この驚くべき世界征服者は、厳烈を極めた彼のヤサ(律令)の中で、平時に於ける個人的な殺人や倫盗や強姦などと共に、男色をも死刑に相当する重罪として規定しているが、



その実、晩年の彼は、しばしば、帳殿すんだの枕辺に色白き美少年を侍らしたと、伝えられている。ある説によれば、それはどうやら陰萎防止の目的からであつたと。

チンギス・ハーンの軍隊は、全部騎兵であつたが、遠征に際して、彼は、夥しい予備の軍馬の外に食糧として、山羊を主とする無数の家畜を引き連れて行つた。モンゴル兵は、その家畜の大群を「歩く食糧」と呼んでいた。ところで、モンゴル兵の旺盛な食慾を満たしてくれるこの山羊の大群は、時に、彼等の性慾を充足するためにも、転用されたのである。

戦地に在つて、精悍無比なモンゴル兵どもは、しばしば、狂暴な情慾をもて余すことがあつた。敵城市の防備が堅固で、予定通り陥落しない場合など、女体に飢えかつえた兵どもは、ともかく怒りッぽくなつて、些細な事から思わず大失敗を齎すようになる。このような場合、彼等のハーンは、臨機応変、「軍律による集團猥褻」を実施したのである。

その方法は、生きている若い牝山羊を幾百頭となく、土中へうつ伏せに埋め、臀部を斜め上方へ向けて地上に露出させ、それにむかつて順々に、四足獣の交尾式にやらせるので

ある。このような用途にあてられる羊群は、モンゴル兵どもによつて、「歩く陰門」と呼ばれたという。

モンゴルには、古来、結婚に先立つて、一種の「性的見合い」とでも言うべきものが行われていたが、明君（？）チンギス・ハーンは、この奇異な習慣を大いに奨励したらしい。

今日で言えば「優生学的な見地から——」ということになるだろうが。では、その奇習とは、どんなものであつたか？

それは、見合いをする若い男女は、それぞれ近親者たちに伴われて、沙漠の中でも砂地の比較的軟い場所へ赴く。そして、談笑しながら、茶やクミーズなどを飲んで、尿意を催すのを待つ。やがて、我慢が出来なくなると、それぞれ、指定された砂地へ放尿する。立会いの近親者たちは、その放尿によつて穿たれた穴の深さや大きさによつて、本人の精力と性力を判定し、「性力強し！」ということになれば、縁談は成立し、その反対ならば、不成立に終るのである。

これを以て観る時、チンギス・ハーンの女性観は、容貌よりも、氣質よりも、実に性慾をもつて第一の目安としたのである。

## 裸体に對する嗜虐的愛好、一民族擧つてサデイスト（淫虐狂）？

チンギス・ハーンは、彼の軍令の中で、その戦闘員たると非戦闘員たるとを問わず、敵の捕虜を殺す際には、必ず腹を裂いて胃袋の内容を検査するように命じている。そして、この掟は彼の存命中のみならず、二代目のハーンたるエゲデイ（訛つてオコタイ）が第二次大西征を敢行した際に於ても、几帳面に勵行されている。

それは、当時、モンゴル軍に蹂躪された各地方に於ては、住民は身に危険が迫ると同時に、所持している貴重な宝石類を嚥下して、掠奪を免れようとした者が頗る多かつたからである。名立たる敵の大都を占領して、二十万、三十万といったような桁外れの大量殺戮をした場合にも、それらの犠牲者たちは、一人の例外もなく、胃袋をひき出して断ち割られたのである。

まことに酸鼻の極と言ふべきだが、犠牲者が婦人たちの場合には、その上に、更にもう



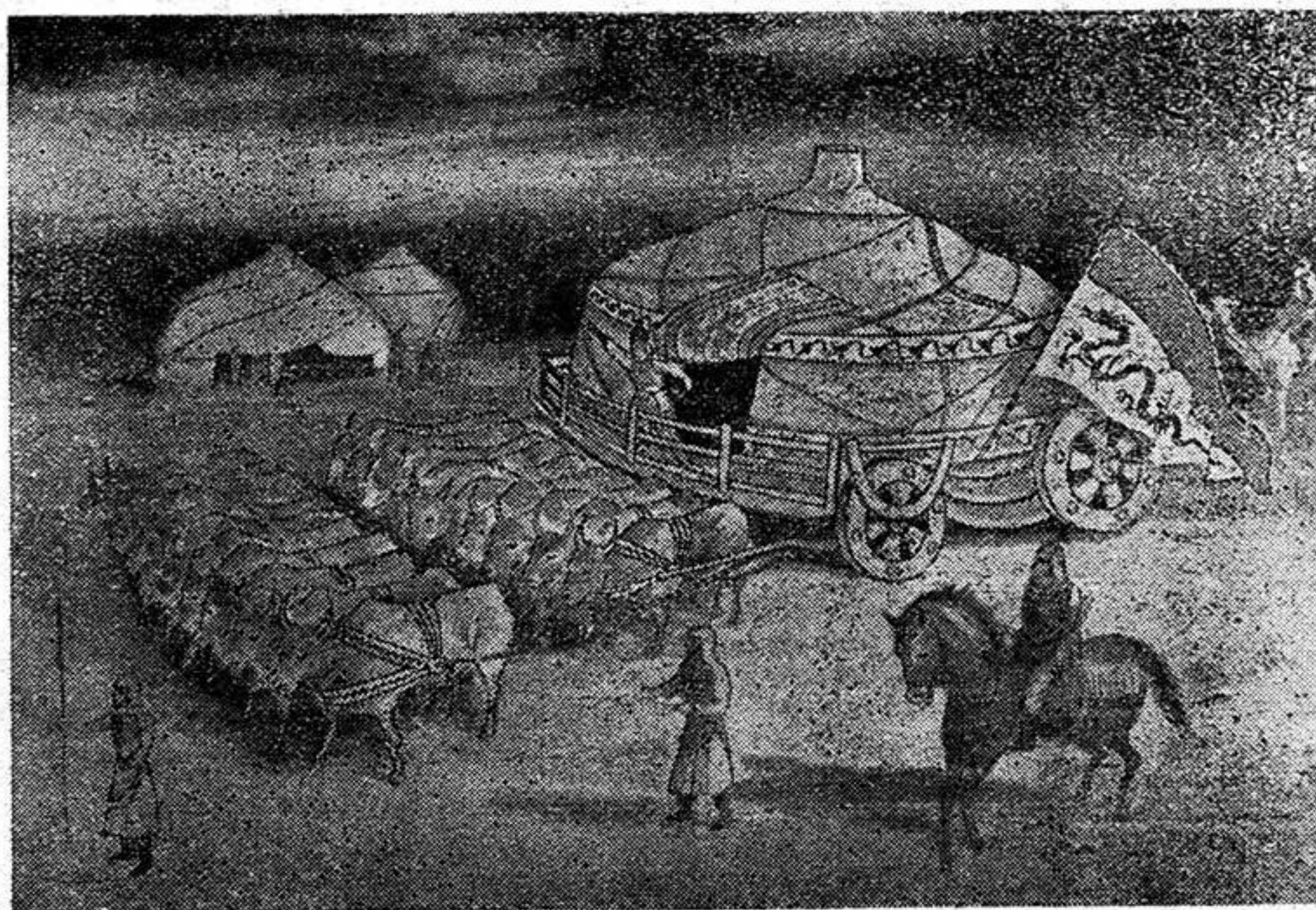
一つの残酷が加えられた。それは、彼女たちが、命の次に大事にしている高価な宝石類を、好んで勝手間の秘庫に隠匿したからである。虐殺に先立ち、彼女たちは、まず一切の衣服をはがれて全くの裸体のまま凌辱（多くの場合輪姦）され、それがすむと、起こしも立てず、生きながら、胴を切り裂かれるのである。イーラーンの史家たちの実録には、そのような凄惨な情景を活写しているものが多い。

この裸にするということに想い出されるのは、当時のモンゴル人は、捕虜や罪人を処分する場合、その男女を問わず、たいいてい衣服をはぎ取つて、裸にした上で殺した一事である。それは、勿論、軍令乃至は律令に従つたものだと言え、それまでであるが、兵といわず官吏といわず、血に飢えた当時のモンゴル人は、どうやら人間の裸体に対して凌辱を加えることに、変態性慾的な興味を、否、それ以上のものを有していたらしいと思える節がある。そして、少し飛躍的な推断になるかも知れないが、この世界征服当時のモンゴル人は、上はハーンから下は一兵卒にいたるまで、民族全体として、サディスト（淫虐狂）的傾向にあつたと言ふことになるのである。

次に、その生々しい二、三の実例をあげて見よう。

チンギス・ハーンの歿後、ハーンの後継者となつた彼の第三皇子エゲデイは、一二三六年に父ハーンの第一次西征を凌ぐ記録破りの大遠征を、ロシア、ポーランド、ホンガリア、バルカン諸国、ドイツ等に向つて展開した。この大遠征軍の総指揮官には、エゲデイ・ハーンの甥で暴勇無比の聞えあるバトゥーが選ばれた。

破竹の勢をもつて進撃した遠征軍の各枝隊は、波状をなして先ずロシアの東南部並びに東部に乱入したが、またたく間に、その広大な地域に割拠していた諸種族の抵抗を粉砕、蹂躪し、長驅、ロシア本部のウラディミールに迫つた。当時、モスクワ（訛つてモスコ）は、まだ地方的な小都市に過ぎなかつたがリヤザン、コロムナ、スズダール等の諸城市と共に、早くも血





祭りに挙げられていたのだつた。

「東方の悪魔」の大群に十重二十重に取り囲まれ、間断なく弩砲による猛攻撃を受け、た首都ウラディミールの市民は、もはやこれまでの運命と覚悟をきめ、涙と共に、救世主イエスと聖母マリアの御名号を唱え、この生地獄の城内で一日送りに露命をつなぐよりも、むしろ一刻も早く天国へ昇らしてもらいたいと願つた。別けても大公の親族たる諸公子や諸公女をはじめ、幾多の貴族たちは、古めかしいギリシア教の精神に従い、男子は僧に、女子は尼になつて、清らかに昇天しようと、申し合わせた。

そこで、彼等は、一斉に髪をそり落して、大寺院へ立てこもり、恐怖と絶望におののきながらも、一心不乱に、

「もし御旨ならば、主よ、すみやかに、われ等を御許へ召させ給え！」

と、祈りつづけた。

クリスト旧教たるギリシア教の教理などとは凡そ何のゆかりもない鬼畜の大群は、忽ちにして城市を陥れ、例によつて、城兵と市民とを余さず惨殺しにかかつた。乱入して来た鬼畜どものために、剃髮者の一団は、ついに大寺院の内陣へと追いつめられた。房房した

美事な金髪をそり落して、情ない坊主頭となつていたそれらの可憐な貴婦人たちや令嬢たちが、やがて、北歐婦人特有のその雪にも紛らう真白い柔肌を、垢と汗と汚物とにまみれた獸人どもの焼饅頭の如き毒牙の前に、曝されなければならない時が来た。愛する夫や父や兄弟たちが、次次に衣服をはぎ取られ、××を切り落されて、惨殺されるその面前で、彼女たちもまた、同じように一切の衣服をはぎ取られ、言おう様もなき手荒い玩弄と凌辱、怒罵との嵐の中に、窒息し絶命したのである。

ある所伝によれば、狂犬の如き野蠻人どもは、彼等の体内に荒れ狂う極度の劣情に打ち負かされ、単に平常の所作によつて情慾を遂げるだけでは満足せず、その犠牲者たちの豊麗な肉体に、乳房といわず臀部といわず大腿といわず、所きらわず噛みつき、無数の咬傷を負わせたというが、また、他の所伝によれば、獸兵どもは、輪姦の末に惨殺したうら若い貴婦人たちの臀肉を切り取り、後刻、羊の肉と同様に、鉄板にのせて、焼いて食つたともいう。フランスの史家、パシメールの所記は、それらの蠻行を裏書している。曰く「ビザンティン（コンスタンティノープル）の国民は、タタール兵（モンゴル兵）が残虐

の限りを尽しているのを伝え聞いて、大いに恐れおののき、この野獸人どもは、犬の顔をし、人間の肉を食つているものと信じた」

行く行く無数の城市、村落を廢墟となし、幾百万の無辜の民を白骨と化せしめたモンゴルの各部隊は、ポーランド・ドイツ・ハンガリア等の奥深く大洪水の如く侵入して行つたが、総司令官バトゥーに率いられた主力は、ブダ、ペスト両市（後に合併してブダペスト市）以下の諸城市を陥れ、残虐、汚行の限りをつくした後、当時ハンガリア王国第一の都城であつたエステルゴムを包囲した。

同市の軍民は、勇敢に防戦したが、ついに力尽きて、予期された悲惨な運命に逢着した。最後に生き残つた貴婦人の一団は、取つて置き的美服をまとい、有りつたけの宝石を身につけて、市街の一角にある堅牢な石造家屋に避難していた。

が、その避難所も、恐るべき侵入者のもつ無限の破壊力の前には、玩具の家も同然であつた。三百名に及ぶ貴婦人たちは、引き出されて、まさに集團凌辱の一步手前に立たされた時、予め打ち合せてあつたものか、彼女たちは一斉に手を合せて、声を限りに哀願するのだつた。



「どうぞ、バトゥー大王の御前へつれて行つて下さいませ！ぜひ、大王に申し上げたいことがあるのでございます！どうぞ、ぜひ、大王の御前へ……………」

珠数つなぎになつて連れられて来た美女の群を見て、元帥バトゥーは、思いがけぬ御馳走に会つたように、眼を細めた。貴婦人たちは、その大人物らしい風貌の中にも大人物の人格を形づくる属性の一つである寛容を予期し、ここぞとばかり一斉に紅涙を流し、嬌態をつくって哀号しながら。

「どうぞ、お助け下さいませ！大王様の奴隸として、一生、犬や馬にも劣らぬ御奉公をいたしますから！」

と、合唱しつづけた。

が、そのモンゴル帝国隨一の<sup>大物</sup>大物と言いはやされている豪傑は、親兵たちに命じて、情容赦もなく彼女たちの被服をはぎ取らせ、ずらりと並んだ三百の玉体を、みずから一巡して検査するのだつた。やがて、最も妖艶な八名を自身のために引き抜いた後、彼は、悦に入つた様子で、残りの全員を、麾下の將兵に引出物として与えた。凌辱数刻、彼女たちもまた、一人の例外もなく、非業の最期を遂げたのである。

戦時の例ではないが、モンゴル帝国の第四代目の主、ムンゲ・ハーンが、自分の即位に反対した先帝クユク・ハーンの正后オグルガイミシを訊問、処刑した時にも、やはり、この裸にする処置がとられた。即ち、彼女の両手をいつしよにして一つの革袋に入れ、これを縫い合せた上で、彼女の衣服を悉くはぎ取り、その裸身を毛氈に包んで、水底に沈めたのである。

## チンギス・ハーン

### 戰術の正体

以上、チンギス・ハーンの「性慾戰術」ともいふべきものについて、その概略を紹介したのであるが、序でに、その母体たる言わゆる「チンギス・ハーン戰術」または「モンゴル戰術」の輪廓をも紹介して置くことも、時節柄、無益ではあるまい。

スウェーデンの史家、ドーソンは、簡約して、「チンギス・ハーンが勝利をおさめたのは、意志が強固なのと、才幹が非凡であるのと、そして、無遠慮にあらゆる手段を採用したのによる。……………」と述べている。

「あらゆる手段」——それは、もちろん人間以上の或いは人間以下の、悪魔的なもしくは鬼畜的な、一切の手段を包含したもので、全く現代人の想像を絶した底のものであつた。

チンギス・ハーン戰術の第一に掲げなければならぬものは、いわゆるスパイ制度である。それは、彼が幾多の戰術、戰略、乃至は政略を実施するに當つて、いつ如何なる場合に於ても、必ずそれらに先行させたものは強力なスパイ活動であつたからである。もともとスパイ根性なるものは人類の自衛的本能に根ざしたものであるから、文献としては旧約全書に現われているのをはじめ、スパイ活動の歴史は極めて古いものであるが、東西を通じていわゆるスパイ戰術を大成した者はチンギス・ハーンその人であつたと言つてよい。

次に、「敵の敵」を利用すると同時に、敵の陣營を離間する方策である。彼の支那征服を例にとれば、彼は初めに夏を攻めた際には、夏とその友邦たる金とを離間して、金をして中立の態度をとらせ、次いで金を攻撃するに當つては、金人に征服されてその压制下に呻吟していた契丹人を一斉に蜂起させ、更に金の不信を怨んでいた夏をそそのかして金



の国境を侵させた。が、後にまた夏に攻撃を加えるに及んで、金に対しては一時講和的な態度をよそおい、ついに夏を亡ぼした直後、死床につくや、その皇子等や將軍等に対し、金の宿敵たる宋と同盟して金を討つべき方略を授けたのである。彼の遺詔にもとずき、嗣子のエゲデイ・ハーンは金を亡ぼし、孫のフビライ・ハーンは宋をも亡ぼした。

チンギス・ハーンが駆使した幾多の戰術の中で、その中核とも言ふべきものは、「集團奴隸制度」と「督戰戰術」であつた。彼は常に龐大な数に達する捕虜を奴隸として、最も危険な戰鬪や最も困難な作業に従事させた。また、屬国の民や占領地の民を駆り集めて同様の勞役に服させた。そして、多くの場合、モンゴル兵は、それらの奴隸部隊を背後より操縦し監督した。彼とその子孫の諸ハーンとが、広大な地域で長年月にわたり野戰攻城を事としたにもかかわらず、殆んどその兵力を弱めなかつたのは、全くこのためであつた。

古来、チンギス・ハーンほど軍紀の振肅に心を致した征服者はなかつた。彼は、子孫のためにのこした「ヤサ」律令の中で、「十人隊の長にして、もしその隊を指揮することが出来なかつたならば、彼の妻子もろとも死刑

に処し、改めてその隊員の中より隊長を選べ。百人隊長、千人隊長万人隊長についても同様によせよ」と規定している。この制令は、彼の子孫によつてどの程度まで遵奉されたかは甚だ疑問であるが、少くとも彼一代の間は、ほぼこの嚴令通りやつてのけたものと見てよい。

自家の軍隊に対して「命にかけての規律」を維持したチンギス・ハーンは、他方、敵に対しては彼の有名な「恐怖戰術」を実施した。敵国民の生命、財産、住居その他一切に對して加えられた彼の徹底的破壊絶滅主義は、實に至大なる天然の崇りにも似たもので、敵国民の間に無限の恐怖心を起させ、攻撃を受けた人民をしてまず防禦する勇氣を失わせた。「モンゴルが来たぞ!」とすかさば泣く兒も黙るとまで言われたその極端な恐怖心の波紋的伝播は、單なる自然現象ではなく、それは明かにこの世界征服者によつて企てられた惡魔的神经戰術の效果であつた。

チンギス・ハーンが特にその西征の全期間を通じて、到る處、敵国民の大量屠殺を勵行したのは、懸軍万里、百種に近い異民族の只中に孤立する不安と後顧の憂いとを除くためであつたが、同時にまた、敵を恐怖と恐慌の

どん底に突き落すためでもあつた。彼は、敵城を攻圍するに當つて、幾多の民族より成る奴隸部隊の他に、よく各地で駆り集めた浮浪の徒などを雲霞の如く展開、前進させたが、それは敵をして見渡す限り「モンゴル兵の波」であるかの如き錯覺を起させ、それによつて恐怖心をより大ならしめようとした常套手段に外ならない。今日の「人海戰術」などは、全くその模倣に過ぎない。

チンギス・ハーンは、勇敢な者や大功をたてた者に対しては、惜し気なく恩賞を施し、「バートル」(英雄)なる名譽の稱号を附与した。この褒賞制度は、彼の子孫のハーンたちによつて受け継がれた。當時のモンゴル人にとつては、この稱号を与えられることが無上の誇りだつたのである。

チンギス・ハーンは、敵国の内情に精通した上でなければ決して侵襲を試みなかつたが、その敵情を偵察するためには、敵国内の不平分子を巧みに誘惑し、彼等の協力によつて容易に探察の目的を達した。これらの不平の徒は、單にモンゴル側に内応したのみか、しばしば彼等の祖国の危機に際してモンゴル軍に呼応し、自国を内部から崩壊に導いたのである。





## 上海千一夜

昭和十七年九月二十六日午前十時、北京を飛行機で出発した私は目的地シンガポールに向い、広漠たる大陸の上空を南へ南へと進んだ。黄河を過ぎる頃より漸く天候が不良となり上海に着陸することになった。

右は漠々とした広野に連つて山々が幾重にもヒダの様に重なり、左は遠く海岸線が迂余曲折して緑の中に覆み、高度四千米、天候は

## 太平洋戦争

## 戦塵漁色余話

高 原 順 三

次第に悪化を加えてくるとはいふものゝ、機体の動揺もさしてひどくなく快適の飛行旅行であつた。丁度正午に上海大場鎮の飛行場に着陸、直ちに宿舎である北四川路の日本軍隊指定旅館に入る。

明くれば二十七日早朝、飛行場迄出たものゝ、天候は昨日より悪く滞在を余儀なくされた。十時頃より自由行動を許され市内見物に出かけた。自由行動とは言つても、独行は危険のため二人以上連行するより注意があつたので私は、フランス語、ロシア語、ドイツ語、支那語、英語の五ヶ国語を自由に操ることが出来る親友の黒瀬君を伴いフランス租界へ足を伸ばしてみることにした。

ガーデンブリッジを渡る頃より異国情緒が一入豊かになる。何とかいう七階建のデパートの前で市電を下り約三丁程南へ行くと所謂

観楽街に出る。ブラリ／＼と散策するうちに午前中は過ぎ去りロシア料理で簡単な風食をとる。白系露人の娘さんのサービスで葡萄酒に陶然と酔を発する。午後は観楽の手始めに映画見物にゆく、日本の軍人は無料で特別席へ招待される。映画館の感じは一寸有楽町の日本劇場を思わせるものがある。

案内嬢のサービスが日本では一寸経験の出来ない程素晴らしいものだ。腰まで切れ上つた支那服のよく似合う抜ける程色の白い二十才位の姑娘が、まるで恋人とでも逢曳きしているようにニコ／＼と愛嬌よく二人を特別席へ案内して、そのまゝ二人の間に坐つた。

暫くそのまゝで欲劇していたが、彼女は何か小声で唄を吟んでいて映画等見ていないようだ。その中つと立上つて席を外したかと思ふと暫くして、コーヒとケーキを持ってきて



二人にすゝめた。彼女が動くたびに薄暗がりの中にもくつきりと白い太腿が印象的である。

菓子の次に果物が出て、彼女は私と黒瀬君の間に落着いた。彼女の右手は静かに私の膝の上に置かれた。脈があるなと思い乍ら女の顔を見ると、正面を向いたまゝ微笑している。甘い香料の匂いが襟元あたりからブーンとほのかに匂ってくる。少々悪戯気も手伝い左手を彼女の右腿のスカートの割目より差し入れる。馴れているのか、予期しているのか大して警戒の様子もない。

温かい生目の細かい肌、手は次第に奥へ進む、スカートの下は何にもつけていない素肌だ。何んという偉大な案内嬢のサービスであろう。私の胸の鼓動は高まる。……生え際に達するだろうと思われる頃、私の手は不思議なものにぶつかつた。パンティーではない、手だ。しつかりと前を押えているのだ。彼女少々警戒しているなと思ひ乍ら私はその手を握つた。所がその手は右手だ、彼女の右手は私の膝の上にある。しかも、その手は女のよるな柔かなものではない。彼女は相変らず微笑している。

先客があつたわけだ。黒瀬だと感ずいた時

には既に彼の手は引つこめられて澄まし込んでいる。後釜に気持をこわしてろろくしてゐるうちに映画は終つた。映画館を出るなり私は黒瀬君の背中をどやした。黒瀬の曰く彼女はフランス系だ、小声で唄つていたのはフランス民謡だと。

街路はすでに黄昏れていた。白系露人の美人を紹介するという黒瀬の言に従つて入つた処はキャバレー風な裏通りの建物。他に客はなく、六つ客用のテーブルと椅子、隅の方に六人の女が一かたまりとなつて雑談していたが、私達が入るやいなや、中の二人が飛びついてきて椅子をすゝめる。紫の光りの中でよく見ると、二人共白露の美人だ。

葡萄酒と漬物を注文して暫く待つ、私が満州のハイラルにいた頃、或る露人に接待を受けた時の漬物の味が忘れられないものだからロシア料理といえは漬物を思い出し注文した次第である。楽しそうなジャズ音楽が静かな寂しいセレナーデに変わった時、黒瀬は相手をうながしてダンスを始める。私はダンスも出来ず話も出来ないの、専ら飲み食いの方を引き受けることにした。幸いなことに私の相手の女は日本語が少々話せるらしい。——もつとも当時のような情勢では全然日本語の分

らん者は居なかつたろうが——。

その女は六人の中で一番小柄であつたが、それでも五尺四寸ある私よりは遙かに大きい。立つて並ぶと私の口が丁度彼女のオツパイ附近だ。漬物を嚙じりながらブドウ酒を飲む彼女もよく飲む、大きな身体だから無理もない。競争したら負けそらだ。私の手を握つてきた大きな手だ。茶色がかつた銀色の生毛がきら／＼と光っている。

バンドは次の曲に移つた。黒瀬は五尺一寸そこそこだからお母さんに子供がぶら下つて駄々をこねているといった恰好だ。倦かずにまだぐるぐる廻っている。

私の手の上にある彼女の手に次第に力が入り引張られるように感じたので、どうしたと聞くと一寸来て呉れというので言われるまゝに彼女について立ち上つた。アルコールも大分身体に廻つてきた。目で黒瀬に無言の合図をすると、彼は女の胸のあたりでOKの右手を振つて見せたので安心してついてゆく。二回ばかり狭い廊下を曲つて突き当つた部屋に導き入れられた。手は握つたまゝでまだ離してくれない。入つても鍵を掛けるでもなし、金は黒瀬にまかして私に一文も持つていないし、只空いた片手で小型拳銃を握りしめてい





つてい  
る。や  
られた  
かと思  
つてド  
アのノ  
ツプに  
手をか  
けてみ  
ると難  
なく開  
く。思  
い直し  
てウイ

るだけだった。  
彼女は私に椅子をすゝめてウイスキーを取り出した。当時珍しい角瓶だ。立て続けに三杯空けると下地があるので一寸応えてきた。こゝは案の定スペシャル・ルームである。二方の壁は鏡になり、緑の光線が部屋中をやわらかく照らし出して艶めかしい雰囲気が出ている。右端にはスプリングの目立つダブルベッドが人待ち顔に煽情的である。空いた一方の壁には大きな裸体画が架つている。部屋中を見廻している間に彼女は姿を消してしま

スキーをもう一杯御馳走になる。

煙草に火をつけようとライターを出したが油が切れたのか中々着かない。静かにドアが開いて彼女が大きなガウンを着て現れ、小さなライターを取り出して火をつけて呉れた。此処は何をする処だ、何んの用事で引張つてきたと分つていながら聞いてみないではいられなかった。彼女は黙つて私の隣りに坐りながらガウンの前を開いてみせた。下着は

ブラジャー以外何もない。未だ曾て見たことのないよく揃つたきれいな毛並が眼の中へ飛び込んできた。

まるで猫の毛のように柔かそうである。ブラジャーも取れよと手をかけたら、いやだと言つてガウンで包んでしまった。何んでも西洋人はバンテイーよりもブラジャーの方に貞操観念を持つていて、夫以外ブラジャーは取らないそうだ。部屋の情緒と彼女の図体に圧

## 男子同性愛者

### からの書信

南里文彦

昨年来、私は男色に興味を有する人、或は同性愛に現に悩む人達から沢山の手紙を貰つた。その中で特に私に同情を求めた悲痛な私信があつたのでこゝに紹介することにする。住所姓名は明記してあつたが匿名である旨が附記してあつた。

私は奇譚クラブの愛読者ですが、特に昨年の十二月号や本年の三月号を拝見して、

自分の此の変態的な恋に苦しむ辛さを書き綴つてせめてもの心やりとしたいと思い、敢て此の便りを御出しする次第です。或は私の今から申し述べますことは一般にありふれたことであるかも知れませんが、広い世間にはこの様な男もおることを御考え下されば幸せに存じます。

私は本年二十六才の青年です。生理的には何ら畸型も又機能の障害等も認めません商業学校を卒業後、小さな組合の事務員を勤め二十三の年に両親のすゝめで結婚致しました。此れが私の不幸を倍加しました。

私は外見は一人前の男子であり乍ら、年長の同性を慕う女性的な男なのです。妻はあつても熱烈な愛も起らず味気ない日々を



倒されて長居は無用とホールへ帰れば、黒瀬の姿が見えない。後からついてきた私の相手の女が、御友達はスペシャル・ルームの二号だと教えて呉れた。私の行つたのが一号だったらしい。

外へ出た。黒瀬と肩を組みながら、デパートの前あたりまで来る。防寒マントが邪魔になる。安全地帯で市電を待つていると黒瀬が小用だといつて暗がりへ消えた。腕時計を見ると十時過ぎであるが、人通りはまだ相当混雑している。中々黒瀬が帰つてこないの、どうしたのかと思つていると、前に立つていた支那服の婦人が、急に私の胸にぶつたりと倒れてきた。無意識の中に両手で抱きとめて、

「どうした〜」

と言つてみるが、通じたのか、通じないのか私の胸にもたれてじつとしてゐる。

附近の人々は見て見ぬ、知らぬ顔、恐る恐る顔をのぞき込むと彼女はにつこりと笑つてゐる。眼のきりつとした中々よい顔立である。そつと起こすと、はや私の手を握つてゐる。そこへ黒瀬が

「すまん〜」

と言ひ乍ら近寄つてきたので

続けております。そうして電車の中で男性らしい男に逢つた場合には顧みずにはいられません。そしてもしその男性と視線が合つた時等は処女の様に赤い顔をそむける意気地なしです。

苦味走つた男性的な男を見る度に交際して頂きたい、兄弟の契りを結び度いとの念が起つてきて仕方ないのです。私は女ばかりの姉妹の中の一人息子です。その為身体組織が普通の男子と違つてゐるのかも知れません。又女ばかりの中で育てられた習慣のせいかも知れません。自分ではたしかに先天的だと思つてゐるのです。幼児の時分に人形を好んだ事や小学校へ上つた時美男子の先生を慕つたこともあつた位ですから

こんな事を思せば妻帯した二十六才になる男がと世間の人は氣違い扱いにするでしょう。然し先生だけはきつと私の心情に同情して下さると信じます。実に苦しいのです。何とかならないものでしょうか。一度望みがかなえばと思ひ。又女であつたら、美少年であつたらと思わぬ時はあります。自分と反対の悩みに苦んでいられる人はないでしようか。そして男としての人前をつくつて行かなければならない不幸な生れの人が他にもいるでしようか。

とにかくもうこれ以上書くのを止めましょう。申したとて愚痴ですから、只不自然に生れついて苦んでゐる男を憐んで頂ければ十分です。

「馬鹿に長い小用だつたナ」

と言つてゐると、いつの間にやら彼女はいなくなつた。

黒瀬に話をするや夜の女だという。注意してみろ沢山居るぞと言うので見廻したら居る、軒下に三人、五人と群をなしている。

あだかも池面を游渡する水すしの様な目くるましさで雑踏の中にもそれらしい女が動き廻つてゐる。

華麗な服装の色どりが夜目にもしるく私の眼を射た。

よし、明日の晩も出発しないようだつたら、こいつ等を漁つてみようと思ふと黒瀬と約束して、今宵はこのまゝ大人しく帰宿することにした。十六七日頃の月だろるか、ガーデンプリツジの影が長々と尾をひいてゐた。





## 女闘繪巻

## 美濃輪稻荷縁起

増田志郎

て着せて遺ることにした。

夫の郡長は晴れ／＼とした気持で国府に赴いて国司の前に出て面目を施すことが出来た。さてその時国司はその郡長の着ている衣服の余りに見事なのに感心すると共にそれが欲しくてたまらなくなつたので、

「立派なものだわしにも一寸着せてはくれぬものか、さても／＼此の様な品はお前等が着るにはちと勿体無い故、わしに預けて置くがよい」

といつてとう／＼それを取り上げてしまいました。いくら頼んでもなか／＼返してくれ様子もなかつた。

仕方無く気の弱い郡長は持ち合せのものを着て家に帰つて来た。夫の帰りを迎えた妻はその姿を見るなり不審に思つて訊ねてみた。

夫が今日の事の次第を話すと。

「では私が行つて訳を話して取り返して参りましょう。」

翌日妻は早速国府へ出向いて行つた。

大勢の役人達が女だと侮つて帰えれ／＼と追ひ払いにかゝると、貴男方では話が通じませぬ故国司様に直接会つて戴くものを戴かねば帰りませぬと言ひ乍ら、忽ち四、五人を左右に振り払つて役所の奥へ進んで行つた。このさわぎに驚いて出て来た国司を掴まえて訳を話して着物を返してもらおうとしたが、てんで相手にしないので

「それでは仕方が御座居ませぬ、ちと痛い目を見なさるか。」

と言ひざま相手の腰を取ると片脇に抱えてズル／＼と門の外へ引張り出して、石段から

尾張の国は三輪の里に小柄ではあるが大変力の強い女が住んで居た。この女は其所の元興寺の道場法師とて大力で世に知られて居た人の孫娘に当る者でその容姿も人並優ぐれて美しく夫にもよく仕える貞節な女であつた。或る時の事、郡長をしている夫が国司の庁へ出仕しなければならぬ事になつたので、彼女は早速新しい立派な衣服を夫の為に仕立



下へ投げ倒そうとしたから胆をつぶした国司は冷汗を一つばいかき乍ら、「返すく」と思わず悲鳴を揚げて許しを請うたので漸く双の手をゆるめた。いや何と大した力であらうと今更乍らに女の容姿を見直すのであつた。

此の様な事件が在つてから郡長の家では両親達が心配し初めて、「国司様に手荒らな事を仕出かしてこれから先又何んな災難を招く様な事になるかも知れぬ。その様な女を妻にして居るのでは不安が募るばかりじゃ。」とて離縁すると云い出した。夫もホト／＼

これには参り、可愛い妻と一つしよに楽しい日を送りたいのはやま／＼乍ら、父母を捨て、逃げ出しもならず、氣弱の男の常とて、遂に女と別れなければならぬ羽目になつてしまった。

是非なく女は亦故郷の三輪の里へ帰るより途がなかつた。然し老いた両親に心配を掛けるも心苦しいと、その後は物の商い等をして日を過す様になつた。

或る時、行商に出た女は美濃の国の小川の市と云う処までたどり着いた。そしてその街の真中を流れている河で小舟を操り乍ら多くの商人達に混つて亦一としきり商いが初められた。

さて其処の市には又これも大力で強情な女が居て、商人達に何かと難癖をつけては色々な品物を奪い取る様に巻き上げて、強勢に振舞うまるで今日でいう女ボスがあつた。

それで人々はこの女の事を「美濃狐」と仇名して誰一人として手出しをする者さえ無い有様で手を焼いていた。何んでもそれは女の四代目の先祖が狐と結婚したとかで、つまり狐の兇惡な性質を受けたのだらうと陰口を言うものゝ皆泣き寝入りして居る有様だつた。

今日も今日とて噂をすれば何んとやらその大柄な体に肩で風を切つて小川の市に現われた女ボスの美濃狐は、フト見ると今し方川岸の方に舟を着けて商売を初めている尾張の女の姿が目にとまつた。さて此の様な他国者の新顔を見ると亦例の狐の血の流れが意地悪く暴力を狩り立てずにはおかなかつた。

やがてツカ／＼と尾張の女の舟に近づいて突然高飛車に云つた。「誰に断つて此の地で商売をするのかい。お前一体何処の者だ」

然し相手の女は聞えたのか聞えぬのか一向に素知らぬ顔で商売を続けて居る。美濃狐はこれを見ると一層腹立しげに同じ様な事を声高かに怒鳴り散らしたので、人々は次第に二人の周りを取り巻き初めた。一体これはどう

なる事かとその場の成り行きを見守るばかりである。あまりうるさく怒鳴り立てられるので漸く尾張の女はおもむろに口を開いた。

「何処から来たか、大きなお世話だよ、亦何所で商売しようと勝手じゃないか、品がようて安いのなら何処なと商売になるといふものさ。」

「何んだと柄になく大きな口を叩く女だ。お前は、この私の力の強い姐御様を知らぬのだな」ときつと女を睨んだ。

「どれだけ力が有るお偉い方か知らないが、今は商売の邪魔だよ、力競べ位なら後でゆつくり相手になつてやるからどいた／＼。」

事も無げに平氣な顔でこう云う女の態度に美濃狐はもう全く我慢がならぬかの様に、口元をさながら狐の様に尖がらせて叫んだ。

「よし！向うの河原まで来い、目に物見せてやる。」と肩で風を起して河原目がけて大股に歩き出すのだつた。

やがて商売も一渡りすんだ頃、折から沈みかけた夕日を背に尾張の女と美濃狐の大女とが燃える様な瞳に物すごい怒氣を含んで向き合つて突つ立つて居た。

こんな小女一人何事の事やあると、大女がパツと尾張女へ飛び掛つて武者振り着いたの



を切掛けに双方は互いに腕と腕を取り合い髪  
の毛を掴みむしり合つて組んずほぐれつ、夕  
暮迫る川原に砂煙りを揚げて男も及ばぬばか  
りの力と力の競り合いが火花を散らし、二つ  
の肉体がもつれ合う様は將に物すごいばかり、  
しまいには衣も破れ、腰の物もあらわに  
からみ合つた足と足、太股や、臼の様な大き  
な尻と尻とがぶつつかり合うのは誠に好色艶  
姿エロ百パーセントという所である。

何時集つて来たのかこの状景をながめて遠  
巻きにした多勢の人々が口々に何かわめき乍  
ら唯ワイ／＼訳のわからぬ事を互にブツ／＼  
言つては居るもの、誰一人として止める者と  
てなくかえつて、日頃から憎い女狐め、早く  
クタバレばよいものと手に汗をにぎつて見物  
するばかりである。

腰にからんだ尾張女の足がバツと揚がつた  
かと思うと女狐の巨体はもんどり打つて砂に  
埋まつた。起き上ろうとする所を素早く馬乗  
りになつて、片手でグイ／＼喉輪を絞めつけ  
れば、足をバタ／＼させ乍ら身もだえしつ  
つ両手で相手の丸い大きな乳房を揮身の力を出  
してつかんで横に捻れば、さすが女の急所を  
突かれて絞める力がゆるんだ隙に上半身を起  
こそうと懸命の努力も及ばず又元の様に抑え

つけられてしまふ。然しまだ乳房を掴んだ手  
ははなさないが次第に力が弱ままつてゆくのが  
感じられた。やがて「ヒイ／＼」と苦しい  
音を揚げて「ウ／＼」と最後の呻きを発した  
かと思うとグツタリと動かなくなつてしまつ  
た。死んだのだと思つて漸く手をはなして起  
ち上つた尾張の女の裸身に夕日が肩から胸に  
光りをなげかけて居る。激しい闘争に乱れ

た髪が荒い息をする度に肩から背にふりかゝ  
つてゆれて居る。

と。絶命したと思つた女狐は突然息をふき  
返した様に力無くフラ／＼と起き上つたと思  
うと、物凄しい形相に血走つた目をむいて化物  
の様に近づいて来た。尾張の女は驚いて振り  
返りざまボンと股間を蹴り揚げたからたまら  
ない「キヤツ」と一声異様な叫びをのこして

## 女軍從軍譜

鹿原大助

日本軍が大陸で戦っている頃国民政府軍  
の遺棄死体の中に女兵士が混つていたとい  
う事を当時報導されたのを記憶している  
が、今次の大戦に於ても、米軍やソ連軍の  
中には主として衛生関係の軍医将校として  
従軍していることは公にされている。

従軍といへば看護婦としては世界各国ど  
の軍隊に於ても女性を使用しているのは勿  
論である。然し直接銃器をとつて第一線で  
戦闘する正規の部隊に女兵士を用いたとい

う事は聞かない。然し各国の軍隊に女性が  
公然又は秘密に混入していた事には証拠が  
ある。

然し戦士という事はオペラに出る女兵士  
の様なわけにはゆかないから、一般に思ひ  
程エロチックで華やかなものであるわけは  
ない。男ばかりの戦場に女であることを示  
した死骸が横つていたり、野戦病院へ運ば  
れた負傷兵の上衣をとると丸い乳房が出て  
きたりするとやはり殺伐な戦場にもいさゝ



川の水際にのけぞつて真逆さまに深みにはまり込んで姿を没してしまつた。後にはいつしか中天に上つた月の影のみが何物も無かつた様にキラ／＼川面におどつて居るのみであつた。尾張の女は初めて自分がすっかり裸体であつたのに氣のついた様に、その白い豊満な乳房を片手で包み片手で股間をかくし乍ら引きさかれた着物を身につけようとあせつた。

初めから終りまで見極めた人々は漸く夢からさめた様にぞろ／＼女の側に近よつて来た。

× × ×

その後美濃狐の女の死体は川口にvari果てた姿で発見された。死んでしまえば亦憎しみも消えて土地の人々は懇ろにその靈を葬つた。その附近に美濃輪稻荷という社が残つて居てそれはこの女の魂をまつたのだとも言ひ伝えられて居る。

免に角それからは小川の市は又元の様に盛え人々は平和な交易を営んでゆくことが出来た。

これは今から八百年余りも昔の話である。

× × ×



か色氣が添加されることになる。(前大戦で赤軍の兵士のズボンが破られたまゝ死んでいる写真が残っている)

戦争へ兵士として参加した女という場合、断然有名なのはロシアである。ウラル・コザック連隊のココウツエワは陸軍大尉として奮戦、二度も負傷して聖ゲオルギー勲章を貰つてゐるし、オルガ・クラシルニコフという十九才の娘の如きはポーランドで十九回も戦闘に従事している。然し何れも男装して忍び込んで兵士となつていたので、公然と女の軍隊があつたわけではない。

公然と女の軍隊を組織したのは、労働者農民の反対を押し切つて戦争を継続し、一

度は手に入れたブルジョア政權を下からひっくり返えされたケレンスキーである。最初の女軍の指揮官はマリア・バクチャロフ中尉で、その下には二百五十人の女の兵士がいた。半分は今迄こつそりと軍隊に忍び込んで既に幾度も戦闘の経験のある連中で、他の半分は野戦病院の看護婦であつた。この女軍が黄色な声を挙げて突撃したのだから、すさまじい。それどころではない。この女軍に包圍されて降参したドイツ兵さえある。武器を捨て、手を上げたドイツ兵が近づいてくる敵を見て

「あッ、女だ！」

と叫んだというから、彼女らの勇猛さは押して知ることが出来る。勿論、ドイツ兵は女軍と見て喜んで大急ぎで捕虜となつたわけでもない。相手が女と知つたときの事を、或るオーストリアの将校は女と男と戦うのは流石に氣持が悪かつた。實際、これには弱つた。それで我々は成るべく捕虜にするようにしたものだといふはしている。

× × ×

× × ×





## 終戦時に満洲で奪われた

# 日本婦人の貞操

池 内 白 楊

満洲からの引揚者には處女はいないと云われた位、ひどく喧傳されている事實である。  
虐げられた弱者、満洲開拓者とか商社の家族達を弔う以外の他意はない。

◎

「満洲偽政府倒壊、日本軍完全敗滅 東北人民完全解放」——東北人民解放軍——

壁に貼られたビラが風にヒラ／＼ひらめいている。今迄軍閥の庇護の下に三千万の満洲国人の上に君臨していた日本人も、ソ連の参戦によつて関東軍が崩壊すると共に一朝にして哀れな亡国の民と化してしまった。

ソ連軍の鉄蹄に蹂躪され、加うるに匪賊の来襲、住民の暴動、農民の掠奪、そして幾多の日本婦人の貞操もその生命財産と共に彼等暴徒の暴虐の魔手の下に潰え去つてしまったのである。

「東洋鬼!」 トンヤンキー  
「東洋鬼!」 トンヤンキー

敵意と憎悪のまなざし……長い間、満洲国の名の下に日本軍閥の手によつてあらゆる犠牲を強いられ、圧迫を加えられてきた彼等として当然のことではあろうが、それが、弱い無辜の婦女子に迄加えられようとは、余りにも悲しい事実であつた。

此処に於て日本軍閥の飽くなき罪惡を憎むと共に、辺境の地に恨をのんで倒れた非戦闘員である婦女子に対して同情を禁じえない。以下見聞した実情の一端を記して、日本軍閥の蒔いた罪惡の犠牲となつた方々の冥福を祈りたい。

### 恐ろしき暴虐の跡

八月の下旬、牡丹江へ向けて避難を続けて

いた私は山の中に迷い込み空腹と疲労とで仲間の人達とはぐれて、笹藪の丘陵の中に倒れてしまった。

それから何時間経つたでしょうか、気がついてみると太平鎮の收容所に放り込まれて寝ていました。そこは学校の雨天体操場のような広い土間の部屋で、まわりには私と同じような捕われた女たちがボロを纏つたまゝで寝ていました。皆、泥と汗に包まれて醜い虫のような恰好になっています。

しかし此の部屋の者は生きているだけ、まずましでした。便所へ行く為に匍うようにして隣の部屋を覗いてあつと驚きました。もつと／＼悲惨な人々が何人もころがされてお



ました。真裸にされた若い女たちが、散々おもちやにされ、辱められ、衣類一切をはぎとられて血のにじんだ白い肉塊を投げすてられてあるのです。

中には頭からドンゴスをかぶせられ、下半身には既に蛆がわいている死体もあります。まだうめいている女の人もあります。しかしそんな人も激しい凌辱のために次々に息をひきとつてゆくのです。(引揚者F子さん談)

### 白衣に挑む兵たち

ソ連参戦の報と共に、首脳部がいち早く逃亡してしまつて、病院には医員と看護婦ばかりが残つてしまつた。何んとかして女達だけでも避難させたいと思つたが、列車は軍用以外絶対に使用させないと憲兵の拳銃に嚇されやつとその混雑がおさまつたと思うと後を追うようにしてソ連軍が進駐してきた。

数十名の看護婦や町の避難民の女たちが集合している病院の玄関へ毎日のように女を出せと強要に來た。時計も布団も家具も、既に献納とか借用とかの名目でゆすり取られた上数百の住民たちも毎日やつて來て、何かしら持つていつた。そうして遂に売り喰いも出來

ない程無一物になつた我々の処へ女の貞操を奪いにやつてきた。

幾度の強要にも拘らず女を出さない為に遂にしびれを切らした彼等達は夜になると銃剣で威嚇しながらやつて來た。そして待ちきれない様に入口に近い女のズロースの前をびりツと破つた。こうして入れかわり立ちかわり彼等たちはやつてきた。それに対して防ぐための何等の力も我々にはなかつた。只職掌柄それに依つて生ずる傷害とか病氣に対する予防処置を速かに講じられる位のものであつた(引揚者K氏談)

### 暴力の嵐の下に

狂人と化した暴力者の前に婦女子程脆いものはありません。敗戦者ですから、財産を奪われ家を捨て、逃げるといふ事は仕方がないと諦めておりますが、殆んど婦女が淫虐極まる暴徒のために言うに言われぬ辱しめを受け中にはその為に生命を断たれる方もありました事はかえすがえすも残念でなりません。

今こうして日本で安全に暮しておりますも、あの当時を思い出す度に身慄いするような恐怖を感じますし、未だに夢の中にうなされて夜中に飛び起きるような事もございます

御承知のように中国では売買結婚ですから、

金持は何人ものお妾を持つている代りに、貧乏人はお嬢さんが貰えなくて、筋骨逞ましい苦力等は女ひでりでウヅ／＼しているのです

そこへ以て日本の敗戦——公然と日本の婦女を弄んでも誰も文句の云わない時代が現出したのです。躍り上つて喜んだのは彼等労働者です。この好機逸すべからずと五人六人と連絡をとつて暴民化したのは勿論です。

若い一人の日本婦人はこの暴民によつてたかつて真つ裸にされ(この着物も又彼等の獲物となるのです)泣き狂うのを腰紐で後手に縛り上げられ、群衆環視の中で次々に輪姦された挙句、人事不省に陥つたのを、車にのせて街路を引き廻し、更にその肉体にあくなき弄辱を加えた末、非人道の限りをつくして殺害してしまつたのです。

こういった例は枚挙に暇がない位、日常普通に行われた事実なのです。誰に訴える事も出來ずすべて泣き寝入りになつて闇から闇へ葬り去られてしまつて、一部の人間以外にはもう日本人の頭からさえ忘れ去られようとしています。(引揚者A子さん談)





## 戀の義勇看護婦

伊藤 忠 造

捕われの身となつたロシア士官マロフは、両眼を覆う白布の繻帯の顔を真直ぐに向けていた。フランス西部戦線後方の野戦病院の一室。

遠くで、爆音と砲声がとぎれ／＼に聞えていた。後部戦線とはいゝながら、辺りは穏やかな静けさであつた。

ヴェルダン要塞を放棄した仏軍は首都パリを背中にして、決死の背水の陣を布いていた。それに食糧と弾薬の補充は、撓められた力を一挙に敵へ向つて伸してゆく氣運を見せ始めた。戦機は何か新しい変化の前の一時的小康を孕んだまゝ大きな長い息つかいをしているようだった。

昨日、ドイツ空軍秘藏の爆撃機八機が星のない闇夜を一路陣地の上空を突破して、眠りに落ちている巴里の襲撃を敢行

した。これは膠着状態の戦局を刺戟した一つの大きなセンセーションだつた。

夕靄が忍び足で滑り込んできた。既にこの戦線に忍び込んでいた媚態の義勇看護婦マタ・ハリは新しい恋人の寝台に腰かけていた。彼女は男がないと生きてゆけない女だつた。

「なんでもいゝ見たい、盲目になる程不幸なことはないよ。」

「でも、わたしも不幸なのよ。マロフさん。あなたは戦さの傷で盲でしようが、私は恋の傷手で、私の心は何も見えないの」

ロシア軍大佐マロフは、遠い処を見るような所作をした。マタ・ハリの恋愛手帳に始めてみる純情なものであつた。朗らかに晴れた午前、病院の芝生には和やかな陽炎さえ、ちら／＼揺れていた。――

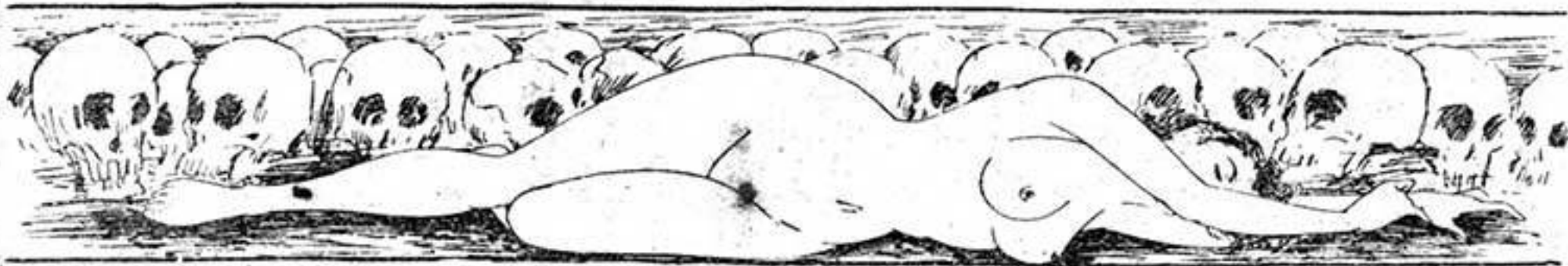
――街路樹のリンデンのとりけるような匂いが流れているのか、淀んでいるのか――「マロフさん、人間は盲になると何も見えなくなるというけれど、私は私の真赤な情熱の胸をあなたに見せるためには、どんな事でも出来るのよ。」

マロフの投げ出した足に彼女は情熱の腕を捲きつかせた――二人の背後にすく／＼と伸びた白楊の木立、前には芳しい花で飾られた灌木があつて――左にはなだらかな芝生の丘陵が裸女の腰線のようになつていつていた。

二人きりの世界が――情熱の花粉で埋められた。魂の底まで陶醉させずにはおかない烈しい情熱の芳香だつた。

だが媚態の看護婦マタ・ハリは誰も看護してくれないエロスの神の負傷者にはなつてしまわなかつた。彼女には恋愛も歡喜のスリル感で充たしはしたが、同時に女間諜としての冒險慾が、彼女の情熱の血をうじ／＼させずにはおかなかつた。一九一四年、大戦勃発と共に、ドイツ情報局はアムステルダムに秘密外交支局を設立した。イギリスも情報秘密間諜の最高首脳部をオランダのロッテルダム





ムに置いた。フランスも特別情報部をオランダに置いた。オランダのみならず、スイスその他の中立国の首都は、皆国際スパイ戦の跳躍の舞台だった。

マタ・ハリは絶えずこの在阿姆斯特ダムのドイツ情報局と通信を往復していた。彼女は恋愛の歓喜に浸っている瞬間も、スパイの眼を八方に注いでいた。看護婦の姿がフランス官憲の注目をそらせた。

併し戦雲に、急速な危機を孕んで膨張していった。そしてスパイは結局使われるものだった。新しい局面が彼女を戦時病院から飛び出させた。

彼女は名におう巴里のフット・ライトの前にあでやかな踊り子姿を現した。彼女の踊りは、エロチシズムとグロテスクの刺戟の混合酒——印度寺院の密房で修行したと称する美しい赤裸の踊りだった。

彼女の出現によつて戦時下のパリはその疲労しきつた官能と末梢神経とを掻き立てられ、生きた蛇のような滑らかな光沢と、弾力に満ち満ちた肢の味いには淫慾のパリジャンの視線が渦を巻いた。

マタ・ハリは夜の吸血鬼だ、肉の香の

蒸れるエロチシズム——彼女は先天性を持つた蠱惑の売笑婦だ！、その魅力と媚態は、フランス武官の骨を溶かす腐触薬のようなものだった。恋の女魔術師は、参謀本部直属の一陸軍大尉の判断力を魔痺させるために、さまでの努力を必要とはしなかった。

マタ・ハリは躊躇することなく、彼女の弾性に富んだ全裸の肉体を捧げた。モンマルトルの奥まつた酒場の一室が酔い痴れた二人の常用逢曳場所だった。

彼女は、或る日電話口から、魅惑な誘いを大尉の耳へ流し込んだ。——大尉は参謀本部の会議室から、そのまゝ真つ直ぐに酒場へやつてきた。

一九一六年夏、ドイツ戦線に活躍していたフランス間諜は、ドイツ軍司令部の手で迅風迅雷的に一網打尽にされて、フランス軍当局は俄然色を失つた。これらの間諜はいわば、フランス陸軍の高級策戦の眼だったのだが——

この秘密漏洩が、マタ・ハリによりこのモンマルトルの酒場のスペツヤル・ルームで行われた事は、一体誰が知っていたらう。

## 讀者通信

投稿歓迎 次号発表

○躍進三月特大号を見て「夫婦生活」と対蹠的な雑誌の存在を知つた。晴雨趣味もよい行き方であるが惨酷なのは胸が悪くなる。エロはよいがグロは困る。芝居でも男の賣物は陰惨である。女でも年寄りや眉落しの乃至美女でないのは困り物である。あく迄若い美しい女でなければいけないのは、変態とか何とかいうより寧ろ一種の煽情法であるからである。好奇の部門が秘密の姿が見たい慾望を満足せしめる一種の狂崇を満たすものでなければいけない此の意味で本文より「讀者通信」が面白かつたのは皮肉である食尿症なども言葉が興ざめである。(尼崎生)

○我々軟派誌の愛好者として、毎号ヒツトを放つてくれる奇譚クラブに要望したい。三月号のアブノーマルグループの特集はよかつた。男娼共同組合なんか微に入り細を穿ち、こんな面白い読物はなかつた。あながち変態のもののみを好むものではない。四月号の小説陣も興味深く読んだ。二俣志津子さんの作品が見えないうが、同じ世代の人間として共感を呼ぶ所が多い。次号あたりから掲載してほしい。壬生すみ子の非処女告白はよく書けているが性愛の描写にもう一つ掘り下げ方が足りない。松井籟子の作品は好きなものの一つである。小説の外 前人未踏の軟派を期待する。(赤木彦一)



# ジャワ戦争をめぐる

## ・哀戀ブンガワン・ソロ

井村幸男

ジョクジャカルタの平地は中部ジャワの南部平地に連なり、プロゴ川とオバク川の支流がこれを貫流、スラカルタはその州の中心にあつてジャワ第一の大河といわれるソロ川によつてうるおされている。

一八二五年——当時ジャワ全土は戦乱流血の時代であつた。そのうちでも特にこのジョックとスラカルタの両土候領内には絶えずオランダ政府に反対する反抗の気がみなぎり、血なまぐさいテロ事件は夜に日に次いで惹起其流れが街に、そして村にたぎり燃えていた。その年の七月、遂にジョクジャカルタに大叛乱がぼつ発した。ジョクジャカルタ州にあつて最も有力な酋長であつたデイボ、ネゴロがスラカルタの同志を併合して、オランダのジョクジャカルタ理事管舎を急襲占領するとともに、オランダ政府に好意をもつていた華僑をはじめ同族を虐殺、一瞬にして深緑した

たる平和郷は血の海と化し、有に二万の叛乱軍はデイボ、ネゴロを陣頭に一挙ジャワの首都バタビヤに押し迫らんとする気配をみせたのである。

酋長デイボ、ネゴロはかねてからヨーロッパの権力を甚しく嫌惡し、厳格な宗教生活によつて原住民間に神の如く敬まわれていた人物だけに、人々は彼を以てオランダを放逐せんとする救世主と考え、両州のほとんどのジャワ人はその旗下に集中、ここに水澄める聖流ソロ川を鮮血に彩つたいわゆるジャワ戦争の序幕が切つて落されたのである。

物語りはこのジャワ戦争のぼつ発する前夜にはじまる——。

× × ×

その夜、バタビヤのオランダ軍司令部ではデイ・コック將軍をはじめ軍の首脳部たちが額を集めて叛乱軍鎮圧の対策を練つていた。

閉めきられた周囲の窓、丸く藤椅子を輪にして、それぞれ腕組みしたまま足下に抵げられてある蘭領東印度大地図に眼を傾注させている。乾期明け前後のむし暑い夜、チリチリと面々の背には下着を通して汗がにじみ出、沈黙のなかにただ、柱時計の時刻む音のみが、せわしく耳をうつ。

しばらくして——

「どうしてもここ一ヶ月は叛乱をさけなければならぬ……」

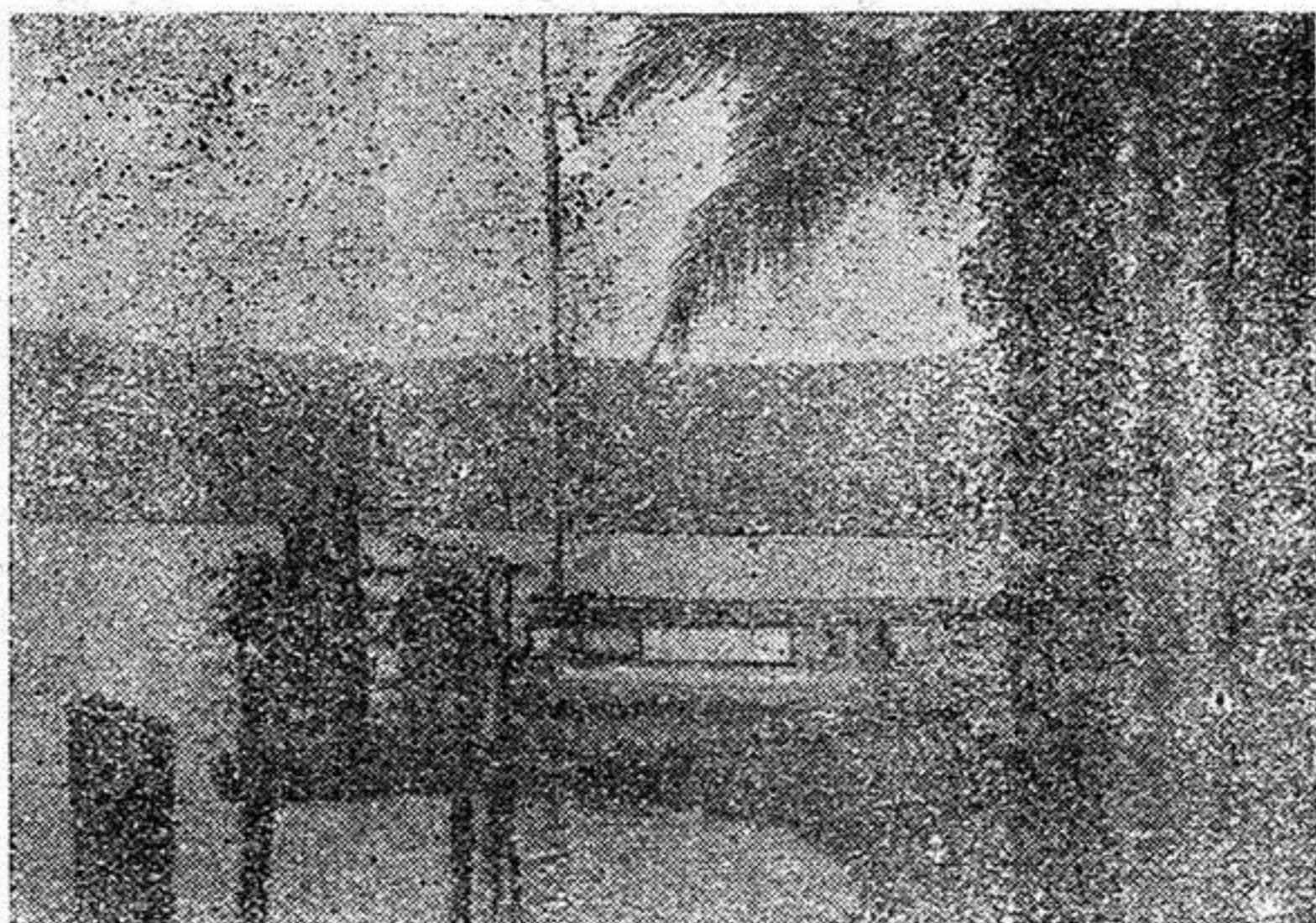
深刻な面持でデイ・コック將軍が思い出したように一同を見渡しつぶやく。

「スミツサール理事官、何とかいい策路はないものか？」

デイ・コック將軍がさらに語を次ぐ。

ジョクジャカルタ理事官であるスミツサールは一瞬地図に見入つていた眼をデイ・コック將軍に向けたが言葉なく再び眼を伏せた。





(ソロ川の流れ)

行きすまたった空気が部屋一ぱいたちこめ、どうしようもない不安と焦そらが明らかに察知される。その頃、叛乱はジャワにとどまらず蘭印全土に及び、オランダ軍の主力はボルネオのパレンバン、セレベスのボネなどへ遠征中で、ジャワに残留する兵力はわずか二千に

も足らず、遠征軍の帰還するまでは如何にしても叛乱を阻止せねばならぬ苦境に置かれていたのである。

情報によれば、今日明日にもデイボ、ネゴロはこのバタビヤを攻撃するかも知れない気運をみせているとのことだ、このまゝではウィリヤム作戦参謀の悲痛な表情——夜もだいいぶふけているらしい。時折鳴く「トッケイ」の声が遠く近く、死んだように鎮まり返ったバタビヤの星の夜空に長く尾を引いてとよめく。

耐えきれない無気味なまでに押し迫ったふん囲気にいたたまれず席を立つたスミツサルは窓を細目に開き、じつと夜露にうるんだ街々のうす暗い灯をみつめていた。ここ二、三ヶ月前までひかり渦巻き、ジャズに浮かれていた歓楽街も今は昔、華僑の店々も早く戸をたてて、夜のおとずれとともに、文字通り猫の子一匹姿をみせない死の街——。

「將軍！」

突然スミツサルはふりかえると、おもむろに席に戻つて静かに手にしていたヘルメットをかむつた。

「私はこれからジョクジャカルタに戻ります

デイボ、ネゴロはこの私にまかせて下さい、命にかけてバタビヤへの攻撃を喰い止めましよう……」

「どういう方法で？」

一同の眼がスミツサルに集中する。

「それは聞かれないで下さい、いずれは解ることですが、誓つて任務は果しましょう」

「しかし、それでは困る、このような重大問題を若い君一人の考えでやることは無謀だ、若しそんな大言を放つていて失敗したらどうする、責任はわれわれにかかってくることは必定だ、殊に將軍を前にして如何なる処置に出るのか明らかにしないというようなことは許されん行為だ」

「作戦参謀、まあそう角をたてるな、とにかくスミツサル理事官の申出は一応入れ、まあさう、そして、バタビヤに居るわれわれはわれわれで遠征軍を一日も早く帰還するよう本国とも連絡をとり促進するより他はない」

ウィリヤム作戦参謀の言分も、もつともではあつたが、スミツサルの真剣な眼差しに、死を決意した強固な責任感を見てとつたデイクック將軍は、参謀の言及を制して、彼の申出を入れたのであつた。



單身、ソロ川をさかのぼつてスミツサールがジョクジャカルタに戻つたのはその翌朝であつた。ランサツプの白い花の咲くころ、ジョクジャカルタの町々は、夜明け近く降りはじめた南国にはめずらしい小ぬか雨に包まれ煙つていた。

「あッ、ミスタ・スミツサール、やはりあなたは帰つてくれたのね、うれしいわ、ちえ抱いて、もつと強く抱いて……」

理事官舎に着くといきなりユミが飛びついてきた。

「帰つてきた。帰らずにはおられなかつた……」

頬すり合う二人、わなわなと歡喜にうちふるえる胸の動き、長い口づけが続く――。

ユミは洋妾であつた、長崎から広東、福建を経て、シンガポールからジャワに流れてきたのは一八二二年、ちょうどスミツサールが理事官として本国からこのジョクジャカルタに赴任してきた年であつた。まだ独身で若かつたスミツサールは着任した当初毎夜のようにソロ川辺にたたずんで郷里の父母を偲んでいたが、ドリアン薫る四月のある黄昏れ、ソロ川の堤のとあるランサツプの木の下で一人の女が、息も絶え絶えに苦しみもがいている

のを発見、早速理事官舎に運び手当した。幸い軽い胃けいれんであつたので何のこともなかつたが、しばしベットに横たわり寝りおちていた女の顔にスミツサールは、郷愁にも似たえもいえないなつかしさをおぼえた。

スミツサールは幼少の頃、父が長崎出島の領事館に務めていた関係で十年ばかり、日本で暮らしていたことがある。だから女の顔に幼い時代の記憶がよみがえつたのも当然であるが、持つてうまれたあどけなさ、夜をひさぐ女にしてはあまり美しいこの女に、スミツサールはいつかしめつけられるように心ひかれていつた。その女がユミであつた。ユミもまた捨てられては拾われ幾變転、野良犬のようにさまよい歩いてきた真暗な過去から、スミツサールによつて、はじめて男への真の愛情を感じ光を求め得たのであつた。

以来二人は永久に変らぬソロの流れのように深い愛情によつて結ばれてきた。しかしこの二人も遂に別れねばならなくなつた。大叛乱ののろしが蘭印全土にまたがり、ジョクジャカルタ両地域にも火の手があがろうとしてきたのである。かくて――スミツサールがバタビヤ軍司令部から即時徹退命令をうけたのは昨日のことであつた。

愛別離苦――心から愛し合うものの別れは死よりもまして苦しい。ユミをつれてとも決意したが非常事態に直面している重大時、女を伴う事は許されなかつた。――二人は泣きの涙で別れたのであつた。しかしスミツサールは再び帰つてきた。

「ユミ死んでくれるか？ 僕と……」

「死んだつて、もう離さない……」

ユミはコックリと大きくうなづく。昨夜一すいもしないのか眼が充血している。

「僕だつてもう君は一生はなさないが……、

ユミ僕にはたつた一つ果さなければならぬ任務があるんだ。ジョクジャカルタの責任者として……」

「それはどんな？……」

「君にだけはいつておくが、デイボ、ネゴロが今日にもこの官舎を襲い、バタビヤへ総攻撃しようとする動きをみせているんだ、僕の任務は、たとえこの命にかえても彼等のバタビヤへの攻撃を阻止することなんだ、方法はたつた一つデイボ、ネゴロを殺すことだ、彼さえ葬れば叛乱軍は支柱を失い、そう早急にはバタビヤを攻撃しないと確信するのだ」

「いや、いやつたら、そんなことをして若しあなたが捕まり反対に殺されたら……私はど



うなるの一人にしないで、お願い……」

「無理いつてくれるな、日暮れ僕はデイボ、ネゴロの本拠を襲う、君はブリツヂ、スラカルタのたもとに舟がつないであるから、それに乗つて待つのだ、なあに、可愛い君が待つているんだ捕まつてどうしよう、運よくバタビヤへ帰れたら結婚するんだ」

心配するユミの肩をいたわるように軽くたたいてスミツサールは強いて笑顔をみせるのだつた。

いつ理事官舎は襲撃せられるかわからないので二人はそのまま裏門から官舎の東側に続く椰子林にひそみ、抱き合つたまま黄昏れを待った。

やがて——夕闇に包まれるころ、その椰子林から二つの影が一つは東へ、一つは西へと別れ別れとなり、いつかたちこめた闇の中にかき消されていった……。

小ぬか雨は夜にふりつぎ一こう止みそうもない空には星一つ見えず、うるしをとかしたような真の闇夜だ。

そのころジョクジャカルタの西部シラロンの広場に、予期していた通り、デイボ、ネゴロの主力が集結、叛乱を回教僧キヤヒ、モデヨの勧告によつて回教の聖戦と名づけ今にも

バタビヤへ押し迫らんとしていた。そしてデイボ、ネゴロ軍の総指揮者セン

セツトの率いる約五千名の第一軍はすでに理事官舎を襲い三色旗を焼きはらい歓声をあげていた。

ところが、突然、その歓声が水を打つたようにビタリととまった。

殺されている——ついさつきまで一同と共に気焰をあげていたデイボ、ネゴロが広場東端に仮設された六角便所附近で鋭利なクリスで心臓をグサリ、

と抉られ、紅に染まつてこと切れているのだ整列していた約二万の人の波が急に崩れるそしてこれと前後して今まで降つていた小雨が急に雷音をともない石をもうがつか豪雨になった。

「スコールだ!!」

「雷が落ちるぞ!!」

たちまち統制は乱れ、広場は一瞬にして人影を絶つた、あとにはまだ雨にうたれて消えたダマールの黒煙がただよっているのみであった。

× × ×

ソロ川はこの豪雨のためにたちまちココア色の濁流と化し、渦に狂いたけつていた。そ



の荒波を縫つて一隻のくり抜き舟が木の葉のやうにのまれてゆく、舟べりにしがみつく女の白い手。怖ろしさに寄せる肩をやわらかくかき抱く男の手、雨があふれる二人の涙を洗い、舟は一気にうち流されてゆく——。

翌朝、雨あとの下流ブンガワン、通称わにの瀬といわれる白砂の上に相抱いた男女がうちあげられていた。スミツサールとユミである。

こうして約一ヶ月後、叛乱軍はデイボ、ネゴロにかわりセンセツトが旗頭となつてバタビヤに攻め入つたが、その時はすでにオランダの主力は各地から帰還、一兵の犠牲も出さずにこれを撃退し得たのである。



再び南国は平和にかえつた。ジョクジャカルタの町々にもランサツプの白い花が毎年咲いては散つていつた。そして人々の頭からスミツサールのこともまたユミのこともいつか消え薄らいでいつた。

しかし——誰がものしたのか、二人をいたむ身を切るような「ブンガワン・ソロ」の哀調はまたたくうちに全インドネシアを風びし誰しらぬものもなくなつた。

ブンガワンソロ

今宵ひとり

川のはとりを

さまよい行けば

ブンガワン・ソロ

鳴るかび

幸多き日を

胸にささやく

椰子の樹蔭に

誓いし言の葉

かわせし指輪

くちづけも

ブンガワンソロ

いまは遙か  
空しく消えし  
流れ星

これはジョクジャカルタ、スラカルタ地方で唄われているブンガワンソロを直訳したものであるが、今もなお夜のおとずれとともにソロ川畔にはスミツサールとユミの悲恋を秘めて、むせびなくようなこのメロディがいつまでも奏でられていることであらう。

(了)

## 女体哨戒線突破

浪速三郎

民国十三年の秋——

時の軍閥呉佩孚將軍が山海関へ兵をすゝめて、張作霖將軍と相對峙していた頃である。

直隸軍第三方面軍として熱河方面に於て奉天軍と戦いを交えていた管の馮玉祥將軍の兵隊が突如として時の首都北京へ押し寄せてきて、大總統以下をしばらく上げ味方であるべき

呉佩孚にガゼン反旗をひるがえしてクウデタ1をやつてしまつた。

北京市内は勿論馮軍の戒嚴令下にある。クウデターの朝、町の通行人は何人たるを問わず嚴重なる訊問を受け、所によつては武力によつて通行を禁止された。殊に正陽門は北京へ入る大玄関とあつて警戒頗る嚴重を極め

怪しきやつは鼠一匹だつて通さんぞ、と歩哨が頭張つていたのである。

そこへ折悪く通りかゝつた外国婦人、忽ち歩哨につかまつてしまつた。

——何処へゆく？

——前門外へ！

——なんのために？

——夫に会うために

訊問しているうちに、いかめしく緊張していた歩哨の顔がだん／＼くずれて来た。フェルト帽子からはみ出した亜麻色の毛、白晝の顔の下から、オド／＼と見上げる灰色の眼、だが、相手は外国人だ、平常、列強のイムペ



リアリズムの横車に手をやいている支那軍人とて、うっかりふざけようものなら、どえらい目にありということをよく知りぬいている——お前は何國人か？

——俄國人（ロシア人）

ふウン！ 兵士の眼は妖しく輝やいた。ロシア人！ 今頃こんな所を通るロシア人——見れば汚ない洋服を着ている。ノンストッキングの脚は見栄や流行からではなく、真実靴下も買えないまじしい白系露人の脚だ。

——夫は何國人か？

——……。

女は黙して答えない。歩哨は重ねて詰問したが彼女はただうつむいていただけだった。

——だめだ。こゝを通つちやいかん

暫くしてから歩哨はおごそかに命令した。

——あら、どうして？ そんなこと云わないで通して下さいよう、よう。

灰色の眼をもつ彼女は、とても達者な北京語で歩哨に嘆願した。エロチックな身振りで男をとろかすウイंकで全身の媚で歩哨の心を酔わせようと手管を弄しはじめた。

——だから聞いてるじやないか、お前の夫は何國人か？ 歩哨はニヤニヤしながら彼女の手を握つた。

——じや言うわ。私の夫は中国人なの、でももうお爺さんなのよ。

——なに、中国人？ そりか、そうなら俺だつて中国人だ。どうだ、仲よくしようじやないか。

と、所もあろうに白鳳の往来でエロ歩哨がふざけかゝろうとしたとたん、後から

儼傲甚磨哪

とドラ声が二人の耳を打つた。見ると馬に乗つた将校が、剣をすらりと引きぬいて二人を睨みつけているではないか——歩哨はすっかり縮み上つてしまった。今にもあのサーベルで首を斬られて四ツ辻に曝されるのではないか。……と、オドオドしている歩哨に将校の命令がひびいた。

——お前はこの外国婦人を連れて俺について来い。

歩哨はやがて来るべき最悪の運命の予感にブル／＼とふるえながら、そのロシア婦人を伴つて将校の後をくつついて歩いて行つた。将校はずん／＼馬を進めて門の傍の城壁の後ろまで来て馬を降りると、歩哨に向つて、

——お前は、これから帰つて、警戒線に立つてろ！

と命令したまゝ、彼は彼女の手をひいて城

壁へ上る石段を上つていつた。……

それから？……

さア、とにかく北京の城壁の上は、東京の隅田公園位の広さがあつて、アカシヤの並木があつて、ベンチがあるんだから……このお誂えむきの密会場所で、その将校が、いかに羽化登仙の楽しみを味つたか位のことはさして触覚的の神経を動員させなくとも想像はつく。

外国婦人はその日の午後、躊々とした足どりで、やつと始めて城壁外への通行を許されたのであつた。

ちなみに彼女はお多分に洩れない某伯爵夫人と名乗るスラブ系のプロテステウトであつて、その日丁度、正陽門外に店を持つバートルンの許へ通う途中であつたという。女人の髪は九牛をも繋ぐ——と云われるが、女体の魅力は軍隊の警戒線をも易々と突破することが出来るということを実証したのだ。

（終）

×

×

×

×

×

×



# ★南方特殊慰安施設こぼれ話★

三 嶋 章 太

## 一、純情娘の訴え

南方の或る街に日本軍の一小部隊が警備隊として定駐することになった。早速兵站旅館の裏の珈琲店の二階を改造して、三人の娘を慰安婦として雇い入れ、特殊慰安所の看板をあげた。

ミシ、シテという十六と十五になるダイヤ族の姉妹とテマという十七になる馬來人の娘である。十二、三になると結婚適齢期になる南方の女であるから、十五六といえは日本の二十三四歳の年齢に当るのである。一部屋を貰つて嬉々として戯れあつてゐるのだ。

それから一週間目、私は検診の医官に通訳のためにつき添つてその慰安所を訪れた。私とその階段を上り切るか切らないうちに、忽ち三人の女にとり纏られてしまつた。

「テイダ・タハン（身体がもたない）」

というのである。まだ一週間も経たないうちに此れは大変だと会計の支那人の老婆にきいてみると、一日に客は一人当三人位だというのだ。一日三人位で我儘を言つて貰つては困るとなだめてみると、彼女達が身体がもたないと告白した原因は来る客来る客全部に情をふりまいて万全のサービスをしなくてはいけないと思つていたらしいのだ。

ロパンを借すだけでいゝのだと説明してやると、それなら五人でも六人でも辛抱出来ると大笑いしたことがある。彼女たちはそれ程純情であつた。

## 二、日本種を妊んだ娘

それから間もなく通過部隊も増えてきたので、郊外の家を一軒借りて女の子も一躍十名に増やして銀星という慰安所を作つた。

その時、カンボンから連れてきた色の白い

可憐な顔立ちの十四になるダイヤ族の娘があつたが、四月位してその娘の腹部が次第に膨れ上つてきた。医官に見せると完全に妊娠だというのである。日本人の種だとはわかつてゐるが、毎日多数の客に接してゐるので相手は誰であるか勿論わからない。

「墮胎しなければならぬ」とその噂が日本人間に大きくなつて当局者が慌てゝいる中に彼女は忽然と慰安所から姿を消してしまつた。同じ村から来ている娘に見舞品を持たして訪ねさせて帰つてきての報告によると、日本人の子供を妊んで帰つた娘は、まるで凱旋將軍でも迎えるような村中の大歓迎で、婿になりてが多くて困つてゐるとの事であつた。

丈夫でよく働くというので生れたばかりの支那人の赤坊を大金を出して買つてきて、自分の子供として育てる彼等の事であるから、当時南方を席捲のして神ように崇つていた日



本人の種であるから、神様の授け物のように思つたのも無理はない。

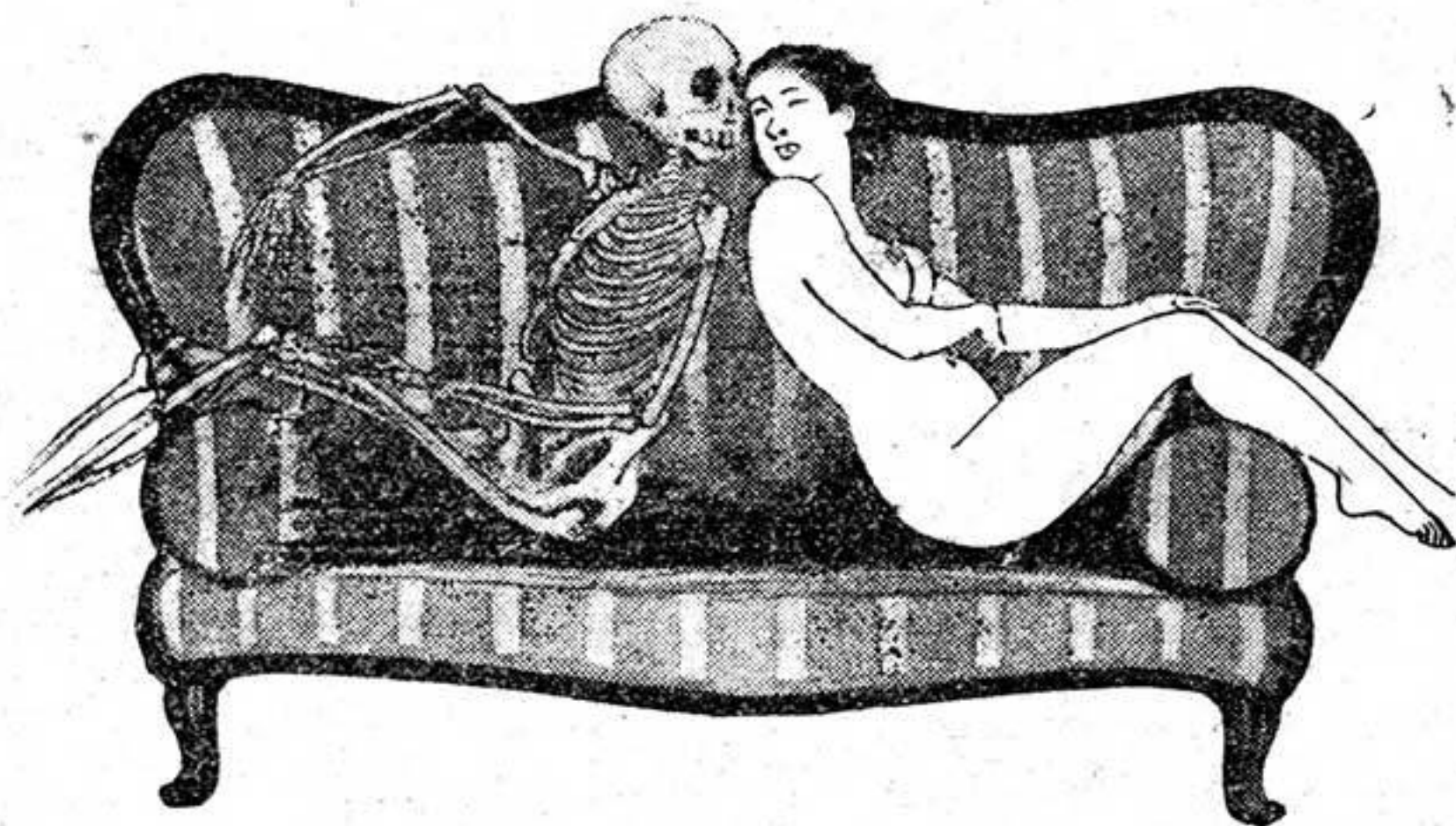
その娘はそのまゝもう帰つて来なかつた。

### 三、功一級の慰安婦

一週間に一回の検診によつて、不合格になつた慰安婦は赤札によつて休業し、毎日治療のために病院へ通わせなければならぬ。これが限られた慰安婦なので、三人も四人も赤札が出た日に、船が着いたりすると大変なことになる。従つて休業か就業かは、いつも頭痛の種になつた。

この中に最初三人から出発した時から、ずっと勤めているミシという女だけは、只の一回も病氣をしたことがないので、私達の間では功一級の慰安婦と呼ばれていた。稼働日数は他の如何なる娘よりも多く、しかもいつも検診に立ち会う私であるから判ることであるが、彼女は如何に多くの客に接しても、肉体的にいさゝかもくずれを見せないのである。

この点、彼女が絶対に病氣にかゝらない点と共に未だに不思議に思つている所である。彼女は、日本軍がジャングルの中へ敗退するまでずっとその慰安所にいた。



### 四、病菌の傳播者

第一線からの転進者がこの街に乱入してから、需要は加速度的に増したが、慰安婦は減る一方であつた。やむを得ず警察の手で街娼

をキャッチして、検診の上慰安所へ送つたが全部性病の罹病者であり、中には治療するにも手の施しようのない潰瘍を起している者も少くなかつた。

そんな頃、一人の姑娘が手を廻してあつた支那人の老婆に伴れてきた。堂々たる体格で上背もありそれに色白にぽつてりと肥つてゐるのはとても魅力的であつた。顔も勿論悪くない。これは上玉だといふので、本人にきいてみると承知だといふ。

早速検診台に上げてみると、やはり頸管部及び腔壁の一部から膿汁が多量に出てくる。素人眼にも子宮頸管淋であることがわかつたが、とにかく一室を与えて治療を施すことにし、特に会報にも出して、この女に近ずかないよう嚴重に警戒した。

それから暫くして病院を訪れる性病者が夥しいので、不思議に思つて調べると、根元は皆この中国娘にあつた。入口には貼紙の但書をし女には中から鍵をかけておく様命じていたが、女に飢えた兵士達にやられてこんな事で効き目がある、しかも相手は上玉の美人ときてゐるので、勿体ない勿体ないとばかり塀をのり越え窓をこじ開けて、遂にかくなる次第となつたといふわけである。



早速彼女をその部屋から開放して、病院へ通りように処置したが空襲の激化と共に田舎へ疎開してしまつて、日本軍に対する病菌の伝播者としての役目だけが彼女によつてもたらされたものであつた。

## 五、再生サツク異聞

度重なる連合軍の潜水艦攻撃によつて、俄然内地からの輸送物資が途絶えてしまつた。その中にゴム製品もあつた。野戦倉庫のストックが絶える頃には皆慌て出した。今迄何んでもなしに扱つていたものが急に貴重品となり、抜目のない華僑の間では日本人の横流し品が高価に取引されるようになった。

名案はないものかと鳩首協議の結果、今迄慰安所の周囲に捨てられたものを拾つてきて再生するという事に決定した。

早速、附近の叢を探索して拾ひ集めた百数十個の該製品を過マンガン酸加里の1%液で消毒の上陰干して椰子粉の化粧によつて立派に更生した。

兵隊達はこの再生ものの使用を嫌がつたけれど、自分で新品を所持しない限りは病院にも慰安所にもストック品は絶えてきていた。港の埠頭に着いた荷物を検査する際くすねてき

たものが大分憲兵隊に保管されていたが、この様な状況になつてみれば、彼等もそれをむざ／＼と離したがるのは勿論であつた。その頃、慰安所のオヤジはサツクの再生に追われていたし、検診の為に訪れた私達の眼に、そのダラリと伸び切つた陰干し醜態をいやでも映じさせられたものである。

## 六、移動娼婦の群

船という船がシラミ潰しにやられ、市街が爆撃で炎上すると、連合軍の上陸をおびえ乍ら、日本軍はジャングルの中に遁入して空襲を避けねばならなかつた。

慰安婦たちは完全にばら／＼になつて、もう組織的な施設はありようもなかつた。その頃になつてジャングルの各所に屯する日本軍を慕つて娼婦が二人三人と組んで訪れるようになった。日本軍の持つてゐる綿布や、食糧品が目当であつたが、中には日本人のチンタ（恋人）のために危険を冒して食糧を運んだり情報を提供する女もあつた。

派手なサロンで日本の流行歌を唱い乍ら彼女たちの群が通りかゝると、陰惨なジャングル生活の日本兵士達の面上に、生々とした明るい表情が燃え上つた。部隊が次第に奥へ奥

へと追われていつても、彼女たちだけは最後迄離れず日本人につき従つてきたようであつた。只経済的な問題ばかりではなし、肉体と肉体との繋りにおいて、緊密感があつたのではないかと今でも私は思う。

## 七、敗者に恵む愛

日本の全面的な無条件降服により奥地に潜んでいた日本人は続々と収容所へ送られてきた。輕蔑と憎惡の籠つた現地民の眼の中で、石を投げられ、唾をかけられて、炎天下でパンツ一枚の裸で使役に出る日本人の姿は敗れたとはいへ哀れなものであつた。

そんな時鉄条網にはりめぐらされた収容所へ日本人の名前を言つて訪ねてくる一見してそれとわかる現地人の女があつた。日本人は敗れてみて始めて女の愛の深さを知つたのであつた。

只物資や金目当の女たちは、その頃日本人を白人に乗り換えてジャズ音楽の洩れるラブ・ロードの森の奥に瀟洒なバンガロー風の別荘があつて、嘗ての日本軍にしたように新来の占領軍である白人に媚をふりまいていた。日本兵の使役がその附近に來ると、彼女たちはチヨコレートやキャメルを授け与えて流



妖

艶

の

舞

姫

暢な日本語で「愛国の花」や「愛馬行進曲」を唄った。その唄声は敗惨の日本兵に対して激しい屈辱と過去の生活に対する反省を呼び起させた。

飛行場建設の土木工事に駆り出された日本人は炎々と陽炎の燃える中に蟻のように働いていた。ジープが砂煙を挙げて走った。運転

台の横には戦前白人の妾で、日本軍の進駐以来捕虜収容所の通訳をしていて、今では白人将校の秘書の名目で走り廻っている日本人の女が寄り添っていた。

空腹と疲労と絶望とにさいなまれていた日本軍の兵士たちは、性慾よりも食慾の方により以上激しい執著を覚えていた。そして嘗て

の女から一切のパンを恵まれ、一本の煙草を恵んで貰う為に泣き笑い唄い踊ったりした。

日本から飛来した航空兵たちが、日本ゲイシャガールの味を捕虜の日本人に自慢し、東亜の盟主であつた筈の日本人の鼻をへし折つた。彼等が復員して上陸した元海軍工廠のあつた埠頭では、日本娘が白人兵に戯れていた

て見える両方の瞳は、却つて欲情に濡れているように見えた。

「フフ……」

上と下と、間近い空間を隔て、

視線が絡み合つた時、彼女は押し殺したような嬌笑をこらえて見せた。

「何がおかしい——。」

「いゝえ、——たゞ、せつかな方。それでしよろ。」

人差指で元帥の二重顎をつゝく

と、

「なにを、おまえの方が、いつも気をもませ過ぎる」

「あんなこと——」

それからマタハリはグラスに注

巴里郊外——。

深く幌を降した自動車が深夜の道を或る瀟洒なホテルの前に着いた。車から降りたのは酩酊したフランス陸軍大臣メシミー元帥と、海綿体のように吸い付いている濃艶な踊り子マタハリだつた。

メシミー元帥は、奥まつた寢室へ入ると直ぐ巨大な体軀をベッドの上へ転した。マタハリはベッドの端にだらしなく滑らかな肉体をくねらせながら、濡れたような眼

で斜めに元帥を見下した。

やにわに元帥は腕を伸して、マタハリの首筋を抱え込んだ。その力に引きずられて、マタハリの伸びた両足は宙にはね上つて、上半身は水平に元帥のぶ厚い胸の上に重なつた。

だが、その瞬間、巧みな手首の捌きで、彼女は扇子で素早く唇の前に障壁を作つた。しかし、彼女の眼の表情は拒んでいなかった。——妖し気なみず／＼しさに輝い

いだワインをさも旨そうに飲み干した。

その夜のダーク・チェンジがどんな結果を惹起したか——。誰が知ろう。だが、その翌くる日、地中海上のアメリカ兵やイギリスの弾薬を満載した連合軍の商船が、その船名、航路、時刻等軍事上最上の秘密として厳秘されていたにも拘らず、忽然として現れたドイツの潜水艦に襲撃されて、瞬時の裡に海中深く消え去つた事件を、その前夜、パリ郊外のホテルの一室で行われた情慾の密事に結びつけて、そこに因果関係を認め得たものが果してあつただらうか。



戦争は人間の理性を泥土の中へ埋めてしまふ魔術師である

## 二人の兵士 渡辺 榮一

これは実話である。白雪の山野を血に染めて今尙、朝鮮に於ては日夜激しい戦いが展開されているのを思うにつけても、私は終戦時に於ける朝鮮でのこの一挿話を忘れることが出来ない。

戦争、敗戦、絶望、そこには此の兵士のような刹那主義的な人間も現れてくるであろうし、又此の鮮女のような痛ましい犠牲者も出てくるであろう。これこそ戦争が人類に課した恐ろしい罪悪であり、人間からすべての人間性を奪つてしまふ狂的な行為である。

此の三人も又哀れな戦争犠牲者であるといふことが出来る。

### (一)

海行かば水づく屍、大君の辺にこそ死なめかえりみはせじ——

あの哀調切々たる歌を全員斉唱して玉砕を誓つた羅津での一夜が思い出される。

「何故あの時、日本人らしく一思いに死ねなかつたのであろうか、こんな所で落伍してのたれ死んだら……。もうこうなれば何んとか頑張つて茂山迄行けば、茂山迄」

山田は口の中でつぶやきながら、今にも大地にめり込んでゆきそふな身体を引きずつて戦友に遅れまいとついて行つた。八月とはいへ北鮮の夜気はひし／＼と身にしみる。下腹がじいつと痛くなつた。時計は八時を過ぎていた。夜営をしてもいゝ時間だ、寝ておかないと明日の行軍が思いやられる。林の中にちら／＼する民家の灯が懐しく眼にしみる。

「山田、民家に行つて飯を炊いて貰おうか少し米をやれば炊いてくれるだろう」  
戦友の谷本が枝木を集める手を止めて話し

かけた。

「うん、これから炊くと小一時間もかゝるねあの民家に行つて頼んでみよう」

二人は右手の林の中に見える灯の方へ歩き出した。

山田達は羅津の通信隊に七月の末、満州の鞍山から転属してきたのだつたが、半月経つや経たずの八月十四日にソ連軍の上陸にあい玉砕を誓つたのもほんの一瞬、その夜から南へ南へと退却が始まつたのである。

南へ、南へ、一里でも半里でも、一時間で半時間でも早く退くことが生命の安全に近づくことであつた。兵隊の列、避難民の群が遠く尾をひいて蜿蜒と続く、昨日まで駐屯していた町の兵舎は炎々と黒い煙を上げて燃えている。すべてが灰塵と帰してしまふのだ。只今残つているこの五尺の身体さえ、いつ何時





消え去つてゆくかわからないのだ。  
血と泥と汗と油に塗れた血腥い兵士が後から追いついてきた。

「どうだった？」

「駄目だ、とてもお話にならんよ。全滅だも  
う直ぐ追いつくぞ！」

血のにじんだ腕を吊つた兵隊が吐き出すよ  
うに言う。歩いている山田達を轢き倒しそ  
うに言う。乗用車、トラックが走る。その度に蒙々た  
る砂塵が列を包んでしまふ。落伍者が続々と  
出て夥しい数のボロ切れのように疲れ果てた

ら南へ南へと下つて行つた。これが偽らぬ人  
間の姿であつた。

## (二)

そつと戸の節穴から中をのぞくと、夫婦者  
らしい若い男女と親爺らしい六十年輩の男が  
食事をしている最中であつた。

「今晚は、今晚は——」

トントントンと先ず谷本が戸を叩くや、家  
の中の三人はハッと戸の方へ眼を注いだ。

「一寸、開けてくれ、日本軍だ」

人間が道傍にうず  
くまつた。

「連れていつてく  
れ、助けてくれ」  
足にまとわりつ  
いて口々に泣き喚  
くが、それらの落  
伍者をかまつてや  
る余猶のある者は  
一人もいなかつた  
まとわりつく手を  
足を無慈悲に蹴と  
ばして、倒れた人  
間の上を跨ぎなが

中の三人はビクツとしたようにお互いに無  
言のまゝで顔を見合したが、誰も直ぐ立つて  
ゆこうとはしなかつた。

「おい、飯を炊いて貰うんだ。開けてくれ」  
やがて恐る／＼若者が戸の門をはずすと、  
「どうぞ」と眼で合図をした。米を五合ばか  
り袋のまゝ渡して、炊いて貰つた飯に牛肉の  
罐詰を開け、それに朝鮮漬を貰い、腹一杯食  
つた上にマツカリを一杯御馳走になり、一週  
間ぶりに人間らしくなつた二人は上気嫌にな  
つて闇の外へ出た。久しぶり腹に入つた酒精  
が山田と谷本の話題に自然に今見た鮮人の若  
妻の上に馳せられた。

「こんな山奥に勿体ない美人だつたナ」

「うん、俺はびつくりしたよ。朝鮮人にも美  
人はいるんだなア——と」

山田も相槌を打つた。

「京城の妓生なんかに、あんな別嬪は少い  
あの若者には實際勿体ないよ」

「だが考えて見れば可哀想なものだな、こん  
な山奥で何の楽しみもなしに、夫と舅につか  
え畑仕事に追われ一生が終つてしまふんだ」  
「あゝ腹はふくれたし、マツカリはいゝ具合  
に廻つてきた。これであの女を一晚抱いて寝  
られたら、もう思い残すことはないんだが」



「とんだ夢だな、ハハ……」

「だが朝鮮の女はネ、結婚前は非常に身持ちはいゝが、結婚してしまふと案外ルーズなんだ。あの女が飯盒を渡してくれた時、俺はちよつと手を握つたが赤くなつてうつむいていたけど確かに脈があつたヨ」

「自惚れもいゝ加減にしろ、明日から又炎天下の行軍だぞ——」

「歩け歩けか、いやになるナ」

### (三)

あの日から三日歩き続けてやつと茂山に着いた。その夜一足違いにソ連軍が入つてきた北辺鎮護の関東軍の精鋭と豪語していた山田達ではあつたが忽ちのうちに俘虜の身に置きかえられてしまつた。

武装解除が終るや行軍で失つた人員を編成し直して、次の朝当てのない俘虜の行軍が始まつた。一昨日通つた道を又逆に富寧へと引返すのだ。それから何処へ連れてゆかれるのか部隊長にもわからない。羅津から携行してきた食糧は一粒もなくなつたが、ソ連軍は何にも支給しようとはしない。一体俺達をこのまゝ餓死さすつもりだらうか——。

いつしか兵隊達はソ連兵の目をかすめて道

端の林檎を盗んで嚙る。それが次第にひどくなつてゆくが監視のソ連兵は見えて見ぬふりをしてゐる。やがて「休憩」の号令がかゝると共に兵隊達はどつと附近の林檎畑めがけて襲いかゝる様になつた。畑の持主の鮮人が喚くのでソ連兵は仕方なくマンドリン(自動小銃)を盲撃ちにバリ／＼と撃つ、運悪く命中する者もあるが、それを恐れていては餓死してしまふ。どうせ死ぬなら腹一杯喰つてと、こゝに浅間しい人間の餓鬼道が展開された。

行軍が日を重ねるに従つて、益々掠奪がひどくなつてゆく、林檎だけで辛抱しきれない者は民家を襲つて、米や朝鮮漬を強奪し、今將に食べようとする食膳の飯を奪ひ、泣き叫ぶ女や子供を蹴飛ばして暴れまわるといった状態であつた。

### (四)

「休憩」の号令はまだ聞えて来ないが、遙か前方の坂を登りかけた兵隊が急にばら／＼と道の両側へ散りかけたのを見るや否や、山田達も路傍に背嚢を投げつけるようにして、右手の林檎畑へ走り出した。こんな元氣がどこに潜んでいたかと思われる程猛烈な勢で林を一本一本裸にしてゆく。

山田も何か穀物でも手に入れようと、林檎畑に囲れた一軒の民家の裏木戸に立つた。その時、家の中から若い女の悲鳴が彼の耳をうった。山田は「何かな?」と不安に思いながらその木戸を押して家の中へ入つた途端、思わす「あッ」と声を出してしまつた。一人の日本兵が朝鮮の女を手籠めにしようとしているのである。その兵は山田の入つてきた物音にふりかへつた。その目と目が合うや、お互いに無言のまゝで激しく視線が宙にからみあつたその男は谷本であつた。

白い裳を谷本に握られたまゝ、真蒼になつて慄えている鮮女は、嘗ての夜、飯を炊いて貰つた美人だと賞めた若妻であつた。

「おい、山田俺の女を横取りに来たのか」

谷本が吐き出す様に言つた。

「俺の女? 馬鹿言え、お前も人間だらう。」

恩を仇で返さすつもりか

「明日の命のわからん俺達だ。刹那の幸福でいゝんだ。俺は死んでもいゝ、こんな苦しい行軍を続ける位ならこの女を抱いて殺されてもいゝ、そんな事を言つて貴様もこの女を狙つて来たんだらう?」

「何を言う、俺は、只食物を探しに来ただけだ」



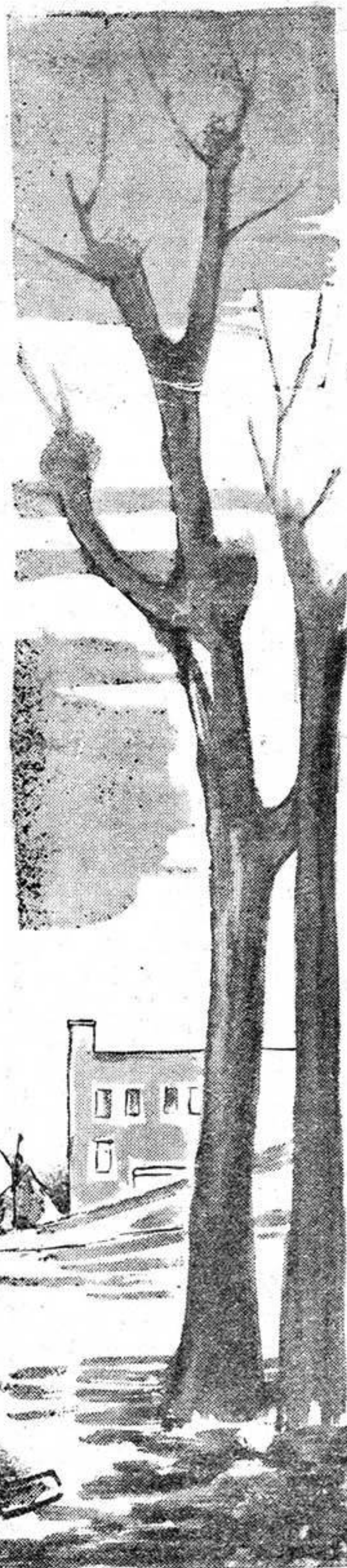




## シベリヤ俘囚記

## テルマ病院の点描

花 本 史 郎



イズブエスコーヤ地区の山奥——こゝらあたりにも、こうした美しい建物があるのかと思わされる程の美しいシベリヤ式の建物が豊富な木材をふんだんに使つて、小高い丘の病院を中心に、四方に拡がっている小さな森の町とでも云いたいテルマの病院に、私は附近の収容所からトラックで運ばれて、半死半生の身をベッドに横たえることになった。

丁度終戦の年で、季節から云えば極寒の年

の暮れも押し詰つた、内地ならもう正月もま近いという十二月の半ば過ぎだつた。

在満生活二十余年、その大部分を満鉄に奉職して、年中全満を歩き廻り、相当北満あたりの極寒にも馴れ、自信のあつた私も、流石シベリヤの寒さには驚いてしまった。

このテルマの地は、大体が「濕地帯」で、病院はその濕地帯を避けた可成り小高い丘の上にあるので、文字通り肌を刺すような寒風に

吹きさらされて、その寒さといつたらなかつた。

なんでもこの病院は、元この地方の学校だつたとか、私が入院する一月前、余り附近の収容所から死亡者が出るので、ソ連側が急にあわてゝ開設したものだそうだが、そう云えば多分に学校臭いところがあつた。

各教室を夫々病室にして、手造りの粗末な寝台が入れてあつたが、それでは何分手狭な



ので、病室によつては丸太や板を組み合わせ、部屋全体を、二段制の寝台となるようにしてある部屋もあつた。

もと／＼病院として建てられたものでないだけに、病院としてはいろんな不自由もあつたであろうが、外観だけは、二階建て白聖の堂々たるものであつた。

当時病院には、附近の収容所から入院した邦人の患者が約五百名近くもいた。その殆んどが栄養失調から来るひどい下痢患者で、中には全く歩行も自由にならぬ患者も相当いたが、その他は凍傷、結核患者で、外に十名足らずの元独逸軍隊の将校と、ソ連側囚人患者が十数名いたようである。そしてこれらの患者は病名によつて、人種の区別なしに同じ部屋に寝かされていた。

病院長は中佐で、ふち無しの眼鏡をかけたなか／＼の好男子であつた。通訳の言によると、コーカサス生れで、スイスの医科大学を出たとか、とても好感の持てる人の好きそうな軍医であつた。

軍医と云えば、元中尉の日本軍医が二名と四名の女軍医がいたが、その中の三名は、地方で開業してゐて召集された女医とか、まだ若い上級中尉で、なか／＼颯爽たるものであ

つた。後一名の女医は女ながらも近い中に少佐に昇進するとか云われていた。可成り年とつた、そして豚のように太つてゐる。とても頑固な短気者で、気のいゝ病院長も持て余す程の、絶対の権利を持つてゐる始末の悪い、この病院の副院長でもあつた。

私達はこの婆あ軍医を「吸出玉」（これについては後述）と陰では悪口してゐたが、面と向つては、それこそ御機嫌を損じないようまるで腫物にでもさわるように努めてゐたものである。

看護婦も無論相当いたが、これは囚人の中から勤務状態の優秀な者だけが厳選されて、こゝに配属されたというだけに、余り美人はいなかつたが、それでも若々しい、明るい、そして朗らかな愛嬌を振りまいて、患者にはなか／＼親切であつた。

この外の各病室には、やはり囚人から選抜されたラポーター（勤務者）が一名宛配属されてゐたが、彼等の仕事と云えば、自分が配属されている病室で、患者の食事のことから衣服のことから、転退出、その他一般にわたつて総べてを委かされながら、その指揮下にある手許の、日本人衛生兵を指図して、たゞぶら／＼していればいゝと云つた、まるで部

屋の牢名主といつた権利を持つてゐた。それというのもこれらのラポーターは、あの「吸出玉」老女軍医の息のかゝつた者ばかりであつたから尙更ら始末が悪かつた。

私は今でもあの部屋付のラポーターと、その虎の威をかつて横暴を極めた日本人衛生兵の恨みを、いまだに忘れることが出来ない。

以上は二階の病室関係についてのものであるが、更に階下には二段制のベッドを並べた病室が三つあり、その他炊事場、食品倉庫、衣服倉庫、軍医室等があり、別に大テントを張つた浴場と、退院の希望者から募つた屋外ラポーターのテントがあつた。

日本人の軍医二名は、浴場の一部を囲つたガラントした濕つぽい大テントの一隅を居室として与えられてゐたが、容赦なく吹きこんで来る寒い風には弱つてゐたようである。基礎、臨床の智識、手腕にかけては、ソ連側の軍医が足許にも寄れない技倆を持ちながら、その待遇たるや、まことに粗末なものであつた。

以上は大体病院のアウトラインに就いて述べただけで、なんの変つてもないが、これから私が五ヶ月間、栄養失調と下痢と、マラリヤで病床に横たわつてゐなければならなかつ



た間に、直接見たり聞いたりした、興味ある点に就いて書いて見たいと思う。

## 入 浴

入浴といつても、湯のたつぷりと溢れている浴槽に、伸びくと浸りながら、浪曲の一つでも唸つて見ようという日本式の入浴ではない。

病院に接続して設けられた大テントの中に、濛々たる湯煙りをあげている大桶が一つあるだけで、後はガラシとした土間である。順番に列ばされて一組五十名、一列になつて入口を這入ると、脱衣と共に小桶を一つ渡される。その小桶を持つて大桶の所へ行くと、一杯の湯をくれる。この一杯で石鹸の泡を立てながら、全身の垢をこすり落すのだが、下手をするとその湯もなくなつてしまふから、あとでもう一杯くれる湯を、余程うまく使わないことには、石鹸で引きつる裸体を持て余すことになつてしまふ。でも五十名が入り乱れて夫々湯桶の湯を使うのだから、テントの中は濛々たる湯煙りで、結構蒸風呂の用を達しつゝ、湯の節約にもなつてゐる訳である。

入浴といえど週一回、どんな高熱を出している患者でも、無理矢理強制的に入浴させず

にはおかぬ。だから重患が風呂場で、ころり／＼死んで行くことなど、珍しいことではなかつた。私達はその非常識にたまりかねて「重患だけは入浴をやめさせて貰いたい」と通訳を通して度々申込んだこともあつたが、彼等は、入浴は清潔であり、清潔は健康である——という立前から、重患が入浴のために死のうが生きようが、全く平然たるものであつた。国民性の然からしめるところとはいへなく私達の常識では判断の出来兼ねるものであつた。

## 剃 毛

これにも驚いた。

入浴が済むと、素つ裸のまま一列に並んで、剃毛を受けるのだ。剃毛といつても生やさしいものではない。腋下はいゝとしても、陰部まで全部やられるのだ。

ドギ／＼するような剃刀を持つた囚人の職人が、まことに鮮やかに次から次へと、剃り上げて行くのだが、どうも危なつかしくて途端

に緊張せざるを得ない。今にも切り落されるのではないかと肝の縮まるような思いだつた。それに都合の悪いことには、剃れば剃るだけあそここの毛が固くなるので、始末が悪かつた。復員は出来ても、当分町の銭湯には行けないぞ、あるべきところがない不具者と見られてはたまらぬからな——といった冗談も、真面目に話し合つたものだつた。

ではなぜそんな極どい所まで剃毛しなければならぬかといへば、虱の繁殖を防いで伝染病の予防をするというのだから面白い。兎に角虱の根絶という点には、私達の想像以上に力を入れていた。



虱退治の  
ひげそり



## 虱検査

毎日一回づつ検査がある。衣服を脱がされて素つ裸のまま、衣服といつても、ロシア式の大きな袖の長いシャツに、道化役者の着るようなブカ／＼の長ズボンだった。そしてそれは毎週一回入浴の度に取換えてくれもし、熱気消毒もしてはくれたが——兎に角一寸でも油断すると、直ぐ虱にたかられるので往生したものだ。消毒のため縫目のあたりに、死んだ卵がギラ／＼と銀色に光るように沢山ついていた。

無論検査には虱一匹いてもいけないし、又卵が——たとえ死んでいても衣服についてはいけない。食事の量を半減するというので、毎日々々検査の前には血眼になつて、虱や卵をさがしたものだ。弱つたことには、消毒のため死んだまま衣服についている卵は、少々揉みほぐしただけでは落ちないので、木切れや硝子の破片などでこすり落したものだ。だが落ちたと思つても、太陽にすかして見ると、まだ銀色に光つているといった具合で、運悪くそうした卵の沢山ついている衣服を貰つたものは、貧乏籤を引いたよりなもので、たまつたものではなかつた。

## 発熱

面白いことには、こゝの病院では、どんな高い発熱が続いても、絶対に水や氷で冷やさぬことだ。私は栄養失調の上、ひどい下痢が続き、おまけにマラリヤに苦しめられて入院したので始終高熱が出て衰弱がひどく、もう駄目だと自分でも覚悟していたが、苦しみま

ぎれに幾度となく、氷で冷

やすことを懇願したにも拘わらず、絶対に許されなかつた。仕方なく私は他の患者がこつそりとやつているように、戦友に頼んで氷を取つて来て貰い、夜分看護婦や衛生兵の眼を盗んで冷やしたこともあつたが、それは飽くまでこつそりやることであつて、若し見つかりでもしよものなら、どんな目にあつていたかも知れない。その証拠にはそれが見つかつて、ただでさえ少い食事を中止されたり、てんで看護の方も等閑にされて、病氣以上の苦しみを味わされた同室の患者を何度も見受けていた。



一体ソ連の医学書には「熱は冷やしてはいけない」ということが書かれているのだから。ついその原因を聞きもらしてしまつた私は今日でも、それが不思議に思われてならない。なにか理由があるには違いなからうが——

熱といえば、こゝの病室では、熱をとるために、熱は悪血のために出るのだから、その悪血を取らなければならないというので、矢鱈に「吸出玉」を使つていた。

## 吸出玉



その方法というのは、今時の若い人は知らないかも知れないが、丁度金魚鉢を小さくして、掌に握られる位の形をしたガラス瓶を、中を真空にしておいて、その口を患部に当てながら強く押すと、患部の肉は引きこまれるようにして、その瓶口に吸いつけられる。これを十分余りもして取除くと、そこだけが真赤になつて来る。つまりこれで患部の悪血がこゝに集まつて他に移動しない。これで熱も痛みも去るといふ、至極簡単な方法である。

兎に角この吸出玉は、あの婆の軍医のお得意で、「吸出玉」と<sup>あだな</sup>緋名のあつた位で、所きらず患者の身体中に、吸出玉をくつつけられたものだつた。

## 女軍医

何処の医学校を出たのか知らないが、お世辞にも信用の出来る軍医だ、とは思えなかつた。いくら日本のへつぽこ軍医でも、まだ気が利いている——とは、私達の偽らぬ言葉でもあつた。だが服装だけはバリツとしたもので、上衣は男の軍服と同じく、階級を示す派手な肩章を光らせていたが、下半身はやはり女らしく、国防色ではあつたが、真新しいスカートを穿き、靴下に皮の半長靴をつけた巨

漢揃いで、体格に於ては彼女等に圧倒される私達であつた。

彼女等は皆病院の附近に住宅を与えられて毎日徒歩で通勤していたが、患者が激増して来るにつれて、大部分が病院で寝泊しているようであつた。

彼女等はいつも朗かで、呑気で開放的であつた。だが開放的の女性とは、ともすれば貞操観念の稀薄を意味するように、彼女等も亦その例外にもれなかつた。

お国の婦人はしとやかで、貞操観念も固いと聞いているが、どうもソ連の婦人はね……と、いつか病院長が苦笑しながら、通訳に語つたそうだが、病院に出入りする将校や入院患者とのスキヤンダルも相当派手なものがあつた。

彼女等はよく会食をやり、ダンスをやる。これには患者で音楽のよく出来る者や通訳が招待されて、病人そつち除けの大騒ぎをやるのだから、たまつたものではない。

院長はこんな時に顔をしていたが、何分にも例の「吸出玉」軍医が、その先頭の真つ先きを切つて年甲斐もなく、踊り狂うのだから、なんとも云えなかつたのだらう。日が経つにつれて、患者中の好男子が引つぱり出さ

れたり、楽器もだん／＼整備され出して、時には病院外からも踊りに来るといつた有様だつた。

## 看護婦

二十人近くもいたようであるが、階下勤務の者はどんな者がいたのかさつぱり判らなかつた。というのは階上の者と階下の者とは厳に往き来を禁じられていたから。

不愉快な病院生活で、どうにか明るい存在として私達を引き立ててくれた者は、彼女等であつたが、あけすつぽでよく患者と問題を起すのも亦彼女等であつた。

おい、今夜見に行こうじゃないか。素敵ない、所が見られるぜ——と収容所のラボーを嫌つて、退院が真近になると、わざと水を飲んだり、氷を食つたりして退院したがない、下痢患の常習犯達から、こうした誘いの言葉をかけられることが度々あつた。

私もいつか病院に馴れて、少々身体が元氣になつて来ると、夜分こつそり廊下の隅や、階段の小暗い所を偵察しては、「うん、やつちよる、やつちよる」で鼻の下を長くしていたものである。

風紀の紊れは、こうした看護婦から下働き



の囚人雑役婦にまで及ぶようになった。

これは後で聞いたことであるが、シベリヤ流刑になつてゐる女子囚人は、妊娠したという確たる医師の証明がありさえすれば、即日罪は許されて天晴白日の身となり、地方人となることが出来る——とか、そして又その生れた子供を、本人が育てる意志がなければ、国家がそれを扶養してくれる——とか。

そんな棚ボタ式の、都合のいい法律があるかどうか、真偽の程は判らないが、兎に角あんな紊れた風紀——女から積極的に乗り出して来るところを見ると、たとえそれが嘘であるにしろ、如何にも尤もらしい噂のように思われるではないか。

## 衛生兵

無論この衛生兵は、元日本軍隊で衛生兵だつた者が入院後、身体がよくなつた者や、特に退院の際申出て衛生兵に採用された者で各室に二名宛配置され、その部屋の患者のみを扱つていた。

これは病室ラポーターの直属で、虎の威をかる彼等は、恐らく捕虜として最上の供与を受けていたにちがいない。食事は自分自ら飯ごうで炊事場まで取りに行き、あり余る食事

は三度々々飢えかつ、えてゐる患者の眼の前でお氣に入りの患者に分け与え、常に己の周囲にスパイを飼つておくことを忘れなかつた。

一体に衛生兵といへば、収容所でも病院でも丸々と肥え太つていたが、これは彼等の役得として如何に豊富な食糧に恵まれていたかを物語るものであらう。遊んでいて、脂っこい、美味しいものを充分食べていれば、ぶく／＼と肥えるのは当り前だが、彼等はなんの反省もなく、それを特権のように心得ていた。どんなに反感を持つてゐる患者も、面と向つてはお世辞の一つも云つて、彼等の御機嫌を取り結ぶことを忘れなかつた。若し一寸でも御機嫌を損じようものなら、直ぐソ連のラポーターに密告され、死にも等しい私刑リンチを加えられるのが常であつた。それでなくてさえ身心共に疲れ果てた病人のことだから、彼等の匙加減一つで、生かすも殺すも自由といつた、生殺与奪の権を持つていた訳だ。彼等の犬となつて日本人同志患者の間で、見るに堪えない私刑を加えられた者もあつたが、犬は犬だけに、三度の食事から日用品まで、たつぷりと与えられてどの病室にも数人飼われていた。

それ程権威のある衛生兵だから、中には、

俺は元〇〇部隊の衛生兵だつた——と詐つて採用されていたのはよかつたが、その中〇〇部隊にいた兵隊が、患者として入院して来たために、すっかり化けの皮をひんむがれてしまつたという笑えないナンセンスもあつた程だつた。

## 囚人ラポーター

このラポーターは前にも述べたように、囚人の中から特に優秀で、後二、三年もすればソ連本国に送還されると云つた者の中から、選ばれた連中で、各部屋毎に一名宛——室によつては二名の所もあつたが——配属されていた。

何様今まで苦しい重労働に、たゞノルマ、ノルマ（能率）と追い使われていただけに、こういう病院で、大した仕事もしないで、一室の患者をあずかる身になつて見ると、急に我儘になるものかどうか、それに例の「吸出玉」軍医の直属にあるだけに、その横暴振りは徹底したものであつた。

働かざる者は食うべからず——と云つた鉄則は、この病院にも適用されて、患者に与えられる食事は、質、量共に貧弱なものであつたが、その食事さえ、このラポーターに睨ら





まれたが最後、衛生兵を通して欠食を命ぜられその量だけは、他のお気に入り患者に廻すといった事を平然とやつていた。

飢しさの余り、寝ても覚めても、ただ食べ物のことしか考えていない患者が、食事時になるとベッドの上に起き直つて、分配してくる食事を待ちあぐんでゐるのに、自分の所だけ飛ばされて、欠食を申渡されるあわれさといつたら、想うだに悲惨の極みだつた。

食事のことと云えば、彼等は珍しい時計、万年筆を手に入れるために炊飯ごう一杯の食

事を何日分というように、新しい入院患者がある、炊事のラポーターと組んで、それを捲き上げる奴がいた。中には一人で時計を十数個も持つていたり、万年筆など二、三十本も持つてゐる奴もあつたが、大抵は地方民に売り飛ばして私腹を肥やし、帰国後は何か商売の資本の足しにするのだという。徹底した強慾な奴もいた。だから食事の時間になると飯ごうをさげたラポーターが、各病室を右往左往してヤミ取引をするので、一時は病院としても禁令が出たようであつたが、そんなこ

とは一向徹底されず、相変わらずあさましい醜状を繰り返してゐた。

やれコルホーズ（国立農場）がどうの、共産主義がどうの——とラゲルで相叩きこまれて来た私達もこゝではその阿呆らしさ加減に、幽霊の正体見たり枯尾花——の観を深くされるばかりだつた。

## 若い燕

退院者の中から希望者を

募つて、それに合格した者が、所謂病院の外ラポーターとして勤務してゐた。

元の収容所に帰つて行くより、同じ使役でも病院の方が楽であり、給与もよかつたので志望者はいつでも募集人員より多く、随つていろんな情実が行われていたようである。

このラポーターの主任は、元日本軍隊の軍曹で、柔道五段だとか、格幅のいゝ美丈夫だつたので、五十幾人のラポーターの指揮をとりながら、病院幹部の受けは非常によかつたというのもあの「吸出玉」軍医婆あゝの非常なお気に入り、入院中から既に彼をラポーターの主任として内定してゐたとか——よく患者は陰では「婆あ」の「ツバメ」だ——と云つてゐたが、或はそうだつたかも知れない。ラポーターは各班に分れて、仕事と云えば便所の汲取、掃除、屋外の清潔と整理整頓、開墾、死体の運搬と埋没といったものが、日課であつたが、この外病院側の要求に応じて炊事とか、浴場とか、又は病院外の使役にも出てゐた。

この屋外ラポーターは前述のよりに、退院者からの希望者が非常に多かつたので勤務状態により遠慮なく入れ換えを盛んにやられたので、どうもこれは危いぞ——となると、故





意に下痢患者となつて、又入院するという手を打つものが相当にあつた。

彼等は病院の内外で、ソ連側の幹部に接するためか、常に耳新しい情報の提供者でもあつた。その大方はダモイ（復員）についてのことであつたが、ひたすらそれを待ち焦れている私達にとつては、たとえ出鱈目なデマであるにしても、そりしたニュースをきくことはなによりも嬉しいことであつた。

## 下痢患

彼等程下痢を怖れる国民もないだろう。その癖、神経痛だとか、脚気だとか痔、蓄膿症などがどんなにひどくても、彼等軍医は一向平気で、てんでに取り上げてはくれない。それを通訳に訴えると、「ソ連の医学書にはそんなものはないそうだ」とのこと、まさかとは思つたが、私の戦友が下痢で入院し、退院間際に膝の神経痛をやられて、歩行にも困難なため、病院で今暫く療養させてくれ、と頼んだが、まるで偽病扱いにされて、叱り飛ばされた上、元の収容所に追い帰されたような事実もあつた。だが下痢に対してはその伝染病を怖れるためか、毎日のように検便して——その検便も便器に取つてやるといつた生やさしいものではなく、明けつ放しの、何一つ囲いもないしかも便器の壺がずらりと幾つも並んで、お互い顔を見合せて話しながら、用を達するといった便所まで、軍医や看護婦が直接やつて来て、その場で一々覗きこみながら検便する

のだから、始めての気の弱い患者などは魂消てしまつて、仲々しやがみ込むことも出来ずい有様だつた。私など相当馴れた心臓者さえその都度恥かしくもあり、気まりも悪くて、常ならポンプの筒口から飛び出すような下痢便も、なんだか尻の穴が塞つたよう、で、往生させられることも度々あつた。

血便になると重患者として、この病院の一号室に収容され、絶食療法にも等しい療法を施されるので、毎晩平均十数名も死んで行く栄養失調者の殆んどは、この一号室の患者であつた。

この病室は、病院中一番広い病室で、常に百人位入室していたが、半分以上は便所にも通えない。垂れ流しの重患が多かつた。私達はこの部屋を「死の病室」と呼んでいた。それ程にこの病室に入れられる者は、死の宣告を受けたようなもので、先ず無事で退院出来るといった者はいなかつた。

第二号室、第三号室も、下痢患の病室ではあつたが、第三号室が最も軽い患者で、こゝで悪くなれば二号室に送られ、こゝで又ひどくなれば一号室に送られるので、二号室の患者とても全く生きた気持はなかつた。私は運よく二号室から三号室へ、そして六号室の発



熱患者部屋に入れられたのであつた。

## 死体運搬

この病院では私達が入院早々には、毎朝二十名近くの死亡者があつたが、その後は段々と少くなつたようであつた。それでも毎朝十名以上の死亡者で、それ以下になることは絶対になかつた。

遺髪や爪を記念に取ることをソ連側は極度にきらつたので、夜分こつそり戦友の髪や爪を切り取るという風にしていたが、始終やられる所持品検査で、大抵見つけられ、没収されるのが普通であつた。

髪や爪を切り取つて持つてゐることは、死亡者の氏名が公然と入院者に判り、復員の際内地で発表されるのを、ソ連側が怖れていたためだ——という噂もあつたが、果してそうだつたかどうか、兎に角そうした後に残る証拠物は何一つとして持たせなかつた。

死体は丸裸にされて——無論着衣は洗濯の上、再度の使用に役立てるために——屋外に転がされる、寒気の厳しいシベリヤのことと外に放り出された死体は、まるで石地藏のようになつてしまふ。すると屋外トラポーターの運転するトラックに、トラポーター達はそ

れをまるで丸太棒でも載せるように積みこんで、町外れの土を掘り起した穴の中に埋めて歸つて来る。無論誰々の墓とかいつた墓標の一本すらも立つことは許されない。無限の怨みをのんで、遠く異国の丘に眠る英霊も、哀れと云わなければならぬ。

こうして死んで行つた者の氏名や、死亡の場所も、ソ連側は一向に発表しないのだからその死を見届けた戦友が、復員して遺家族に伝えないことには、その死亡さえ永久に判らないのだ。

私は思う——戦友の最後を内地の遺家族に伝えてくれと頼まれたその戦友が、運よく生きて還ればよいが、不幸にして彼の地で死亡した場合など、恐らくはその死亡も遺家族には伝わらず、還えらぬ夫を、父を、そして兄を弟を待ちわびている人々の如何に多いことだらうか——と。

## 時計と万年筆

ソ連の兵隊は十人が十人まで、拙い子供だまし見たような刺青<sup>いれずみ</sup>を手首に入れている。それがなんとみんな同じような、時計の刺青だから笑わせる。

ソ連兵といつても、当時シベリヤのこの地

方に来ていた兵隊は、全くお話にならない山猿で、無学文盲、手紙一本満足に書けないと云つた教養のない、人を人とも思わぬ乱暴者が多かつた。医学の方でもソ連は一世紀遅れていると云われていたが、ソ連の兵隊もその智識、文化教養の程度に於ても、確かに一世紀は遅れているといった代物で通訳を通して話して見ても、山奥の田舎者と都会人が話しかつてゐるようで、てんで話にならず、ただく／＼あきれるばかりだつた。こんな兵隊だから、時計だとか、万年筆だとかは、ただ話にきいただけで、実際には使つたこともなく、珍らしくて仕方がないのだ。だからせめて子供だましの時計の刺青にして喜んでゐるのだから全く噴飯物だ。

それが敗戦と共に、捕虜になつた日本軍人が、どん／＼シベリヤに送られるようになり欲しいと思つてゐた時計も万年筆も持つてゐるのだから——大抵は満洲やその他で武装解除取り上げられたのだが、要領のいい奴が、どうにかうまく隠して持つてゐたためにいくらかでも取り上げて、その数のふえるのをまるで子供のようになつて喜んでゐた。中にはネジがゆるんで動かなくなると、壊れたものと思つて修理してくれと云う。私達が面白半分に勿体



な振つて、それとは判らないように後向になつて龍子を巻き直して動かしてやると、「ハラシヨ、ハラシヨ」と飛び上らんばかりに喜んでゐる。

看護婦なども、これまで万年筆を使つた者は殆んどなく、インクが無くなると直ぐ患者の所にやつて来て書けるようにしてくれと云う。インクを注いでやつて書けるようになる、なんて器用なことをすると云つた顔で、とても感心しているのだから面白い。

通訳にきいて見ると、第二次歐洲大戰で、ソ連は兵器類の製作に忙がしく、こうした時計や万年筆の製作にまで手が廻らなかつた。だから本国の都会人すら珍しいのだ——と、病院長が話してくれた、とのことだつた「戦勝国のソ連で、そんな馬鹿なことが……」とは思つたが、兎に角時計や万年筆が、まるでお伽の国の宝物のように、彼等に珍重されるところを見ると、成程とうなずける点が多かつた。

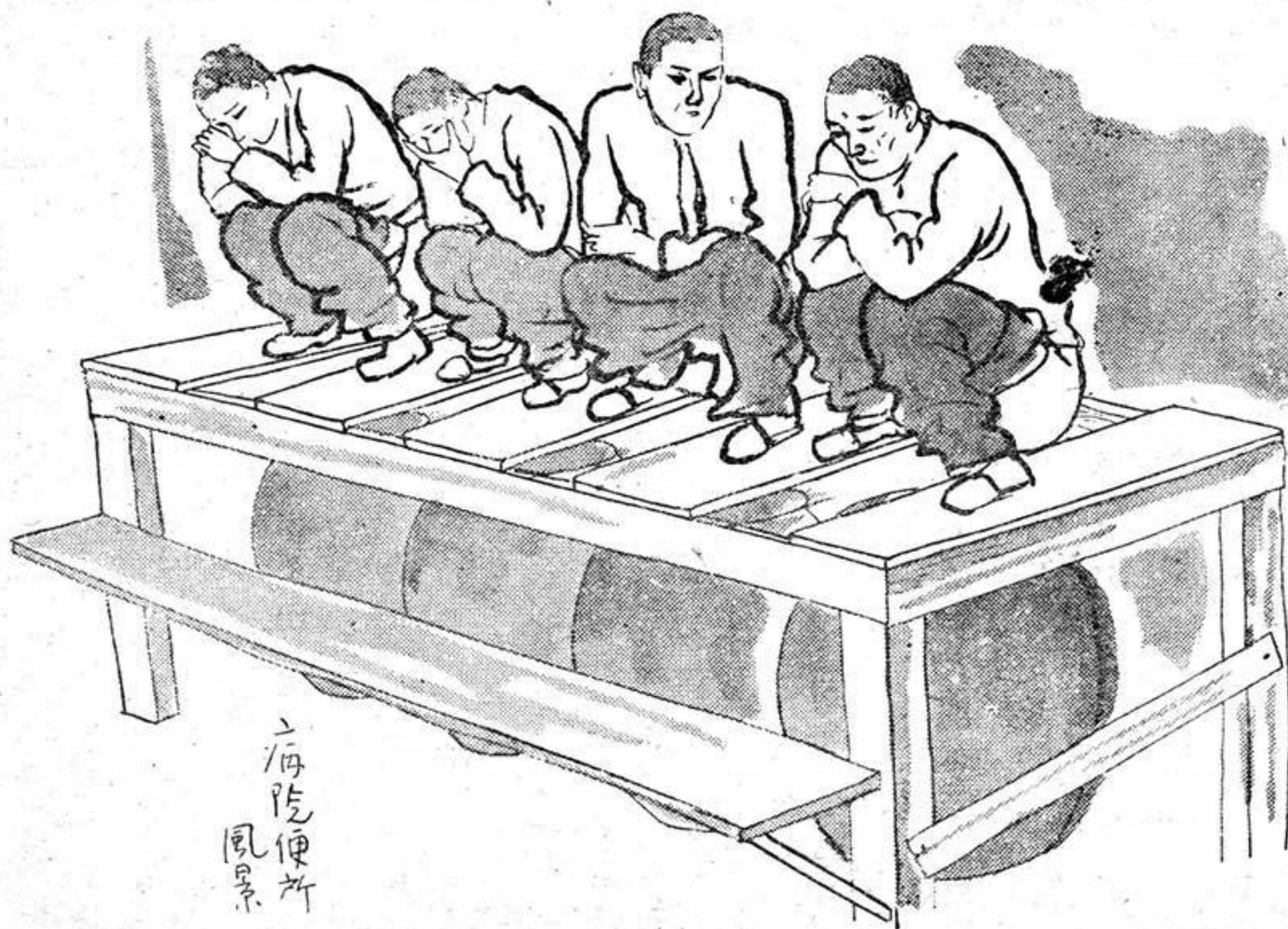
## そろばん

彼等はどんな計算をするのにも計算器を使わない。一々筆算で矢鱈紙に加減乗除を克明にやつて見て、夫々トータルを出すのだから

その時間の不経済なことゝいつたらお話にならない。数の觀念も非常な幼稚なもので、将校ですら齒がゆい位計算は漫々的であつた。

いつも往生するのは収容所にいた時、朝晩の点呼と非常召集の場合だつた。大體彼等は判りよく五十人一组、百人一组といった單位に班や小隊を編成させていたが、私達の方で一々番号をつけて、総員何名と報告しても彼等は又一々自分一人二人と数えて行くのだから、多人数の場合は屢々数え間違をやつて、又始めから一々数え直すといったノンビリ型に、いつも点呼の時間が長くなるのでうんざりさせられたものだ。

病院ではいろんな報告用の統計をとつていたが、これには看護婦が総動員されて、三日も四日も例の筆算



海防便所風景



で、無駄紙を沢山作りながら計算と取り組んでいるので、見るに見兼ねた通訳の一人が「患者の中にソロバンの上手な者がいるから、手伝わせてはどうだろう、その位の計算なら半日もあれば出来るだろうから」と云つたところ、彼女等は「なにを馬鹿な、そんなに早く出来てたまるものか」と本当にしなかつた

そこで通訳はKというソロバンのうまい男——この男は元軍隊で計理の方をやつていたとかで、小さなソロバンを病院まで持ちこんで来ていたが——を呼んで試しにソロバンでやらせて見た。果して彼女等が二、三日もかからなければならぬ計算を、僅か四時間足らずできれいにやつてしまった。だが彼女等は「それは余りにも早すぎる、そんな筈はない。きつと計算が間違つてゐるに違いない」といふので、その同じ計算を例の筆算で三日もかかつてやつて見たところ、これは不思議Kのソロバン通りの答が出て来たので驚いてしまった。

これが評判になつてそのK患者者は方々から引つ張りだになり、お蔭で退院の時が来ても、ソロバン一つで病院の仕事をしながら将校並みの待遇を受けていた。芸が身をたすけるとは正にこのことであらう。

## さむらい

ソ連のラポーターは私達を呼ぶのに、ヤボンスキー（日本人）とは余り云わず「さむらい」とか「はらきり」という言葉を使つてた。

今頃シベリヤの奥地で、古めかしい時代小説か、チャンバラ映画でなければ思い出しもしない言葉をきかされて、嫌な気持ちにならざるを得なかつた。これも通訳の言うところによると、日露戦争で捕虜になつたロシア軍人が、本国に還つて話したものが物珍しいものとして、語り伝えられたものであるという。

粗野で乱暴な彼等も「さむらい」と云い「はらきり」と云い、この言葉には確か一種の勇敢なという意味を持つた気持を含めてゐるようで、時々通訳を通して「さむらい」の話をしろの「はらきり」の話をしろのと催促するので、いゝ加減誇張した話をしてやると真剣になつて喜んできいていた。

## オカ

抑ていよく身体もよくなつて、退院を命ぜられると、元の収容所に帰つて行く者と、直ぐ病院の近くにある弱兵収容所に入れられ

る二つの道があつた。退院してこの弱兵収容所に入れられる者を「オカ」と言つていた。

私もオカとなつて、一度この収容所に入れられたが、いつの間にか又下痢がひどくなつて重患扱いにされた。この重患の部屋といえ、バラック建ての土間を囲んで、正面入口を除いた、ただつ広い三方に三段製の寝台を丸太や板で急造した一番上段の左隅つこに十二、三名の患者と共に放りこまれてしまつた。そして元日本軍隊の下士官だつたとかいう、まるで猿見たような面相をしたこの部屋の主任に、絶食療法だとかいつて、来る日も来る日も絶食されてしまつた。死んで行く戦友を見るにつけて、私はもう絶対に助からないものと観念したが、同じ死ぬなら一か八か當つて砕けると、主任など眼中になく、私は直接近くの事務所にいる女軍医の所にこつそりと出掛けて行つて、入院中覚えたあやしい単語ばかりの露語をあやつつて、もう一度テルマの病院に入院させてくれと頼んで見た。伏魔殿見たよな病院ではあつたが、こゝのオカ収容所に比べれば、五ヶ月余りもただけにまだ――増しであつた。それに当時は病院にあれば比較的元気な者からダモイの望みもあつたので。



## 女<sup>ス</sup>間<sup>パ</sup>諜<sup>イ</sup>は踊<sup>おど</sup>る

### 爪を剥がれても白状しなかつた少女

その宵私は主任から直接行動をとつたとい  
うのでみんなの前で思い切りビンタを取られ  
たが、運よく翌日は馬車で元の病院に帰つて  
行くことが出来た。

その後このオカの収容所からは、重い下痢

患者が送られて来るようになったが、すつか  
り衰弱してからやつて来るので、助かる者は  
ほんの数える位しかなかった。いきなり例の  
一号室「死の病室」に入れられたまゝで――  
私は幸いにもその後暫くして、この病院第

一回のダモイの中に加えられ、思わぬ生命を  
助かつて、無事故郷に復員することが出来た  
が、当時を想い出す毎に「よくぞ我生きて還  
れり」の感を深くする者である。(了)

暫の肌に鞭打たれても一向に白状しないの  
で、トルコ人に或るイレエヌのしなやかな  
手から一枚の爪を剥ぎとつた。そうして翌  
くるには又他の一枚を、その次の日には更

アラビヤ半島に於けるユダヤ人は代々ト  
ルコ人から非常な迫害を受けていたから、  
イギリス遠征軍がスエズへ上陸すると、ユ  
ダヤ青年は心から挙つてイギリス軍に投じ

アロンソンのヨツパの家は、ドイツ参謀  
将校の事務所になつていたので、イギリス  
軍情報部は、アロンソンの情報によつて、  
どんなに利益を受けたか知れなかつた。

然し、十五や十八の少年少女のスパイ行

トルコ軍の行動について情報を送つていた  
そういうユダヤ青年の中でもアロンソン少  
年は、特に熱心で血気な少年であつた。

為がそう永く発見されないでいることは困  
難であつた。エムサレムの攻撃の近ずいた  
或る日の事、妹のイレエヌは、トルコ軍の

彼は自分で舟を漕いで、エルサレムとリ  
ツズの間を往復して、終始イギリス軍情報  
部に情報を送つていた。彼の妹のイレエヌ  
は、ヨツパにいて、同志が情報を蒐めて置

手で逮捕されて獄舎に繋れてしまつた。彼  
女に加えられたトルコ軍の拷問は言語に絶  
していた。

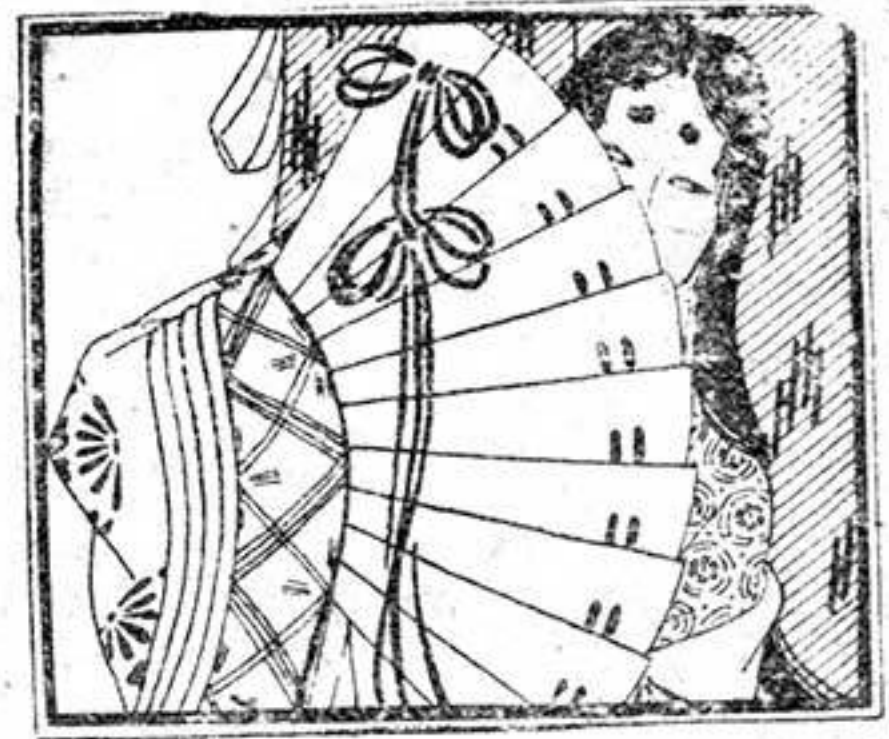
くという郵便函のような使命を果していた

花恥しい體の身体を露わにされても、白



に一枚を、が、この若い娘は残虐にさいな  
まれ、肉体を苦しめられながらも、同志の  
事については遂に一言も白状しなかつた。  
手の指の爪をすつかり剥ぎとられたイレ  
エヌは更に足の爪も一枚一枚と剥ぎとられ  
ていつた。そうして、手足の総ての爪が剥  
ぎとられた時、彼女は永遠の眠りについた  
のであつた。





戦争は賣春婦を生む

# 戦争と娼婦の關係

田 森 庄 志

(一)

日本軍がかつて大陸及び南方の各地へ派遣された時には、それら將兵の相手として日本人は勿論のこと朝鮮美人や支那美人、果ては占領地のあらゆる人種の娼婦がかり集められた。これは然し日本軍だけに限つたことではなく、又今日に始まつた事ではない。實に大昔から存在した事実なのである。

前の第一次欧州大戰においても、軍人相手の娼婦が盛んに押しかけていつて、砲煙彈雨の間に於いて狂蜂痴蝶の享樂に耽つたものである。戦線に於ける多数の娼婦の出没に対して敵も味方も始めは歓迎したものゝ、後には

相当困却したようである。当時の実情を見聞した者の話によると、後方部の軍用列車を寢室として、これを將校用、兵卒用と區別して娼婦の階級によつて使用を許し、列車内には消毒剤から洗滌薬まで用意している有様であつたといふことである。

我が国では源平時代や南北朝時代の戦乱期にあつては、これと同じような恋愛場面が矢石の間に展開されたものである。

大体、戦争と娼婦とは発生的に見ても、頗る深い因果關係を持つていたのであつて娼婦は多く軍人の家庭から出る〃といふ俚諺は實に世界的に共通した事である。敗戦した軍人の妻や娘が生計のために余儀なく笑いを売り媚をひさぐのは、古今東西を通じて何処の国でも見られる社会現象である。

日本内地に於ても軍都と呼ばれる都市や將

兵の発着する港都市には、夥しい娼婦が集結したもので、そいつた都市では私生児の数がうんと多いのである。最近でも進駐軍の駐在地や警察予備隊の駐屯地附近に涇集する娼婦に対して大分問題になつた事が新聞紙上に報じられている。

昔話の一つに、人間として何が一番面白いかといふのに対して〃焼けなければ火事、死ななければ、戦争〃と答えたといふが、成程自分が焼けなければ火事程面白い観物はないであらうし、死ぬことがなければ戦争程面白いスリルはなからう。この戦争の面白いといつた裏面には、勝てば手当の次第に掠奪することや、婦女を凌辱することが潜んでいるためである。

(二)



京都市伏見区に神功皇后を祀つた御香宮に  
附屬して桂女と称する一団は、大昔の巫娼で  
戦陣につき従つた所謂「御陣女郎」であつた  
桂ノ里に住んでいたことからこの戦陣娼婦を  
桂女と地名を附して呼んだのである。

我が国で陣中に女性を伴うたことは、日本  
武尊が妾の弟橘姫を従えたことよりしても  
上古よりの風俗であつたものと考えられる。  
そして桂女が神功皇后の征韓軍に加つたこと  
は、御陣女郎としての表役のためであつたこ  
とは誤りのない事実である。

太古のことは余り記録も豊富ではないので  
詳しい事情は知ることには出来ないが、性慾は  
人間本来の本能であり、娼婦は早く国初時代  
から存在していたわけだし、それに軍紀も左  
程厳しかつたとも思われないので、馬蹄の間  
に沢山の娼婦が出没したことは想像にかたく  
ない。

### (三)

平将門が武総の地に兵を起した時、一名の  
巫娼が陣中に来て将門の人相を占い、王者た  
るの器だと煽てあげたので将門もその気にな  
り、天慶の乱が起つたとあるが、将卒を相手  
とした娼婦のあつたことは此の一時からも推

測される。

此の天慶の乱を境として、平安朝時代の行  
詰つた藤原氏代々の放漫政策は、遂に地方在  
住土豪の自覚をさせて、こゝに武士階級なる  
ものが出現するに至つた。そして是等の武士  
達が各地で戦乱を繰り返した結果、著しい  
娼婦の輩出を促した。

槍先の功名に重きを置いて生命を鴻毛の軽  
きに見た武士達が、明日をも知れぬ一夜の飲  
楽を売女に求める必要と、戦敗の婦女が売笑  
を生活の手段とした需要供給の關係は両々相  
俟つて盛んに喋々噂々の情風を挙げたもので  
ある。

源頼義は陣中に於て傀儡女（人形廻しをし  
ながら売笑して歩いた女）を愛して源義家を  
儲け、義家は母が母だけに頗る付きの粹將軍  
であつて法師の女房にも通えば、降参人の安  
部宗任だけを従えて恋人の許へゆく等、相当  
に艶めかしい物語を残している。前九年の役  
後三年の役には十二年間の長戦くさの事であ  
つたから粹將軍も日向臭い女で我慢すること  
もあつたと思う。將軍に於て既に然り、それ  
以下の兵卒に至つては戦地稼ぎの売女を相手  
として、酒池肉林の快樂に耽つたことは勿論  
である。

源為義には嬖妾が多く、男女四十二人の子  
があり、徳川十一代將軍家齊の五十四人の子  
持に次ぐ、我国子福者の二大横綱である。武  
士は一家一門の殖えることは自分の勢力を加  
えることになるのであるから、いやが上にも  
多くの女性と關係して沢山の子供を儲けるこ  
とが必要であつた。そうした事情から武士の  
妻妾に遊女が選ばれる機会が多かつた。

源義朝は五名の遊女に子供を生ましている  
し、木曾義仲の母も淀川沿いの古い遊廓地で  
ある江口の遊女であつた。

### (四)

鎌倉時代の初期と末期には、各地に戦争が  
多かつただけに将卒を相手に出稼ぎした娼婦  
も少くなかつた。

治承四年八月に、頼朝が石橋山で旗挙げし  
たという知らせが京に達したので、平清盛は  
直ちに孫の維盛に兵五万を与えて総大將とし  
て、駿河の富士川を挟んで源平の両軍が相對  
峙した。源平盛衰記にはこの合戦の事を左の  
様に記している。

「さはあれ共、この川（富士川）を何方より  
も渡すべき様なければ、平家の方には宿々よ  
り傾城（遊女）どもを迎へて、帯ときひろげて



歌よみ酒盛りして居たり(中略)夜も漸く深ければ、各々寝入りてありけるに、夜半ばかり、富士の沼に群居たりける水鳥の、いくら共なく有りけるが、源氏の兵共の物具のさづめく音、馬の啼く声などに驚きて、立ける羽音のおびたゞしかりけるに駭きて、源氏の近づきて関をつくるぞと心得て、素早や敵の寄せたるはと言ふ程こそありけれ、平家は大將軍維盛を始めとして、取る物も取り敢えず、甲冑を忘れ、弓矢を落し、長持、皮籠、馬鞍に至るまで捨て、迷ひ上りける。

此の日頃呼び集めて遊びつる遊君ども、或は踏み殺され、或は手足を踏み折られて、這々泣き逃げ去りにけり。(中略)

源氏は斯くとも知らずして、二十四日の曉に轡を揃へて瀬踏みして、関をつくつて寄せたれども、平家の陣には人もなし。その跡を廻つて見るに忘れたる物ども多し。頭を踏み割られて病臥せる女一人あり、こは如何にと問へば、此の日頃こゝに遊びつるが、過ぐる宵に馬に踏まれて斯く侍りけり……云々。

平家の軍勢が臆病風に吹かれ、水鳥の羽音を聞いて逃げたとは人口に膾炙しているが、この一文は当時の戦場生活を描写している。即ち対陣が長引けば、小屋を架けて臨時の兵

営となし、附近の遊女を呼び集めて、酒を飲んだり博奕等に耽つて遊んだものである。尤も此の当時の習慣から言えば、遊女達は呼ばれるのを待たずして、自分の方から押し寄せることになつていたのであるから、戦争がある、軍営が張られたと聞くと、続々と詰め寄せて、肉に飢えてゐる将卒を生擒にしたのである。

## (五)

武士の家庭から多くの娼婦を出したことは、殊に鎌倉時代が甚しかった。源義家に討伐された安部貞任の娘が遊女になつた話や、保元の乱に失脚した藤原信西の娘が舞妓になつたという哀話を伝えている。併しながら、此等はまだ物の数ではなかつた。二十年の栄耀



栄華に馴れた平家の一門が、東夷の猛者どもに駆け悩まされて、九里の都を落ち、果ては陸を離れ海に漂うた末に、あわれ、檀の浦の戦いに栄華は水の泡と消え、廻ち洩された宮女、侍女、又は生命を惜しんで京畿の地に身を隠した多くの女性が、遂にその日の暮しにも窮し、相率いて倫落の淵に投じて団体的娼婦の出現したことは、哀れであつた。かくして昨日は香蘭を炊いて眉を画いた才媛が今は半点の朱唇を万客に供する売女となり果てしまつたのである

戦争が各地に起り、然かもそれが長びくなれば、独り戦敗者としての武士の家庭から娼婦を出すばかりでなく、戦渦のために家産を失つた商人や、耕地を荒された農民家庭から、多くの娼婦を出すに至つたのも当然である。かくて売女遊女の



類は全国津々浦々に至るまで充満したのである。

武士の出現が娼婦を要求し、やがてその武士の娘が多く娼婦になるとは、何という人生の皮肉であらう。花を咲かす雨は即ち花を散らす雨でもあつた。

木曾義仲の四天王と云われた手塚太郎光盛の娘万寿姫が鎌倉へ来て遊女となり、父の仇敵である坂東武士に笑いを売つたことは有名な話である。平家方の侍大将であつた悪七兵衛景清の娘人丸が同じく鎌倉で遊女をしていたと云われる。こうした名門から娼婦が出る位であるから、他の農商からも出たことは想像にかたくない。遂に鎌倉幕府では、建久四年に遊女別当なる官職を設け、里見義成をこれに任じて取締りさせた。我が国で娼婦のために官職を置いたのは実にこれが最初である。

## (六)

南北朝から室町期へかけて戦場へ出稼ぎする娘<sup>にようし</sup>子軍は、依然として少くなかつた。殊に此の頃になると一般に士氣が弛んでいたので、野武士からの成り上り者が多かつたので、賭博が上下に流行して風紀も甚しく紊れた。滯

陣の間、将卒共に売女を抱いて賭博に耽るのが常であつて、戦争に大切な太刀や甲冑まで質に入れて、打つたり買つたりして、いざ戦争というのに、素肌<sup>すき</sup>に棒切れを持つて出かけるという醜態を演じたものである。

室町期の世相を考えると、建武中興の失敗が倫落の女性を激増したのは当然であつた。然かもその婦人は生産という事に縁遠い宮中の侍女、公郷の子女が多かつただけに、実に涙ぐましくもあり、また氣の毒にも感じるのである。この点から言えば寿永の秋に西海で亡びた平家の女性が団体的娼婦になつたのと優るとも決して劣ることなき実情であつたようだ。公家門跡の姫君の貞操は、町売り遊女の半宵の享樂よりも手輕に且つ安価に取引された。

二十余年来、打続いた戦乱のために、産を失い家を離れた貴族、それに伴う上臈<sup>うろう</sup>、女房達は敗北者の身の置き所もない有様なのに、これに加うるに週期的に襲来する飢饉は、これ等の人を路傍に餓死させ都大路に惨しい餓鬼道を現出するに至つた。従つて京都に残つてゐる人間は驚くほど減少したのであるが、その代り此の惨状を眼前に見詰めながら踏みとどまつていた者は、男女共に一ト筋縄でゆ

かぬ人物ばかりであつた。殊に女子にあつては、悉く娼婦性を帯びるようになった。

室町の末から世は戦国時代となり、鉄砲という武器が輸入され、戦術も戦法も非常に變化を來たし、今迄の一騎討的な個人的な戦いが団体的に駆引するようになり、軍律も頗る嚴重なものとなり、先ず第一に槍玉に挙げられたのは娼婦である。殊に天文頃から俗に南蠻瘡<sup>なんばんそう</sup>と云われる梅毒が輸入されたので、将卒の方でも売女を遠ざけるようになった。

売女に代つて流行したのは美少年であり、男色である。戦争と男色は決して新しいことではない。既に奈良朝の昔にこの事が行われ平安朝には源義家と権五郎景政、鎌倉期の源頼朝と工藤祐経の如きは有名である。この期に至つては甚だ盛んで織田信長と森蘭丸、大内義隆と陶五郎<sup>すゐ</sup>というように、大将は必ず一人か二人の美少年(俗にお座直し小姓という)を愛したものである。従つて兵卒の間にもこれが行われ後にはこれを營業にする陰間<sup>かげま</sup>なるものを生ずるようになった。

然しながら戦場を稼ぐ売女は、これが為に根絶した訳ではない。やはり飯の上の蠅のよう<sup>いへの上のこば</sup>に追えば散るが、追わぬと元のように寄り集り弓矢の間に脂粉の香をふりまいていたの



である。

(七)

豊臣秀吉は戦上手であつただけに、常に味方の兵を損ぜずして敵を陥落せしめる手段を講じた。殊に小田原城に北条氏直を包囲した折には、力攻めにしたのでは中々落城しないと見切りをつけ城の周囲を水も漏れぬように遠巻きにし大名達には本国から奥方を呼ぶ事を許し兵卒たちには遊女を集めて楽しませた。これでは戦争やら遊山やら全く訳がわからぬようだが、陣中に於ける娼婦の繁昌ぶりは察するに余りがあつたであらう。秀吉は陣中に女性を携えていたようであるし、家康も中年以後は専ら陣中の女性を寵愛した。

江戸三百年の太平の夢が破れて、明治維新になる際、各地に戦争が行われた。慶応四年三月八日の夜、佐幕党の脱走兵が五百名程、館林に泊るべくやつてきたが、梁田には三十軒の妓楼があり、三百人近い売春婦がいると聞き、肉の香に飢えた脱走兵たちは、俄かに予定を変更して宿泊し、各自思いの飯盛女を擁して春の夜の甘いさゝやきに浸つた。すると此の事を熊谷にいた官軍が知り、夜通し駆けつけて翌九日の払暁に攻め立てた。

# ★男子同性愛雜考★

(附・戦争と同性愛)

浅倉 支朗



## ◎同性愛者の第六感

同性愛の事実がその当事者以外に迄知られる事は極めて稀である。従つて商売的な男娼は別として一般には同性愛の事実としての男色は世間には知られていない。然しおそらく事實は人々の想像も及ばない程、夥しい数に

のぼっている。

普通世間一般の人は、同性愛の最初のキツカケを極めて難事と考え、そんなに多くの男色が行われている事実を疑うであらう。その人たちは一度そういつた同性から言い寄られたという様な経験もなく、若し仮りに間違つて言い寄られてもしようものなら、極度の汚辱感とそれに伴う憎悪によつて、恐ろしいヒジテツを喰わせるであらう。

然しその危惧は絶対に存在しない。同性愛者はその氣のない者に手出しはしない。彼等は悉く同傾向者間にのみ通ずる氣分を持つてゐる。だから、彼等がお互いに一眼見ただけで相手が同性愛者であるか否かを判別する。そしてこの鑑識眼は百分間違ひはない。それは智識でも技能でもなく、身体全体で感じる第六感であるから。この第六感が同性愛の無組織的秘密俱樂部を存在させてゐる。



脱走兵の一隊は牽情の夢さめやらぬ折とて散々に打ち破られ、梁田も兵火にかゝり大半焼かれてしまった。戦士と売女、それは恰かも火を慕う夏の虫の如きものであつた。

会津戦争に於ける官軍の乱行は、筆舌に尽し難い程惨虐なものであつたが、この戦争の結果として武家の妻や娘が夥しきまでに売女に成り下つた事である。そして会津では戦争が終ると同時に城地を失つたので、家中の老幼婦女一万七千人という者は、旧領地の縁故を頼つて三百七十ヶ村に分れて住むことになつた。村々では旧領主の家来だから預つたようなものゝ、かなり迷惑な事でもあり、且つ実際に生活も貧しかつたので、十分に世話が出来なかつたので、若い婦人達は遂に堪え忍ぶ事が出来ず、遊女の鑑札を受けて賤しい稼業に就いた者が一千余名に達したということである。僅か会津一藩だけで此の多数な売女の生産、明治で廢藩になつた全国の数調べたら、それは驚くべき数であるに相違ない。こゝでも娼婦は概して武士の家庭から出るとは決して偽りはないのである。

×

×

×

## ◎同性愛と性慾

同性愛も勿論性愛の一つであり、従つてその中に性慾の存在することは世間周知の通りである。然し同性愛の全部を即ち性慾的なものであると考えることは必ずしも正しくないそれは異性愛ですら必ずしも即性慾でないと同じである。否むしろ同性愛の方がよりプラトニクな面を持つていゝという事が出来る。だが異性愛の場合に於ても淫乱者があるように、同性愛の場合に於ても、淫乱者はある。そうした極端な場合とか、男娼のような商売上技巧を凝らすような場合のみが世間一般に知られるのである。然しその場合に於ても異性愛に比べて極めて低率であることも記憶せねばならない。

一般に同性愛の場合は異性愛とは比較にならない程劣情性は持つていない。異性愛の場合に於ては屢々劣情そのもののみの場合も多いが、同性愛の場合は絶対にさういつた事はない。

同性愛(男色)が誤つて解釈されるのは、陰間的な存在として男娼と混同されて同性愛者が不当に冤罪を蒙る際である。男娼は単に遊蕩的男性の放蕩的行動の相手以外の何物でも

ない。眞の同性愛といつたものは、こんな遊び半分のものでもなく、デカダンのものでもない。

## ◎戦線に於ける同性愛

戦場間に於ける同性愛は戦友愛から強固な団結心の基礎となり、殺風景な戦場生活に於て一服の清涼剤としての役目を果すことが多い。純粋なプラトニクな戦友間の同性愛は特にこの効果は大きく、犠牲的精神の發揮、勇猛果敢な猪突精神もこの傾向を有する兵士間に強いといわれている。

こゝいつた純粋な精神的な結合の外に、女性の代用としての単なる性慾のはけ口を求め、るための同性愛とか、又完全な女性的男子の誘発による同性愛等が入り乱れるのが戦場の慣しである。将校と従兵、古年兵と少年兵等の関係もその程度の差こそあれ、戦争を背景とした反自然な人間の姿が露呈されてくるのも又やむを得ない事であつた。

老巧な将校は自分の当番兵には努めて美少年の兵を選び、歩哨に立つ兵はお互いに親密な相手を選びたがつた。男性ばかりの集団の中にあつて、女性化した男子が如何に尊重されたか、これは軍隊生活を一度でも経験した者は誰でも知つてゐる秘密である。





## 珍奇文獻

## 人間便所の妄想狂

二 宮 忠 一

「汚物愛好症のマゾヒスト青年が某一流女優に出した手紙と、彼が彼女の家の便所で体験したことの手記」

筆者は現在ある新制大学で教鞭を執っているものであるが、近頃珍らしい手紙を手に入れたから、奇譚クラブ愛読の諸君に紹介したい。

昨年十月中旬の夕刊に、××××（筆者云。某一流女優）宅に賊という見出しで「忍込んだが家人の物音に便所にかくれたところを発見、臭い逮捕。」といった記事があつたのを憶えている諸君がある。あの晩私の所へ警察から電話がかかつて来た、そしてNという生徒を知っているかというのである。私の所に入入りしておりよく出来て可愛がつている学生の一人に相違ないのでその旨返事すると、××××に忍び入った賊だということで、驚いて署にいつて見た。両親も立派な人だがもう来ていて只驚いている。貧の盗みなどする家ではないのである。聞いて見ると女優宅では何も盗っていない。しかも本人は盗るつもりだつたと自供している。十九才なので少年法該当だが一応送検することだつた。送検されてからも私はどうも彼の行動が腑に落ちないので、一度面会してゆつくりきい

て見た。すると実は窃盗ではないのだが本当のことは恥かしくていえないという。しかし私が醇々説ききかせてやつと白状させたことは、Nは××××家の便所が目的に忍びつたのだということ及び××××に対しそのことはファンレターで書き送つたということであつた。

そこで私は××××に逢いにいつた。年甲斐もないファンと思われたらしいが、とにかく用向きを話し、何か近頃非常にいやらしい内容のファンレターが来なかつたかときくと、すぐ思いあたつたようだつたが、「初めは何処へやつたかしら。捨てちやつたわ。」と云う。然し私が青年一人の前途を救うかどうかなのだということ力を説けると、彼女は「その人がそれで助かるなら……」といつてやつと出してくれた。その時私が面白く思つたのは、捨てたところか他のファンレターとは別に戸棚に入れてあつたらしいことで、これはあとの内容を読まれてから、読者諸君に女性心理について考えていただきたいところだ。



そのレターをもつていつて私は検事に示し検事も一読してNが変態者なのを了解し、窃盗未遂ではなく、家屋侵入になる丈だが、不起訴にするといつて釈放してくれた。レターはその時提出したのであるが、もつてゆく前に私はコピーをとつておいたので、以下御紹介するのはそれである。女優本名を連想させぬよう文は多少は直してある。

★ ★ ★

私の最も尊敬する人×××様。あなたは私の女神です。私はあなたに奉仕する運命をもつて生れて来たと自覚する賤しい奴隷の一人です。私は今迄あなたを限りなく尊敬し崇拜して来ました。その

## 執筆より編集者へ

これは創作ではありません。資料は確実なものです。ですから本文にもかいたように文献として学術雑誌にも載りうるのですが、本文にかいた事情の外、学術雑誌の時は、誌面での匿名はとにかく、色々と支障もあり、私の立場としてそれは出来ず、さればとてこの珍奇な資料を未発表でおくのもおしいし、又後述のようにNのためもあるのです、思いきつて投稿して見ました。

「手記」の方は検閲を恐れて削除となるかと思いますが（尤もNの話では「女優の便器になる話」などという小説をのせた雑誌もあつたとのこと）「手紙」の方は大丈夫だと思いますし、文献としても私はこの方を重視していますので、この方をば是非御登載頂きたいのです。筆者としては、Nの保導役として一種のカタルシス療法のもりで手記もかかせ、匿名発表もしてやっているのだと御承知下さい。Nのその後の妄想と行動（筆者の妻と娘とに対する）について更に別の資料もあり、更にN行状記第二話を書きたいと思ひとます（Nのために。）

二宮忠一

余り、あなたの尊い時間を私のようなものの手紙のために、割いていただくことさえ恐縮と思つて一度も出したことなく、一人でプロマイドを見ながら日記にあなたへの讃歌を捧げて来たのみであります。しかしこの頃は激情はますますつり、このまゝ一フアンとしての立場を守つていくことができなくなりました。そこで一つの計画を立てています。そしてその実行につきあなたの御承諾を得たいのです。そのためこの手紙をはじめあなたに差上げる気になりました。どうか一通りお読み下さるだけの労をおとり下さるべく、そのあとでは便所の落し紙に使つていただくことをお願いします。

「計画の実行につき御承諾を」など申すと、あなたは何かウルサイことのように考えられるでしょう。「一度あつてほしい。」というのではないかと思われるでしょう。違います。私は少しも御迷惑をかける気はありません。今迄手紙さえ慎みましたほど私にとつて神聖なあなたのお時間です、たとえあなたが遊びごとや居眠りに費されるような時間でも、私にとつては神聖です。それを私のために一分でも割いて下さいなどは申しません。この手紙がいかなかつと同じように、毎日をお送り下さつてよいのです。あなたの日常生活を少しも乱しませぬ。

計画実行に入つても恐らくあなたは私の存在に気がつかないだろうと思います。然し万が一気がつかれた時あなたを驚かせるということと思つて、それでこの手紙をかくわけなのです。では一体私はどこにいくのか。私は毎日あなたを見たいのです。それも最も内密な関係で、将来あなたの夫君たるべき方（申し上げますが、奴隷の私は夢にもそんな者になろうとは思つていません。）を除いては私だけしか知らぬような所や、いや夫君たるべき方すらも知らぬよう



なことを思う存分に知り味いたいです。これで何か肉体関係を連想されたとしたら、あなたは私のことを怒られるでしょう。トンデモナイ。私は賤しい奴隷、神聖なるべき女主人とそのようなことをしては罰があたります。私は実は便所の踏板の下にかくれていてあなたを見たいのです。あなたは踏板の上において下に私がいることを御存じない。私は下からあなたのおからだを充分眺められます。踏板の上と下、これは二人の関係が対等でなく、上下の関係であることを示します。私のからだのどの部分よりも下にあるのです。私は決して見下すことなく、只見上げるのみです。

私を一人前の人間とお考えにならないで下さい。私に人格をお認めになれば、それに肉体を見られることは「恥かしい」かも知れません。然し私を古代の奴隷と思つて下さい、家畜と同じように人格のない畜生だとして扱つて下さい。飼っている狎が見ているからとて着更えを躊躇する人はいないでしょう。人に見られてこそ恥かしいが、犬に見られても恥かしいことはないからです。私をそういう狎ころなんかのように見て下さい。いや、それも「もし私を御見付けになつたらそう見て下さい。」というに過ぎません。用便の度の下をのぞくような品の悪いことをあなたはなさらないでしょう、だつたらそれでいいのです。私がいるかいなか無関心でいて下さい。しかしもし私がいるのが目に止つたとして、人格のない私をば空気見たいに、無いと同然に扱つて下さればよいのです。

さてそうなれば、今度はあなたのからだから出て来るものについての私の慎ましい要求も大して気にせず容れて下さると思います。あなたは毎日一回の大便と数回の小便とをなさいます。それはあなたにとつては生理上必要な排泄行為であり、でていくものは

あなたにとつては不要なもの、むしろ汚いもので、無価値というより反価値（着物についていたりすればあなたは汚いと思うでしょう）のです。然し私にとつてはどうでしょう。私にはあなたは神と畜生ほど遠い距離にある尊さなのです。その間にどのような交渉が可能でしょう。接吻とか握手とかいうこと、それは対等の人格者の行為です。勿論許されません。次に一方が相手の足の裏にキスするということ。これは最も奴隷的な行為とされていますが、私にいわせれば、神と人間、人間と畜生との間（例えば犬に足をなめさせる等）には可能であつても、神と畜生とほど距離のある所ではまだ僭越なのです。つまり足と口とにせよ、こちらの肉体が直接相手の肉体にふれることなのですから。

そこで神に対する畜生は、何か仲介者をおかけしなければなりません。その仲介物は神にとつては全く価値のないものであつても、畜生にとつては、神と関係あるが故に限りなく尊いものなのです。例えばあなたのズロースやストッキングの使い古したのはあなたにとつては単に衣類に過ぎなくても、ファンにとつてはあなたに接触した故に崇拜の対象たり得ます。しかし、ズロースやストッキングは「価値少く」とも無価値ではありません。まして反価値ではありません。どんなファンもあなたのからだから出て来たものでは避易するでしょう。それらが、自分はそれ程には賤しく低い存在でないと考えているからです。私は違います。私はあなたに対して自分を限りなく賤しく感ずるが故に、あなたのからだから出て来たものを以て、私に適当な仲介物であると考えなのです。便所という、人間の住む所でない所に身をおくというのも、天上の樂園に比すべきあなたのお家の中では、私のいる場所はそこしかない。他は皆不適当と感ずる



からなのです。

そして、一旦、それらと自分とを等価値と悟ると、それらは何と有難いものとなるでしょう。それらはいっ瞬前迄はあなたのからだの中にあつたのです。いやあなたのからだの一部だつたのです。それが私のものになるのです。私はあなたの小便をからだの真上から浴びるでしょう。又口をあいて受け、飲み込むでしょう。更にお尻の下に口を開いて、出てくる大便をそのまま受けとるでしょう。食べてしまうでしょう。小便の流れの続く間は、私の口と、あなたの穴とはそれによつて連結されています。握手も接吻もできぬ私、踏板の上と下とに在つて下から見上げる丈の私は、かくして間接にあなたのからだに接触しうるのです。そしてあなたのからだの一部だつたものを摂取することによつて、誇りを感じうるのです。あなたは私に毎日この上ない贈物をあたえられるわけです、しかもあなたにとつては全くの不要品で。——うまい話ではありませんか、自分のいらぬもので人を喜ばせることができるなんて



右に私に「何よりの贈物」といい、「喜ぶ」といいました。その通りです。奴隷たり、畜生たる私はそうなのです。然し私は現在一個の人格ある人間でもあります。学生として教養のある方でもあります。そういう人間としては私は他の何人も未だかつて味はつたことのない屈辱を味うわけです。そうでしょう、人間が他の人間のからだから出たものを口にするなんて。更に他の危険負担があります。女優たるあなたが、撮影所内部で身を誰かに任される、その結果もし淋病になられたら（失礼な想像ですが）私は直ちに失明するわけです。又もし消化器系の伝染病だつたら、直接口に受けてる私が直ちに罹患すること申すまでもありません。あなたのからだの調子はそのまゝ私のからだの調子を左右するのです。全く受身の「あなたまかせ」で、あなたに隷従するというわけです。この屈辱感、この危険感がそのまゝ又私にとつては何よりの喜びと転化するのです。しかもこれらの間、あなたにとつては、先にも繰返したように、毎日を全く正常に送つていただいてよいのです。普通に飲食し、排泄する。私は慎ましく、便所の狭い空間と、あなたと用便という短い時間を利用して、少しもあなたをウルサがらせることなしに最大の満足を獲得できるというわけです。

そして、×××様、私は正直に申上げるのですが、そういう私がいるというのを知ることとは、あなたにとつても快感ではないのでしょうか。女は自分のために男が死ぬのを見た時、その男のために可哀そうにも思うでしょうが、一方に、自分の魅力がそこまで及んだことに満足をおぼえないでしょうか。そして、死ぬことは、私が前かいた行為と比較してどちらが男にとつて楽でしょうか。勿論死ぬことです。だから死ぬより辛い屈辱を忍ぶ男を自分の魅力が創り出



したのだとお考えになる時、あなたの自尊心は痛快に感じないでしようか。ただあなたを崇愛するの余りにあなたのからだから出たものまで口にするほどに迷った男を、あなたは軽蔑すると同時に憐憫の目で見ないでしようか。

かくして、あなたが積極的に私というものを認めて下さったなら私は夢想します。今まで述べたように、私は無害な便器代用品を人の知らぬ所で演ずる丈で満足してるのです。しかしあなたが、私の無害さを知り、これを更に有用な家畜のように利用されたら？ それを考えると私の胸はおどるのです。必ずあなたは用便の時紙を使用なさる必要がなくなります。私は人並より長い舌をもっていますから大小便にかかわらず、用便後これを拭つてきれいにし上げて上げることが出来ます。これは人に知られずにできる奉仕です。又長い間口にする中には私はあなたの身体の調子が、出て来たものの味ですつかり分るようになります。何しろ直接からだから出て来たものをすぐ使うほどたしかな診断はありません。ただ普通の医者には舌が使えない丈です。こうやつて分るようになれば、私が「今日は一寸御からだが悪いようだから……」というようなことを申せるようになるでしょう。あなたが私の存在を認めて下さるようになれば。

更にもし、お家の方々にも分つて構わないというのだしたら、私は便所を出て、あなたの居間や寝間に侍ることにします。今迄は折角便器代用をしていても、便所という本来の用途の場所だから消極的存在にしか過ぎませんが、一旦そこを離れると、代用としての意義が高まり、私がいる限りあなたは便所にいらつしやる必要があります。ません。催されたら一切私の口を使用されればよいのです。

更に家の外迄お伴することも決して辞しません。ロケーションで

便所のない時などお考えになれば私のようなものが伴にいたらどんなに便利か想像できるでしょう。しかし、そうなると世間は承知しますまい。勿論私は世間の評判になることは却つて望むところ、それだけあなたの魅力を賞讃することになれば本望なのですが、私のようなファンをもてない魅力のない○○、○○、○○、などはあなたをねたんで人間を便器にするなどは冒瀟的だなどというでしょう。そんなことでお人氣にキズがつくといけません。ですから家の外には出られません。家の中ということも、スターという職業柄、人に知れずにすまぬとすれば、やはり難かしく、結局私は便所の下に人々に知られず住むが一番良いのだらうとも思います。さしあたっては勿論あなたのお気持も分らぬので、コッソリかくれるだけなのです。

どうか、もしか私を見付けになつても、「アアあの手紙をよこした痴漢か」とお思いになつて、お騒ぎにならぬようなさつて下さい。これだけをお願いします。 賤しい僕<sup>しも</sup>べたるものより。  
××××様

★ ★ ★

かような内容のものである。読者諸君はいかが思われたであろうか。筆者は専攻は生物学であるが、この方面にも多少の興味と知識を有する。それによつて判ずるとこの手紙は三つの点で価値がある。第一にこれがいわゆるマゾヒストの「手紙」に属することは云うまでもないが、クラフトエビングの古典的な「性心理」は十二版に至り、十一版までは存した「手紙」の例を省いたし、一番「手紙」の多いヒルシュフェルトの「性病理学」にもこの手紙のように長文なのはなく、又職業的女主人にあてたものばかりでこのように実社



会の知名女性にあてたものなく、その内容も鞭打が主であり、従つて相手に求めるところの多いものである。Nの手紙はこの点相手を悩まさず、相手を神聖化する等各種の契機においてマゾヒズムの純な形がよく出ており、殊に青年らしい純真な傾倒が見える。

第二に、自己卑下の極致として汚物愛好に陥つてゐる。ステケルの著者にはこの心と同じようにある処女を崇拜するあまりその便器と自己を同一視した少年の例が一に止らぬし、その研究ではマゾヒズムと「愛糞症」<sup>コプロラグニア</sup>と「愛尿症」<sup>ウロラグニア</sup>との結合は意外に多いようであるが一般に発表された文献はこれ又意外に少ない。性学文献を離れて文学を見ても、サド侯の「ソドムの百二十日」とか例の「ドクマンタ・エロチカ」のようにマゾヒズムを離れての面で汚物愛好はあつてもマゾヒズムと結合させてものは少ない、「ロシア踊子の回想」の原書では地主の侍女達が女客達の用便後を舌で拭わせられる話があるが、近時の翻譯は省略しているし、男性マゾヒストへヒルシュエルドの所謂メタトロピストと汚物愛好との結合は「美しき女主人達」において見られる位のものである。そういつた点でこの心の手紙は割合に珍らしい文献であると思う。

第三に、これは心の実践の先駆となつたという点で重要である。所謂「手紙」なるものは大半が空想の産物で（Nの手紙中にもその部分があることはお読みになつたとおり）あるが、この手紙ではNは空想だけに終らなかつたのである。そういつた点でも価値がある。旧ドイツの性科学雑誌などはよくこのような資料をのせたものである。然し今の日本では一寸載せてくれないだろうし、専攻でないので筆者も知人がない。そこでむしろ本誌のような性慾実話雑誌に発表して見る氣になつたのである。

筆者の意図は「手紙」の紹介にあるが、読者はNの実践行動について興味があるであらう。そこでそれには幸に現在Nは、筆者が検察庁で請書をかいた関係で親許から托されて筆者が監督する事になり私と一緒に生活している。この種変態行為を除いては仲々優秀な学生である。そして私にだけは一切打明けて話をする。手紙には世間に知られることを厭わぬといつてゐるが實際は窃盗未遂の冤罪を着ても自分の変態を隠そうとした位恥かしがつてゐるのであるが、筆者のすすめで、事件の手記をかいた。

★ ★ ★

映画雑誌を毎号見ている中に××××のことは色々分つた。スタ1の住居拝見で間取図が分り、便所の戸が××××の居間の戸の向いにあることも知つた。郊外の家を外から見にも行つたし、物売りになつて台所に廻る冒険もした。そして近所の百姓に汲ませるためか、汲取口が昔の大型なのを知り嬉しかった。大型の奴なら私の小柄なからだは通るのだ。

父母には合宿があるといつておいて友人の下宿に泊り、夜の行動を楽にした。この頃撮影がないこと、然しどこかへ出かけて帰りは大体七時半であること遠くから××××宅の門を夕方中観察して発見した。いよいよ決行だ。

第一日がやはり一番昂奮した。前に一晚庭で泊り込みで観察したので、夜廻りのないことは分つていたからそこへ服を脱いだ。着込んでは汲取口へくぐれないのだ。夏時間が終つたあとだから七時十分でもう暗い。私は忽ち汲取の中にもぐり込み中から蓋を閉めた割合に大便所が広く一坪近く取つてあるので、私の住む世界も高さは無いがのびのびしてゐる。中央の壺のふちになる部分が広いのであ



る寒さと臭さ。臭さはすぐ慣れたが寒さはじんじんしてくる。しかしそろそろ七時半になる筈。あゝ玄関があいた。いつも銀幕できく天使のようなソプラノがかすかにきこえる。何となく自分が×××の家の一員となつて迎えたような気持がする。声が大きくなり居間の戸らしい音がし、それがしまつて又遠くなつた。一しきり笑声女中相手に着更えしてるのだらう。やがて女中の出ていく音居間に残つて足音は××××に違いない聞えなくなつた。どの位経つたか突然居間の戸のあく音。しまる音、便所の灯がつく。戸があく。しまる。中の戸があく。穴から差し込む光が一瞬暗くなる。私の望みはかなつたのだ。踏板の下から私は踏板の上を穴を通じて見上げる。動く上半身が一寸見える。衣ずれの音。暗くなる。彼女が蹲んだから。電燈がバックにあるから二つの股の間はまつくらだ、神秘的な幽暗と淨福、私は身動きもしない。次の瞬間には私の頭の上から甘露水が浴びせられる。紙が一枚ふつてくる。すぐ又明るくなり上半身が一寸見える。ともう身づくい終つて中の戸が開き、外へ、やがて居間の戸の音。そうだ、たしかに××××だつた。私は狭い空間を後ろへまわる。何故つて今彼女が来た以上、次には他の女中達にきまつてるし、そんな連中のは考えた丈でも胸糞が悪いから。私のすることはこの次居間の戸のあく音がした時又今の位置にくることだ。尿流の方向も今で大体分つた。此の次にはうま口に入るような所に顔をもつていけるだらう。やがて玄関脇の女中部屋の方から足音がしてから灯がつく。女中である。それから外の家族達、然し、やがて××××の寝る時が来た。居間の戸の音で私は位置をとるベツトに行く前に私に再度の贈物がされるのだ。顔をもつていくところが少しずれて尿流は額に直突した。目に入つた。淋病だつた

ら？それも本望だ、彼女のために盲目になるのも。彼女は寢室に行つたらしい。私も終るとすぐ外に出た。庭で身づくろいし。垣根をこして小路に出る。時計は十二時過だ、身体はひえきつてゐる。七時十五分から約五時間。その間、帰宅后と就寝前と二度の機会を得したわけ。それも××××には何も迷惑をかけずに。

第二日、昨日で味を占めたので、度胸がつく。同じ二度の機会をねらう。今日は二度目の方でうま口に受けることに成功した。息がつまるのでそのまゝ呑み込めない。口に溢れたがそのまゝの形でいて、彼女が去つてから、口に入っている分丈を息をついで呑み込んだ。暖かくすかにしおからい味。口にうまく入つた時、のどの奥にぶつかつたまゝ放流が暫らくつづいた。こうして彼女とつながっていると感じて幸福だつた。

第三日、彼女は朝排泄するらしく夜ではこの機会がないので今日は方針を変え明け方五時半頃入り込む、服は別に包んでやはり中へ入れた。こうして風を一日ここで過すので。汲取はこの間来たばかりだから大丈夫である。六時頃パジャマ姿の××××が寢室から小便に来た。落ませてから又ねたらしい。それから暫くの間家人達の排泄行為を散々見聞する。××××は一番おそくおきる。これは訪問記でも知つてたとおりだ。何といつても一家の中心だ。その中朝食らしく皿の音がする。そのあと暫らくして××××が来た居間からではないが、もう足音殊に戸の開方ではつきり分る今度はきつと大便だと思つたから他の人ので見当のついたお尻の穴の真下に口をあいて待つ。今迄のように夜とちがつて、いくら汲取の蓋があつても何となく明るいかもし下を見られたら見つかるかも知れない。その中第一弾が落ちてくる。口を動かすと音がするだらうからちつ



としている。又落ちて口一ぱいになった。口からつばきが出てとけたので口一ぱい苦いものが走る。更に落ちて来た細いのがつま重なる。夜より明るいので白い大腿もよく見える。暗い毛の谷間も。小便もした上で彼女は紙を使い、それは丁度私の眼をおほう所にとまる。彼女が出ていつてから私は口の中のものを処理しようとしたがいつもの空想とちがいムシヤ／＼とはやれず大部分吐き出した。ひる近く居間からの音。然し私の動作がおそかつたので気配が残ったのか、それとも明るかつたせい、彼女は私に気付いたようだった。少くとも用便後立上つた時いつもとちがつて顔は下を向いて私の方を見ていたのだ。然しそのまゝ出ていった。明るいといつても暗さになれた私の目でのこと。外から入つて来た彼女の目に、踏板の下の暗黒部分にいる私が認められたかどうかはつきりしない。しかしとにかく下を向いたのだし、そして何も言わなかつたのだ、私の手紙をよんで了解してくれたのだろうか。「あの馬鹿がいるわ」と思つたのだろうか。彼女は家を出ていった。夜七時半迄退屈。帰宅後の贈物を頂戴して退散。暗いので彼女が下に注意したかどうか分らないが動作はいつもと同じようだった。

第四日。風は無駄が多いのでやはりはじめのように夜をわらう。物音足音話し声などから家の中のことが実によく分るので自分でも驚く。今日は誰か友達を連れて来て夜おそくまで遊んでいた。女友達三人とマージャンなのらしい。居間の戸はヒンパンにあき××××を区別できるのは便所の戸のあけ方だけだ、一度まちがつてお客さんの時顔をさしのべてしまったが、途中の身動きは危険なのでそのまゝ洗礼を浴びた。彼女以外の人ののははじめて。しかし女中などと違いどうせ名のある女優か何かにはいないし、若い女性という

ことは恰好でもよく分つたから大して嫌ではなかつた。

第五日。今日は運悪し。やはり夜忍入り、帰宅後の頂戴し、次に就寝前の飲んだら帰ろうと思つて隠れている時、女中がメンスの手入に来、綿を沢山取落して下をさがしたのでとうとう見つかった。大声をあげて飛び出していったのですぐ逃げ出せと思つて、汲取から出て服の包みをひつつかんで逃げかけたが、シャツ丈で道を走つてはいけなさとズボンをはいてる中、電話でかけつけた警官に懷中電燈で見付けられた。今日帰宅後の口を受けてたためシャツはあまり濡れてないので助かり「忍び込んだが物音がするのでそのまゝちつとしていた所だ」といった。家人に首実験されるおり××××を初めて正面きつて見たが、××××の表面には驚愕と憤慨とを浮べた表情の奥に、その目に私を見る憐憫の情があつたのを認めたのは私のひが目か。三日目のひる、××××はやはり私を見付けそれ以後は私がいるかも知れぬことは承知だつたのではないだろうか。少くとも警官を呼んだのは彼女ではないのだ。警官も僕が何も盗つてないのと、昨日までの被害がないとの××家の言とから、僕が今日始めて忍び込んだ所と信じているらしい。

以上がNの手記である。然し変態者の常として欲望が実現したようなウソをつくことがある。或は本当にこの通りだつたかも知れず或は実際は見付かつた晩に忍び込んだ丈で運悪くすぐ見付かつたのかも知れない。しかし初めに書いたように××××が私からこの手紙を請求された時、大切にしまつていたことから見ると、案外気がついていていたのではないか、そしてNの願いを容れ、知らぬふりをしていたのではないかという気もしないではない。Nの手記が真か偽かは読者の判断にお任せする。



謎の男えへへ大人シリーズ 第二話

えへへ大人シリーズ  
ましろんち  
魔性私刑



街啓介  
文曾根三郎



## 見つかつた男

開け放された二階の窓から、爽やかな緑風が迷い込んで、豊麗な明子の頬を、甘くくすぐつた。眼下に展開する関門海峡は、五月の太陽を眩しく浴び、きら／＼と鱗波を立て、大小様々の色彩を撒いた船舶、飛び交う鷗の目に滲む白さ……総べてが、詩情溢れた、美しく和やかな画である。

（この素晴らしい眺めも、或いは今日が最後に成るかも知れない。）

明子は不図、胸に切なく湧く憂いを覚えてその大柄な咲き競うダリアを思わす華艶な顔を曇らせた。この風景だけでなく、今では深い離れ難い愛着を持つ日本の土地からも……いや、それにも増して、極度の憎悪と狂おしい迄の思慕の、相反した感情で探し求めて来た男とも、いよいよ永久に、おさらばを告げねばならぬか判らぬ、土端場に立たされてゐるのだつた。

もう帰つて来るはずの芳村の報告が、はつきりと、あの男だと云つたら……。その後に来るものは、何であらうか？一人の、洗練された智的な風貌と、とぼけて、えへへへと笑う、二ツのマスクを同時に持つ男の、血塗れ

に成つて悶絶する姿と、無限に雪と氷に凍結され、荒涼とした生れ故郷、北満の曠野とが痛ましく脳裡に点滅した。

あの男であつてくれ！と、意気込む願いと、あの男でなければいゝがと、臆病げに祈る複雑な気持が、明るい五月の季節さえ、彼女から忘れさせようとしていた。

階下が急にざわめいて、荒々しく階段を踏み足音がした。芳村が帰つて来たのだ。明子思わず身を堅直さして迎えると、

「たゞ今。」

無遠慮に飛び込んで来た芳村は、満面に会心の笑を湛えて、明子に向い合つて腰を降ろした。

「お嬢さん、お悦びなせえ。確かにあの野郎に間違ひありませんぞ。」

明子は、ぎくりとしたが、それを上手に隠して、

「お前は、はつきり見たんだね！」

と念を押した。

「見た段じやありませんや。ほら。」

芳村は手にした膨らんだ紙袋をテーブルの上に置き、ぱりつと裂いて拵げた。転び出たのは街角なぞで売っている太鼓焼である。

「これは、彼奴が焼いていたのを買つて来た

んです。真逆この俺が、北満の山猫、楊芳鬼とは、さすがに氣付かなんだようですぜ。」

芳村は得意げに太鼓焼を頬張つた。

「やつと苦勞が報いられ、いよいよ故郷へ帰れますぜ。」

芳村は、にや／＼と妖しく淫らな眼を輝やかせて明子を真正面から見降ろした。その言葉の裏の意味を知るだけに、明子はぞつと背筋に悪感を走らせた。復讐の為に故郷を出発する時、彼女の兄張学山は、通称えへへ大人と呼ばれたあの男を美事討ち果して帰つたら、妹を遺ると芳村の楊芳鬼に誓約した。明子も又あの男への憎悪に激昂した儘で承諾して了つたのである。

「処で彼奴を、どんな方法で殺らそうと考えているんですか。みんな俺達に任せてくれますかい？」

「いけないわ。何しろ今迄に、何度刺客に襲われても、巧みに裏を掻いて逃げてゐる相手なんだから、充分に計画を立てた上で、用心に用心を重ねないと失敗するよ。一応みんな集つて協議するのよ。」

明子は嚴とした口調で云つた。アジア諸国の言葉は自由に喋り、一見脾弱そうだが、柔道剣道唐手の達人だし、何よりも怖いのは天



才的なピストルの名人で、十間以内なら弾で悪戯描きをする相手である。さすがに無鉄砲な芳村も、彼女の言葉に反対はしなかつた。「兎に角、みんなを集めていてくれない。その間に、私もちよつと、様子を窺つて来るから。」

「行つて来るんですかい？」

芳村は、不満そうに云つた。

「念には念を入れぬと、飛んだ間違ひでも起しては、いけないからね。」

「でも、大丈夫間違ひないんですから、行かん方がいゝですぜ。それに……。」

「それに？」

「それが……色は黒く白みたいだが、滅法色

気のあるお神さんと、仲好くやつてゐるんですから。……」

「何を云うの、馬鹿つ！」

荒々しく立ち上つたが、明子の胸には、かつて感じた事のない激しい嫉妬が、むらむらと燃え上つた。

## 裏切られた女

明蘭の父、張景林將軍は馬賊上りであつたが、北滿の一角に独立君臨し、善政を敷いたので、住民共の信

頼と共力を得ていた。その為、滿洲国建設後も、その広茫と果なき曠野と、折曲万丈の山岳地帯を天然の要塞として神出鬼没、日滿軍の手を焼いていた。

日支軍が激突し、日本軍が全支のほとんどを席捲した頃、戦雲の外に悠々としていた張景林の居城へ、珍らしく都會育ちの風變りの旅の青年が訪れた。一見軟弱秀目であるが文武両道に達し、特に易学、天文学に通じ、天才的な弁舌で、社会状勢民族愛などを説いて無学な將軍達を驚ろかし、又一面飄々として掴み処のない、おとぼけ振りで、お上品にえへへと親しく笑い、苦を苦としない大人の風格は、女子供にまで親しまれ、懇願される

儘に足を留め、その多才な学識を、あらゆる面に発揮した。

豪快な父の血を受け継いで、男勝りの娘明蘭は、常に男装して悍馬に鞭打ち、一隊を指揮していたが、この青年の出現に依つて大きな変化を示した。彼の口から聞かされる都會文化の話、人間の愛情の神秘さ、神仏の話などが明蘭を女性として深く大きく目醒させたのである。

地平線に沈む真赤な夕陽に向つて、長く影の尾を曳いて、静かに話し合う二人の姿に、無味殺伐な人々も、暖かい微笑を思い出し、朝の清々しい陽を浴びて武骨な城壘に二人の明るい姿を仰いで、誰れもが心から祝福を送



つた。二人の愛情は急速に進み父達もそれを一家の繁榮の基礎と、無条件で悦び許した。青年は機会ある毎に世界の大勢から日本の真意などを熱心に語つたそれが次第に張景林などの根強い反日感情を柔げ、二人が結婚すると同時に日本軍と和解協定する事になつた。

彼は一躍人氣者となり、鹿爪らしい本名なぞ呼ぶ者はなく、





えへへへ大人と親愛感を盛つて尊敬された。

それが又、一番びつたりした呼び名だつた。

明蘭は幸福の頂上に我れを忘れた。特に愛の営みに於て、彼女なぞ

夢想も及ばなかつた歓喜の数々を教えられた

広い世間に、こんな

にまで男から愛される

女が果しているだろう

か！、明蘭は心からそう

思つた。だから間もなく、

それこそ掻き消される

ように彼が行方不明になり、

その後には様々なデマが流布され

ても、彼女だけは自分

へ寄せられた愛情を信

じるが故に微塵も疑惑を抱かず、

一途にその身を案じた。然し、

周囲の状況は明蘭に焦燥

を与えて、刻々と悪化した。

えへへへ大人は日本人で、日本政府や軍部から特に選ばれた満洲国最高特務機関の重要

## 焼 鼓 太



三 郎

人物の一人だと云うのである。彼は満洲国の癌と成つてゐる張王国を切り崩すべく、重大使命を帯びて侵入したスパイで、その目的が一応和解協定の名目で果されたので、次の秘命を受け、砲煙下の中支で暗躍していると噂

が拡がつた。それが事実とすれば、彼女はただ一つの道具として利用された、余るにも愚かし存在ではないか！、あの熱烈な愛情が、愛撫の数々が、単に血的の為の手段に過ぎなかつたと云うのか！

（そんな事はない。そんな事があつて堪るものか！）

明蘭は、狂おしく絶叫した。

だが現実には冷酷な牙を剥いて現れた。

米英への日本の宣戦布告、それが長期戦に疲労した日本軍を不利にした事が、北満の片隅にまで波及して来ると、張景林の背後には色々と策動の手が伸び、内部からも動揺が起つた。和解協定も危ふく、駐屯した日本軍と張軍との対立が激化した時、えへへへ大人は忽然と姿を現わし、単身張景林達と会見した。が、もうその頃では、日本軍を軽視してゐたので、彼の熱弁も何の効果もなく却つて、スパイとして嘲罵を浴び、互いに激昂の極に達した時、一人が発砲したので、会場は突如、ピストルの乱射応戦となり、それ



が、万一に備えて城内にいた日本軍との交戦にまで及び、張王国は遂に無惨に崩潰した。

父の張景林は、えへへ大人の弾を受けて即死、兄学山を始め主脳部のほとんどが、彼のピストルで傷付いて敗走した。明蘭は一度血塗れで荒狂う彼に縋り着いたが、一瞥をも与えられず突き放されて了つた。

（畜生！瞞されていた！）

明蘭は血の滲むまで唇を噛み締め、血走つた瞳で復讐を誓つた。父を殺し、一族を亡ぼしたのは勿論憎い。だが、それ以上に、信じ切つた愛情が裏切られ、純情を踏みにじられたのが、死んでも死に切れぬ程口惜しかつたのだ。

日本の敗戦後、兄の張学山は敗散していた旧部下を集め、一将校として拾い上げられ、どうやら昔の面目だけは与えられた。それと同時に、張王国の宿敵、えへへ大人への復讐が話題に上つた時、明蘭は率先してその大役を買つて出た。そして馬賊上りの楊芳鬼の芳村を始め、日本人の部下五名を連れて、名を明子と変え、引揚者に成り落まして、えへへ大人を追つて日本へ来たのである。

幸いな事には、かつて芳村達と一緒に、満洲で悪事ばかり働いていた無頼の徒が、相当

日本へ引揚げて来ているので、それを金で買収し、八方に網を張つて、えへへ大人を追求していた。廿日ばかり前、それらしい男が九州から下関へ渡つたとの報に、明子達は海岸通りの中華そば屋満珍軒を根城として必死に探索したが、全然手掛りがなく、なかば諦めていると、昨夜一人の部下から十日ばかり前に、引揚者同志でやつている協和マーケツト中で、荒くれやくざ者数人をえへへへと笑い乍ら手玉に取つた男の噂を聞いたのである。

## 激発する憤怒

明子は、足を留めた。協和マーケツトの前である。人眼に触れるのを避け、控え目な黒一色の服装ではあるが、それが返つて明子の派手な風貌をくつきりと強く浮き彫りにする効果となつて、擦れ違ふ人々を思わず振り返らせた。道路の向う側の露店の蔭から

「御免下さい。」

短い暖簾をくぐつて這入ると、其処に小さな卓子と椅子があつて、休むようにしてある「いらつしやい。」

色あせた軍服に前垂れを掛け、景気の好い向う鉢巻と云う恰好で、明るい笑顔で迎えたのは、すっかり太鼓焼の主人に成り切つては

いるが、正しくえへへ大人の変り果てた姿である。これが大陸に、幾つもの謎と影と重圧を与えた人物かと、明子は感慨無量だつた日本へ来てから、これ程痛切に敗戦を知らされた事はない。

「一皿、お願いします。」

腰を降ろし乍ら、何気なさを装つて云つたが、さすがに声は上ずつていた。

「はい。有難うございます。」

木製の小皿に、出来たばかりの太鼓焼を三箇のせて、明子の前へ持つて来て、

「結構な、お天気でございますね。」

男は愛想よく、茶を注いですゝめ、

「どうぞ、ごゆっくり。」

と云い残して、再び焼器へ帰つて、せわしげに動き出した。

どんな客にでもする、同じ動作なのである少しの不自然さも無かつた。それに対してすつかり硬直して、何の言葉も出ない自分を明子は齒がいく思つた。気付いていないのか？いや、そんなはずはない。続けて二、三人の客があつたが、わざとらしさのない愛想は聞いていても、気持ちがよく、ほのかな暖かさをあたりに漂よわした。

何の味も覚えず、太鼓焼を口にし乍ら、客



と談笑する男の横顔を明子は、夢見る気持ちで凝視した。そうだ。この優しく上品で、特に個性のないのつべりした顔こそ、変装に最も適しているのだ。八つの面を持つと云われたえへへ大人のこれが素顔なのだ。明子の恋人として現れた時には、この顔に、比類ないまでの青春の情熱と、夢と欲喜が溢れていた。激しい息吹きと、甘い囁きは、未だ新しく耳朶に残っていた。

「では、ちよつと行つて来ますよ。」

太い女の声に、明子の甘い追想は破られた。這入つて来た時から、丸く背を見せてメリケン粉を練つていた女が、やれ／＼と云う顔付きで腰を伸ばした。貧乏臭く色も褪せた手縫いの単服を着ているので、相当年輩の女と思つていたが、その媚を含んだ顔は未だ若いお世辞にも美人とは云えぬ何処の長屋にでもいる平凡な色の黒い取柄もない女だった。がずんぐりと白みたいな体は、健康の固りのようで、不思議に色気が満ち溢れていた。えへへへ大人と夫婦に成つているチエとか云う女だと、明子は直感した。

「あゝ、それだけあれば充分だ。それから帰りに、坊やの絵本でも買つてくるんだよ。」  
 顔んこを入れていた手を休めて、男は眼を

細めて笑つた。何か買物に行くらしかつた。

「それからね……。」

チエは、ちらりと明子の方を盗み見てからそつと男に何事か囁いた。その仕草が、花恥かしい新妻みたいの色つぽい。男はそつと首を傾け、頬を寄せて答えたが、チエはくすぐつたげに含み笑いをして曰のような下半身をくねらした。ぶるつと身慄いた明子の全身の血が、かつと逆上して了つた。目の眩む屈辱と憤怒！あの薄汚ない女体が、毎夜、えへへへ大人独自の強烈な愛撫を受けているのだ  
 「畜生つ」

ぎゅぎゅと歯を鳴らした嫉妬の鬼と化した明子は思はず呻いて、前後の考えもなく、ハンドバックを探ぐつて、掌の中に隠される精巧なピストルを握り締めた。その瞬間、目前に黒幕が降ろされたような錯覚に陥つたが、  
 「どうしました、お嬢さん。」

耳元で男のを声聞くと同時に、手が痺れてことりと卓子の上へピストルを落した。

「ほうう！これは珍らしく上等な玩具ですねえへへ。」

片手で明子の手首を握んだ儘、一方の手でピストルを拾い上げたえへへ大人は惚々と眺めた。明子の頬から血の気が失せ、額にじ

つとり汗が浮いて胸が怪しく波立つた。

「ね、お嬢さん。どうでしょう、この玩具、譲つては頂けませんか？内の坊や、とてもピストルの玩具を、欲しがるんですが……えへへ。」

まるで、世間話でもするような平気な男の横顔を、口惜しげに喰い込むように蒼ざめて睨み上げていた明子は、突然、手を振り切つて、脱兎の如く表へ飛出していった。

## 畏 に 陥 つ

チエは、夕暮れの街を急いでいた。朝鮮から引揚げて来る時、特に世話に成つた一家の子供が病氣なので、やつと今日暇を作つて見舞つての帰りである。

「まあ、チエさんは、若返つたね。」

近くの山奥で、炭焼をしている一家の人々は、予期しなかつたチエの見舞いを大騒ぎして迎えてくれ、口を揃えて感嘆した。チエが赤くなり、廿日ばかり前に結婚した事、その相手が、満洲では偉い人だったと、簡単に話すと、

「それは目出度い。あんたの苦勞に花が咲いたんだ」

生死を共にした人々だけに、チエの俸せを



心から悦んでくれた。

然しチエは、現在の夢見るような幸福が、永続するとは思っていない。えへへ大人と云われたあの男は、いずれ何か大きな仕事をするに違いないのが判っていた。自分なぞ永く連れ添える人でない。ほんの一時の気紛れか、何かの方便で懷へ飛び込んで来ただけである。が、それにしても、何と云う誠実さを持つ男であらう。貧乏育ちで無学な上に、不器量と来ているので、男から愛されるなぞ可笑しくて、考えた事もないチエの中から、ほんの僅かな良い点を探し出しては、それを泥中の真珠と讃え、切ないまでの愛情を注いでくれる男を、チエは勿体なく思っていた。

子供の絵本と、男のシャツの入った風呂敷包みを抱いて、チエは、夜毎変化する刺激に富んだ男の愛撫を、楽しく想い出し、全身の血をたぎらせて足を早めた。

「もし〜。お神さん！」

協和マーケットの見える街角を曲つた時チエは、背後から呼び止められた。はあく息使いして追つて来たのは、この辺でよく見掛ける、片目の乞食である。

「何！私に用？」

チエは頬を膨らせて睨んだ。人通りの多い

街中で乞食に呼び止められては、誰れだつて腹を立てるだらう。

「あんたは、協和マーケットの太鼓焼屋のお神さんでしょう」

乞食は、チエの立腹なぞ眼中にない様子だが、何か只ならぬ気配が感じられた。

「それがどうしたの！」

「あんたの処の子供が、自動車に跳ね飛ばされたんで……」

「え？何！正一が！何処で!!」

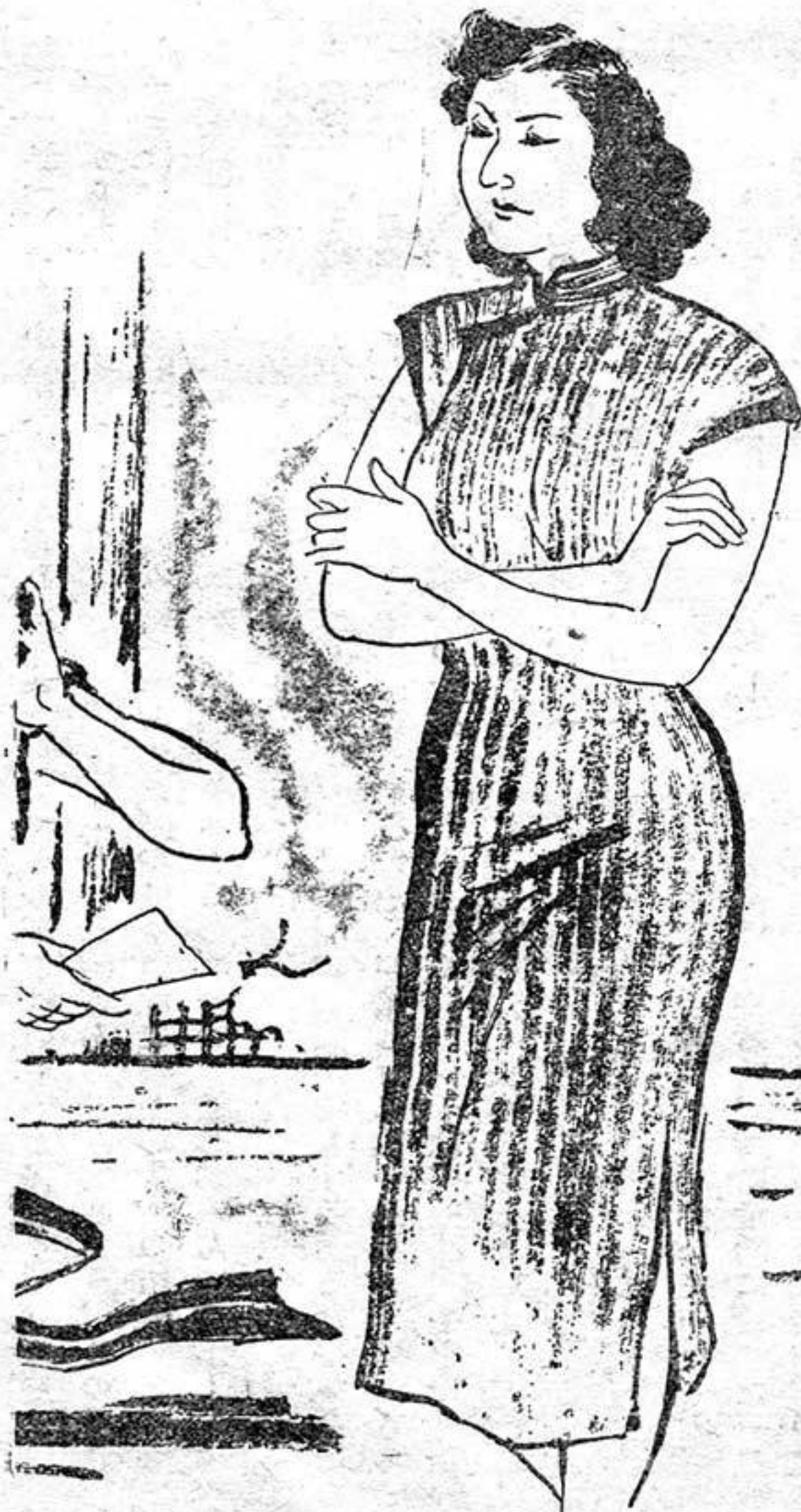
チエは、噛み付くように喚いた。

「か、海岸通りで……、それで自動車は逃げたんで、子供は、あの中華そば満珍軒に……」皆まで聞かず、チエは狂つたように走り出した。何だつて又今日に限つて、あんな方へ遊びに行つたのだらう。正一に万一の事があつたら、どうしよう。

（正一の馬鹿！死ぬんじゃないぞ！）

チエは、人を突き飛ばし、夢中で走つた。

チエの現在の生活を支える二本の柱は、えへへ大人と正一である。特に正一の場合は今後の生涯をも頼る大黒柱だつた。





言語に絶する貧窮に生き抜けて来たのも、正一がいたからである。正一はチエの半身、命の頼り処であつた。

転んで、取り乱して、狂人と云われても、チエは無我夢中で、齒を剥き眼を充血させ、嵐の息を吐いて、もどかしげに走り、やつと目的の家へ駆け着けて見ると、どうした事が表戸は堅く閉ざれ、休業の札が掛つていた。

「もし！開けて下さい。開けて下さい！！」

恐ろしい権幕で、硝戸子を叩き喚いた。

「お、お神さん。こつちだ」

やつと追い着いた乞食が手招いた。横手の露地から、裏口へ廻つた。

「お、来たな」

ぬつと顔を出したのは、芳村であつたが、

チエは相手は何者か知らない。

「あの、正一は、何処にいますか？」

「うん。こつちだ」

芳村に導かれて、変にこてくした狭い道路の奥へ這入つた。

「この中に居るぞ」

芳村の開けた扉へ、只、可愛い、正一の姿を求めて、チエは何の躊躇もなく、扉を入れた。と同時に、どんと背中を強く突かれた。

「あつ！」

と仰天、転げ込むと、その場にいた四、五人の男が蝗のようにチエの襟に飛び付き、声を出す隙も与えず猿轡をかませ、背ろ手に縛り上げて了つた。全く慣れ切つた動作だつた。

「ふ、ん。うまく行つたな」

芳村のせゝら笑いに、チエは始めて瞞されたと思つて、狂うように身を悶えたが、どうにもならず、口惜し涙と恐怖に、がた／＼と身を慄わせた。その時、階段を鳴らして、一人の女が降りて来た。酒を飲んでいたらしく足をよろめかして、

「乞食は？」と、芳村に訊いた。

「へえ／＼。」

芳村に連れられて来た乞食は、扉から醜い片目の顔を覗かせた。女は幾枚かの紙幣と一通の手紙を乞食に握らし、

「必ず渡すんだよ。礼は又後でうんとするか、間違ひなくやつて、約束の時間までに必ず戻つて来るんだよ。」



「へえ／＼。承知しました。」

乞食が、ぺこ／＼お辞儀して去ると、部屋から一人の男が、その後を追つて出た。

芳村と顔見合して、領き合つた女が、こちらを向いて、チエを見た。

（あつ！）

と、チエは、声にならぬ叫びを上げた。今朝店へ来て、玩具のピストルを置いた儘逃げ出した女である。然かも、あの時の令嬢然としたのと別人のように獣じみた眼をしていた



## 嫉 妬 夜 叉

豆灯が一つ、ぼつんと点いただけで、何もない六畳ばかりの部屋へ、チエは炭俵みたいに転がされていた。もう相当な時間が経過している。突然襲い掛つた災難の意味が、未だによく呑み込めない。窓一つない薄暗い部屋の様子や、人相の悪い男がごろ／＼している処から想像すると、この頃噂のある婦女子誘拐に關係がありそりに思えた。が、それなら自分なぞ一番価値がないのが判つていた。あの美しい女は何者であろう？ 考えると、今朝の態度も変である。もしや、えへへへ大人に關りがあるのではないだろうか？ そう思うと気が氣でない。何とかして縄目から脱しようと転げ廻つた。

「うるさいね。何んて往生際の悪い女だ。」  
物音を聞き付けて、二階から降りて来た明子は、熟柿のように酒臭い息を吐き乍ら、いま／＼しげに、チエの頭髮を掴んで、畳に摺り付けた。チエは苦痛に呻き恐怖に顔を歪めて喘いだ。

「今朝はよくも私に面当てみたいに、仲の好い処を見せてくれたね。この口で何を云つたんだ。この乳房を、毎晩こんな風に、可愛が

つて貰うんだらう！」

乱れた胸元から覗く、チエの大きな乳房を明子は留々しげに捻じ廻した。チエが自由を奪われた軀を、のた打ち苦悶すると、

「この腹が、この尻が……。」

と、曰のような肉塊を、明子は矢鱈に冒瀆しながら夜叉のように笑つた。

嫉妬に狂乱した明子は、えへへへ大人を知つてから一滴も口にしなかつた酒を、今朝から手当り次第に自棄に飲み続けた。

その強烈な酒は、長い間、理性と努力で抑えていた生れ乍らの、馬賊上りの父より受け継いだ荒々しい血潮を、再び狂喚させたのである。

ぐつたりと、もう諦めて、たゞ怨めしげに見上げるチエを明子はさも満足げに眺めて云つた。

「もう騒がないのかい。じゃ、いゝ事を聞かしてあげようね。今にお前の恋いこがれている旦那様がお前を連れに来てくれるよ。今八時四十分だから、もう二十分、九時かつちりにね。万一警察へなぞ知らすと、お前の命を即座に断つと、手紙に書き添えると、必ず一人で行くと、最前あの乞食が返事を持つて来たからね。あの男は一人で来るだらう。何し

ろお前が可愛いくて耐らないんだからね。その時には、ちゃんと店の間では、お客みたいな恰好をした、十何人もの男がビストルを構えて待つてゐる。私がカウンターのこちらから会図をすると、扉を締め、一斉に発砲する手はずは、ちゃんと出来上つてゐるんだからお氣の毒みただけど、お前が御対面遊ばす旦那様は、蜂の巣みたいに弾を喰つて血塗れで死んだ旦那様だよ。ほほほほ。」

チエの眼が、驚愕に物狂おしく血走るのを明蘭は、毒々しく笑つて、

「まだもう一ついゝ事を教えてあげようね。旦那様が救けに来て殺される時、のんびんだらりと、こゝで寝転んでいては、申訳ないだらうから、お前にも分相応な事をして上げるよ。ほら覚えてゐるだらう。あの乞食、お前を親切にこゝへ連れて来たり、旦那様への手紙の往復なぞ、随分よく働いてくれたので、お金のお礼の上に、お前の軀を思ふ存分に弄らしてやると約束したのよ。どう？ 中々名案じゃない。乞食に強姦され乍ら、旦那様の断末魔の呻きを聞くのも、又変つた味だらうからね、ほほほほ。」

明子は、勝ち誇つた悪魔のように、無氣味哄笑をした。何と云う慘酷極まる淫らな構想



なのであろう。嫉妬は女の魔性を斯くまで露骨に、むき出しにするものであろうか！チエ蒼ざめて、人間の想像も出来ぬような悪魔の私刑に身を晒さねばならないのだ。その時、憶病げに扉が叩かれた。

「誰？」

明子が、鋭く訊くと、

「へえ……あの、約束の時間なので……」

どうやら、今の話に出て来た乞食らしい。

「お菰さんだね。お這入りよ。」

明子は、浮々と答えた。

「へえ……」

そつと扉が開いて、おず／＼と覗き込んだのは、汚れた型のない登山帽に、穴だらけの悪臭を放つ服を着た例の片目の乞食であつた。

「嬉しそうだね。お菰さん。」

「へえ、へえ。」

「どう。私のこゝろ見ている前で、この女をものにして見ない。」

「それはどうも、なんぼなんでも……」

「恥かしいのね。人間並に……ほほほほ。じや遠慮して上げようか。何なら電気を消してもいいよ。その代り、この女は大切な人質なんだから縛めに触つたりしたら、お前も一緒に

地獄行きよ。」

「それあへえ、よく承知していますへえ。」

「じや思い切り、御馳走におなりよ。丁度似合いの花嫁さんよ。ふふふふ。」

明子は、上機嫌で部屋を行て出つた。それ待ちかねたように、乞食は豆電灯を消して手探ぐりにチエの軀を抱き締めた。

## 裏をかゝれた私刑

もう駄目だ。乞食に辱かしめられる位ならいつそ舌でも嚙んで死んだ方がましだと思ひ詰めたチエの耳元で、

「僕だよ。僕だよ。えへへへ。」

と、押し殺した声で囁いたのは、意外にもえへへへ大人であつた。チエは我が耳を疑がい眼を張り裂ける程開いたが、真暗な底なので何も見えない。

「直ぐ縄も狼轡も解いてあげるが、絶対に声を出してはいけないよ。そして僕の云う通りにするんだ。判つたね。」

間違ひはない。地獄で仏とは、正にこの事である。どつと溢れ出れ出た嬉し涙と共に、チエは暗の中で大きく頷いた。それは相手に直ぐ通じたらしく、手足の縄は、鋭利な双物で切断され、狼轡は外された。あゝ助かつた

！然しまだ安心は早い。恐ろしい悪魔の巢窟の直只中である。慌てゝ飛び起きようとする、えへへへ大人は、上から被さつて抱き締めて動かさず、耳元に口を押当てゝ云つた。「今変に騒いだり下手をすると、二人共殺されて了うよ。じつとしてゐるんだ。僕が来た以上、大船に乗つた気で居ればいゝ。ちゃんと計画は出来上つてゐる。君が僕の云う通りに動いてくれゝば、こつちの勝だよ。今少しの間は、こうして二人は、抱き合つておればいゝのだ。えへへへ。」

何んと云う呆れ返つた事を云うのだらう。そう反駁し乍らも、不思議にチエの心には、僅かの落着きを感じられた。この男の言葉に従つて居れば、どんな場合にも間違ひはないという絶対の信頼感である。処が、その次に男がしよとする意図を知ると、血の凍る思ひがし、

「いけないわ！」

と、口の中で叫んで、懸命に拒んだ。この生死紙一重の危機に晒された中で、太胆と云うか無神経と云おうか、えへへへ大人は、図々しく愛の営みを始めようとするのだ。

「いゝんだよ。こうする事が、今の二人にとつて、最も自然なんだ。こうするうちに、ち



やんとお膳立てをしてくれているんだ。こうする事が何よりも安全なんだよ。えへへへ」  
 そう人もなげに笑つて、チエの乳房を握つた。

その時、足音が近付き、扉が開けられた。  
 「どう、お狐さん？ふふふふ。」

明子の悪魔のような声である。勿論真暗で人影も見えないが、チエは、胸元へ七首を突付けられた気がし、息も出来ず男の躰へ夢中で獅噛み付いた。

嫉妬の夜叉と化した明子が計画した魔性の私刑は、えへへへ大人に依つて完全に裏を掻かれ、画餅に帰した。

チエを人質に取り、えへへへ大人を誘い出す手紙を持つて行つた乞食は、逆にえへへへ大人に捕えられ、威喝されると、元々悪党でなく、金欲しさで働いただけなので、何も彼も喋つた。大人は乞食に成り済し、返事を持つて満珍軒へ来て、様子を探つてから、警察の協力を求めた。満珍軒の主人は馬賊上りの強か者で、最近巷を騒がす、婦女誘拐の黒幕と睨んでいたが、何の証拠もなく手を空しくしていた警察では、即座に出動を約した。それから再びえへへへ大人は乞食として、チエの躰を弄ぶ約束で、奥深く乗込んで了つたの

## 女性陰毛の生理

—多毛者は果して多淫か—

田 中 芳 生

陰毛は第二性徴の一であつて、生殖腺が成熟し、性ホルモンの内分泌が始まると共に発生すること、腋毛、鬚髥等と同じであるが然し他の毛髪とはその状態及び性質を異にしている。女子は思春期に達するに先立ち、既に陰部の処々に軟弱なる小毛を発生しているが、次いで思春期に達した後は、次第に濃厚なる陰毛を生じてくる。然して其の發育は先ず陰阜の中央部及び大陰唇の辺縁より始まるのが普通である。最初に発生する陰毛は多くは鉛直であつて、捲縮すること少きも、既に十七八才以後となれば、殆んど常に屈曲捲縮し、螺旋状、或は転回す。而して其の陰毛は陰阜の中央部に向うに従つて次第に濃厚強剛となりこれに反して陰阜の周辺に赴くに従つて稀薄となり薄弱となる。

毛髪の中で最も強剛なのは鬚髥であつて、其の直径は〇・一四——〇・一五ミリメートルであるが此れに次ぐは女子の陰毛でその直径・一五ミリメートルである（男子の陰毛は〇・一一ミリ）但し男子に比すれば通常短かきも、其の直径は遙かに大であり且つ強剛なることは夙にパツフの認めた処である。

女子陰毛の排列状態は男子に比して大いに異つてゐる。男子に於ては陰部より下腹部に向つて上行し、臍部に達して上方に尖頂を有する三角形の状態に排列し、また一方には肛門部に及ぶものであるが、女子に於ては多く陰阜に限局し、外方は僅か大陰唇、下方は会陰の中央部に達するに過ぎない。

陰毛の色は頭髮に一致することが多い。又女子の陰毛は腋毛と一定の比例的關係を有し



である。

満珍軒一味の悪業は、その後の新聞を賑わしたが、それを見ずに、えへへ大人の姿はチエの太鼓焼屋から忽然と消えた。何処へ行ったのか、誰れも知らなかつた。チエはさすがに淋しそうだつたが、それは当然な事であると、諦めてせつせと働いた。

(又、何日か私の懷へ戻つて来るかも知れないと、そつと一人思つていた。)(終)

## 娘の心理のナゾ

或る女が私にこういう事を告白した。毎月必ず一遍づゝは私は思い切り泣く、そうして泣くことの快さと泣いてからの快さは私を恍惚忘我の境に誘い込むと——。これは意味深い言葉である。毎月一遍は必ず泣くというのは彼女の月経と非常に密接な関係があるという事は先ず第一に観察出来ることである。

そして又泣きやんでしまつた時には晴々として快感を感じるといふのも面白い。とに角愛する者にいじめられて喜び、或は泣いて快感を感じる心理は、分析して何かの心理的要素に持つて行くべきものではなしに、むしろ本原的な感情であるように思われる。

腋毛の多い者は従つて陰毛も多い。また眉毛の強く発生する者に於ても同様である。併し頭髮とは一定の関係がない。

ペアーは陰毛少き女子百四十四人の中、其の七十二人は頭髮の濃厚なるを見た。また陰毛が全く欠除し、或は殆ど之を有せざる者を女子の三%に於て認めた。女子陰毛の密度もまた個人によつて種々である。ペアーはこれを形容して、或は扁平にして捲縮せる芝草の如く、或は密生して高く茂れる藪の如きものありと云つた。

陰毛は内部生殖機関の發育と密接の関係を有し、幼年時代に於いて卵巢を摘出された者は決して陰毛を発生しない。卵巢の發育不完全なる者に於ても又同様である。プラントは子宮及び卵巢の發育不完全なる一処女に就いて頭髮の長く發育せるにも拘らず、陰毛が毫も発生しなかつたことを見た。斯くの如く陰毛は生殖機関の發育と一定の関係があるから陰毛の多き者は従つて内部生殖機関の發育も完全なると共に、性慾も又強きことを唱うる学者もある。

ミツハエル・スコットは頭髮及び陰毛の粗剛にして、且つ捲縮せる女子は性慾強しと言ひ、ルーボは陰毛の密度、色、及び捲縮の状

態は性慾の強弱を制定すべき尺度なりといふ。マルチノーは生殖機関の發育愈々完全なるに従つて、陰毛も多く発生するものであると記し、タルジュは色情の濃厚なる女子に陰毛の多きことを説き、ペアーは二千二百人の売笑婦を検査して、その陰毛の著しく密生した者の多数を発見したが、斯かる者は色情の念甚だ盛んであると云つた。

然し陰毛の発生發育が、生殖腺の發育成熟と一定の関係のあることは明白であつても、然し陰毛、多寡を以て性慾の強弱の尺度となすことは疑問である。即ち陰毛が欠除し或は寡少なるものにして、性慾に濃厚なる者も決して勘くない。江戸時代の文化文政の頃「かわらけお伝」と呼ばれて、陰毛の欠除した女性にも拘らず甚だしい淫婦で数十人の情夫をこしらへ、世間に醜名を流したことは隠れもなき事實である。元來性慾は生殖腺の内分泌物によつて発揚興奮するものであるけれども、然し性慾其の物は腦の官能の一つであつて、生殖腺必至の関係あるものではない。従つて単に陰毛の多寡のみによつて性慾の強弱を推定せんとするが如きは偏見と云わざるを得ない。





## 今は昔戦線エロ落穂集 (二)

### 下出章一

#### 三段階

前進強行、漸く夜も深くなつて宿営地が決定すると、一番先に慰安所が設定される。女たち(殆ど半島出身の)はトラックに乗せられて、部隊の殿りに従いつてきている。

まず、兵卒の中から、その設定の使役が選抜されるが、志願者が多いので抽せんということになる。

何故にこゝした使役の志願者が多いかという、使役は役得で、一番先頭に列ぶことが出来るからである。

慰安所は概して三段階に定められて、将校用、下士用、一般兵卒用となつていくが、おのずとその格によつて、慰安婦の美醜に差があり、待遇にも別がある。

では、部隊長は慰安の必要がないかといふと、部隊長は後方に第二号が待機させてあつて、宿営地が決定すると、戦闘軍用機に塔乗し、銘酒、スルメ、鶏肉な

ど、ホルモン豊富の御馳走を持つて飛来するから、下士官以下にはその秘密は洩れず、部隊長は品行方正の人格者のように思われている。

#### 人間模様

部隊長だとして人間であるから、戦時中だからといつてキリストのような潔斎を求めるのが無理というものである。陸大出の将官だといくぶん少いけれど、予備役から召集されてきたような幹候上りの佐官級になると、地方にあつた頃、相当の猛者であつた者が多いから、その陣中の性生活はまことに乱脈を極めたものであつた。

彼等が内地勤務の時は、家庭にキウウキクジョとして仕える奥様がいます。概ね政略結婚が多く、上官の娘たちを買つていたので、常に、奥様の前では頭が上らない。それが満洲の野に野放しにされた

のだから、急に人間模様が一变するものも無理ではない。それに明日をも知れぬ危い生命で、半ば、自棄が手伝つていながら、乱行など、赦されてもいふと、彼等は、ヒトリで決めてかゝつていふ仕末であつた。

上長がそれだから、将校以下がタケリ立つのもエトワリである。本俸は内地の家庭に下附されていて、戦線では本俸に幾倍する戦時給が支給されているから、それが野放図な遊蕩を敢てするのだ。

戦線に立つたものでなければ、その消息は判らないが、敵と対峙して寸尺の油断ない緊張した戦闘中は、むろん情慾は忘れていくが、斗いが済んでヒトリになると、熾烈な助平根性が熱湯のように心の中に沸き立つてくるものである。

#### 愛憎

さて、兵卒の使役がアンペラを連んできて急拵えの慰安所を作り上げる。アンペラで四囲をかこい、お粗末なベッドの中に設けてやる。女が、その仕度にかゝる頃は、ちやうど戦時中に、配給物貰いに群衆が立ち列んでいた光景とそっくり





で、一列縦隊にズバリと列んで兵卒たちは張り切り乍ら待機しているのである。

「おい、割込むと承知センぞ！」

「列を乱すなよ」

などと、兵卒たちは締めきつて、小競り合いさえ惹起している仕末である。

兵隊たちはサカリのついた吐馬みたいなものだから、すでに斗わざる前にサルマタを濡らしているテアイも居る。

隔日位に一人の慰安婦で一時に、数十人の客を優遇するということは至難なことである。そこで彼女らは、一種のテクニクを用いるのである。

例えば、全裸になつてベッドの上に横たわっている。そこへ、興奮の頂点にある若い兵隊がMボタンを脱しながら入ってくる。

「あんた、ちよつと待つてよ」

そう言つて女は、ストリップのまゝ立ち上つて、踊りくねるようなポーズをつくつてみせる。

そうなると駄目で、若い兵隊はいよいよという場合、門前であつさりお払い箱になつてしまふのである。

「もう一寸！」

と申込むと、

「アトが控えているからネ。愛は万べんなくバラ撒きたいからね」

と姐御は仰言る。

それ故に、一時に、数十人の客がトレるという訳で、マトモに向つたら、それこそ、数日で腰が抜けてしまふに決つてゐる。

彼女らとても真剣なのである。一人五円の料金をとつて、シヨタマ貯金し、一日も早く故郷の半島へ還りたいのだ。

彼女らが持参している支那鞆の中には数万円の軍票や紙幣が藏われてある。それに、特別の待遇をうけようとして、兵隊たちはこつそり貴重なタオルや缶詰や煙草を寄贈するのである。

だから、慰安婦たちはみんな財産家揃いだ。自から身銭を切つて、惚れた美男の兵隊を購うような場合もある。

塩田という万年一等兵がいた。衛戍監獄出で員数除外者の猛者であつた。その塩田ある日、列の中から出て、前列の戦友に言つた。

「オレは、急にウンコがしたくなつたから、ちよつと行つてくるが番を頼むぞ除

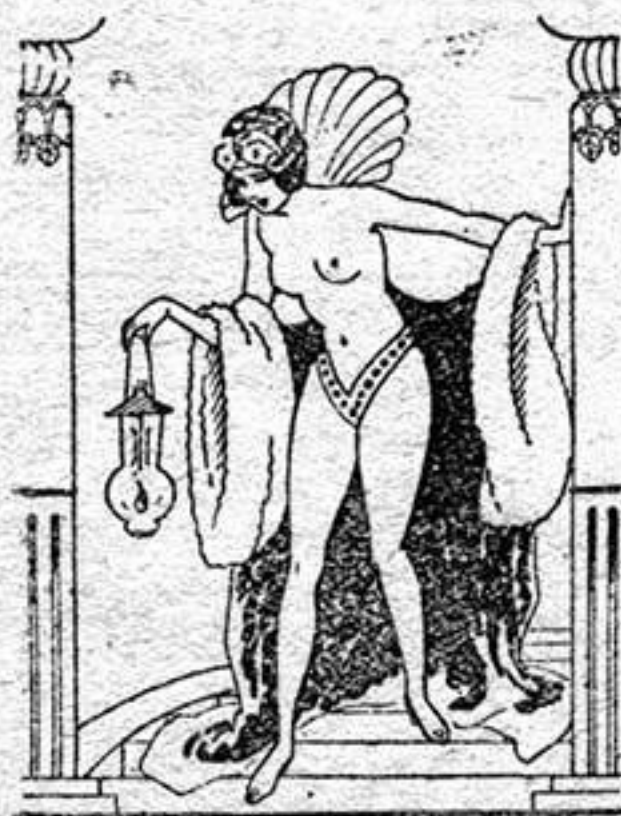
外したら許さんだ！」

そう言つて麦畑の中へ塩田は身を隠した。実は脱糞というのは嘘で、折角、タマイ五円をフンパツして、門内一瞬洩水では損も甚だしいとそう思つたから、この機会をいとも有効に使うために、彼は麦畑のウネの中に蹲むと、いきなり自瀆をやり出した。

「さア来いッ」

立上り、軍袴の紐をしめしめ畑の中から走り出て来た。

この隊内で慰安婦を手こずらした者はこの兵隊だけであつた。塩田はこの方法を自家ドクトクのものとして、秘かに専売特許だと称していた。(つづく)







「お母ちゃんうち歌劇のスターになるわん」と、母親を驚かしたのも昨日の事の様に思

(一)

われる。昭和十一年O・S・Kの試験場に周囲の反対を押し切つて自分から飛び込んだ十五才の矢野元子は、千八百人の中からの八十人の一人に選ばれた。負けん気の押しで行く

彼女の不屈の精進が、「京マチ子」の名をぐんぐん伸ばして、新人の秋月恵美子の人気にせまろうとしていた。

「うち、あないなことようせんわア……。」  
「少女歌劇はストリップ・ショウとちがうでエ」

工場に兵器を作る火花が散り、日夜空襲に怖えきつた人々に再び春がよみがえつた。華やかなリズムの弾圧の手がゆるめられると同時に裸体ショウやきわどい色慾劇が巷に氾濫して来た。松竹少女歌劇へも、そのむせかえる様なエロチシズムが滲透してくると少女たちに清新な自尊心を傷けられでもしたように頬をふくらました。

「何も勉強や、自分からストリップ・ショウや思ふたら芸がみだらになるばかりや」  
その中であつて、京マチ子は自分からスツポリ衣裳をかなぐり捨てた。均育のとれた若鮎のような四肢を惜し気もなく現わして。……

「京マツちゃん」

支配人の松浦要が、舞臺の袖から度の強い近眼鏡をのぞかせていた。敗戦から漸く立ち上つた新しい日本のその様に、京マチ子も、やつとロケットガールの群れからぬけ出



# 星の惑銀幕

## 京マチ子

小説

して、一人歩きが出来る程になつた時だつた。今日は「セントルイスブルース」の舞臺稽古、ブギを踊る京マチ子は、みじかい腰裳だけの黒人の姿で、近寄つて来た。

「あんなア、どうせ稽古のとれるのは二時三時やろ？電車はあらへんし、わしの車が来るよつて乗せたるわ……」

松浦支配人は、彼女のむつちりした胸のあたりを眼でなでながら云つた。

「おゝきに……そやけど、うち一人だけやないし、明日の初日は早いんですさかい、みんなと楽屋へ宿りますよつて」

「えゝやないか、みんなはみんなや……車は一人乗つたかて二人乗つたかて一緒や、送つたる。稽古しもたら仕度して支配人室へ来や、えゝな、待つてでエ」

五十男の押しの強さに、舞臺の上では猪武者のように負けん氣のマチ子も、け押されて口をつぐんだ。十九の娘は、周囲の嫉妬の眼を恐れた。一にも踊り、二にも踊り、ただその情熱の炎の中に身を投げてがむしやりに下運な境遇から浮かび出ようとがいて舞臺の上の妖女は一たび踊りから離れゝば、平凡で内氣でひかえ目勝ちな世間一般のありふれた娘だつた。

「フムムそのハンドバック支配人さんから買うてもろたん……？」

鏡台をならべている青島ルミが、アイシヤドウを眼の上にすり込みながら云つた。

「えゝなア、京マツちゃんは何んでも支配人さんから買うてもろうさかい……うちもジー・アイさんでもみつけなアカンな……」

その言葉尻をつかまえて、三枝あけみが鼻の先で笑つた。彼女は、O・S・Kの頃からの同輩で、京マチ子がぐんぐん他を押しのけて十七の春、オペレッタ「春の散歩」で、一躍スター勝浦千浪のパートナー・ケティを演つた時から、敵愾心を持つてゐる一人である。それが女のみにくい小さな嫉妬であることを利溲な京マチ子は知つていた。

「その洋服もかいな……結構やなア……どこぞにうちもえゝバトロンあらへんやろか……？」

「あほ云いな、只でえゝもん買うてくれへんで、大事なもんと交換や……」

「そら、かなわん……」

二人の同輩が、同時に笑い出すのへ

「あんたら何云うてんの？なんぼ友達かて云うていゝことゝ悪いことがあるえ……そんなつまらんこと勝手な当推量で云わんといはしいわ」

たまりかねた京マチ子が、膝の上の編みものを放り出して立ち上つた。

「ハンドバックも洋服も何一つ買うてもろた覚えはあらへん！洋服は、うちの少ない給料から買うたのやし、ハンドバックは、お母ちゃんに買うてもろたんや！」



「頭の禿げた、背広着たお母ちゃんや」

どこかの隅で、小さな声が聞えた。

「阿呆なッ！うちは誰の前でも真つ直ぐ向いて云える。うちの眼が本当か、嘘か正直にあんたらに証明してくれると思う。あんたら、それでも云えるならなんぼでも云うたらえゝわ、なんぼでも笑うたらえゝわ」

流石に楽屋の中は、しーんとして、中にはこそ／＼部屋暖簾をわけて出て行くものもあった。

あんなことがあつて、まだ間もない今日だ。京マチ子は、なぜあの時ハッキリ松浦支配人に断らなかつたのだらうと、今更、重い心に引きずられた。楽屋風呂で賑かに若い娘たちが囁つているのを聞きながら、彼女は黙つて黒人のドーランを洗い落していた。上背もあり、もうすっかり女の躰になつている京マチ子は、そのポツチリ薄桃色で、開きかけた蕾のような乳首を両手で押えて湯舟につかりながら、やつぱり断つてこようと、心に決めていた。

その為に、支配人の機嫌が悪くなつても、それは止むを得ないと、そこまでつきつめると、湯玉を散らして浴室を飛び出した。

## (二)

「何や、帰り支度して来えへんかつたのか？待つてゐるんやでエ」

案の定、支配人は眉を曇らせて、彼女のタオルの部屋着に紅い模様の銘仙の羽織を引つ掛けたゞけの姿をみやつた。

「うち……やつぱり、お友達と楽屋へ泊ります……すんません。今までお待ちして……」

「そら、わしかて支配人と云う責任上舞台稽古とれるまでいんならんのやからかまへんが……あんたも強情やな、人の好意を無にするもんやないで、素直に送つてもろたらえゝやないか……」

彼はやたらに外国煙草をふかしながら、その煙草の中で、京マチ子の熟しかけた躰の匂いを楽しんでいた。

「そやけど……よわつたなア」

彼女は、三枚目に顔をしかめてポリポリバーマネントの頭をかきながら

「どないしよう！又、お友達に云われるわ」と、黒人のブギの真似をして、大袈裟に両手を上げた。

「何を云われるわん？」

「何つて……支配人さんとの事ですわ……」

「わしのこと……？」

「つまり、何ですわん……うちのパトロンやつて……」

「ハムムムムパトロンか、そら、えゝ……よつしや、パトロンになつたる！ほんまにパトロンになるで、京マツちゃん」

「いや、かなんわ、そんな真面目な顔しやつて……そう思われんようにと思つて……」

彼は、吸いさしの煙草を灰皿の中に捲き込み乍ら

「なア京マツちゃん！」

と、いきなり腕を伸ばして来た。

「あッ！」

と後ずさりする彼女の躰は、男の力でしっかりと抱きすくめられた。深夜の劇場内は、無気味な程ひっそりとして、支配人室に当てられている地下室のこの部屋へは、二階、三階の女の子たちの、陽気なお喋りも届かなかつた。

湯上りの若い女の肌は匂うように鼻腔をくすぐり、それがために、男の官能をいやが上にも煽りたてた。

「いや、いやよ、いやよ」

と、マチ子は今は夢中で身をもんで、五十男の強引な腕の中から逃れようとあせつた。



「京マツちゃんや！えゝな、そない騒がんと落着いてんか……わしはな、京マチ子の稽古熱心に惚れた。ついで、その烈げしい気魄の籠った舞台に惚れた……そして今は、京マチ子その人を愛するようになってしまった……いや、も、ちち、ちよつと聞いてほしいのや……わ……てわなわしは、この年になつてあんたを自分一人のものにしようなどそないな厚かましこと思わへん……只、只、一度だけ……一度だけでえゝのんや、わしのものになつてほしい……なア、えゝやろ……一度だけでえゝ……」

あえぎ／＼云う男の顔を、マチ子は頸を振つて右に左によけながら  
「いけません！うちを放しとくなはれ、声たてまつせ」

と、身をそらした。いつかタオルの部屋簾が肩からずれて、細帯一つのたよりなさは、身をもがけばもがく程、淫らな姿態をさらすばかりだつた。男はいよ／＼猛りたつて

「わしかて云い出したからには、恥ををかくだけでは後に退れん！えゝ魅して……どや……これ」

彼は、無理に着物の胸元をひろげ、ぐい／＼自分の体を押しつけながら、次第に肩か

らはずして腰の辺りまでおろしていつた。

「いやア！誰か、誰か来てエ！支配人さん！

貴方は卑怯です。貴方も男ならこんな弱いものいじめは、や、やめて下さい。う、うちが

声を立てたら、あ、あなたの信用は失われてしまふのです……あ、あなた

の今の地位はいつべんに無くなつてしまふのです」

「地、地位も、信用もいらん！今、ほしいのは、は、あ、

あんたの魅だけや！」

マチ子は、

「あッ！」と思わず身を硬くした。いつの間に細帯の結び目を解いたのだらう。スルリとわけもなく、彼女の着物が床へぬげ落ちた。舞台では、

大胆に衣裳をかなぐり捨て、思いきり腰を振つたフラダンスも演るが、リズムのともなわなないストリップは、まつたくたまらなかつた。

しかも、牙を研いだ野獣が眼の前に貪慾な眼を光らせているのだ。男は、夢中でパンツ一枚のマチ子を、側のソファに押し倒した。

ソファの弾力でパウンドしながら、二つ

の魅が折なり重なつ



Toshiyuki



た。

「いけないッいけないッ誰か、誰か来てエ  
！」

彼女は悲痛な声をふり絞った。相手が、野  
獣であれば、何の躊躇<sup>ちゆうちゆう</sup>もいらぬ。こつちも  
野獣の餌になる前の羊のように、あらん限  
りの身を守る最後の叫び声を、たてるより他  
はない。男が死んでくれば、こつちも死んで  
抵抗するだけだ。彼が呼吸を弾ませ、慾情の  
渦の中で身をのたうち、ベツとり汗ばんだ手  
を彼女の腰部から前に廻し、ズロースのゴム  
をずり下げた時、コッコッコッとして階段を降り  
て来る男の靴音が聞えた。

はッとゆるめた彼の腕の中から、素早く身  
を逃れるとマチ子は風のような早さで、部屋  
着の袖へ手を通した。死闘は終わった。軽いノ  
ックと一緒に、彼の運転手が帽子をとつて慇  
懃<sup>きん</sup>に挨拶して云った。

「車が参りました」

支配人は、背広の襟を正し、気むずかしい  
顔で黙つてうなずいた。

彼の靴音が又階段を昇つて行くと、「フー  
ッ」と、大きくふいごのような息をつきなが  
らあたりを見廻したが、もうそこには京マチ  
子の影はなかつた。

「畜生！」

と、松浦要は声に出して彼の運転手の靴音  
に向つて云った。

「もう一息と云うとこだつたのに……」

とり逃した魚の大きさに今さら、下からゆ  
さぶられる様な悔やしさを感じた。彼は、ゆ  
つくりと身づくろいを終ると、荒々しく皮の  
手提カバンをテーブルの上からとり上げて部  
屋を出て行つた。

### (三)

煽情的なリズムが舞台一杯に流れて、青い  
椰子の葉蔭から、五人の黒人の踊り子が飛び  
出した。その真中で踊る、京マチ子が、他の  
四人を押し参けて、圧倒的にうまかつた。牀  
の線のやわらかさ、指の先までブギ調が躍動  
して、支配人始め、劇場側から観客層をうな  
らせた。

「わしに思いきり恥をかゝした憎い奴じや  
が、うまい奴じや！」

松浦要は、心の中で舌を巻いた。彼のちつ  
ぽけな慾情は、マチ子の芸術の前でもろくも  
くず折れたのだ。火の玉のような踊りへの意  
慾の烈しさの前に、彼は五十男の半白の頭を

下げて謝<sup>あや</sup>まるのへ、マチ子は笑いながら

「もう過ぎたことでつしやる、何とも思てし  
まへん。冗談や思つてますよつて……」

美しい齒なみをみせて云つた。

忍苦十年の舞台に花が咲いて、京マチ子の  
黒人は決定的な賞讃を拍し「ブギの女王！」  
とたゞえられた。

柚木鞍彦が彼女の前に現われたのは、昭和  
二十三年の暮、日劇で「七面鳥<sup>クイック</sup>ブギ」を演つ  
ていた時だつた。大阪の京マチ子は、東京で  
も人気を集め、今や完全に日本の「ブギの女  
王、京マチ子」と、一枚看板を揚げるとこま  
で来た。

「え？誰？」

部屋のれんを振り返つたところに柚木鞍彦  
が、上背のある瀟洒<sup>しょうしや</sup>な背広姿で立つていた。  
彼女をひいきにしてくれる。築地の待合「河  
辰中」の女将<sup>おかみ</sup>に紹介されて、三日前に初め  
て、この日劇の楽屋をおとずれた彼女だつた。  
明るい女将の袖の蔭にかくれる様にはにかん  
で無口な彼は、それから毎日のように彼女の  
部屋をのぞきに来た。

「徳川さんから、柚木伯爵へ養子に行つた人  
なんですよ。やつぱり品がいゝでしよろ？あ  
の方のお父さんの慶順さんて方が、よく昔ら



ちへいらしたんですの……」

と、女将は彼のひととなり語つておいて「私と同じに、やつぱり京マツちゃんのパンでね、どうしても貴女に一度逢わしてくれつてきかないのよ、云い出したらきかないのは、やつぱり華族さんのお坊つちやんだわねえ……」

と、笑つた。誰にしろ、ひいきにして下さつて、自分の芸を愛して下さる方は有難いのだ。彼は、昔の華やかな夢をうばわれ、斜陽華族の痛々しさを丸出しにしたような一人立ちする処世術も知らない青年だつた。一日、友人と観た京マチ子の「七面鳥ヅギ」の舞台一ぱいにみなぎる迫力と、いかにも生活力のあるリズムミカルな太鼓の響に合せて躍動する美しい四肢に心をうばわれ、恍惚としてしばし席を立つのも忘れていた。三回興行の三回とも食い入る様に観ていた彼は、今まで知らなかつた勇気が、体内から肉を分けて飛び出すようにあふれてくるのを覚えた。

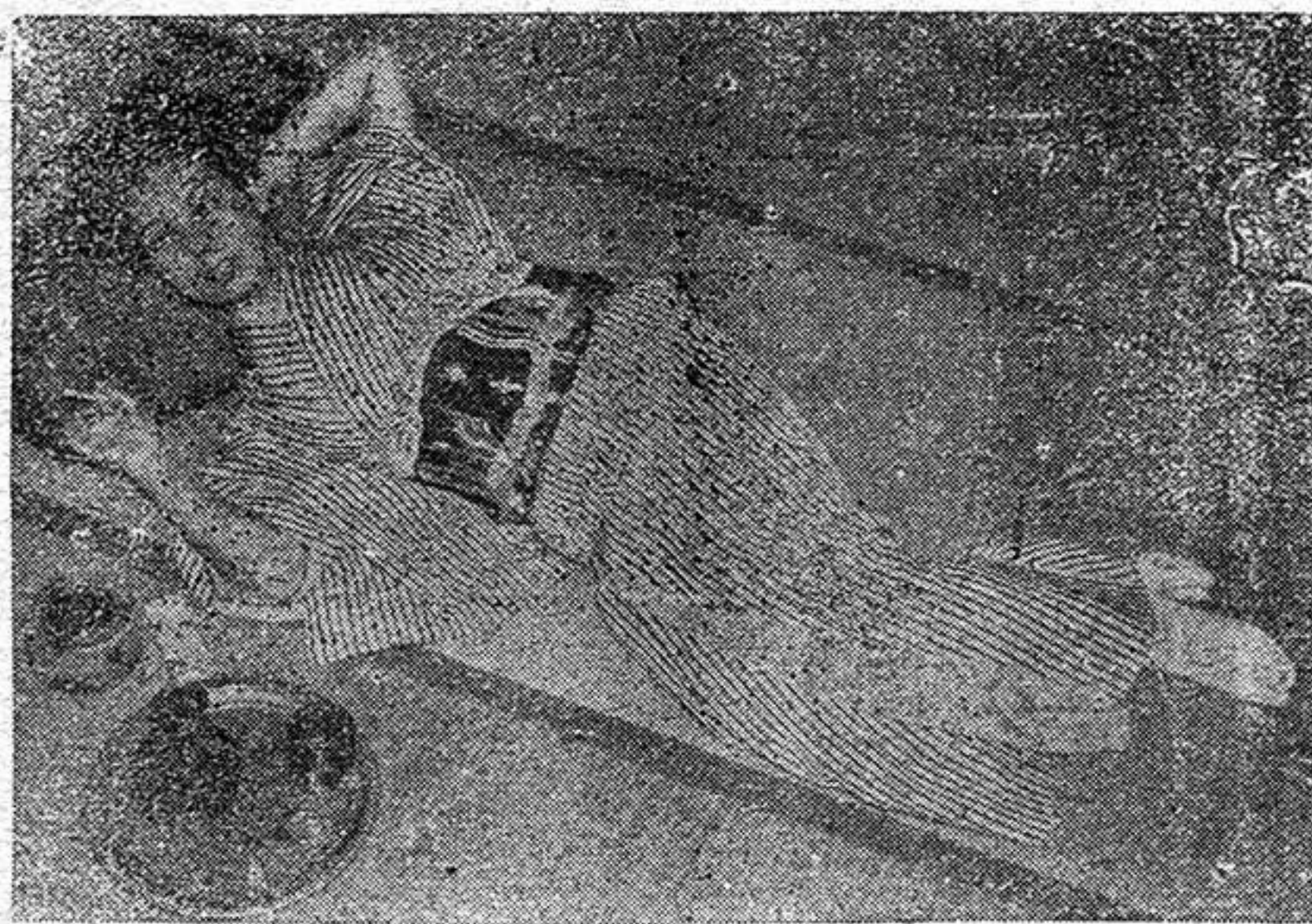
「あれが芸術の力だろうか？」

彼は今さら芸術の偉大さを知つた。心の中には、耳を澄ませばいつでもあの太鼓の音が聞える。そして、それと同時に、美しい羽毛を腰につけた全裸に近い四肢の躍動！古い世

界に身を置き乍ら、いつも新しい感覚を持ちつづけている顔見知りの「河辰中」の女将へ京マチ子の事を彼は話しに行つた。それは嬉しい結果になつた。

「今更感心してるの？ 鞍彦さんは……若いくせに時代にズレてるわよ。私なんかとうの昔に京マチ子のファンよ、もうファンの域を脱して、もう友達だわ……そりやアいゝ娘よ。ふだんは又舞台とガラツと異つておとなしくて、純情で、涙もろくて、親孝行で……」

「もうわかりましたよ、その位で……それより、これからすぐ連れてつて彼女に逢わして下さい。頼みます。この通り」



膝まずいて手を取るのへ

「フム、フムそんな時ばかりねえ……いゝわ、紹介しましよ。それ以上好きになられたら困るけど……」

女将は、今夜広間で催される外務省の偉方の宴会も放ッぽり出して、女中に車を呼ばせた。

#### (四)

「今日はお一人……？」

静かな部屋着の半纏

をひっかけ二回目の顔にかゝつていたマチ子が云つた。この半纏も女将が、わざ／＼「えり円」で彼女のために染めさせたものだった。

「えらい入りですねえ……京マチ子さんの部



屋へ行くて云つたら、楽屋番の爺さんが関所の様に頑張つて、中々通してくれないんですよ」

彼は、いつもの様にじつと彼女の眼をみつめて、遠慮深そうにせまい楽屋の隅にコチンと膝をそろえた。

「フムムムこれどう？……」

彼女が進駐軍将校から貰つたチョコレートを半分わけて出すのを、少年の様に頬を赫らめて受けとる柚木鞍彦だつた。みじんも濁りのないその澄んだ瞳が輝き出して人生の幸福を一人じめしたように他愛なく嬉こぶ彼へ、兄妹のないマチ子は、いつか遠く離れていた兄に巡り逢つたように、ほの／＼と心の暖る想いだつた。

女将のはからいで「河辰中」の牡丹の間に、すき焼の鍋を囲んで、京マチ子と鞍彦が膝をつき合せたのは、日延までした日劇もいよいよ明日が千秋楽と云う前の晩だつた。料な小座敷の中は暖い牛肉の匂いがやわらかくたちこめて、床の早咲きの桜がほころび初めていた。

「マチ子さん！」いくつか重ねた日本酒にほんのり眼のフチを染めている彼女は、にこやかに頸をかしげて笑つた。

「なアに……？」

「嬉しいんです！僕は……」

やゝ充血した眼でじつとその美しい顔をまじろぎもせず見つめながら

「人間の真の幸福と云うものを、僕は今初めて知りました……今までの僕は、まったくロボットでした。霞の上に坐らされ、目かくしをされて、自由と云うものは一際あたえられず、只、自分を取りまく地位や財宝だけを御生大事に抱えこんでいた道化師でした……霞を食つてた仙人と同んなじことです。いや、下界へ美事に転落したみじめな仙人です。境遇から来たコンプレックスかも知れませんが、自分をみつめる世界の眼を只冷たく感じ反逆児のそのように世の中にすねていたんです。暗いジメ／＼した青春でした……それは昨日までの僕です。しかし、今日の僕は異う！京マチ子と云う人を知つてからの僕は異う！貴女によつて勇気づけられ、新しい希望と喜びで世の中がすつかり明るくなりました……人間の生きる喜びを貴女によつて与えられたのです……僕は……僕は……」

女のように赤く濡れた唇は、いつもの様に似合わず、お酒のせいですつかり雄弁になっていた。

「マチ子さん！ついで下さい！僕の青春の再スタートを、祝福して下さい」

二人は又、何度目かのグラスを合せた。

「アツごめんなさい、お酒が……」彼女は、銚子を置いて鞍彦の膝へにじり寄つた。美しい絹ハンカチーフが惜し気もなくこぼれた液体のズボンを拭う手を、彼は、いきなり抱え込んだ。

「いけません！鞍彦さん！」

マチ子はげしい言葉で、ぐつと深く手を廻し、火の様に燃えた唇を近づけようとした彼は、驚いて叱られた子供の様にその両手を退いた。

「すみません、つい……つい……僕は……あゝ、許して下さい、あやまります……悪いことをしました……」

意味のない接続詞ばかりならべておど／＼上眼で見上げる男へ

「いつのよ、いゝのよ、ふムムそないあやまられたら、うちの方がテレルやないの……」

マチ子は、硬い空気をほぐすように笑つて云つた。しゅーんと胸に痛い程、純情な異性だ……。まるで母親におねだりした手を叩かれでもしたようにすつかりしよげかえつているのが、彼女には何かせつない程の愛情を



かき立てる思いだつた。

「どうしたのさ、二人共、嫌に神妙に黙りこくつて……お通夜みたいね、まるで……」

陽気な女将が、二階の宴会の席をはずして部屋に入つて来ると、肥つた体を二人の間にわりこませながら

「どう？京マチちゃん、お風呂よかつたら這入らない？うちの自慢のトルコ風呂に一ペン入つてよ今、丁度空いてるわ」

「ほなら、一寸入らせて貰おかしら……」

彼女は、救われたように立ち上つた。

青く透きとおつた香水風呂の中に身をひたしているマチ子の体は、名人の彫刻のように美しかった。細目にあけた化粧ガラスの窓から鞍彦はじつとものにつかれたように凝視していた。それは、女将が彼のために謀つた彼女のありつただけの智慧だつたのだ。

「女将さん！頼む！僕はもう苦しくてたまらない何とかしてマチ子さんを僕のものにして下さい！」

「そりやア鞍彦さん無理よ、私だつてこんな商売を永年やつてるんだから、女の一人や二人とりもてない事はないけど、あの子だけは……芸者衆と違うんですからね……あなたの腕よ、紹介して上げたんだから後は鞍彦さん

の腕次第ですよ……」

帖場のれんの蔭で女将は気弱な男の肩を叩いて笑つた。

「しかし……僕はダメだ！僕には出来ない」

がつくり肩を落すのへ

「嫌な人！しつかりしなさいよ、チャントお膳立てして上げたんじゃないの……それ以上私にどうしろつて云うのよ……ま、いゝわ私にまかしときなさい！」

女中頭の呼ぶ声に、女将はボンと胸を叩いて帖場じきりをあわてゝ出て行つた。マチ子は、ゆつくりあごまでつかると、ザーツと湯の音をさせて白いタイルのフチに腰をかけた。鞍彦は、箱の中のものをゆさぶる様に胸をコトコト鳴らせて、薄い湯気の中の裸の女王をまじろぎもせず眺めた。

彼女は、石鹸の泡を一ぱい体中になすりつけ、まるでしやぼん玉のやわらかい七色の虹を楽しむ様に思いきり手足をのぼし、立ち上るとシャワーにかゝつた。その動作の一つ一つに美しい線が現われ、鞍彦はもう息を弾ませて、只、恍惚となるばかりだつた。

シャワーの水しぶきが、すっかりしやぼん玉を洗い流すと、彼女はいつもやる風呂場の体操をやり始めた。両足を高く上げ思い切り

胸を張り、床のタイルに水平に両手をひろげ背筋はびつたりと白い濡れたタイルにつけている。静かに片足ずつ交互におろし、起き上ると、ぐつと両足をひろげて胴体を中心にした一本の線になる。鞍彦は、

「あッ！」

と、思わず軽い眼まいのようなものを感じて、せわしく目ばたきを繰り返した。ごくつ！と、つばを呑み込んで、女湯をのぞいて自分の醜態も打ち忘れていた。マチ子は尻部をタイルにつけたまゝの姿勢で、両足を今度のはげしくくるくる回転しはじめた。そして、立ち上ると思いきり弾みをつけて頭の高さまで片足ずつ持ち上げて行つた。

「あゝ」鞍彦は、たまらなくなつて遂に声に出してしまつた。

「だ、誰ですッ！」

「マチ子の上つた声と男の足音が、廊下をつゝ走つて行くのと同じだつた。」

女将の好意が気弱な柚木鞍彦をより一層苦しめる結果になつてしまつた事はマチ子自身知らないが、彼が、もんもんとして自殺したことを知つたのは彼女が大阪へ帰つて間もなかつた。



## (五)

大映、永田社長から薦められて映画入りの話が決定した頃、思わぬ人が京マチ子を尋ねて来た。「佐伯健」と云う名刺を手にとり乍



ら、彼女は何か信じられない気がした。

「本当ですよ、貴女のお父さんからの言伝えです……石田治三郎さんとは僕は南米で親しくしてしまってますね……」

「ま、お父さんお父さんが生きているなんて……」

母一人子一人のわびしい生活の中に夢にまでみた父が、急に自分の身近かに息づいているなんて……。

「お父さんは、元子が小さい時亡くなったのよ……」と、二十年も偽っていた母を恨む気持だった。元子を祖母に預け、女中奉公して育て、下すつたお母さん……だけど、お父さんに一度逢いたい……自分達母子を捨て、行つたお父さんだけ……。マチ子は、いかにもブラジルあたりで働いているらしい健康で若く精かな佐伯健の眼を見つめながら

「あのウ……そして父は、私が舞台に居りますことを……」

「ええ、知つてますとも……舞台に立つ限りは日本一のスターになつてくれる様にと云つて居られましたよ」  
「日本一の……?」

まだ見ぬ父の慈愛の瞳を追うように、遠くをみつめるマチ子の眼がうるんでくるのだつた。

映画出演第一回主演の「痴人の愛」で、京マチ子の映画スターとしての地位は決定した。

「僕は、二三日中に又、ブラジルへ帰りますからね」

竹を割つたような、飾り気のない男だが、どこかに暖かみのある表情で佐伯健が彼女の家をおとずれて来たのは、さわやかな五月の朝風が、庭から座敷へ、座敷から廊下へ吹きぬけている頃だった。第一回の完成休暇に緊張を解かれてセルの着物にくつろいでいるマチ子の部屋で彼は、キヤメルのやわらかい煙を楽しみながら

「貴女は美しい人ですね、ブラジルにもずい分美しい人がいるが貴女程の人はない」  
と、ぶつきら棒に賞めた。マチ子も笑いがら

「私も一度ブラジルへ行つてみたいわ、せめて私の映画でも行つてくれたら父は嬉ぶでしょう……」

「どうです、僕と一緒に行きませんか?」  
まるで銀座へでも誘うように云うのへ



「貴方つて、面白い人やわ」

と、マチ子も深々と紫煙を吸い込んだ。母親と女中が買物に出掛けて行つたあとは庭先につながれたリルが、時々人恋さに鼻を鳴らすだけだつた。

「マチ子さん！」

男の異状に光つた眼に、彼女は、ドキッと身を硬くした。

「僕が貴女を愛していたらどうします?……」

「そないなこと云うておどかさんといてよ……」

「いや、真面目ですよ……僕は、貴女を南米へ連れて行きたい!」

「私にはまだ大事な仕事がたくさんあります!」

「マチ子さん!」風のような早さだつた。

「あッ!」

と声を立てる間もない。あお向けにソファに押し倒し、のしかゝる様に、男は強い力でマチ子の頸をかき抱き唇を吸つてしまつた。乱れた裾から白いはぎがあらわに、彼女は飛び上る様に男から離れて

「あほ!何するのん!卑怯者ッ!」

と声を震わせた。

「憤つたんですか?許して下さい。こうでも

しなければ、とても貴女が僕などに許して下さいと思つたので……悪かつたらあやまります……」

「悪いにきまつてるやないの……もう取りかえし出来へん……返して云うたかて……」

「僕は頂いて帰ります……もう二度と日本の土を踏まない僕の只一つの土産にさせて下さい!」

「もう、あんた頼んだかて、してしもたやないのん……」

云いながら、マチ子はとうとう笑い出しまつた。きよとんととして、頭ばかりかいている佐伯を、なぜか心から憎む気がしないのだつた。一つも自分の行動にあらわせず、心に秘めたまま死んで云つた柚木鞍彦といふ対象だと思つた。「もう二度と日本へやつて来ない」と云う名目で、彼の非礼は許され。

「フフフフ但し、お父さんのお使いだつたら。その限りにあらずよ!」

と、マチ子はつけたすのだつた。

昭和二十五年度の演技賞は「偽れる盛装」の京マチ子の上に輝いた。彼女は、仲好しの水の江滝子と同じ鎌倉山に新しい家を建て、その広々とした芝生の愛犬「バンビ」とたわむれながら母の幸せそなうな声を聞いていた。

「ねえ、元子!ブラジルへお前の「偽れる盛装」がいよいよ行くんだつてさ……お父さんもどんなにお喜びだろう……」

その父の伝言「日本一のスター」は、今や「羅生門」によつて、世界の檜舞台にかけられ、「世界一のスター」と段階へまでこぎつけようとしている。イタリヤのコンクールで見事「グランプリ」を獲得した「羅生門」を、映画を知る限りの全ての人は、まれに見る偉大なる芸術作品として賞めたゝえているのである。通商大臣は、一夕「羅生門」の出演者を招いてその労をねぎらつた。その帰り「京君!これを見給え!これを……」

アメリカ有名新聞の映画批評欄を集め、その一つ一つを翻訳させたものを示しながら永田社長が立つた。

「これが有名なニューヨーク・タイムズの批評だ……京マチ子の写真がこんなに大きく掲つてゐる!日本の京マチ子が世界一の新聞紙上に掲つてゐる!嬉しいじゃないか……ねえ」

車のゆるやかな震動に身をまかせて、自分の羅生門の扮装写真を食い入るようにみつめながら、マチ子はその耳で、感激に震える社長の声の聞こえていた。



觀々堂手柄話之内

## 淫蕩歌舞伎図繪



緑 猛比古

絵 今幾々歳

まつたく眞にせまつた濡れ場ですぜ

「芝居にも色々あるが、嵐半之丞と云や度々お上の御取締りにも引  
つ掛つた名代の好色役者だ。御禁制の強姦、姦通芝居の筋書をホ※

※ンのちよつぱり色変えして、憶面もなく  
中村座で上演しているんだから呆れるじや  
ありませんか。そこへ以て責め場の色揚げ  
が、何とも云えねえ凄さなんで……。これで  
もくかの責めのあの手この手に、女子衆  
なんざ眼を覆う始末……。ええ先生——、  
野郎が観ていても気が変になる様なこんな  
芝居をよくお上は黙つて許していなさるね  
え——」

「それを取締るのが、源六旦那のお役目じ  
やなかつたかな?——」

「と云われると面目ねえが、町方で黙つて  
いるのを、こちとらが兎や角云う筋合でも  
なし、虫を殺して我慢しているが、相当は  
らくさせますぜ——」

と源六、口先だけはしきり  
にいきまいておりますが、結  
構喜んでこの芝居を熱心に観  
ている事は言葉の端々にも  
窺がわれます。

初鰹の威声のいゝ声がお江  
戸八百八丁を往来する今日此頃、葉桜の緑に心もウキウキする晩春  
の穏やかな宵のことです。

御用を済ませたせつかち源六、通称カチ源が、浅草観音様境内の  
薄暗い片隅に神興を据える観々堂先生相手に、例によつて罪もない



四方山話に華を咲かせていたのです。

境内の石畳の廻廊にポツンとおかれた、八卦、うらないの字も朧に霞んだ角行燈が、仄んのりと辺りを照している外、シンと静まり返った境内には人の足もいつしかに途絶えて、物佗しく戌上刻（十時）を知らず上野寛永山の鐘の音が、ゆるやかに静寂を破つて流れ始めました。

「先生——、いやにシンミリとして来ましたねえ。人ッ子一人通らねえや。そろ／＼カンバンにして、そこいらで一杯えやり乍ら、徳利片手にとつくりと、お芝居の無駄ッ話でも語ろうじやありませんか」

「ウームよかろう。艶な責め場をしつぽりと聞かして貰うも偶には保養。ではポツ／＼出かけるとするかな——」

道具と云つてもせい竹と、天眼鏡を包んだ風呂敷包み一つの身軽さ、手早く纏め終つて角行燈の灯を吹き消して片隅に押しやると、肩をならべてスタ／＼と境内を抜け、夜明しの居酒屋へゾイと通ります。

呑む手、さす手もいそがしく、源六の身振たつぷりな芝居囃は、酒に乗つてか際限もなく、妖しくも弾んで行くのでした。

安永年間——、好色將軍家治の治世下、度重なる天変地異にもかかわらず、江戸庶民の生活力は旺盛でした。ワンマン田沼意次の執政の下に、表面は至極天下泰平乍ら安閑に流れ、度々御禁令の取締りもいつしか影がすく、巷には怪しげなる見世物、いかがわしき淫書のたぐい溢れ、江戸六座にも堂々と、姦淫を主とし、嗜虐的責め場を売物にした歌舞伎狂言が題されると云つた有様で、中でも中村座に拠つた嵐半之丞の題し物は、全狂言これに終始しており、江

戸の、色に明け獵奇に暮れる風流人士間には圧倒的な人気を占め、他の市村座、春木座、河原崎座、新富、守田座にも、夫々こうした題しものをあしらつてゐるも、断然他を引離して連日大入を続け日増しに座主の懐を肥やして行く許りでした。

評判を生んで、女子衆の中でも勇敢なる連中は、羞かし見たしの一心で人の陰にかくれては顔を赤らめて桃色の溜息をつき、棧敷のかじりつきは、微に入り細を穿つた場面見たさの人々で鈴なりにひしめており、源六が余りの評判に覗いた時も、丁度こらした所でした。観衆は固唾をのみ息をつめて、水も滴る名女形嵐半之丞の責めさいなまれて苦悶する姿に魅入り、犯されては呻く妖しい肢態に興奮して、飽くことなく恍惚と、その一挙一動に溺れていたのでした。

その時の第一狂言は、桜田治助作「名高手秘諷実録」。第二狂言は南北の「曾我梅花念力弦」<sup>そがきようたいおもひのはりゆみ</sup>。第三狂言が黙阿彌の「小猿七之助」と、濡れ場、責め場、姦淫の場を網羅した番組で、彼の人気は今や当時の一流役者、市川小団次、三世中村歌右衛門、岩井桑三郎をも凌ぐ程の凄まじさでした。

「名高手秘諷実録」は十二分に嗜虐性を発揮した題し物で、徳川を憚かつて時代を足利にとり、大久保彦左を大森彦七の名にかりて、矢代騒動、松前屋事件を中心に、そこへ時代は違いますが経題院騒動、蓮華往生の延命院日当を組み込んで面白い狂言にしてあります。極楽往生を願う大年増を座らせて、それを尻の穴から槍で芋刺しに突き殺す大蓮華は、廻り舞台として裏からその突く態を露わに見せて看客の獵奇を煽り、日当が地下の密室で次から次へと若い娘を犯す情景は生々しい慾情をそゝり、半之丞の日当は、若い娘も後家



も等しく随喜の涙を催させる程に妖しくも瑞々しい道心振りでした。かてゝ加えて、主題の矢代家騒動では、万里矢四郎と云う悪侍がお家押領の野心から、先代の妾経題尼と密通して、忠義の腰元菊野と家臣鎌田又八を利根川で殺害し、二人の半裸体の死骸を背中合せに縛り合せて流す、その見せ場がこの芝居の山で、大道具の土手



から悪人共の手によつて、逆さにぶら下げられた二つの体が河に放り込まれる態は、何とも疼く残酷さをヒシ／＼と看客に与えるのでした。

松前屋四郎兵衛の無実の罪を裁く足利義満の御前の場、背中合せの幽霊に悪人輩が悩まされる場、人面序の怪物が現われる場など盛り沢山に目先を変えて、大時代的に興味を盛り上げて、観客はもうこの狂言だけでも堪能して終り程でした。

続く第二の狂言「曾我梅花念力弦」は其の頃実在した盗賊をその儘とり込んだ、強姦を主としたもので、主人公の盗賊新藤徳次郎には、後年三代目菊五郎が十八番として演じた事もありました。頗る美男の義賊徳次郎が、手下大勢を引き連れて強慾石部屋と云う呉服屋へ押し込みに入ります。丁度其の晩は婚礼で、新嫁は信濃屋お半、相手は石部屋才次郎とてひどい醜男――。借りた金が返済できぬ為、その代りとして望まれた詮方なしの花嫁故、勿論お半は泣きの涙。そこへどや／＼と押し込んで来た一団は花婿を縛り上げてしまいます。正に初夜の営みの始まらんとした瞬間で、紅閨は踏み荒され、花嫁も伊達巻一つのあわやと云う姿にされてしまいます。

卜書に「徳次郎思わずお半の顔を見て手下兩人に囁く、兩人心得お半を手取り足取り引立てる」となっている通り、お半をずる／＼と徳次郎の前へと引き曳つて来ます。

ぐつと拘え込んで、上へ蔽さる徳次郎――。抗うお半の手が男の顔を払う拍子に、ペラリと解けた頬かむりの下から美男の顔が現われて、お半は思はず凝つと見惚れ、やがて彼女の手が男の首筋に力を籠めて巻かれて行き、いつしか美しい濡れ場になります。





手下のかこつた枕屏風の右脇から、二人の上半身が纏れて見えて、齒ざしりする花婿才次郎を尻目に、歡樂の二人の抱擁

は生々しく、屏風の蔭を覗客は固唾をのんで見学するのです。眼のやり場に困る手下二人が、いつしか覗き込んで興奮する態も窺視趣味横溢し、屏風がとられた後、お半は丸められたみす紙をそつと袂に忍ばせ、乱れた裾を直して、才次郎には目もくれず

「もしお前さん、又何時頃お出でなされますえ——」

「いつといつて日も定められめえが、またそのうちに参りやしよう——」と云う会話で幕になり、場が代ると、徳次郎は長右エ門と改名し帯屋を開いており、せくにせかれぬ恋慕から、どどのつまり桂川へ二人の道行となる。至極都谷よくつくられた狂言です。

お半に扮する半之丞は、生娘が犯されて、それが歡びに変わるこの濡れ場を、見事美しく、艶にやりこなし、二枚目徳次郎に扮する一座の立役者嵐璃昇も亦、それに劣らぬ名演技でした。

最後が今に名高い好色狂言「小猿七之助」の土手場です。奥女中の滝山には半之丞、小猿七之助には璃昇と、一枚看板を揃えて、最終の幕の降りる瞬間迄たつぷりと、夢幻の興奮と歓喜に観客を魅惑させたのですから、その評判は近郊近在迄も響き、日を追つて中村

座は大入を続け、遂には満員札止め迄出す盛況振りでした。中村座の座主は今で云うボスで、秘かに町方取締り役にも袖の下を使つていると云うのは、あながち噂のみではないらしく、座廻りの町方も敢えて狂言には触れず、大入満員の盛況振りを苦笑いし乍ら、そつと握らされた山吹色に、当り触りなく世間話などしては帰つて行くのが落でした。

「と云うわけで口惜しいが、あの馬鹿騒ぎに手も足も出ねえ。江戸にはなんて物好きな奴も多い事なんだろうと呆れまさあネ——」  
「とか云つて、狂言がわり度毎に、覗きに行くんじやないのかな」  
「へへ、面目ねえが図星で——。一度見たら止められねえの我乍ら情ねえ。」

源六の云う通り、それは江戸市民を麻薬中毒者の様に、頽廢的傾向へと押し流して行きつゝあつたのです。

残春の宵もいつしか更けて、先生と源六の千鳥足が纏れて淫蕩の巷の闇へと、情熱のはけし場を求めて吞まれて行く頃、問題の中村座では恐ろしい慘劇の幕が既にきつて落されていたのでした。

### 衆人の前で強姦された翠句の果に

「こ、殺されたんだッ先生——。先生——……やいッ先生——……カンカンおやじ——」

と翌朝早くから、先生の枕元で我鳴つているのは源六——。

昨夜何処をどう廻つたか、曉方近く佗しい時の万年床へもぐり込んだ寝入り華のカン——堂先生、血相かえた源六に遂に煎餅布団をまくられては些か御氣謙斜めです。

「ウーム眠むい。明日では駄目か——」



「何を呑気に寝言を云つてゐるんです。昨夜噂をしてた許りの、例の人気の絶頂にあつた嵐半之丞が殺されたんですよ——」

「ハーン、噂をしたのが、さては悪かつたのかな——」

つい二刻程前に別れたカチ源が俄然張切つてゐるのには、流石商売柄眠くないのかななどと先生は呑気な事を考え乍ら、それでも耳新らしい噂の主だけに興味は自ら湧いてきます。

「——で殺されたのは何時の事だな?——」

「それがさ、丁度昨夜先生と一杯のみ乍ら、埒もねえ芝居話をおつ始めていた頃で——」

中村座では響き渡る析の音と共に、最後狂言「小猿七之助」の幕が、興奮する観衆のぞよめきのうちにスル／＼と開きました。

これは当時の大奥御殿女中を諷刺したものだけに、江戸ツ子の趣向にアツピールして非常に痛快がられたものです。

男禁制などと堅い台詞を口にしながら、その実男欲しさにウツ／＼している御殿女中滝川を、下卑な巾着切小猿七之助が無理矢理手籠めにしてしまふと云う筋ですから、紙一重の極どいスレ／＼の情痴堪らなく観る者の胸を弾ませた事は云う迄ありません。永代橋で滝川を見染めた七之助は、伝手を求めて仲間になり滝川に近づく機会をねらいます。或る日滝川が実家へ戻る時、うまく仲間の供の列に入り、すきを窺ううち、丁度洲崎の上手でひどい雷雨に逢います。駕籠の者や供の者が滝川を捨て、逃げ去つた後、二人切りになると、気絶した滝川を、折よく傍らに建つた材木小屋へと抱え込みます。入口の戸は一枚きりなので、それを横にして身を隠しますが二人の上半身は蔽う術もありません。やがて正気つき抵抗し乍らも衣類を剥がれて行く滝川。七之助はクル／＼己れの帯をとくと滝川

を後手に縛り上げます。

横にした戸板だけで下半身を巧みに蔽して乗りかゝる七之助、きれ／＼に聞える二人の呻き。妖しい舞台の魅力にシーンと静まり返る観客——

長襦袢の襟元から手をさし込んで乳房を探る七之助に、身体をくねらして身悶えする艶めかしい真に迫つた女のしぐさはオドロ／＼と響き渡る雷雨の大鼓の音と共に愈々佳興に入り、薄暗い暮色の舞台面に緋の色がチラ／＼と隠見する中に

「いくら泣いても喚いても町を離れた洲崎の土手……」と名高い台詞につづいて

「いなごやばつたと割床に、露の情の草枕、まだ草原で、下駄を枕に野天の味はしるめえ。ちつと夜露で冷たかろうが、これも話の種だから、野暮は云わずにしつぱりと、雲間の星でも数えていゝえ」

と乙な台詞と共に、虫の音をきゝつゝの首尾を果します。心で憎み乍ら、始めて知つた男の味に愛情の籠つた眼でにらむ滝川の視線をさけて、頬かむり姿の七之助は暫しし終せた後の処置に迷うのです。奥女中を犯したと知れば獄門首は知れた事、未練はあるが、生かしておけば身の破滅と、心を決した七之助は思い切つて懐中の七首の鞘を抜きます。雷鳴又一しきりのうちに、始めて知つた男恋しで口説く滝川を

「生かしておいちゃ、おいらの身の破滅、可愛想だが迷わず成仏……」

と思ひ入れよろしく、一突——ぐさりと滝川を刺し殺したのですぐつと押えた口許から「ウーム」と苦悶の呻きが洩れ、露わな足が赤い蹴出しをけつて宙に二三度躍つたのを、すべての見物は一分の



見落しもなく、見入つておりました。

チョンと柝が入つて「あばよ」と一言さつと型通り花道へ駆けこむ七之助が、どうしたとか、その日に限つてサツと下手に姿を消したのでした。舞台の空白の瞬時、幕になる寸前、バタリと小屋の横戸板が倒れ、ゴロリと転がり出た滝川の胸許からはドク／＼とおびただしい鮮血が、止め度なく舞台を染めて行き、既に蒼白に交じつた半之丞の滝川は、最早その時完全にことされていたのです。

一瞬にして中村座は蜂の巣をつゝいた如く阿鼻叫喚の巷と化し去りました。

## 殺した筈の七之助は素裸で

## 縛られてころがつていた

「と云うんだから、話はこんぐらがつてきやがる。てつきりやつたのは七之助役の璃昇に違えちえと眼をつけて、飛んで行つて見るとこの始末——さあ分らねえ。えー先生、それじゃ一体どいつが犯人だと思ひやす？」

「全然何も思わないな。第一源六旦那、未だ殺しの場を語つただけじゃないかえ。ズーッと出し惜みせずに、旦那の頭の冴えたところをスラ／＼とお聞かせ願いたいねえ」

「へッへ、成程——。いかに八卦のカン／＼堂先生でも御見通しはきかねえと云う訳で——。ようがす。ではわつしのチョイト小当りに当つたところを述べちまいますあネ」

脇道沢山の源六の話も、やつとどうやら本腰に這入つたのです。殺された嵐半之丞の死因は、心臓部を二寸近くも真上からぐさり

と突き刺した、七首の突傷によるものでした。両手を縛られ口を押えられた彼は、死の直前にそれる知つて恐らくは無念だつた事でしょう。

艶かしい蹴出しから覗く男の毛足は毛深く、苦悶に歪んだ濃塗りの白首は夜叉さながらに凄まじく、これが先刻迄は濡れごと師として江戸の好事家に持てはやされ、嬌然と我が世を謳歌したものゝ姿かと、源六始め彼を取巻く一座の者は肅然と身の寒くなる思いでした。検屍迄の間取敢えず荒蕪を被せ、直ちに下手人璃昇を捕えるべく人々は八方に散つたのです。数多の観衆と座付の人々を前にしてこの犯行は、余りにも大胆すぎ、今や璃昇が犯人である事は疑う余地ありません。ところが当の璃昇が奈落の張りぼての祠の蔭で発見されたのでした。

「オーイ、大変だ／＼。璃昇さんが見付かつたぞう——」

という道具方甚吉の声に、ソレッと一同どや／＼と奈落への暗い階段を駆け降りますと、下手人であるべき筈の璃昇が、素ッ裸に渾一つの哀れな姿で、乱暴にぐる／＼巻に縛られ、狼轡をかまされ上、四本の手足を一つに縛り上げられて、海老の様に丸くなつて埃の中に転がされていたのです。

「璃昇さん——璃昇さんじゃないか。どうした——」

と一座の箱頭米三が駆け寄ると、素早く璃昇の縛めを解きました「アッ、番頭さん！若しや座長の身に変つた事が……」

「なければよかつたが——大ありのそれも取返しのないえらい事になつて仕舞つたよ。座長は殺されたぜ——」

「えッ、殺された——それじゃやつぱり……」

「と云うと、何か心当りでも——」



「……出番の報せに、七之助の支度を整えて化粧部屋を出た私と出合頭に、頬かむりをした、中村座のはんてんを着た男がいきなり

——昇さん大変だッ！ 座長が今奈落で誰かと争っている。すぐ止めてくれ——と云つて来たので、それじゃ人を呼ぼうと云う私の手を、早く——と引ッ張つて——ぐづ——してとんでもない事になりやそれこそ大変、このわつしも一緒に行きやしよう——というので、変だとは思つたが、座長に万が一の事でもあつたならと、云われる儘に奈落への階段降りて奥へ一歩行こうとした途端、後からきたその男に、いきなり固いものでグアンと一殴りされ、私はその儘その場に氣を失つたらしく、寒さでハツと正氣に還ると御覽の通り素ッ裸にされた上、小猿七之助の扮装がそつくり奪い去られてありません。さては誰かの企みかと、心逸れどもものは云えず転がり廻つていた次第でござります——」

と璃昇は蒼ざめた面持で、誰かの脱いだはんてんを羽織りつゝ一同の前で鼻を擧るのでした。

「……とまあ、先生かようなわけで、璃昇じゃねえとすると、はて誰だろうかと、わつしはもう一度振り出しに戻つて、舞台から下手へと下手人の足取りを辿つて参りやした処舞台の引込みからおはやし部屋を通つて、楽屋口へ出る薄暗い板敷きの片隅に置かれたつづらの蓋の間から、血痕のついた着物の端が覗いてるじやありませんか。バツと開いたその中からは、七之助の仲間の衣裳一揃え、それにかつらからかつら下まで押し込んであつて、衣裳の上にくざりと兇行の匕首でさされた一枚の紙片——。へえ、これでムんすがネ。御覽の通り、墨色は相当古びておる処を見ると可成り前から準備してあつた様ですが、どうやら鑑賞をごまかした

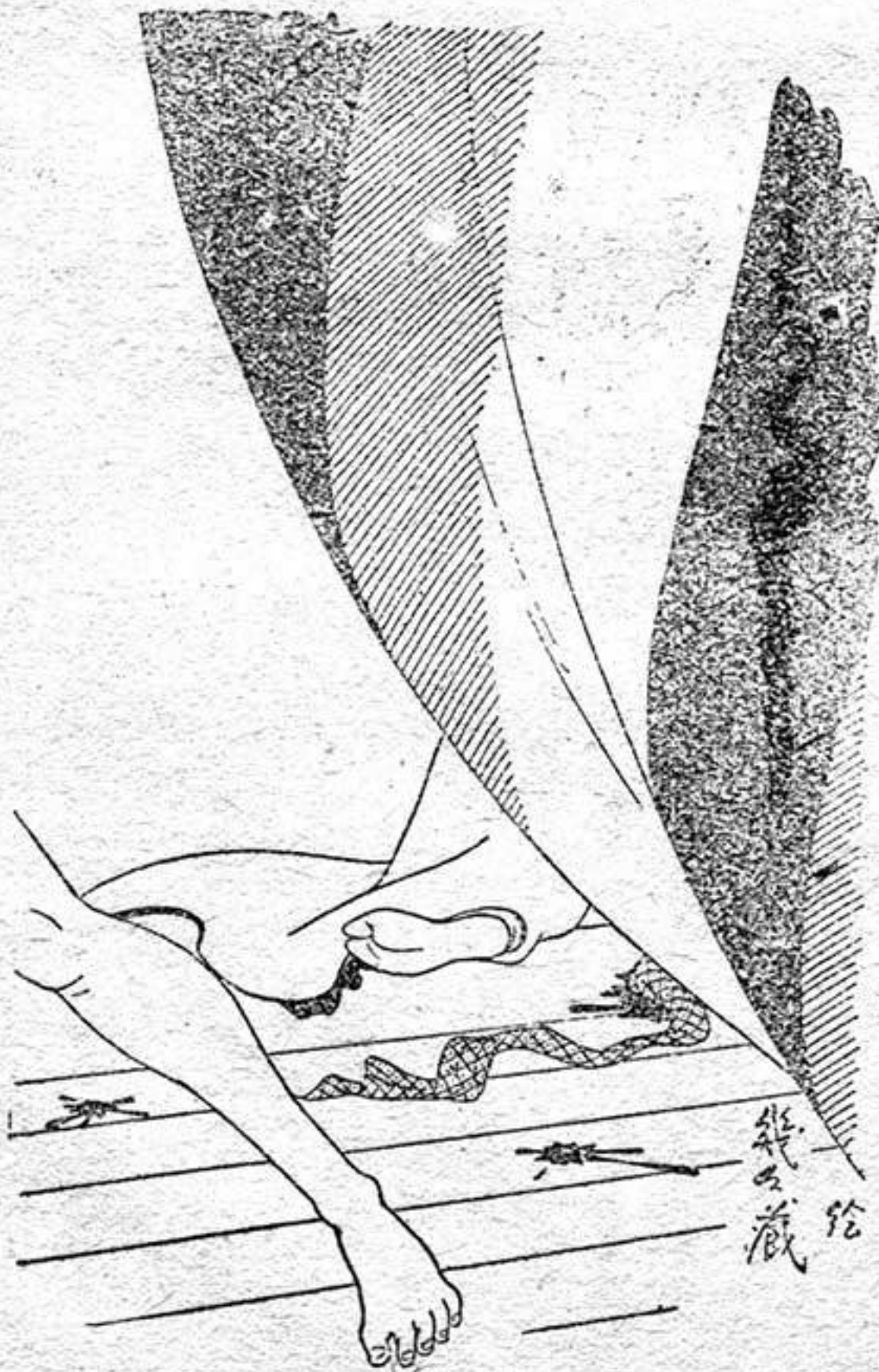
らしく、吊筆（柱より筆を糸でつるし、手をそつと持ち添えて書く方法）で書いた模様ですが

「世に害毒を流す邪道役者を天に代りて誅す、天狗小僧」

なんて、随分時代めいた台詞じやムんせんか」「フーム、天狗小僧——。奴は世に義賊とか申しておつて、滅多に人の命は奪わぬと公言している奴じやが——とうとう見るに見かぬかな。いやさもあるん」

「感心している場合じやねえ。その人を殺めた事のねえ奴が、遺憾もねえたかが役者風情を、天に代りてなんぞチトきな臭いじやありませんかい」

「いかにも、もつともく。で、楽屋口からでも逃げた形跡はあるかな？」





「ぬかりはねえ。楽屋番の作造爺をつかまえて聞き訊した処——。へえ、何でも柝のなる拍子にバタ／＼と音がしたかと思うと、頬かむりした浴衣一枚の男が、いきなり後ろからドンとあつしを突き飛ばして、バツと表へと飛び出しましたので、あわてゝ起き上り、表へ出て暫くその辺りを左右見廻しましたがもはや姿は見えなかつたので——」

何とも申訳ねえとこんなわけで、どうやら目星は外部の者をついたが、こいつはひよつとすると半之丞の人氣を妬むの余り、天狗小僧の名に籍りて、他座の奴でもバラしたのじゃねえかと——」

「璃昇を殴つた男と、作造爺の見た男は同一人かどうか確かめて見たかな——」

「作造爺は何しろいきなりで、判つきりと顔は見ねえが、互に聞き合した処大体符合しておる様で——」

「して見ると、そやつは七之助の役を勤めたわけじゃが、半之丞始め見物も座付役者一同誰も氣付かなかつたのかな——」

「一同がヘンだと思つたのは、殺された前後だけで、台詞と云い、仕業と云い璃昇に決してひけをとらなかつた出来栄えだつたそりで——」

相手役の半之丞が氣付かぬ位だからこいつは余ッ程芝居の達者な奴に違えねえ、前場の仲間部屋にしろ、滝川の部屋の場にしろ、こいつは判つつきり璃昇がつとめたと云つてゐる。問題は最後の洲崎の土手場だが、あの場合は雷雨と嵐で暗くしてある上、璃昇の出が始めつから、鼻面でひねつた頬かぶりだ。

仲間になつて先に逃げた役者と云や、嵐三昇嵐平三郎、尾上泉華の三人だが、揃いも揃つて氣付いちやいない。こりやよつ程の芝居



巧者——。こうなるとわつしの考え通り、どうしても人氣を奪われた他座の役者と思えねえが——どうですえ先生——」

「いやまて——。では見物の噂はどうじゃ」

「芝居道楽、半之丞に大の肩入れの芝居茶屋鳴戸の女将をつかまえて訊いて見ましたが——」

——さあ、常になく顔を蔽す様にはしておりましたが、頭から璃昇さんだと思ひ込んで見ておりましたので別段変だとも思わなかつたのですが、あれが璃昇さんじゃなかつたので、あらまあ——と驚いている話だから恐らく皆の見る眼も疑ぐつちやおらなかつた事でしうぜ」

「しかし、他座の者とするとな勝手をしりすぎるな。えーと、この一座で若しもの場合として、璃昇以外に七之助役をやれる代役はおら



なかつたのかい？」

「フーム待てよ、あつそうくたしか嵐璃狂とか云う役者が一度か二度璃昇の代りを勤めた事があるが——。」

「璃狂はその夜樂屋入りしてたかな——。」

「アッ畜生、いなかつたよ。何でも四五日前辺りから体の工合が悪いとかで休んでいましたが——。ナールほど、奴だつたら結構七之助はやれるに違えねえ。失敗つた！ヒョツとすると高飛びしたかも知れねえぜ先生——。」

「まあくあわてるな源六旦那。今から飛んで行つても居らぬかも知れぬ。何はともあれ旦那の横好きの芝居も、こうなると莫迦には出来ないねえ——。」

「へッ、何だか褒められとくすぐつてえ見てえだが——。」

「兎も角璃狂を調べることにじや。やんわりとあの日のあしどりから聞き出すんだぜ——。」

「おつと合点——有難え、朝飯前だ——。」

いづれは朝餉もしたためては居らぬでしょうが、カチ源の名にふさわしく、朝陽のさし込露路板を踏みならして飛んで行つたのは、何とも腰の軽い愉快な男です。

## 下手人が宵のうちから女を抱いて

### ミシリく

「やらかしていたんじやお話になりませんやね。璃狂の家は六軒長屋の真中だ、右隣りの糊屋の婆さんは宵の口から派手な声に悩まされたそうだし、右隣りのあんまの彌市は、興奮の余り見えぬ白眼を

ひん剝いて、壁のすき間から覗いたと云う程の大したやらかし様だ。璃狂の体の悪いのは腎虚かも知れねえ——。惚れた女子を藉かして同棲してからと云うもの、いやもう凄いのなんのつて……。」

「見て来た様な事を云うねえ。とすると、その時間には璃狂は間違なく同衾していたと云うんだな——。」

「疑がい深いネ、まさかこればかりは一人じや出来ねえ筈だが。厭だぜ——。」

「判つたく、余り源六旦那を興奮させると、又変な夜鷹でも押しつけられる懼れがアル。」

「で、これからどうしよつて云うので……。」

「出掛けのじやよ。」

「何処へ？——。」

「とはカチ源の名に似合わぬな。勿論中村座へさ。」

「有難え、さては目鼻がつかしましたかネ」

彌次馬の立去らぬ中村座の木戸前は、何がなしにざわめいておりますが、既に幟を降し、ヒッソリと木戸を閉めた表は流石に佗しく「都合に依り休演」の勘亭流の貼紙が、春宵の微風に吹かれて淋しげでした。艶な絵看板が、昨日に引かえる今日の空しい空気を反映して白々しく、ひそく囁き交して往来する巷の噂は、殺された半之亟に対する厳しい褒貶の批判で持ち切りでした。

先生と源六は案内も乞わず樂屋口からズイと通ります。不気味に静まり返つた樂屋裏に絵の具のにかわの匂に交つて、プーンと香華の薫が漂つて来ます。

山羊鬚をしごく先生の手が宙に浮くと、パツとその眼が輝きをま



「源六——旦那一寸耳を貸しなされ——」

と、何かひそくと囁きます。忽ち飛んで行つて隼の如く戻つて来た源六の報告を耳許にきくや、先生はニツコリ、おもむろに口を開いたのです。

「下手人は分つた。但しその殺した原因はわからぬが——半之丞を殺した男は……」

えつと驚く顔々の中に先生はズバリと一声

「ハツハハ、見物は劣か半之丞も一座の者も気付かなかつた筈、七之助は正真正銘の七之助役のその男——。いや、とんとうまく胡魔化したな璃昇——。」

「これは又、何を理由に——その時私は奈落で縛られて氣を失つておりましてものを——」

神妙に珠数をつまぐつていた璃昇の足許が一瞬浮足立つて見えましたが、ぐつとこらえて蒼白の顔が先生をにらみつけます。

「では訊ねるが、そなた七之助に扮して部屋を出た時、芝居に使う小道具の七首を持参したかどうか——」

「持たなかつたであらう。そなたはその時本物の七首を懐にした為日頃使うお芝居の七首をうつかりと忘れたのじや、舞台に出る役者が己れの使う小道具を忘れる筈はあるまい、今調べたら切れぬ芝居用の七首はその儘未だにそなたの部屋に置いてあつた。万事うまく芝居をしたが七首二本持ち出さなかつたは不覚じやつたのう。それに逃げた筈の男の浴衣と血をふいた手拭が奈落の祠の横にある地藏様の腹の中につゝ込んであつた。素ッ裸になつて兼ねて地藏の腹の中へ隠しておいた縄と別の手拭をとり出す、着ていたものを代りにそこへ詰め込み、大急ぎで自縄自縛猿轡——」

先程から震えていた璃昇の手許が動いて、黒い小粒の玉が一粒アツと思ふ間もなく口へ放り込まれて、ぐびりと喉仏がなつて嚙下した璃昇の顔から冷汗が一筋糸に伝います「覚悟なされたな——」犯人を指摘したものゝ流石に先生は沈みます。いつしかに喘ぐ息の下で璃昇は膝も崩さずに述懐を始めたのでした。

「私は可愛い、妹の仇をとつてやつたのです。半之丞は悪魔に魅入られた様な男でした。生娘を何人とも知れず甘言と己れの美貌をわなに誘い込んで、片ツ端から娘達を傷物にして操を奪つて行きました。併しそれは私とは関係のない事と知らぬ振りをしていたけれどたつた一人の妹のお才までも毒牙にかけられたとあつてはもう辛抱出来ません。他の娘達と同じ様に、閉じ込めた一室で妹を裸に剣き種々にあらん限り責めさいなみ、拷問にも勝るひどい目に合せてそれを眺め乍ら、色々の角度から奴はそれを舞台の芸に生かして来た。己れの嗜虐的な芸の為には、鬼畜に勝る行為を敢てして毫も省みなかつた——。挙句の果、お才はきやつゝの責の激しさに、遂々鴨居から一糸纏わぬ素裸でぶら下げられた儘氣を失つてしまった。病いを口実に還されてきた妹の体はすき間もない程の責め傷だらけ。二日寝ついて、それでも奴に対する恨みがましい言葉一口云うでなくヒツソリと死んでしまった。私の腹は煮えくり返る様だつた。考えに考えた末、衆人の前で見せしめに私は奴を殺してやろうと思つた。そして見事やり終せた——。でも……今はもう思い残すこともない……」

ガツとどす黒い吐血と共に璃昇の体は前にのめつたのでした。苦肉を耐えて力の限り握りしめていた水晶の珠数が引きちぎられてベロ／＼と白玉のように散らばりました。



## ▽応募作品掲載外佳作発表△

男ごころ(梓加代子)つた江の告白(吉井川洋)  
 激浪の妻(団五平)中国夜話(皆田仁)春よ再  
 び(秋山ルミ子)汚物嗜好症の男とオナニスト  
 ・ガール(里見敦子)蘇える初恋(吉田俊郎)  
 ツマミ食い三重奏(野村一郎)鍵穴(渡辺秀人)  
 濡れ肌の女学生(潮マリ)今宵燃え燃えて  
 (久富浩司)恋は熱病(佐々木直)獣姦記(洗在  
 鐘)女の本願(夢秀樹)蓄癡乙女(梅津タマ)  
 実話レポート(野田伍郎)情慾の初夜(清水賢  
 太郎)肉体の饗宴(星不二夫)

◎本誌所載の記事、挿絵、写真。其の他一切  
 の無断上映、上演、転載、脚色を固く御断  
 り致します。

## ◎裸婦肉体美写真実費分譲◎

光沢面焼付 五枚一組 二百円  
 印刷紙焼付 十枚一組 三百五十円  
 (送料共)

一糸纏わぬ全裸の肉代美人の豊艶絢爛たる大  
 胆奔放ないろ／＼のポーズを敢て愛好家  
 に実費分譲致します。

☆賣められる女各態 ☆野外ヌード写真各態  
 ☆浴室に於ける各態 ☆女浴場のポーズ各態  
 ☆室内に於ける各態 ☆寝室のシーン各態  
 各作とも新に多数追加致しておりますので、  
 必ず御満足召すと存じます。切代用は小額の  
 ものにて一割増に願います(代理部)

## 集 募 稿 原

古今東西を問わず珍奇な小説読物

変態資料、体験告白、暴露記事  
 探訪報告、奇習紹介、實話小説

- 一、すべて未発表の興味本位の作品たるべきこと。
- 一、四百字詰原稿紙三十枚迄の作品たるべきこと。
- 一、住所、本名の外略歴を記載して下さい。
- 一、発表作品は発行後一ヶ月以内に相当の謝礼を呈上致します
- 一、原稿は原則として御返戻致しません。
- 一、締切は毎月二十日、翌月落に発表します。
- 一、挿絵、写真、コント、漫画、笑話、小話等も募っています
- 一、奮って御応募下さい。

探偵小説、怪奇小説、時代小説  
 軟派文獻、犯罪實話、珍談記録

大阪市堺局区内菅原通四ノ三〇  
 曙書房内 奇譚クラブ編集部

## (編集後記)

読者各位の熱烈な要望を反映致しまして本号  
 より雑誌の大きさをA5版とし、従来より更  
 に内容の充実をはかりました。尙本号は発売  
 日の都合で五、六月合併号としましたが、前  
 号四月号とは丁度一ヶ月目に発売致すわけで  
 ありますから、實際上休刊しているわけでは  
 ございません故、御承知をお願いします。

## ◎直接購読者募集◎

半年分六冊(送料共)五百四十円

(定価値上げの際も据置きます)

右御支払込の愛読者の方々様には特別景品として、  
 極鮮明優秀なる裸婦写真一組を贈呈致します。

◇振替又は小為替にて御送金下さい。切手代用の節  
 は小額のもので一割増に願います◇

## 奇譚クラブ

第六巻 第五号  
 毎月一回一日発行

新緑五・六月合併号定価九十四円

昭和二十七年五月二十日印刷  
 昭和二十七年六月一日発行

編集人 箕田 京二  
 印刷人 上田 庄之助  
 発行人 吉田 稔

大阪府堺局区内菅原四丁目二〇

発行所 曙 書 房

振替口座大阪第三四九五六番